

日本語オノマトペの仏語訳研究
-宮澤賢治童話を資料として-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀬川, 愛美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22272

明治大学大学院教養デザイン研究科
2021年度
博士学位請求論文

日本語オノマトペの仏語訳研究
— 宮澤賢治童話を資料として

Japanese Onomatopoeic Representations and their Translations into French:
Focused on Novels by Kenji Miyazawa

学位請求者 教養デザイン専攻

瀬川 愛美

目次

第1部 日仏オノマトペ対照研究の視点と構想	1
第1章 日仏オノマトペ対照の視点	2
1 目的	2
2 方法	7
第2章 日本語オノマトペ翻訳研究の構想	10
1 翻訳という観点から	10
2 対照言語学という観点から	11
3 日本語教育との接点	11
4 学際的研究の見地から	16
第3章 日仏オノマトペ翻訳研究としての宮澤賢治	17
1 宮澤賢治オノマトペの特性	17
2 宮澤賢治仏語訳の諸本	18
3 宮澤賢治仏語訳の解説本	25
第4章 日仏オノマトペ対照の研究史展望	28
第2部 宮澤賢治童話におけるオノマトペ仏語訳の記述的研究	37
第1章 『セロ弾きのゴーシュ』と <i>Gauche le violoncelliste</i>	38
1 『セロ弾きのゴーシュ』に出現するオノマトペの頻度と形式	38
2 日本語オノマトペの形態的パターンとその訳出	42
3 漢語由来のオノマトペの形態的パターンとその訳出	51
4 特異な日本語オノマトペとその訳出	52
5 原文の擬音性・擬態性と仏語訳出の文法性の対応	57
6 『セロ弾きのゴーシュ』のオノマトペと仏語訳についての総括	67
第2章 『銀河鉄道の夜』と <i>Train de nuit dans la voie lactée</i>	69
1 『銀河鉄道の夜』に出現するオノマトペの頻度と形式	69
2 日本語オノマトペの形態的パターンとその訳出	73
3 漢語由来のオノマトペの形態的パターンとその訳出	82
4 特異な日本語オノマトペとその訳出	84
5 原文の擬音性・擬態性と仏語訳出の文法性の対応	96
6 『銀河鉄道の夜』のオノマトペと仏語訳についての総括	105

第3章 『風の又三郎』と Matasaburo, le vent	107
1 『風の又三郎』に出現するオノマトペの頻度と形式	107
2 日本語オノマトペの形態的パターンとその訳出	112
3 漢語由来のオノマトペの形態的パターンとその訳出	122
4 特異な日本語オノマトペとその訳出	124
5 原文の擬音性・擬態性と仏語訳出の文法性の対応	137
6 『風の又三郎』のオノマトペと仏語訳についての総括	148
第3部 日本語オノマトペの仏語訳	151
第1章 宮澤賢治のオノマトペの仏語訳の評価基準	152
第2章 基本要素末の促音と促音付加・挿入の仏語訳	155
1 オノマトペ末の促音	155
2 オノマトペ基本要素への促音挿入	161
第3章 基本要素末の撥音と撥音付加の仏語訳	165
第4章 「り」付加の仏語訳	167
第5章 長音付加と挿入の仏語訳	168
第6章 繰り返しの仏語訳	171
終章 結論	175
〈参考文献〉	185

凡 例

- 1) 用例は、章ごとに、()付き数字の通し番号を施している。
- 2) 引用に際して、原文の漢数字を算用数字に変えた場合がある。
- 3) 第2部に提示する表の番号は、下記のように記す。

(例)【表 1-1】

上の例では、第1章の1番の表番号を表している。左側が章、右側が表番号を示す。

- 4) 註はすべて脚註の形式をとっている。

第 1 部 日仏オノマトペ対照研究の視点と構想

第1章 日仏オノマトペ対照の視点

1 目的

1.1 研究の目的

本論文は、日本語オノマトペの形態的特徴に伴ってうみ出される種々のニュアンスが、フランス語として訳される際に、どういった対応がなされているのかを整理しつつ、その訳出法の種々相を探ることを目的とする。

その際、本論文では宮澤賢治童話作品のフランス語訳（以下、「仏語訳」と略記することがある。本論文の題名も、それに従った）を資料として、原文のオノマトペが、どのように仏語訳されているかを整理し、原文のオノマトペの表わしている出来事と、日本語オノマトペ特有の形態に基づくニュアンスが、翻訳できているかを検討することにする（詳細な手順は、後述）。

さて、フランス語を母語とする日本語学習者にとって、日本語で最も難しいものの一つに、擬音語、擬態語の総称としての¹「オノマトペ」がある。この傾向は、初級の学習者のみならず、日本語からフランス語への翻訳を生業にする人にとっても、例外ではないと聞く²。

そのような性格を持つ、日本語のオノマトペに、フランス語がどのように対応するのかという問題を考えることは、重要なものといえる。

日本語のオノマトペと外国語を対照した辞典には、例えば、次のようなものがある。（著者の敬称は略す。以下同じ。）

アンドルー・チャン(1990)『<和英>擬態語・擬音語分類用法辞典』大修館書店
尾野秀一 編著(1984)『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂書店
五味太郎(1989)『英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典』ジャパントイムス
藤田孝, 秋保慎一編(1984)『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』金星堂
松本道弘(2020)『難訳・和英オノマトペ辞典』さくら舎

郭華江 主編(1994)『日中擬声語・擬態語辞典：上海訳文出版社版』東方書店
清水 仁(2014)『日中擬音語・擬態語辞典』書香堂

根本道也(2015) 編著『オノマトペ（擬音語・擬態語）独和小辞典』同学社

¹ 1.1.4 参照。

² 2016年9月から12月に国際文芸翻訳研究所（フランス・アルル）にて行われた、フランス文学翻訳振興協会主催「翻訳家養成プログラム」にご指導にいらした翻訳家たちの声による。

Н.Г. Румак, О.П. Зотова (2012) *Толковый японско-русский словарь
ономатопоэтических слов* (和露擬声語・擬態語辞典) Изд-во
"Моногтари"

日英、日中、日独、日露のものはあるが、日仏オノマトペの対照辞典は出版されていない。また、日本語とフランス語のオノマトペの対照研究は盛んであるとは言えず、日本語オノマトペがどのようにフランス語に対応するのかを知るためのコーパスやデータベースも存在していない上に、フランス語母語話者のための日本語のオノマトペの教育方法も確立していない。

そのことから、今後、日仏オノマトペの対照研究の基礎づくりをすることも、本研究の目的のひとつに数えておきたい。

1.2 仏語訳の実例

ここで、日本語オノマトペがフランス語に翻訳された実例を挙げてみる。下の例は、宮澤賢治『セロ弾きのゴーシュ』³と、そのフランス語翻訳版 *Gauche le violoncelliste*⁴ から引用したものである。日本語オノマトペの意味には、『日本語オノマトペ辞典』の掲載ページ数を併記する（下線部、筆者。以下同じ）。

(1) ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰いろの鳥が降りて来ました。

cria Gauche, mais soudain, à travers une fente du plafond, il y eut un froissement d'ailes et un oiseau gris descendit.

(2) ゴーシュはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。

Gauche prit son violoncelle, essaya un accord et joua : « Do-ré-mi-fa-sol-la-si-do. »

まず、(1)の「ぼろん」を検討する。「ぼろん」はオノマトペ基本要素 {ぼろ} をもとにしたオノマトペである。他に、「ぼろり」「ぼろーん」などが考えられる。{ぼろ} を {X} とすると、「ぼろん」は {ぼろ} に撥音を付加した「Xん」型であり、〈①ピアノや弦楽器を弾いたときに出る低い音 : 463〉を示している。これにあたるフランス語は、*un froissement d'ailes* 〈羽のかすかな音〉である。ここで、オノマトペの型に注目する。「Xん」型の撥音は、「音や動作・状況がとりあえず終わりはするが、その結果や余韻が残るというニュアンスを表わす。」が、仏語訳には、余韻までは感じられない。次に、日本語オノマトペと仏語訳の意味に注目してみる。鳥が穴から降りてくる時の音の描写として、「ぼろん」というオノマトペは、現代日本語では、通常使われない。ところが、原文では「ぼろんと音がし

³ 宮澤賢治『新修宮澤賢治全集 第十二巻』筑摩書房(1980) : 241

⁴ Miyazawa, Kenji. *Train de nuit dans la Voie lactée*, traduit par Hélène Morita (1989) Éditions Le Serpent à plumes

て」とここでは、灰色の鳥がおりてくるときの音を表わすオノマトペとして用いられている。その「ぼろん」という音を受けて、フランス語でも弦楽器の音を表すオノマトペを用いることもできるだろうが、ここでは、鳥が穴から降りてくる時に出る羽ばたきの音と解釈して訳出されていることがわかる。これは、高度な理解とってよいであろう。

一方、(2)の「ボロンボロン」は、(1)「ぼろん」〈①ピアノや弦楽器を弾いたときに出る低い音：463〉の繰り返し、「Xん×2」型であり、チェロが奏でる音が続いていることを意味している。しかし、フランス語翻訳版には、「ボロンボロン」にあたる語がみられない。「ボロンボロン」のように、反復性のある音を表す日本語のオノマトペも、フランス語では訳されずに、音の持つニュアンスが示されない場合があることがわかる。つまり、興味深いことに、この2例を比べると、日本語の擬態語としての出来事の側面は訳されているのに対して、擬音語は、仏語訳されていないことがわかるのである。訳語自体がないのだから、そのニュアンスも示しようがない。

このように、日本語オノマトペ型が持つ特性が、仏語訳にも含まれているのか、また、仏語訳されるにあたって、日本語オノマトペのニュアンスがどのように表現されているのかどうかを、検討していく。

1.3 日仏オノマトペの定義の違い

さて、日本語とフランス語では、オノマトペという学術用語がどのように定義されているのか、ここで確認しておきたい。

まず、日本語のオノマトペの定義を見てみる。オノマトペという術語を使用した最初の擬音語・擬態語の辞典は、小野正弘編(2007)『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』(以下、『日本語オノマトペ辞典』とする)である。本辞典は、オノマトペとなる概ね三つの基準を、次のように定義している。

第一に、「人間の発声器官以外から出た音を表した言葉」(11)である。

第二に、「人間の発声器官から出した音声で、ひとつひとつの音に分解できない音を表した言葉」(11)である。

第三に、「音のないもの、または聞こえないものに対して、その状況のある音そのものが持つ感覚で表現した言葉」(12)である。

一方で、Enckell, Pierre et Pierre Rézeau (2003) *Dictionnaire des onomatopées*. (以下、『フランス語オノマトペ辞典』とする)は、オノマトペを次のように定義している(和訳は、筆者)。

L'onomatopée est un "mot" imitant ou prétendant imiter, par le langage articulé, un bruit (humain, animal, de la nature, d'un produit manufacturé, etc.). : 12⁵

⁵ 『フランス語オノマトペ辞典』: 12

(オノマトペは分節言語によって(人間の、動物の、自然による、人工物による等の)音を模倣する、もしくは模倣するとされている語である。)

そもそも、オノマトペという学術用語は、フランス語の *onomatopée* から借用した外来語である。日本語学において、オノマトペという術語が指す対象は、「音」のみならず「声」「さま」に関する語などである。しかし、フランス語においては、基本的には「音」に関する語のみを指し、日本語の擬態語に当たるものは想定されていない。さらに、『フランス語オノマトペ辞典』には、日本語では間投詞として分類されるものも掲載されていることから、フランス語では間投詞もオノマトペとみなされる場合があると言える。

したがって、日本語の擬態語をを仏語訳する際には、原則として、普通の言葉で詳しく説明するか、あるいはニュアンスのよく似た語で代替するしか方法がないということになる。

1.4 オノマトペという術語を使用する理由

では、なぜオノマトペという学術用語を本論文で使用するのか。

理由の一つ目は、擬音語・擬態語をまとめた総称として、オノマトペが適しているからである。二つ目は、多義的なオノマトペが存在しており、擬音語、擬態語と区別できない場合があるからである。ここで、先行研究における呼称をあげる。

「小嶋は 1951 年の論文では総称として「擬声語」を、1956 年の論文では「写声語」を(「所謂象徴詞」と解説して)用いていた」⁶ が、1962 年以後は、オノマトペという語を使用するように変遷している。

擬声語 → 写声語 → オノマトペ

小林英夫(1933、1965)は、音性があるものは擬音語とする一方、音性のないものを「擬態語」と呼ぶと、動物行動の「擬態」と衝突すると考え、擬態語ではなく、擬容語という語も用いた。

音性(+)-擬音語

音性(-)-擬容語

金田一春彦(1978)は、日本語オノマトペを、その意味から細かく5つに分類して、以下のように名付けた。

⁶ 中里理子(2017)『オノマトペの語義変化研究』勉誠出版：18

音性(+)—有生性(+)—擬声語
—有生性(-)—擬音語

音性(-)—有生性(+)—内性(+)—擬情語
—外性(-)—擬容語
—有生性(-)—擬態語

まず、音を表すもののうち、人間や動物の声を表す「擬声語」と、自然界の音や物音を表す「擬音語」に分けた。次に、音ではなく何かの動きや様子を表すもののうち、無生物の状態を表すものを「擬態語」、生物の状態を表すものを「擬容語」とし、そして最後に人の心理状態や痛みなどの感覚を表すものを「擬情語」とした。

以下がそれぞれの語例である。

「擬声語」：わんわん、こけこっこー、おぎゃー、げらげら、ぺちやくちゃ等

「擬音語」：ざあざあ、がちゃん、ごろごろ、ばたーん、どんどん等

「擬態語」：きらきら、つるつる、さらっと、ぐちゃぐちゃ、どんより等

「擬容語」：うろうろ、ふらり、ぐんぐん、ばたばた、のろのろ、ぼうっと等

「擬情語」：いらいら、うっとり、どきり、ずきずき、しみり、わくわく等

以上のようにオノマトペは様々に呼ばれ、分類されてきた。金田一春彦(1978)の分類は、明晰なものであるが、しかし、これらをまとめた総称として、どの語を用いるのがよいかという問題が生じる。

さらに、多義的なオノマトペは、複数の分類にまたがることもある。例えば、「水をごくごく飲み干した」の「ごくごく」は、実際にのどを鳴らして飲む音が「ごくごく」と聞こえたとも考えられるし、また飲み干す際の、勢いのあるさまを表現しているとも解しうる。このように、音・さま双方の特性を兼ね備えているため、擬音語なのか擬態語なのか明解に区別できないものもある。加えて、「「がーん」のように、擬音語から擬態語に意味変化したもの」もある。⁷したがって、擬音語や擬態語を総称する新たな語が必要になるのである。

そこで、本研究では、物の音や動物などの声を人間の分節音で表すものを「擬音語」、音を伴わない動きや様子を言語音の感覚で表すものを「擬態語」と呼び、擬音語・擬態語の総称として、「オノマトペ」という術語を使用することにする。

⁷ 小野正弘 (2021) 「オノマトペのニュアンス付加」『文芸研究』144

2 方法

2.1 日本語オノマトペと仏語訳の分析

日本語のオノマトペは、ある基本要素が元になり、それらが加工されたり展開されたりすることで、実際の文の中に様々な形で運用されることが特徴である。また、オノマトペが加工、展開されて文中に現れる形にはパターンがあり、それらのパターンは大まかに、次の4種類にわけることができる。

オノマトペの基本要素を{X}とすると、促音「っ」が付加する「Xっ」型、撥音「ん」が付加する「Xん」型、「り」が付加する「Xり」型、{X}の繰り返しの「X×2」型である。

さらに、オノマトペは、語形的特徴に対応した、特性やニュアンスがあるとされている。小野正弘(2009)は、オノマトペの語形による解説を次のように整理している。

「ッ」、非常に瞬間的な区切り目がつくというニュアンスを表わす。

「リ」、一連の動作や状況をひとまとまりのものとして表現して、落ち着いたニュアンスを表わす。

「ン」、音や動作・状況がとりあえず終わりはするが、その結果や余韻が残るというニュアンスを表わす。

「もと」の繰り返し、今まさに続いているというニュアンスを表わす。⁸

また、撥音「ん」に関しては、浜野祥子(2019)の次のような論もある。

一音節のオノマトペが「ん」で終わる場合、その「ん」の大半は、例えば、「ぼん」のように、鳴り響く音を表したものであり、他に「ふん」のように鼻の音や、「ぴょん」のように力強くはずむ動きや、曲線の軌道を示す。その一方、二音節以上のオノマトペが「ん」で終わる場合、その「ん」は、概ね、より抽象的でアスペクト的な意味を持っている。例えば、「ぼとん」は、落ちてはずむ動きを表し、語根が示す主な動作（「ぼとん」においては落下）から運動方向性を変えられる（「ぼとん」においては弾み）としている（原文英語。引用者による訳）。⁹

ここで、日本語のオノマトペと仏語訳をどのように研究するのか、方法を述べる。まず、原文に出現するオノマトペを抽出し、出現回数を数えつつ、語形ごとに分類する。次に、日本語オノマトペの語形が持つ特性やニュアンスが、それらの仏語訳にも含まれているかどうか、原文と翻訳文を照らし合わせて検証する。小野正弘(2020)は、オノマトペの

⁸ 小野正弘(2009)『オノマトペがあるから日本語は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』平凡社：28

⁹ Shoko Hamano (2019) *Monosyllabic and disyllabic roots in the diachronic development of Japanese mimetics, Ideophones, Mimetics and EXpressives* : 62

語形の特性がアスペクトと対応できるという、斬新かつ注目すべき論を唱えている。オノマトペの語形と仏語訳をみるにあたって、アスペクトと関連性があるのかどうかという点についても、検証したい。

2.2 「Xっ」型

「ぱたっ」のような、促音付加「Xっ」型は、〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉というニュアンスを表わし、さらに、アスペクト的には、「動作が終了する瞬間に焦点が当たって」¹⁰いる「終結相」に対応するとされている。

そこで、宮澤賢治の童話に現れる「っ」で終わっているオノマトペが、全体としてどのような訳されかたをしているのかを、〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉に注目してみていく。また、仏語訳がアスペクト的に終結相にあたるのかどうかもみる。

2.3 「Xん」型

「ぱたん」のような、撥音付加「Xん」型は、〈余韻性〉〈残存性〉というニュアンスを表わし、さらに、アスペクト的には、「結果が残存しているところに焦点が当たって」¹¹おり、「結果残存相」であるとされている。

そこで、宮澤賢治の童話に現れる「ん」で終わっているオノマトペが、全体としてどのような訳されかたをしているのかを、〈余韻性〉と〈残存性〉に注目してみていく。また、仏語訳がアスペクト的に結果残存相にあたるのかどうかもみる。

2.4 「Xり」型

「ぱたり」のような、「り」付加の「Xり」型は、〈完結性〉〈ひとまとまり性〉というニュアンスを表わし、さらに、アスペクト的には、「動作・状態全体の流れを視野に入れながら、完結しているという相」¹²であるとされている。

そこで、宮澤賢治の童話に現れる「り」で終わっているオノマトペが、全体としてどのような訳されかたをしているのかを、〈完結性〉と〈ひとまとまり性〉に注目してみていく。また、仏語訳がアスペクト的に、動作・状態全体の流れを視野に入れながら、完結しているという相にあたるのかどうかもみる。

2.5 「X×2」型

「ぱたぱた」のように、オノマトペの基本要素を繰り返す「X×2」型は、「今まさに続いているというニュアンスを表わす」とされている。そこで、宮澤賢治の童話に現れる、基本要素の繰り返しのオノマトペが、全体としてどのような訳されかたをしているのかを、〈反復性〉に注目してみていく。

¹⁰ 小野正弘 (2021) 「オノマトペのニュアンス付加」『文芸研究』144

¹¹ 小野正弘 (2021) 「オノマトペのニュアンス付加」『文芸研究』144

¹² 小野正弘 (2021) 「オノマトペのニュアンス付加」『文芸研究』144

以下、具体的手順を箇条書きに記す。

- [1] 原文の日本語のオノマトペが、どのように仏語訳されているのかを照らし合わせ、日本語とフランス語にどのような対応関係が観察できるかを検証する。
- [2] 日本語オノマトペがフランス語に訳出された結果、日本語オノマトペの型ごとに、フランス語の訳出方法といかなる関連性が見出せるのかを観察・整理する。
- [3] 日本語オノマトペが、仏語訳ではどのような品詞や構文に対応するのかを、整理する。
- [4] そのほかに、訳出上の工夫として、どのようなものが観察されるかを検証・整理する。
- [5] フランス語として訳出されない場合があるか否か、あるとすれば、どのような場合かを整理する。

第2章 日本語オノマトペ翻訳研究の構想

1 翻訳という観点から

「翻訳」の観点から、日本語オノマトペの翻訳を研究することで、またその結果として何が期待できるのだろうか。ここでは、オノマトペが含まれた文章や語句の翻訳と、オノマトペ以外の文章や語句の翻訳を比較したい。宮澤賢治の「ひのきとひなげし」と仏語版 *Le Cyprès et les Pavots sauvages* から、抜粋する。

まず、オノマトペ以外の文章や語句の仏語訳の実例を挙げる。

(1) ひなげしどもはみな熱病にかかったよう、てんでに何かうわごとを、南の風に云ったのですが

les œillettes donnaient l'impression d'être atteintes d'une forte fièvre, chacune débitait des propos incohérents en s'adressant au vent du sud

原文の「云った」が、*débitier* の直説法半過去 *débitait* 〈…をとめどなくしゃべっていた〉と訳されており、ひなげしが、めいめい声に出し続けていることを、仏語訳でも表すことができている。

次に、オノマトペの文章や語句の仏語訳の実例を挙げる。

(2) いちばん小さいひなげしが、ひとりでこそこそ云ひました。

La plus petites des œillettes dit tout bas, en aparté :

原文では、「云ひました」の前に「こそこそ」がついていることで、ひなげしが声を潜めて話し続けているさまが読み取れる。仏語版では、「こそこそ云ひました」を *dit tout bas* 〈まったく低く、小さく云ひます〉と訳すことで、ひなげしの声が小さいことが、また、*en aparté* 〈こっそり、内密に〉によって、密かに遠慮がちに言ったことが、表されている。しかし、「こそこそ」が持つ、話し続ける〈反復性〉のニュアンスまでは、訳出されていない。

これらは、どちらも主語であるひなげしが「云った」という出来事を表すものである。日本語オノマトペがない上の例では、原文が表す出来事を翻訳できている。それに対し、日本語オノマトペ「こそこそ」が使用されている下の例では、「こそこそ」にあたる、動詞を修飾する語句が現れており、「こそこそ」が表す意味合いは訳されているが、「こそこそ」という繰り返しのオノマトペが持つ〈反復性〉のニュアンスまでは訳されていない。

したがって、日本語オノマトペが原文に含まれている場合は、含まない場合よりも翻訳が困難になり、日本語オノマトペが示す出来事の描写のみならず、オノマトペの形式によるニュアンスまでも理解し翻訳するという、高度な技術が訳者に求められるのである。

日本語オノマトペの翻訳を研究することで、どのようなオノマトペであれば、それらが表す出来事や形式が持つニュアンスを訳出することが可能であるのか、また翻訳が困難な点をどのように訳者が工夫しているのかを、明らかにすることができると考える。

2 対照言語学という観点から

「対照言語学」の観点から、本研究を通して、またその結果として何が期待できるのだろうか。対照言語学の最終目的は、両言語の特性をそれぞれに明らかにすることである。日本語が原作である作品と、その仏語版の翻訳を対照することで、日本語とフランス語の類似点、相違点を明らかにすることが可能になる。それらを元に、フランス語話者が日本語を学ぶ者が納得できる説明の方法や、習得が困難となり得る点を想定し、日本語教育の場で活用することができる。反対に、フランス語が原作である作品と、その日本語版の翻訳を対照することで、日本語母語話者がフランス語を学ぶ時に障壁となり得る事柄を把握し、フランス語教育に活かすことも可能になる。

日本語オノマトペがどのように仏語訳されるのかを検証していくことで、日本語オノマトペ自体の特徴が明らかになるとともに、日本語オノマトペにあたるフランス語はどのような品詞であるのか、単語ひとつでも表しきれぬのか、語句に訳されるのか、フランス語オノマトペに訳されることもあるのか、日本語原文と訳文で描写する内容に共通点があるのか否か、文化的な差が現れるのかなどを、明白にすることができる。このように得られた結果によって、日本語オノマトペが表す事象をフランス語話者がどのように認識しているのかがわかり、翻訳の分野で役立つだけでなく、日本語オノマトペの言語教育にも活かせるのである。

3 日本語教育との接点

3.1 日本語オノマトペの説明の難しさ

「日本語教育」の分野において、本研究を通して、またその結果として何が期待できるのだろうか。日本語が母語である者にとって、日本語のオノマトペは、幼児期からの生活体験を通して習得していくものである。したがって、幼児期に日本語に触れる機会がなかった学習者にとっては、日本語オノマトペの習得が困難であることは想像に難くない。

今井むつみ(2014)は、擬態語の理解には、音象徴の感覚だけでは不十分であり、幼少期から大量の擬態語を聞き、使用することが必要であるから、外国人にとって擬態語の学習が非常に難しいとしている。¹³

今井(2014)では、擬態語の習得についてのみ述べられているが、擬音語を含めたオノマトペ全体についても同じように考えられるはずである。

¹³ 今井むつみ, 針生悦子『言葉をおぼえるしくみ 母語から外国語まで』筑摩書房, 2014

日本語のオノマトペの、説明を難しくしている理由として、量および質の観点から、次の2点が指摘できる。

まず、前者の量についてであるが、朝鮮語のオノマトペの方が日本語のオノマトペよりも語数が多いと言われているものの、一般的に外国語のオノマトペに比べて、日本語のオノマトペは語数が多いとされている。『日本語オノマトペ辞典』によって、日本語オノマトペは、およそ4500語あるということが明らかになった。同辞典は、「見出し語数50万語の『日本国語大辞典』第二版から、オノマトペを抽出して、解説を改め、詳しくしてできたもの」である。『日本国語大辞典』に採用されている語以外にも、オノマトペと認定できるものは存在している。さらに、日本語のオノマトペは現在進行形で作られ続けており、今後も増えていくと考えられる。

次に、後者の特質についてであるが、日本語のオノマトペは、非常に直接的に心に訴える語であると言える。小野正弘（2020）は次のように述べている。

「私は、「オノマトペは人のところをわしづかみにする」と言ったりしています。たとえば、「彼女は、その報せを聞くと、力を失って倒れ込んだ」に、オノマトペを加えて、「彼女は、その報せを聞くと、へたへたと/へなへたと/くなくと倒れ込んだ」とすると、力を失った様子が、生き生きと、しかも段階的に表現できます。」

このように日本語のオノマトペを使用すると、日本語母語話者は、倒れ込むようすが、目に見えるように想像できる。しかし、学習者の立場に立つとどうだろうか。日本語のオノマトペは感覚的な言葉であるがゆえに、オノマトペが持つ感覚を経験していない学習者にも、実感を持たせられるように説明することは、難しいのである。その上、オノマトペを説明できたとしても、習得するまでに至るには、オノマトペを使用する状況に出くわしたり、例文などを通して想像したりすることを通して、使いかたを正しく理解するという過程が必要になる。

3.2 日本語教育の教科書における説明

日本語教育の教科書では、オノマトペがどのように扱われているのか確認したい。

フランスで日本語を専攻できる大学、パリ・ディドロ第7大学 東アジア言語文化学科 日本語専攻において使用されている『みんなの日本語』を例に取り、どのオノマトペが採用されているのか、オノマトペがどのように触れられているのかを見ていく。『みんなの日本語』は、初級Ⅰ、初級Ⅱ、中級Ⅰ、中級Ⅱの4冊からなるテキストである。初級Ⅰには、オノマトペがひとつも見られなかった。

まず、『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版』に現れたオノマトペを抜き出し、以下に示す。

語彙

びっくりしますⅢ がっかりしますⅢ

語彙には、「びっくり」と「がっかり」が取り上げられ、どちらも「します」が続く形である。

気持ち

びっくりする がっかりする いらいらする ときどきする
はらはらする わくわくする

気持ちの言い方を学ぶコーナーはすべて絵付きであるが、ニュアンスは記述されていない。語彙と共通の「びっくり」と「がっかり」のほか、「いらいら」「ときどき」「はらはら」「わくわく」という繰り返しの形式のオノマトペが見られた。また、すべて「する」が続く形である。

文法

「て形」は、びっくりします、あんしんします、こまります、さびしい、うれしい、ざんねん [な]、などの感情を表す動詞や形容詞の前にくると説明され、以下の例文が挙げられている。

例文：ニュースを聞いて、びっくりしました。

「て形」の後件に「びっくり」が出ており、「びっくりします」でひとつの動詞として扱われている。

擬音語・擬態語

ザーザー（降る） ピューピュー（吹く） ゴロゴロ（鳴る）
ワンワン（ほえる） ニャーニャー（鳴く） カーカー（鳴く）
げらげら（笑う） しくしく（泣く） きよろきよろ（見る）
ばくばく（食べる） ぐうぐう（寝る） すらすら（読む）
ざらざら（している） べたべた（している） つるつる（している）

擬音語・擬態語を学ぶコーナーで、こちらも絵がついているが説明はない。自然現象の音、動物の鳴き声などの擬音語と、行動や容態を表す擬態語が選ばれている。これらの総称としてオノマトペという術語があることや、文語でも使用されること、それぞれのニュアンスの解説、具体的な例文なども取り上げれば、よりオノマトペの習得につながると期待される。また、ここに挙げられているオノマトペはすべて繰り返しの形式であるが、これでは日本語の擬音語・擬態語は繰り返しであるという誤解を与えかねないため、他の形式のオノマトペがあることに触れたり、形式が持つニュアンスを解説したりする必要があるだろう。

次に、『みんなの日本語中級Ⅰ』に見られたオノマトペを、以下に抜き出す。

語彙

ポツリと どんどん ぼんやりする のんびりする ぐっすり [～眠る]
ピーピー

語彙には、「ポツリ」のように「と」が続く形、「どんどん」「ピーピー」のようにオノマトペ単独、「ぼんやり」「のんびり」のように「する」が続く形、「ぐっすり」のように一般動詞が併記されている形など、様々な形で挙げられている。

文法

「…だろう・…だろうと思う」「…なんて」「～(さ)せる」「～たまま、…・～のまま、…」という文法の例文には、「びっくり」が使われていた。

以下、順に例文を挙げる。

例文：マリアさんの話を聞いて、ご両親もびっくりされただろう。

例文：試験に一度で合格できたなんて、びっくりしました。

例文：テストで100点を取って、母をびっくりさせた。

例文：昨夜の地震にはびっくりして、下着のまま、外に出た。

「～(さ)せられる・～される」という文法の例文には、「がっかり」が使われていた。

例文：何度買っても宝くじが当たらず、がっかりさせられた。

文法事項の例文に、「びっくり」が4例、「がっかり」が1例見られた。「びっくり」も「がっかり」も初級Ⅱで習得済みであることから、新たな文法事項を学ぶにあたって、選ばれたのだと推測できる。しかし、この2つ以外にも既習のオノマトペがあることから、それらも例文に取り入れることで、学習者は多様なオノマトペに触れる機会を増やせる他、「びっくり」に偏った教材内容も改変することができるのではと感じる。

最後に、『みんなの日本語中級Ⅱ』に現れたオノマトペを、以下に抽出する。

語彙

パツと ぴったり くよくよ [する] べとべと すとんと～ きよとんと～
くよくよしない。 ぴかぴか [な] ちらちら じっと いらいら [する]
ずっと (ずうっと) ホツとする ふと たっぷり にこにこ [する]
ズタズタ [に] ぺらぺら

語彙に取り上げられたオノマトペの種類が、初級Ⅱ、中級Ⅰよりもさらに増えていることに気がつく。「パツ」「すとんと」「きよとん」「じっ」「ずっ」「ずうっ」「ホツ」「ふ」

のように「と」が後に続く形、「ぴったり」「べとべと」「ちらちら」「たっぷり」「ぺらぺら」のようにオノマトペ単独、「くよくよ」「いらいら」「にこにこ」のように「する」が続く形で記載されている。また、形式は、基本要素のみ、促音挿入／り付加、撥音付加、長音挿入、繰り返しである。

文法

「辞書形 ている + うちに」という文法の説明には、「繰り返し～すること」や「ずっとと～すること」と同義であると書かれており、以下の例文が挙げられていた。

例文：3年間ずっとアルバイトとして働くうちに、仕事を認められて社員になることができた。

「て形 名詞 + 以来」という文法の説明には、「～してからずっと」と同義であると書かれ、以下の例文が挙げられていた。

例文：結婚して以来ずっと、横浜に住んでいる。

例文：大学卒業以来、ずっと司法試験合格をめざして勉強を続けてきた。

「にほかならない」という文法の例文には、「はっきり」が使われていた。

例文：ロボコンというものが、大きな教育力を備えた活動だということがはっきりしてきたからにほかならない。

「とか。」という文法の説明には、「～そうだ。」や「はっきりとではないが～と聞いた。」と同義であると書かれていた。

「同時に」という文法の例文には、「ホッ」が使われていた。

例文：遅く帰ってきた娘の顔を見て、ホッとすると同時に腹が立った。

「…が、一方で」という文法の例文には、「きちんと」が使われていた。

例文：英語は小さい時から学ばせたほうが良いという意見もある一方で、きちんと母語を学んでからにしたほうが良いという意見もある。

「～だけあって」という文法の例文には、「ぺらぺら」が使われていた。

例文：スミスさんは20年以上日本に住んでいるだけあって、日本語はぺらぺらだ。

「～だけに」と「～ことはない」という文法の例文には、「がっかり」が使われていた。

例文：きっと合格すると期待していただけに、不合格の知らせにがっかりした。

例文：今日の試合に負けたからって、がっかりすることはないよ。次で頑張ればいいんだから。

文法事項には例文の中に「ずっ」「はっきり」「ホッ」「きちん」「べらべら」「がっかり」が使われ、文法の説明内に、「ずっ」「はっきり」が出ていた。特に「ずっ」「はっきり」は、新出の文法事項と同義の言い回しの中に使用されていることから、まずオノマトペの理解が必要となっている構成であると言える。しかし、これらのオノマトペの解説がなく、特に「はっきり」は新出の語彙にも含まれておらず、不十分であるとみなせる。また、例文にあった「きちん」も新出語彙に見当たらない。

初級Ⅰに取り上げられていなかったオノマトペが、初級Ⅱで擬音語・擬態語のコーナーで学べられるようになってきているのは、日本語の勉強を始めて少し時間が経過した初級の学習者の段階からオノマトペを学ぶ意義があるという著者の考えが反映しているからだと推測できる。初学者から日本語オノマトペを学習するという考えには、非常に賛成である。しかし、せっかくオノマトペを学ぶコーナーを設けるのであれば、以下のような改善が見込めると考える。

- a) 日常に使用するオノマトペを取り上げつつ、もう少し説明を増やす
- b) 繰り返しの形式のオノマトペに絞らず、促音付加などのほかの形式のニュアンスも解説する
- c) 文語の例文を記載し、口語のみならず文語でも使用することに触れる
- d) 似たような意味合いの複数のオノマトペを紹介し、使い分けを説明する
- e) オノマトペの練習問題を作成し定着を図る

また、初級Ⅱ、中級Ⅰ、中級Ⅱとレベルが上がるにしたがって、使用されているオノマトペの種類も多くなっていたのは、語彙や文法事項の知識が増えるにつれ、覚えるべきオノマトペの数も増えるということであるだろう。であれば、初級Ⅱに限らず、中級の教材にも、オノマトペを学ぶコーナーを組み込むことも効果的であろう。

4 学際的研究の見地から

学際的研究の見地から、本研究を通して、またその結果として何が期待できるのだろうか。複数の領域を横断することは、多角的な視点を持ちつつ、総合的な研究を設計することにつながる。

日本語オノマトペの仏語訳を研究することによって、言語学、翻訳、教育を統合することが望める。つまり、日本語オノマトペの特性や、フランス語での事象の表し方を明らかにするという言語学の観点、日本語原文と仏語訳の比較を通してその技術と課題を見出すという翻訳の観点、言語教育に活かす方法につなげるという教育の観点、という3つの観点をまとめながら、客観的で幅広い知を構築することが可能になるのである。

第3章 日仏オノマトペ翻訳研究としての宮澤賢治

1 宮澤賢治オノマトペの特性

小野正弘(2018)は、宮澤賢治の初期に制作されたと考えられる童話作品に見られる、延べ1600件のオノマトペの基本要素からの加工と展開を様式化して計量し、その総体のなかから、方言的な感性がどのように現出するのかを見た。以下に、要約する。

賢治初期童話におけるオノマトペを分析していくわけであるが、そのことと、ここで考察すべき、方言の感性を表すようなオノマトペとの関係を確認しておきたい。ここで「方言」とは、国語学(日本語学)で、最も一般的な定義と考えられる、当該地域語の体系全体と考える。したがって、賢治作品のオノマトペは、仮に共通語形と等しいものがあっても、それも「方言」(体系)のなかに含まれる。共通語形と等しくない特異な形式は、「俚言」ということになる。また、オノマトペの俚言性を言う時、ここでは、単に形態が特異であるということだけでなく、オノマトペを生成する様式にも「俚言性」を考えることにする。

オノマトペには、概略、3種のもものが認められる。

第1類は、基本要素が見えない複雑なもの(生成過程で簡単に説明ができない、複雑な説明が必要なもの)

第2類は、基本要素から加工と展開(基本要素からの生成過程で説明がつくもの)

第3類は、基本要素が孤立しているもの(基本要素からつくりあげたものではないもの)である。

1600件のうち、基本要素が異なるものは、328件であり、標準語に観察されるオノマトペ基本要素とは異なるものが21件で、全基本要素のわずか6.4%にあたり、残り93.6%の標準語にもあるオノマトペ基本要素の支えがあるからこそ、「賢治独自の」とか「方言特有の」といった評価が成り立っているのである。

次に、基本要素の加工には、「操作なし(φ)」「り付加」「促音挿入」「長音挿入」「撥音挿入」など、計18種類があり、「操作なし」が66.1%と最も多いが、全体の3分の1ほどには何らかの加工が加えられ、「操作あり」480件中、促音による加工(46.7%)と「り付加」系(45.6%)が双璧をなし、なかでも、「促音挿入/り付加」の複合は、22.3%で加工中の最大値を示している。

基本要素の展開には、「操作なし(φ)」「×2」「部分反復」「結合」など、計13種類あり、「×2系」の合計は48.8%に上り、「操作なし」42.2%を上回る。さらに、反復系は「×2」から「×6」まですべてあり、それが初期童話段階から見出されるということの指摘は意味のあることであろう。

最後に、初期童話の文中に最終的に実現される姿として、語尾なし、語尾「と」、サ変、断定助動詞、助詞など、計9種類である。

非標準語的なオノマトペには、方言の感性を表すものと賢治の個人的感性の感じられるものがあり、共通語形と等しくない特異な形式は、「俚言」ということになるが、現代日本語ではあまり耳慣れないように思われるもののなかには、俚言性ではなく古態性があり、ただちに俚言であるとか、賢治の独創と即断できない。

宮澤賢治の作品に見られるオノマトペは、その総数が多いことはもちろん、形式や種類が豊富であり、オノマトペの多彩さが群を抜いている。標準語的なオノマトペと非標準語的(方言的)なオノマトペの双方が見られるが、標準語的なものが大部分であることから、賢治の作品においては、かえって、俚言性や古態性があるオノマトペ、賢治独自のオノマトペが際立つとされる。

宮澤賢治の作品を研究対象にすることで、多くの標準語的なオノマトペを分析することが可能になり、オノマトペの形式や種類によって、仏語訳に傾向があるのか、考察できる。また、非標準語的なオノマトペによって、微妙なニュアンスが表現されていることから、それが、仏語訳でどのように表されているかを見ることにも意義を見出すことができる。

2 宮澤賢治仏語訳の諸本

ここで、宮澤賢治の作品のフランス語版について、誰による翻訳で、どのような種類があるのかを見てゆく。

まず、最も多くの作品をフランス語に翻訳しているのは、**Hélène Morita** である。全部で10冊となるが、同じ題名のものが、他の出版社から発行されているものもあり、出版社が異なるものも別に数えると、全17冊であり、そのうちの、2冊において第二版があり、14冊は、複数の作品の訳を収めた作品集となっている。1冊は、**Shizuko Bugnard** との共訳である。以下に、**Hélène Morita** による訳本の題名、出版社、出版年をあげる。日本語原作の題名も、右に併記する。

Hélène Morita

Train de nuit dans la Voie lactée 『銀河鉄道の夜』

Intertextes (collection "Lettres du monde"), 1989 (第二版 1991)

Le Serpent à Plumes (collection "Motifs"), 1995 (第二版 2000)

- Gauche le violoncelliste セロ弾きのゴーシュ

- Matasaburo le vent 風の又三郎
- Le train de nuit dans la Voie lactée 銀河鉄道の夜

Traversée de la neige 『雪渡り』

Intertextes, 1991

- Les Ours de la Montagne Nametoko なめとこ山の熊
- La Grue et les Dalias 真鶴とダリア
- Le Quatre du mois des Narcisses 水仙月の四日
- Le Cyprès et les Pavots sauvages ひのきとひなげし
- La Poire sauvage やまなし
- Traversée de la neige 雪渡り
- Place de Pollanno ポラーノの広場
- Que la pluie ne m'abatte 雨ニモマケズ

Traversée de la neige et autres récits 『雪渡りとその他の物語』 (和訳は、筆者。)

Noël Blandin, 1991

- Train de nuit dans la Voie lactée 銀河鉄道の夜
- Gauche le violoncelliste セロ弾きのゴーシュ
- Matasaburo, le vent 風の又三郎
- Place de Pollanno ポラーノの広場
- Les Ours de la montagne Nametoko なめとこ山の熊
- Le Cyprès et les pavots sauvages ひのきとひなげし
- La Grue et les dahlias 真鶴とダリア
- Le Quatre du mois des narcisses 水仙月の四日
- La Poire sauvage やまなし
- Traversée de la neige 雪渡り

Traversée de la neige 『雪渡り』

Le Serpent à Plumes (collection "Motifs"), 1994 (第二版 2001)

- Les Ours de la Montagne Nametoko なめとこ山の熊
- Le Cyprès et les Pavots sauvages ひのきとひなげし
- La Grue et les Dalias 真鶴とダリア
- Le Quatre du mois des Narcisses 水仙月の四日
- La Poire sauvage やまなし
- Traversée de la neige 雪渡り
- Place de Pollanno ポラーノの広場

La Pilule des six dieux 『山男の四月』（直訳は、『六神の丸薬』。）

Editions Grandir, 1996

Le Diamant du Bouddha 『十力の金剛石』

Le Serpent à plumes, 1997

Le Serpent à plumes (collection "Motifs"), 2003

- Rêves de brouillard 種山ケ原
- La Pulsatille barbue おきなぐさ
- Le bois des Loups, le bois des Paniers et le Bois des Voleurs 狼森と笊森、盗森
- La nuit de la fête 祭の晩
- Le Rat Tsué 「ツエ」ねずみ
- Les Poteaux électriques au clair de lune 月夜のでんしんぼしらの軍歌
- L'Éléphant blanc オツベルと象
- Signaleur et Signalesse シグナルとシグナレス
- Le Fils des oies sauvages 雁の童子
- Le Diamant du Bouddha 十力の金剛石
- Le Filet d'Indra インドラの網

Les Fruits du ginkgo 『いちょうの実』

Le Serpent à plumes, 1997

Le Serpent à plumes (collection "Motifs"), 2006

- Les Lys de Gadolf ガドルフの百合
- Le Jeune Echo 若い木霊
- Tanéli avait vraiment l'impression d'avoir mâché toute la journée
タネリはたしかにいちにち噛んでいたようだった
- Yomata, le Lys merveilleux 四又の百合
- Trois Diplômés de l'école du Blaireau 洞熊学校を卒業した三人
- L'Office des chats 猫の事務所
- La Biographie de Nénémou Pène-Nène-Nène-Nène
ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記
- Les Enfants-Fruits du Ginkgo いてふの実
- Histoires de farfadets ざしき童子のはなし
- La Fourrure du rat-des-neiges 氷河鼠の毛皮
- Le Dragon et le poète 龍と詩人

Les Astres jumeaux 『双子の星』

Le Serpent à Plumes, 2006

Le Serpent à Plumes (collection "L'Ecdysiaste"), 2018

- Kajû et la danse des cerfs 鹿踊りのはじまり
- La Chênaie dans la nuit かしはばやしの夜
- Les Rainettes et le crapaud カイロ団長
- Au printemps, l'Homme-des-Montagnes fait un rêve 山男の四月
- Le Feu du coquillage 貝の火
- Lin Pâ, Lin Poû, Lin Pô, fantaisie chinoise 北守将軍と三人兄弟の医者
- Les Bêtes au clair de lune 月夜のけだもの
- Le Commissaire qui aimait trop le poison 毒もみのすきな署長さん
- Le Bois de Kenjû, le bois pour tous 虔十公園林
- Les Astres jumeaux 双子の星

Les Pieds nus de lumière 『ひかりの素足』
Cambourakis, 2020

Que la pluie ne m'abatte 『雨ニモマケズ』
Jentayu, 2020 (天沢退二郎による解説つき)

また、Hélène Morita と Shizuko Bugnard が共訳した作品は、次の通りである。

Hélène Morita et Shizuko Bugnard

Les Pieds nus de lumière 『ひかりの素足』
Le Serpent à Plumes, 1998 ; Le Livre de poche (collection "Biblio"), 2003

Hélène Morita に次いで、多く翻訳をしているのが、Françoise Lecœur である。全部で5冊であり、そのうち、作品集が2冊であり、『銀河鉄道の夜』を翻訳したものが3冊ある。

Françoise Lecœur

Dans la voie lactée 『銀河鉄道の夜』 (直訳は、『銀河の中で』。)
Editions Picquier, 1989

Le train de la voie lactée 『銀河鉄道の夜』
Critérium, 1990

- Le Dieu de la terre et le renard 土神と狐
- L'étoile de l'engoulevent よだかの星
- Les glands et le chat sauvage どんぐりと山猫
- Le mois des narcisses 水仙月の四日
- L'homme de la montagne 山男の四月
- Gauche et le violoncelliste セロ弾きのゴーシュ

- Le train de la voie lactée 銀河鉄道の夜
- Matasaburo, l'enfant du vent 風の又三郎
- Opbel et l'éléphant オッペルと象
- Le restaurant aux nombreuses commandes 注文の多い料理店

Le train de la voie lactée 『銀河鉄道の夜』

Critérien, 1993

Le coquillage de feu et autres contes 『貝の火とその他の童話』（和訳は、筆者。）

L'Harmattan (collection "Lettres asiatiques"), 1995

- Prélude à la danse des cerfs 鹿踊りのはじまり
- Le Général Son-bâ-yû et les trois frères médecins 北守将軍と三人兄弟の医者
- Le coquillage de feu 貝の火
- La bonne pierre volcanique 気のいい火山弾
- L'enfant des oies sauvages 雁の童子
- Les bottes en caoutchouc de la grenouille 蛙のゴム靴
- Le Grand Chariot et les corbeaux 鳥百態
- Le magnolia マグノリアの木
- La valise de cuir 革トランク
- Le biographie de Gusuke Budori グスコーブドリの伝記
- La nuit de la forêt des chênes 二十六夜
- Le parc frestier Kenjû 虔十公園林

Printemps et Ashura 『春と修羅』

Editions Fata Morgane, 1998 (Francis Coffinet 編)

その他の7名の訳者による翻訳がある。訳者の名前を挙げる。Yves-Marie Allieux、René de Ceccatty と Ryôji Nakamura、Elisabeth Suetsugu、Ryoko Sekiguchi と Patrick Honoré、Déborah Pierret Watanabe である。René de Ceccatty と Ryôji Nakamura、Ryoko Sekiguchi と Patrick Honoré は、共訳である。訳者と翻訳本は、以下の通りである。

Yves-Marie Allieux

Anthologie de poésie japonaise contemporaine 『日本現代詩歌傑作集』（和訳は、筆者。）

Gallimard (collection "Du monde entier"), 1986

- Le Printemps et le démon Asura 春と修羅
- Danse du sabre au village de Haratai 原体剣舞連

René de Ceccatty et Ryôji Nakamura

Europe n° 693-694, janvier-février 1987

- Coulée de lave 気のいい火山弾
- Le Mont Iwaté 岩手山

Elisabeth Suetsugu

Le Bureau des chats 『猫の事務所』

Editions Picquier, 1997

Picquier poche, 2009

La Loupe (édition en gros caractères), 2010

Ryoko Sekiguchi et Patrick Honoré

La Cocotte (Collection "Raconte-moi une histoire de cuisine", volume 9), 2012.

Le Club des gourmets et autres cuisines japonaises, P.O.L., 2013

- *Matin d'adieu* 永訣の朝

Déborah Pierret Watanabe

Gôshu le violoncelliste 『ゼロ弾きのゴーシュ』

Ynnis Éditions, 2019

以上から、フランス語翻訳本が全 27 冊あること、翻訳者が 10 名いること、また、80 年代から翻訳され始めていることがわかる。それぞれの作品の出版回数が多い順に並べると、次のようになる。括弧内に翻訳者数も記す。

銀河鉄道の夜	5 回 (2 名)
ゼロ弾きのゴーシュ	4 回 (3 名)
水仙月の四日	4 回 (1 名)
風の又三郎	3 回 (2 名)
山男の四月	3 回 (2 名)
真鶴とダリア	3 回 (2 名)
雪渡り	3 回 (1 名)
なめとこ山の熊	3 回 (1 名)
ひのきとひなげし	3 回 (1 名)
やまなし	3 回 (1 名)
ポラーノの広場	3 回 (1 名)
気のいい火山弾	2 回 (3 名。うち、一つは 2 名による共訳)
貝の火	2 回 (2 名)

猫の事務所	2回（2名）
オツベルと象	2回（2名）
雁の童子	2回（2名）
鹿踊りのはじまり	2回（2名）
北守将軍と三人兄弟の医者	2回（2名）
虔十公園林	2回（2名）
春と修羅	2回（2名）
ひかりの素足	2回（2名。うち、一つは2名による共訳）
雨ニモマケズ	2回（1名）
永訣の朝	1回（2名による共訳）
種山ケ原	1回（1名）
おきなぐさ	1回（1名）
狼森と笹森、盗森	1回（1名）
祭の晩	1回（1名）
「ツェ」ねずみ	1回（1名）
月夜のでんしんばしらの軍歌	1回（1名）
シグナルとシグナレス	1回（1名）
十力の金剛石	1回（1名）
インドラの網	1回（1名）
ガドルフの百合	1回（1名）
若い木霊	1回（1名）
タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった	1回（1名）
四又の百合	1回（1名）
洞熊学校を卒業した三人	1回（1名）
ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記	1回（1名）
いてふの実	1回（1名）
ざしき童子のはなし	1回（1名）
氷河鼠の毛皮	1回（1名）
龍と詩人	1回（1名）
かしはばやしの夜	1回（1名）
カイロ団長	1回（1名）
月夜のけだもの	1回（1名）
毒もみのすきな署長さん	1回（1名）
双子の星	1回（1名）
土神と狐	1回（1名）
よだかの星	1回（1名）
どんぐりと山猫	1回（1名）
注文の多い料理店	1回（1名）

蛙のゴム靴	1回（1名）
烏百態	1回（1名）
マグノリアの木	1回（1名）
革トランク	1回（1名）
グスコブドリの伝記	1回（1名）
二十六夜	1回（1名）
原体剣舞連	1回（1名）
岩手山	1回（1名）

宮澤賢治の作品のうち、フランス語に翻訳されたものは、全 59 作品にのぼり、フランス語圏でも宮澤賢治が受け入れられているとうかがえる。そのうち、最も回数が多く出版された作品は「銀河鉄道の夜」である。その次に「セロ弾きのゴーシュ」と「水仙月の四日」が多く出版された。「風の又三郎」「山男の四月」「真鶴とダリア」「雪渡り」「なめとこ山の熊」「ひのきとひなげし」「やまなし」「ポラーノの広場」の 8 作品が続く。59 作品のうち、62.7%の作品が、1 回のみ出版されたもので、例えば、「十力の金剛石」「注文の多い料理店」などである。

3 宮澤賢治仏語訳の解説本

ここで、宮澤賢治のフランス語翻訳の解説本を挙げる。

第一に、日本語からフランス語へ翻訳の題材として、宮澤賢治の「オッペルと象」（「オツベルと象」）の部分訳を比較、議論したものに、大賀正喜、Gabriel Mehrenberger (1987) 『和文仏語訳のサスペンス-翻訳の考え方-』がある。両者の考えをそれぞれ以下にまとめる。

大賀正喜 (1987) によると、『オッペルと象』は話の内容がきわめて日常的、具体的であり、「ぎくつとした」というような内容の持つ *connotation* (含意) をつかむのは非常に難しいとしている。さらに、*niveau de langue* (言語使用の差異) の問題もあり、話しことばにも、*familier* (くだけた)、*populaire* (一般的な)、*vulgaire* (下品な) という違いがあるが、本作品は話しことばのように見えるが実際は異なり、話しことばを借りた文学、文学の語りで、賢治の文体をどう訳すのかが課題であるようだ。

Gabriel Mehrenberger (1987) は、文体にリズムがあることや、現代の日本語とどのくらい違うのかはわからなかったため、現代フランス語で訳したとし、東北地方のことばもあるかもしれないが、日本的なものがあまり出てこないことや、場所が不明で、全く *fable* (物語) の世界であるから、全部フランス語に訳すことができると述べた。また、賢治は *onomatopée* の名人であり、課題にした部分にはあまり含まれていないが、「のんのんのんのんやってきた」や「ほ

くほくした」など、よく *onomatopée* が使われており、訳すことは面白いとしている。例えば、「ぎよっとした」が4回出くることに関して、フランス語ではひとつの文章で同じことばを繰り返すのは、避けなければならないが、その性質は、物語の文体、*langage oral* では当てはまらず、繰り返すことで聖書のようにリズムが出て、覚えやすくなるようだ。

第二に、宮澤賢治の作品の仏語訳について解説したものに、Gabriel Mehrenberger (1995) 『宮澤賢治をフランス語で読む』がある。オノマトペについて触れた箇所を要約する。

日本語は擬音語を多用するため、何か音が出るような場合、その音の感じをできるだけ具体的に出そうとするが、フランス語ではその必要はなく、むしろおかしくなることが多い。賢治はオノマトペが特に多く、擬音語、擬態語の数や種類が研究の対象になるほどで、他の童話作家と比較しても格段に多いのは、賢治に特別の考えがあつてのことである。例えば、「ばたっと手を拍ちました」の「ばたっ」はとくに考慮する必要はないため、「ばたっと」は訳さず、*frappa dans ses mains* 〈手を拍った〉で十分であり、このあたりがことばの面白いところである。「ぼんぼん叩きはじめました」の「ぼんぼん」は無視してもいいが、出すとすれば *tagada-tagada* である。この時演奏している曲が「愉快な馬車屋」であり、馬が走る音も *tagada-tagada* であるから、実によく対応している。このように、語と語の調和は非常に重要である。「ふっと何だかこれは、鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました」では、「ふっと」の感じを出したいので、*il eut comme l'impression que c'était peut-être le coucou...* 〈それはきっとカッコウが…という印象を受けた〉とすれば、*comme* 〈として〉と *peut-être* 〈きっと〉で「何だか」というぼかした感じが出る。

以上を整理すると、以下のことが言える。

[1] 日本語オノマトペは、次のように分類できる。

- 第1類 基本要素が見えない複雑なもの（生成過程で簡単に説明ができない、複雑な説明が必要なもの）
- 第2類 基本要素からの加工と展開（基本要素からの生成過程で説明がつくもの）
- 第3類 基本要素が孤立しているもの（基本要素からつくりあげたものではないもの）

宮澤賢治の初期童話作品に見られたオノマトペの大部分が、第2類であり、標準的な基本要素から生成されたものである。

- [2] 基本要素の加工には、18種類があり、「操作なし」が過半数であるが、全体の3分の1ほどには何らかの加工が加えられ、「操作あり」480件中、「促音挿入／り付加」の複合は、22.3%で加工中の最大値を示している。

基本要素の展開には、13種類があり、反復系の合計は約半数まで上り、反復系は「×2」から「×6」まですべてあり、それが初期童話段階から見出される。

初期童話の文中に最終的に実現される姿としては、9種類見られた。

- [3] 非標準語的なオノマトペには、方言の感性を表すものと賢治の個人的感性の感じられるものがあり、現代日本語では耳慣れず共通語形と等しくないように思われるもののなかには、俚言性ではなく古態性がある場合があることから、俚言であるか、賢治の独創かは慎重な検討が必要である。
- [4] 宮澤賢治の作品のフランス語翻訳本は27冊あり、10名の翻訳者によって、「銀河鉄道の夜」「セロ弾きのゴーシュ」など全59作品が訳されている。
- [5] 賢治の童話作品は、単に平易な子供向けの物語とは異なり、独特の文学性を有する文体であることから、賢治の世界観を表すのに、どのような語を使用するのかという点、また、話し言葉でも *familier* (くだけた)、*populaire* (一般的な)、*vulgaire* (下品な) という違いがある中、どれを選択するのかという点が、全体として課題となる。

また、架空の世界を描いたものであり、日本的なものはあまりでてこないため、全てフランス語に訳することは可能であるが、訳文に原文のオノマトペのニュアンスを含めるかどうかは、場合による。オノマトペの訳出と言っても、擬音語か擬態語かによっても異なる。擬音語は、フランス語においては、訳が不必要である、もしくは訳するとかえって奇妙になってしまうことがある。ただ、語と語の調和がとれる条件では、フランス語の擬音語を使用することは効果的である。擬態語をフランス語に訳すことは、不必要とはいえ、何らかの形で訳文にも原文の擬態語のニュアンスを表すことは可能である。

第4章 日仏オノマトペ対照の研究史展望

ここで、日仏オノマトペ対照の先行文献を検討する。

まず、辞典を用いた研究や、語そのものの語源や音声からアプローチした研究をあげる。

田島宏 (1973) は、『外国人のための基本語用例辞典』の付録「擬声語・擬態語について」に収録されている 200 語について、どの程度フランス語に移せるのかどうかを、日本語が達者で語感も鋭いフランス人に試みたが、「結果は、一部の擬音語を除いて、大部分は訳せないか、あるいは無理に訳したとしても、日本語のイメージからひどくかけ離れた分析的・説明的な訳文にならざるをえませんでした。」としている。

加えて、動物の鳴き声についての表現がフランス語では豊かで、細かくわかれているということは想像以上だが、その他の擬音語については、日本語の方がむしろ豊かで、特に自由に作れるという特徴が見られるとしている。さらに、擬態語になると、もうお手あげであり、*pêle-mêle* 「ごちゃごちゃ (に)」、*méli-mélo* 「まぜこぜ」、*cahin-caha* 「どうにかこうにか」、*fla-fla* 「見せびらかし」などはフランス語の擬態的表現といえるかもしれないとしている。したがって、「けろりと忘れる」を *oublier complètement* (完全に)、「ぐうぐう眠る」を *dormir profondément* (深く)、「ゆらゆら揺れる」を *se balancer lentement* (ゆっくり)、「すくすく育つ」を *grandir rapidement* (急速に)、「するする登る」を *grimper rapidement*、「ひらりと」も「ふわふわ」も *légèrement* (軽く) と訳す以外に方法がないとすれば、擬態語については日本語のイメージがフランス語にはほとんど全く移しえないといわざるをえないと述べている。

200 語の擬音語・擬態語をフランス語に移せるのかどうかという試みは、大変興味深いだが、頼んだフランス人がどのような経歴の持ち主だったのかは、明らかではない。例えば、日本語の学習歴はどのくらいなのか、日本の滞在歴がどのくらいあるのか、もしくはないのか、職業や専門は何なのか等によっても、結果が異なるのではなかろうか。また、複数のフランス語母語話者に同様の調査をすることも考えられる。

わずかではあるが、擬態語的表現として、*pêle-mêle* 「ごちゃごちゃ (に)」、*méli-mélo* 「まぜこぜ」、*cahin-caha* 「どうにかこうにか」、*fla-fla* 「見せびらかし」が挙げられている。フランス語のオノマトペには擬態語が想定されていないという『フランス語オノマトペ辞典』の定義に異を唱える内容であり、注目に価する。ただし、それらがほかならぬ擬態語であることの根拠を示す必要があるだろう。擬音語については、フランス語では動物の鳴き声は豊富にあるが、その他は日本語の方が豊かで自由に作れるという指摘は興味深い。

上記の論を受けて、動物の鳴き声を含めたフランス語の擬音語、擬態語を整理したものに、次の研究があげられる。

石野好一(2014)は、『プチ・ロワイヤル仏和辞典』においてフランス語のオノマトペにあたる語(「擬」と表示されている)を抽出し、金田一(1978)の分類から、音を表すものを「擬音語」と「擬声語」に分け、様子や動きを表すものは「擬態語」とした。オノマトペが名詞の場合は、男性名詞を(m)女性名詞を(f)と記した。これによると、37種類の擬音語、27種類の擬声語、11種類の擬態語が列举されている。それぞれを以下に引用する。

37種類の擬音語のうち、11種類が男性名詞である。

「名詞

claquement	(m) (ドアの閉まる) パタン; (鞭(むち)の) ピシッ; (拍手の) パチパチ; (歯)のカチカチ
crincrin	(m) (安物バイオリンの) キーキ
dring	(m) (鈴、特にベルの) リーン、ジリン
flic flac	(m) ぴしぴし、ぴしゃぴしゃ(鞭(むち)、平手打ち); ひたひた(波); びしゃびしゃ(水たまりを歩く)
floc	(m) ぴしゃ、ぱしゃ(水)
flop	(m) べしゃん、ばしゃん(柔らかな物が落ちた時)
glouglou	(m) ごぼごぼ、どくどく(液体)、くうくう(七面鳥・鳩など)
snif(f)	(m) くんくん、ふんふん(においをかぐ)
teuf-teuf	(m) (エンジン) ぱたぱた
tic(-)tac	(m) (エンジン)(機械・時計など) チクタク、こちこち、かちかち
zinzin	(m) 騒々しいもの

27種類の擬声語のうち、4種類が動詞、3種類が男性名詞である。

「動詞

chuchoter	ささやく、耳打ちする、ざわめく
chuintier	しゅうしゅう鳴らす、フクロウが鳴く
jaser	うわさする; 悪口を言う、[鳥] さえずる; [幼児] 片言をしゃべる; [小川など] せせらぐ、((古))ぺちやぺちやしゃべる
zézayer	= zozoter 歯音 [シュー音] 不全の発音をする

名詞

brouhaha	(m) (群衆の) ざわめき、どよめき
couac	(m) (吹奏楽など) 調子はずれの音
cri-cri、cricri	(m) (コオロギ・セミなど) 鳴き声

11種類の擬態語のうち、8種類が名詞である。

「charivari	(m) 騒がしい物音、喧騒(けんそう); (金切り声をあげての)
------------	----------------------------------

大騒ぎ、てんやわんや

couac	(m)	「調子はずれの音」から「不一致、不調和」
guili(-)guili	(m)	(くすぐる時の) こちょこちょ (擬声語)
pioupiou	(m)	((話・古)) 若い兵士 ; 兵卒、兵隊
tintin	(m)	ガラスの触れ合う音から、「何もないこと」
toc	(m)	こつこつ [ぱん、ぽん] という音から、偽物、模造品 ; 下らない物
tralala	不信・喜びの間投詞から (m)	「派手、華美 ; 気取り」の意味で
zinzin	(m)	騒々しい物 (エンジンなど) から、(形容詞) 頭が少し変な

『プチ・ロワイヤル仏和辞典』の見出し語は、4038(第3版)4320(第4版)である。(石野は第3版を使用)」

37種類の擬音語のうち、11種類が男性名詞であり、27種類の擬声語のうち、4種類が動詞、3種類が男性名詞である。また、11種類の擬態語のうち、8種類が名詞である。フランス語のオノマトペは、名詞としての運用が可能であるということがわかる。擬声語には、動詞も観察されている。これは、日本語オノマトペがフランス語に翻訳された時に、名詞や動詞になって現れる場合があることの一理由の一つとして、考えられそうである。フランス語では、オノマトペが擬音語もしくは間投詞であるとされているが、日本で出版された仏和辞典のフランス語には、名詞や動詞もオノマトペとして掲載されているのは、実際のところ、フランス語のオノマトペという術語が指す対象は、擬音語や間投詞のみに限らず、もっと広いからかもしれない。また、「擬態語」と分類されているものは、実際には、擬音語・擬声語・間投詞由来のもののみであって、日本語のように、音のイメージによって、印象や感覚を表示しているものではないことにも、注目してよい。

泉邦寿(2004)は、フランス語の動詞の中に、オノマトペ的な要素が含まれるのではないかという説を唱えている。

動詞では、ふらつく、きらめく、ぎらつく、はためくなどがオノマトペを元にして派生されたものだが、もう元がわからないまでになっているものもある。ささやく、とどろく、ひかる(ぴかぴかと関係あり)、おどろく、ゆれる、などだ。しかし、こうした動詞までをオノマトペとはふつう考えない。音象徴(sound symbolism)という類のものに入るか、あるいは、もはやふつうの語と考えられているのである。

もし、こうしたところまで範囲を広げるなら、フランス語にも擬声語はもちろん、擬態語はたくさんあることになる。chuchoter「ささやく」、grincer「きしむ」、rouler「転がる」、briller「輝く」、étinceler「きらめく」など、みなそうである。

フランス語を含むヨーロッパ語は、日本語よりもオノマトペが少ないとされている。しかし、上の論のように、*chuchoter*、*grincer*、*rouler*、*briller*、*étinceler* といった動詞までオノマトペとみなすことが可能であるならば、『フランス語オノマトペ辞典』に記載されているものはフランス語のオノマトペの一部に過ぎない可能性があり、音声を表す擬音語のみならず、様態や状況を表す擬態語もフランス語に存在し得ると言えるかもしれない。ただし、その場合、語彙的集合（クラス）としての擬態語ではなく、擬態語的要素というべきであることには注意しておく必要がある。

青木三郎（2006）は、フランス語の動詞の意味を、語源から分析した。

フランス語は他の西洋諸語と同様にオノマトペの使用が少ない。それに比して日本語では(1)のように動詞をオノマトペ（擬音語・擬態語）で修飾することは頻繁に行われる。

- (1) 湖面が星のようにきらきら輝く。

対象の輝く様を「星のように」という比喩表現とキラキラという擬態語とを重ねるのは日本語の自然な表現手段である。フランス語では、「星のように (*comme des étoiles*)」のような比喩表現はあるが、キラキラに対応する擬態語は存在しない。

- (2) *Le lac brille comme des étoiles.*

定冠詞 / 湖 / 輝く / ように / 不定冠詞 / 星

(湖は星のように輝く。)

フランス語では動詞 *briller* の中にすでに語源的にオノマトペが含まれており、オノマトペで動詞を修飾する必要がない。動詞 *briller* (輝く) は *Trésor de la langue française* (TLF) によれば、15世紀後半にイタリア語の *brillare* (揺れる、振動する) から借用された動詞である。*brillare* の語源は不明だが、ヴァルトブルクの語源説では *prillare* (ぐるぐる回転する) に由来するのではないかと考えられている。*prillare* から <独楽の回転>を意味する名詞が派生される。ヴァルトブルクは語源 **pri(l)-* に「振動する、回転する」という意味のオノマトペがあり、そこから星の点滅する輝きを表す *briller* が生じたと仮説する。この仮説に依拠するならば、*briller* は「きらきら輝く」というよりも、輝きの擬態語キラから形成された動詞キラメクに近いと理解するべきかもしれない。フランス語ではオノマトペを語源にして動詞を派生させるのが一般的で、日本語のように多彩なオノマトペで動詞の表す動きや状態を修飾することがない。

フランス語の動詞の一部には、それらの語源自体にオノマトペの要素がすでに含まれていたものが動詞化した場合があるという指摘は、注目に値する。**briller** が「きらきら輝く」というよりも、動詞キラメクに近いという考えは、フランス語のオノマトペには動詞も含まれるとした研究の結論を裏付けることになりうるだろう。ただし、**brillare** の語源が、ヴァルトブルグの主張するように **prillare** だとして、それが〈ぐるぐる回転する〉という意味であることが、そのまま、オノマトペであるという根拠にはならないことにも注意しておく必要があるだろう。オノマトペの研究でフランス語の動詞について考察する時、オノマトペを語源にした動詞であるのかどうか、慎重に検討する必要がある。その上で、フランス語オノマトペとして認定できるか難しい判断をすることが求められるだろう。

田辺保 (1969) (1997) は、フランス語オノマトペやその他の語の音韻に関して、次のように述べている。

ドーデ¹⁴の文章の中に、間投詞とともに際立つものは、擬声語 (*onomatopée*) だとして、**Pan! pan!** (戸をたたく音)、**cra-cra** (羽ペンが紙の上をきしる音)、**patati patata** (ペチャクチャというおしゃべり)、**tic tac** (時計の音) **clopin-clopant** (エッチラ、オッチラびっこを引いて歩く感じ) を例にあげている。日本語が擬音的表現にたいへん富んでいて、「廊下をパタパタと歩く」「スーッと消えていく」「ほんのりかかった春がすみ」などをフランス語に訳するのにはいつも苦労しているだけに、フランス語自体の中にも含まれている語の音韻上の有縁性には、非常に興味をそそられるとしている。

一般的に言って、たとえば、**brrr** のような音は、寒さや恐怖によるふるえを示し、**ch**、**cht** の音が沈黙を命ずる効果をもつことはうなずけるでしょう。(…) **clac**、**clac** は何か激しくぶつかって鳴り響く感じ、**toc**、**tac** は乾いた衝撃音を連想させ、**spasme** (けいれん) などの **s** 音は、ハアハアと息をあげく感じをよくあらわし、**fluide** (液体)、**liane** (蔓) などの **l** 音はさすが流音といわれるだけあって流れるような感じ、するすると伸びていく感じをうまく表現しているようです。さらに **porc-épic** (やまあらし) のように、**k** 音が二つ並ぶと、この動物の痛いどげどげが感じられるという人もあり、ラテン語 **papilio** からきた二つのフランス語の単語 **pavillon** (旗、のぼり)、**papillon** (蝶) には、風にひるがえる布の音、二枚の羽根がぱたぱたと動かされる音を聞きとる人もあります。

フランス語の語句に関する音声学的な視点に加えて、モーラ数から受ける印象についても考慮する必要があるということがわかる。フランス語では **s** 音がハアハアと息をあげく感じをよくあらわすとしているが、この考えには多少の違和感を覚える。**porc-épic** という語を、**k** 音が二つ並ぶとしているが、**k** 音が途切れなく連続しているわけではないので、モーラの最後の音が **k** 音であるのが続くと、トゲトゲした感じがあるということであろう。

¹⁴ 田辺保 (1969) (1997) には、ドーデと記載されている。

いずれにせよ、フランス語の語句に、音韻上の有縁性が見られるものがあるという論は、フランス語母語話者にとっては、日本語のオノマトペの理解や習得に役立つことにつながり得るだろう。日本語母語話者にとっても、日本語とフランス語の共通点を見出すことができるという有益な指摘であると言える。言語教育にこの論を取り入れるには、どのような教材が適しているのかなど、考える必要がありそうだ。

次に、オノマトペが出現する作品から実例をあげて検証した、日仏オノマトペの対照研究の論文をいくつか取り上げ、以下にまとめる。

岡本克人（1990）は、日本とフランスの絵本にみられるオノマトペを対照した。

ネイティブ・スピーカーの説明によると、フランス語圏ではおよそ 10 才位からオノマトペの使用から遠ざかるようになり、読みもしなければ聞きもしなくなって忘れてしまうそうである。フランス社会では、オノマトペは正規の言語記号ではなく幼児語や間投詞のような価値が低い存在なのである。

フランス語の絵本は、最後まで一度もオノマトペが出てこないものも多く、日本人は最初、少し冷やかな印象、静か過ぎるのではないかと、という感想をもつだろう。従って、逆にフランスの側からいうと、日本の絵本はかなりにぎやかなのである。もっともあるインフォーマント（フランス語話者）によると、幼児に絵本を読んでやる時に、原文にはないオノマトペを付け加えるなどして、興味をひきつけることもあるそうである。ということは、日本人が直感的に想像するように、どこの国の子供でもにぎやかな音が好きなはずであるが、（現に漫画にはオノマトペが日本の漫画も顔負けの勢いで出ることもあるのだから）、文化的なパターンが異なっていて、かなり大人の側からの抑制が効いているのではないかということである。

まず、オノマトペは価値の低い存在だと見なされていると、断言できるのであろうか。使用がはばかられ使用度が少ないのと、価値が低いかどうかは、指標が異なるのではないか。岡本克人（1990）は、1 人のネイティブ・スピーカーに尋ねたようだが、複数のフランス語母語話者に意見を求めた方が、より客観的な結果が得られるにちがいない。

次に、この論におけるフランス語の絵本というものが指すものは、日本語が原作の絵本のフランス語版ではなく、フランス語が原作の絵本であるようだが、日本語原作のフランス語版でも同様の結果が得られるのか、疑問である。

さらに、フランス語が原作の絵本では、オノマトペの使用に大人側からの規制があるというならば、読者の対象が幼児であっても、オノマトペは文体として相応しくないが、読み聞かせを行う際に大人が発声し、声からの情報として使用される分には、許容されるということであろうか。フランス語において、オノマトペは、そもそも音や声の情報を表すものであるから、幼稚性を表し、大人は使用することが少ないということに加え、幼い子供向け

の絵本であっても書かれる文や単語にオノマトペは相応しくないと判断されている可能性があるであろう。

上記の論文は絵本についてであったが、漫画を扱ったものもある。山中冴ゆ子(2010)は、「田守/スコウラップ(1999)で主張されているように、音象徴は普遍的なものであるかという疑問から出発し、英語同様、日本語とは系統的な関係も言語接触もないフランス語と、日本語の音象徴について考察した。」まず、『フランス語オノマトペ辞典』と『擬音語・擬態語辞典』を用いて、両言語において慣習的なオノマトペのみを取り上げ、日本語とフランス語のオノマトペに音象徴な特徴が見られるのか検討した。「フランス語において特に取り上げるほどの母音の音象徴が見つけれなかった」とし、子音について次のように述べている。水しぶきの音は、*plof*、*plouf*、*splash*、*splatch* など、両唇閉鎖音である [p] や、[s]、[ʃ] といった粗擦音が含まれ、急な終わり方を表す語は *bip*、*clac*、*clic*、*clop*、*fft*、*frrt*、*ploc*、*prout*、*smack*、*tchac*、*chtac*、*schlac* のように [p]、[t]、[k] で終わる。さらに、語頭子音に見られる日仏語共通の音象徴を踏まえて、日本語が原文である漫画を6作品取り上げ、次のように結論づけている。

日本語原文の漫画の中で使われているオノマトペと、その仏語訳されたものを比較検討した。その結果、フランス語は、日本語ほどオノマトペ(特に擬態語)に豊富な言語ではないという原因もあり、慣習的なフランス語オノマトペで、音声的にも意味的にも日本語に近かったものは、あまり見られなかった。しかし、臨時的な仏語訳オノマトペは多かったものの、言語の音声にはあまり似ていないものも複数見られ、言語の音声より、その状況のイメージが湧きやすいと思われるものを訳者は選んだということが言える。また、原語では同じオノマトペが使われていても、訳者によって、あるいは同じ訳者であっても場面によって、何に重点を置くかで、用いられた仏語訳オノマトペにはかなりの差があった。これは2つの言語における音象徴の問題というより、訳者個人の音声感覚や、翻訳の問題であろう。

この研究で使用された漫画は、

- 作品1：高橋和希(1997)『遊戯王』第2巻、フランス語版 *YU-GI-OH*. Sébastien Gesell 訳
- 作品2：井上雄彦(1991)『スラムダンク』第1巻、フランス語版 *SLAM DUNK*. Misato 訳
- 作品3：吉崎観音(1999)『ケロロ軍曹』第1巻、フランス語版 *KERORO*. Thibaud Desbief 訳
- 作品4：真島ヒロ(2006)『フェアリーテイル』第1巻、フランス語版 *KERORO*. Vincent Zouzoukovsky 訳
- 作品5：藤子・F・不二雄(1974)『ドラえもん』第1巻、フランス語版 *DORAëmon*. Misato 訳

作品6：大場つぐみ、小畑健（2004）『デスノート』第1巻、フランス語版 *DEATH NOTE*.

Myloo Anhmet 訳

である。これら6作品を選択した理由が述べられていないため、作品の選択にあたってどのような基準があったのか不明である。また、フランス語翻訳版の訳者がどのような経歴の方なのか気になる場所である。漫画は、絵があることから、原文の日本語オノマトペの音声をもとに、フランス語の綴りで示しても、読者には日本語オノマトペのニュアンスが伝わる場合があるはずだが、見られた臨時的なオノマトペは、日本語オノマトペの音声よりも、状況の描写に重きが置かれるのであるとすれば、訳者が原文の音声情報よりも状況説明を優先したということであろう。

童話では、宮沢賢治『銀河鉄道の夜』を調査対象としたものがある。井波真弓（2011）は、例文をあげて、規則的に繰り返される音にフランス語との対応関係がみられること、日本語のオノマトペに対して、フランス語においては音声への関心が高くないことを指摘した。

フランス語のオノマトペに訳されていないからと言って、音声への関心が低いと断言できるものなのか、疑問である。フランス語においては、動詞、名詞など、オノマトペ以外の品詞に訳される方が、フランス語翻訳版の読者としてはしっくりくるために、フランス語オノマトペが採用されなかった可能性はないだろうか。オノマトペの語形による分析や、統語論的分析はされていないが、分析を深めることで、異なる結果が得られるかもしれないと考える。

加えて、大きな問題点がある。日本語のオノマトペは擬態語と擬音語を総称するものとする先行研究を示しながらも、この研究で用いるオノマトペという語がさす対象が何かは、定められていないことだ。例文を見る限り、「さま」のみを表す日本語オノマトペを取り上げていないことから、擬音語のみをオノマトペとみなしていると推測される。ただ、どのような基準があって、オノマトペとみなしたのかは定かではない。オノマトペの研究であるからには、オノマトペの基準を明記する必要があるはずだ。

以上を整理すると、従来の日仏オノマトペ対照研究の流れとして言えることは、

- [1] 『外国人のための基本語用例辞典』や、仏和辞典に掲載されているフランス語オノマトペを取り上げたり、フランス語の語句の語源や音韻に注目したりすることで、日本語のオノマトペと比較した研究
- [2] フランス語のオノマトペが出現する絵本や漫画、童話の実例をあげて、日本語と比較した研究

といった大まかにふたつの方法で行われた研究に分類でき、注目すべき点として、

- [1] フランス語のオノマトペは、擬音語や間投詞とされているが、フランス語の動詞

- には、擬態語的な要素が含まれる可能性があるということ
- [2] フランス語で書かれた絵本、漫画、童話にオノマトペが現れる頻度は少ないということ
- [3] フランス語の語句に、音韻上の有縁性が見られるものがあること

が指摘でき、問題点や課題として、

- [1] 仏和辞典において「擬態語」と分類されているものは、実際のところ、擬音語・擬声語・間投詞由来のもののみであり、日本語のように、音のイメージによって、印象や感覚を表示しているものであるとは言えないこと
- [2] フランス語の語句に擬態語的な要素が見られたとしても、それがすなわちオノマトペであるという根拠とはなりえず、オノマトペとみなすには更なる基準や検討が必要であること
- [3] 文章語¹⁵のフランス語では、オノマトペの使用が憚られることがあり、また、日本語からフランス語への翻訳の場合は、音声情報を訳に含めるかといった訳者の捉え方や、音声感覚が、オノマトペを用いるのか否かに関わること

などが挙げられる。

第2部では、日本語オノマトペの仏語訳の実例を分析・調査していく。翻訳文献は、Hélène Morita 訳の *Train de nuit dans la Voie lactée, Le Serpent à Plumes*, 1995 を用いる。Hélène Morita は、もっとも多く宮澤賢治の作品を仏語訳しており、また *Train de nuit dans la Voie lactée* は、日本とフランスに関する優れた研究や著作に贈られる渋沢・クローデル賞、並びに、宮澤賢治の名において顕彰されるにふさわしい研究・評論・創作などに贈られる宮澤賢治賞奨励賞を受賞している。

Train de nuit dans la Voie lactée には、次の童話が含まれている（日本語原作の題名も、右に併記する）。

- Gauche le violoncelliste セロ弾きのゴーシュ
- Matasaburo, le vent 風の又三郎
- Train de nuit dans la Voie lactée 銀河鉄道の夜

したがって、上記の3つの童話を調査対象とする。

なお、3つの童話の原文に出現したオノマトペの総数が少ない順に、次のように取り上げることにする。

- 第1章 『セロ弾きのゴーシュ』と Gauche le violoncelliste
 第2章 『銀河鉄道の夜』と Train de nuit dans la voie lactée
 第3章 『風の又三郎』と Matasaburo, le vent

¹⁵ 口語に対して、文章を書く際に用いる言語のこと。

第2部 宮澤賢治童話におけるオノマトペ仏語訳の記述的研究

第1章 『セロ弾きのゴーシュ』と Gauche le violoncelliste

1 『セロ弾きのゴーシュ』に出現するオノマトペの頻度と形式

宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』にはどのようなオノマトペが用いられているのかを、頻度ならびに形式の観点から整理・考察する。

1.1 頻度

『セロ弾きのゴーシュ』において用いられているオノマトペを、頻度順(同頻度の場合は、五十音順)に並べると、次の通りになる。

- 6 どん
- 5 すっかり
- 4 かつこう ぱっ
- 3 ごうごう ぱちぱち びっくり よろよろ
- 2 かつこうかつこうかつこうかつこうかつこう きよろきよろ ごくごく
こつこつ さっさ じっ どっかり とんとん どんどん ぱたっ
ばたばた ぱっ ぴたっ ぴたり ぶるぶるぶるぶる ぼんやり むしゃくしゃ
- 1 がさがさ かつきり かつこうかつこう
かつこうかくうかつかつかつか かつこうかつこうかつこう
かつこうかつこうかつこうかつこう
かつこうかつこうかつこうかつかつかつか がぶがぶ がらん
ギウギウ きちん きっ ぎっしり ぐうぐう くっ ぐっ ぐっすり
ぐるぐるぐるぐる ぐんぐん けろり ごうごうがあがあ
ごうごうごうごう こっこっ ごつごつ こんこん しいん
シュッ すう するする せいせい そっ そっくり ぞろぞろ
ちよろちよろ ちらちら トオテテテテイ どきっ どしん
にやにや のそのそ ぱたっ パチパチパチッ ぱちん はっ ひっそり
ふくふく ふらふらっ ベロリ ぼう ぼうっ ぼーぼー ぼろぼろ
ぼろん ぼろんぼろん ぼんぼん むっ りん

頻度が最も高かったのは、6回見られた「どん」であった。次いで、「すっかり」が5回、「かつこう」「ぱっ」が4回ずつ、「ごうごう」「ぱちぱち」「びっくり」「よろよろ」が3回ずつ見られた。2回見られたものは、「かつこうかつこうかつこうかつこうかつこう」「きよろきよろ」「ごくごく」などの全17種類であり、1回のみ見られたのは、「がさがさ」「かつきり」「かつこうかつこう」などの全56種類であった。

以上を整理すると、『ゼロ弾きのゴーシュ』においては、頻度2までのオノマトペは、ごく一般的なものであると言える。が、頻度1のものを見ていくと、一般的なオノマトペに混じって、「ギウギウ」「トオテテテテイ」「ぱたっ」「ふくふく」「ぼろん」などのように、特異と思えるオノマトペが用いられていることがわかる。このような、賢治独自の世界を表すように思われるオノマトペを、どのようにフランス語へと移していくのか、そのときに、どのような工夫の跡が見られるかも、のちに考察したい。

1.2 形式

次に、オノマトペの形式ごとに整理した結果は、以下の通りである。

まず、日本語オノマトペについて述べる。

1.2.1 日本語オノマトペの形式

第1類 基本要素が見えない複雑なもの 12 回件 (10.0%)

かっこう かっこうかっこうかっこう

かっこうかっこうかっこうかっこうかっこう

かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっかっ トオテテテテイ

第2類 基本要素からの加工と展開 103 件 (85.8%)

● {X} →加工 φ→展開 φ

きっ くっ ぐっ じっ シュッ すう そっ どん はっ ぱっ

ぱっ ぼう むっ りん

● Xっ系

どきっ ぱたっ ぱたっ びたっ ぼうっ

◎ X×2+っ系

ふらふらっ

◎ X×3+っ系

パチパチパチッ

● Xん系

がらん きちん どしん ぱちん ぼろん

◎ Xん×2

ぼろんぼろん

● Xり系

けろり びたり ベロリ

●×2系

がさがさ がぶがぶ ギウギウ きよろきよろ ぐうぐう ぐんぐん
ごうごう ごくごく こつこつ こっこっ ごつごつ こんこん
するする せいせい ぞろぞろ ちよろちよろ ちらちら とんとん
どんどん にやにや のそのそ ばたばた ばたばた ばちばち
ふくふく ぼーぼー ぼろぼろ ぽんぽん よろよろ

◎X×4

ごうごうごうごう

◎X×2+X×2

ごうごうがあがあ

●挿入系

◎AっA系

さっさ

◎Aーん系

しいん

●促音挿入／り付加系

◎AっBり系

かっきり ぎっしり ぐっすり そっくり どっかり びっくり
ひっそり

●撥音挿入／り付加系

◎AんBり系

ぼんやり

第3類 基本要素が孤立しているもの 5件 (4.2%)

すっかり

以上、出現したすべてのオノマトペの第1類から第3類の総数と割合をまとめると、次のようになる。

まず、第1類の基本要素{X}が見えない複雑なものは、「かっこう」「かっこうかっこうかっこう」「かっこうかっこうかっこうかっこうかっこう」「かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっかっ」「トオテテテテテイ」の6種類が見られた。なお、「トオテテテテテイ」は賢治独自のオノマトペとみなす。

次に、第2類の基本要素から加工と展開について述べる。

基本要素{X}の形のまま出現したオノマトペは、「シュッ」「どん」「ぼう」などの14種類見られた。

{X}から加工したものは、「どきっ」のように促音が付加した「Xっ系」、「がらん」のように撥音が付加した「Xん系」、「けろり」のように「り」が付加した「Xり系」、「がさがさ」のように繰り返しの「×2系」の4つの形式に大きく分類できる。

「Xっ系」は「どきっ」「ばたっ」「ぱたっ」などの5種類のオノマトペが見られた。「Xっ系」を展開したものには、「X×2+っ系」の「ふらふらっ」、「X×3+っ系」の「パチパチパチッ」、「AっAφ系」の「さっさ」の3つの形式が観察された。

「Xん系」は「がらん」「きちん」「どしん」などの5種類のオノマトペが見られた。「Xん系」を展開したものには、「Xん×2」の「ぼろんぼろん」が見られた。

「Xり系」は「けろり」「びたり」「ペロリ」の3種類のオノマトペが見られた。「Xり系」を展開したものはなかった。

「×2系」は「がさがさ」「がぶがぶ」「きよろきよろ」などの29種類のオノマトペが見られた。「×2系」を展開したものには、「X×4」の「ごうごうごうごう」、「X×2+X×2」の「ごうごうがあがあ」の2つの形式が観察された。

「挿入系」は促音挿入の「さっさ」と、長音挿入の「しーん」の2種類オノマトペが見られた。

「促音挿入／り付加系」は「かっきり」「ぎっしり」「ぐっすり」「そっくり」「どっかり」「びっくり」「ひっそり」の7種類のオノマトペが見られた。

「撥音挿入／り付加系」は「ぼんやり」の1種類が見られた。

最後に、第3類の基本要素が孤立しているものに当たるオノマトペは、「すっかり」の1種類が見られた。

以上から、『ゼロ弾きのゴーシュ』に出現したオノマトペのうち、第2類のオノマトペが高い割合(85.8%)を占め、残りは第1類のオノマトペ(10.0%)と第3類のオノマトペ(4.2%)であったと言える。さらに、最も多い形式は「×2系」であり、基本要素が孤立した「X」が次いだことがわかった。また、「×2系」を展開したものとして、「X×4」「X×2+X×2」「X×3+Aっ×5」という3つもの形式が見られ、繰り返しのオノマトペが多いことが指摘できる。

1.2.2 漢語由来のオノマトペの形式

漢語由来のオノマトペは、基本要素を反復した「せいせい」の1例のみが現われた。

2 日本語オノマトペの形態的パターンとその訳出

ここからは、日本語オノマトペの形態的パターンごとに、原文と仏語訳を対比しながら考察する。

2.1 促音

促音には〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉があるとされている。フランス語でもそれらの性質が含まれているように訳出されているのか、例文を挙げて、考察していく。

2.1.1 促音付加

(1) セロ弾きは云いながらいきなりマッチを舌でシュツとすってじぶんのたばこへつけました。

Disant ces mots, le violoncelliste frota brusquement son allumette schuut ! sur la langue et alluma sa cigarette.

「シュツ」は〈①すばやく、勢いよくこすれる音。気体が勢いよく出る音。また、そのさま：188〉を表す。一方、これに当たるフランス語は、schuut !というオノマトペである。『フランス語オノマトペ辞典』には、これと完全に一致するものは見られないが、次のものが記載されている。

CH¹ □ VAR. *sch*. 2. "(bruit d'un fluide ou d'une mèche qui fuse)".

□ VAR. *chu*.

(...)

2. Attesté dep. 1932 : 138

ch が *sch* と書かれることもあり、〈流体もしくは火縄が爆発せずに燃える音〉を示し、1932年の使用例が初出として挙げられている。schuut はこれから派生したものであると考えられるが、最後の子音 *t* は発音される。原文の「シュツ」は、マッチを擦った際の音が瞬間的であることが、促音付加によってわかるが、フランス語オノマトペの schuut は *sch* の後に *uu* と母音が続くことから、ある程度の時間の長さが感じられる。よって、フランス語では原文のオノマトペの促音付加が持つ〈瞬間性〉は、表現されていないと判断する。

(2) またかとゴーシュはどきっとしましたがありがたいことにはこんどは別の人でした。

« Encore ! » se dit Gauche en sursautant, mais heureusement, cette fois c'était pour quelqu'un d'autre.

「どきっ」は〈①驚き、恐れ、期待などで瞬間的にはげしく動揺するさま：288〉を表す。この仏語訳は、en sursautant 〈思わず飛び上がりながら〉である。*sursauter* 〈飛び上がる〉を

使うことで、「驚き、恐れ」によって引き起こされる動作が俊敏であることが示唆され、そのことから、促音付加の〈瞬間性〉〈急転性〉のニュアンスが読み取れると言える。

(3) さっきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになったのに、病気になるといっしょにぴたっと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

Dire que jusqu'à l'instant, votre violoncelle n'a cessé de résonner de manière tout à fait grandiose, et au moment où il est malade, la musique s'arrête brusquement, et j'ai beau vous supplier, vous refusez de jouer encore...

「ぴたっ」〈④動いていたものが、急に止まるさま。継続していたものが、急に絶えるさま：364〉にあたるフランス語は、brusquement〈突然、不意に、いきなり〉である。楽器の音色が止まってしまうさまを表していることから、原文の「ぴたっ」には〈急転性〉のニュアンスが見られる。一方、フランス語の brusquement にも、その意味から〈急転性〉があると判断できる。

2.1.2 反復×2＋促音付加

(4) するとかっこうはどしんと頭を叩かれたようにふらふらっとしてそれからまたさっきのように「かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっかっ」と云ってやめました。Alors le coucou tituba légèrement comme s'il avait reçu un coup sur la tête, puis il interrompt lentement son chant, comme auparavant :

« Coucou, coucou, coucou, cou... cou... cou ! »

「ふらふらっ」は「ふらふら」〈②力がこもらず安定感のないさま。めまいや疲れ、空腹などで体が安定しないさま：404〉に促音が付加したものである。フランス語では、tituba légèrement〈軽くよろめいた、千鳥足で歩いた〉と訳されている。「ふらふらっ」によって、かっこうが、急に体をよろめかせた〈急転性〉に加え、よろけた状態から一区切りついたという〈一区切り性〉という、ふたつの性質が表されている。一方、フランス語からは、かっこうがよろめいた事象は示されているものの、動きが急であったか、または動きに一区切りついたかどうかは、読み取れないことから、訳文には、原文の促音が持つ〈急転性〉および、〈一区切り性〉が含まれていないと言える。

2.1.3 反復×3＋促音付加

(5) すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチッと眼をしたかと思うとぱっと扉の方へ飛びのきました。

Le chat écouta un moment en penchant la tête, mais, brusquement, de petites lumières clignotèrent dans ses yeux et, d'un seul coup, il fit un bond en arrière en direction de la porte.

「パチパチパチッ」は、「パチパチ」〈③しきりにまばたきをするさま：339〉にの基本要素{パチ}を3回繰り返して、促音付加したオノマトペである。これにあたるフランス語は、*de petites lumières*〈小さな光、あかり〉である。原文では、まばたきを繰り返すさまと、一区切りした〈一区切り性〉が含まれている。一方、仏語訳では、〈目の中で小さな光が点滅する〉と表され、出来事としての「まばたきの繰り返しのさま」は、描写されているが、原文の促音のもつ〈一区切り性〉は含まれていないと判断される。

2.1.4 促音挿入

促音挿入のオノマトペは、〈滞留性〉〈時差性〉の性質を持っているとされる。本作品では、「さっさ」の2例のみ見られた。

(6) そら三べんだけ弾いてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

Bon, je vais la jouer seulement trois fois, et dès que j'aurai fini, tu rentreras chez toi, entendu ?

(7) ゴーシュはやぶれかぶれだと思っみんなの間をさっさとあるいて行って向うの長椅子へどっかりとからだをおろして足を組んですわりました。

Gauche, en désespoir de cause, passa rapidement au milieu des musiciens puis se laissa tomber sur une chaise de l'autre côté de la pièce et croisa les jambes.

「さっさ」は〈①迷いや気づかいをせずに、すばやく行うさま。急ぐさま。さっさっ。：150〉を示す。「ささっ」〈ほんのわずかの間に行うさま：148〉と比べると、「ささっ」は〈瞬間性〉があるのに対し、「さっさ」には〈瞬間性〉ではなく、行為が完了するまでに若干時間がかかる〈滞留性〉〈時差性〉のニュアンスを持つと考えられる。上の例文で「さっさ」にあたるフランス語は、*dès que* という接続詞句で〈～するとすぐに、するやいなや〉を意味する。下の文では、〈速く、迅速に、手短かに〉を意味する *rapidement* が「さっさ」にあたる。*dès que* も *rapidement* も、ともに〈瞬間性〉や〈急転性〉は感じられるが、促音挿入のニュアンス〈滞留性〉〈時差性〉があるとは断言できない。

2.2 撥音

2.2.1 撥音付加

撥音付加は〈余韻性〉〈残存性〉のニュアンスを持つとされる。それらがフランス語でも見られるのか、観察する。

(8) そのがらんとなった窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。

Alors, par cette large ouverture, le coucou s'envola comme une flèche vers l'extérieur.

「がらん」〈②何もなくて広々としたさま。空虚でさびしく広いさま：53〉にあたるフランス語は、*large ouverture*〈広い、大きな(物の)口、穴〉である。「がらん」には、窓が開

いたさまが続いている〈残存性〉が含まれている。一方、フランス語の *large ouverture* は、窓が開いたことによって生じた広い空間を示していることから、〈残存性〉のニュアンスは読み取れると言える。

(9) すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ座ったままだうもわからな
いというように首をまげて考えていましたが、

Mais le petit blaireau, d'un air rêveur, s'assit convenablement sur le plancher, puis resta un moment la tête penchée sur la poitrine, en réfléchissant, comme s'il ne comprenait pas ce qu'on lui demandait.

「きちん」〈①整った形にできあがっているさま：64〉にあたるフランス語は、*convenablement* 〈礼儀正しく、きちんと〉である。「きちん」からは、床に背筋を伸ばして座っている姿をとどめていることが表されていることから、〈残存性〉のニュアンスを持っている。フランス語の *convenablement* からも、姿勢を整えて座った結果が続いている〈残存性〉が読み取れると考えられる。

(10) 狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしょってゴムテープでぱちんと
とめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行ってしまひました。

Le petit blaireau, avec une grande précipitation, mit ses baguettes et sa parution sur le dos et fit claquer les bandes de caoutchouc pour bien les ajuster, puis il salua deux ou trois fois et fila rapidement dehors.

「ぱちん」〈①金属などかたいものがぶつかって発する鋭く小さい音。口金を締める音。スイッチの音。基石を打つ音：340〉にあたるフランス語は *claquer* であり、〈〔戸など〕を手荒く閉じる〉という意味の動詞である。「ぱちん」からは、軽い音が耳に響く〈余韻性〉のニュアンスを感じる。一方、フランス語の *claquer* からは、音が出たことは示されているものの、「ぱちん」のみならず「ぱちっ」の訳としても考えられることから、撥音付加の〈余韻性〉が訳出されていると断言することはできない。

2.3 長音

長音は〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを持つとされる。仏語訳にもこれらが含まれているのか、観察する。

2.3.1 長音挿入

(11) 東のそらがぼうっと銀いろになってそこをまっ黒な雲が北の方へどンドン走っています。

À l'est le ciel avait pris une teinte d'argent voilée et des nuages noirs s'enfuyaient en direction du nord.

「ぼうっ」〈③意識が抜けたりとんだりしているさま。ものの形が不明瞭に見えるさま：431〉に当たるフランス語は、〈曇った、かすんだ、ぼんやりした〉を意味する *voilée* である。原文の「ぼうっ」は、空の色が変わっていく過程が続いている〈延長性〉〈持続性〉と、変化のさまが一区切りした〈一区切り性〉の性質を持つ。一方で、フランス語 *voilée* にも、ぼやけた空の状態が続いている〈延長性〉〈持続性〉は含まれているが、変化の過程が一区切りした〈一区切り性〉は表されているとは言えない。

(12) ところが聴衆はしいんとなって一生けん命聞いてゐます。

Mais les auditeurs firent le silence et écoutèrent avec une extrême attention.

「しいん」は〈物音一つ聞こえず、静まりかえっているさま：160〉を表し、これにあたるフランス語は、*le silence* 〈沈黙、無言〉である。「しいん」には、聴衆が静まりかえった状態が続いている〈延長性〉〈持続性〉を持つ。一方、フランス語からは、注意深く聴いていると後述されているために、観客の静まりが一瞬ではなく、持続していることがわかるが、「しいん」にあたる *le silence* のみからは、聴衆が無言になったことしか示されていないものの、*et écoutèrent avec une extrême attention* 〈そして極限の注意を伴って聞いた〉という後述から、無言になってから極めて集中して聞いている状態が読み取れ、静寂の〈延長性〉〈持続性〉が読み取れると判断する。

2.4 り

「り」には〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。仏語訳にも同様のニュアンスがあるのか、観察する。

2.4.1 り付加

(13) すると猫もけろりとして

Mais le chat, comme si de rien n'était :

「けろり」〈①何事もなかったように平然とした態度をとるさま。図々しいくらい平気なさま。けろけろ：116〉にあたるフランス語は、*comme si de rien n'était* 〈何事もなかったかのように〉である。「けろり」からも *comme si de rien n'était* からも、猫が平然とした表情になったさまが完了している〈完結性〉〈ひとまとまり性〉が読み取れることから、「り」を持つ〈完結性〉〈ひとまとまり性〉はフランス語に訳出されていると言える。

(14) みんなびたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

Les musiciens s'arrêtèrent net de jouer et restèrent silencieux.

(15) とゴーシュはいきなりびたりとセロをやめました。

Brusquement, Gauche arrêta net son violoncelle.

「びたり」は、『日国第二版』によると〈④動いていたものが、急に止まるさま。継続していたものが、急に絶えるさま：364〉であり、19世紀からの用例が掲載されている。『日本語オノマトペ辞典』に「びたり」は収録されていないが、基本要素が同じ「びたっ」の定義を参照すると、〈動いていたものが、急に止まるさま。継続していたものが、急に絶えるさま〉とある。促音付加には〈急転性〉のニュアンスがあるため、急に楽器を弾くことをやめるさまを表すが、「びたり」は「り」付加であるため、楽器を弾いていた状態から、弾くことをやめ始め、それが完了したさまを表すと考えられる。これにあたるフランス語は、net〈突然、不意に；一挙に。はっきりと、きっぱりと〉である。フランス語では、楽器を弾くことをやめる行為に〈急転性〉があったことに加え、楽器を弾かない状態が完了した〈完結性〉〈ひとまとまり性〉という「り」の性質も含まれているといえる。

(16) 猫はばかにしたように尖った長い舌をベロリと出しました。

Le chat, d'un air moqueur, exhiba prestement sa langue longue et pointue.

「ベロリ」〈①一回強く長く舌を出すさま〉にあたるフランス語は、prestement〈素早く、機敏に〉にあたるフランス語は、prestement〈素早く、機敏に〉である。「ベロリ」からは、猫が舌を伸ばして出したさまが完結した、〈完結性〉〈ひとまとまり性〉が感じられる。一方で、フランス語 prestement からは、行為の完了を表しているとはいえない。後述の sa langue longue〈長い舌〉によって、動作にある程度の時間の長さがあることは読み取れるが、「ベロリ」の「り」が持つ〈完結性〉〈ひとまとまり性〉は、フランス語に翻訳されていないことがわかる。

2.4.2 促音挿入／り付加

促音挿入のオノマトペは、〈滞留性〉〈時差性〉の性質を持っているとされる。「り」には〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。促音挿入と「り」付加のニュアンスが仏語訳にも見られるのか、観察する。

(17) セロ弾きは何と思ったかまはずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎっしりつめました。

Le violoncelliste — à quoi pense-t-il encore ?... — prit d'abord un mouchoir, le déchira, et se boucha énergiquement les oreilles avec.

「ぎっしり」は〈強く押しこんだようにすきまなく、いっぱいにつまっているさま：68〉を意味する。例文では、耳いっぱい力強くハンカチを押し込む動作の始まりから終わりまでの〈時差性〉、耳に詰め込むさまが完了した〈完結性〉のニュアンスがある。これに当たるフランス語は、énergiquement〈精力的に、力強く、強力に、断固として〉であり、力強く押し込んでいる〈滞留性〉は感じられる。énergiquement 一語だけでは、〈完結性〉が示

されていないが、*se boucha énergiquement les oreilles avec* 〈ハンカチで耳を塞いだ〉と、過去の一時的な行為を表す直説法単純過去の動詞を伴うことで、〈完結性〉のニュアンスが含まれていると言えそうである。このように、オノマトペの訳出には、単に、語と語の対応だけではない、構文との呼応も考慮する必要があることには、注意すべきである。

(18) それから、やっとせいせいしたというようにぐっすりねむりました。

Il parut enfin rafraîchi et soulagé, et ensuite il s'endormit profondément.

「ぐっすり」は〈①深く眠るさま。睡眠時間がじゅうぶんなさま：98〉を表す。促音挿入により、眠り始めた状態から寝込むまでの〈時差性〉や寝ている状態で留まっている〈滞留性〉のニュアンスを持ち、「り付加」により、眠りに落ちたさまが完了している〈完結性〉、寝ている状態をひとまとまりに表す〈ひとまとまり性〉がある。これに当たるフランス語は、*profondément* 〈非常に、極度に；徹底的に〉である。眠った状態で留まっている〈滞留性〉や、完全に眠り込んだという〈完結性〉が感じられ、「促音挿入／り付加」の〈滞留性〉〈完結性〉のニュアンスは、フランス語でも訳出されていると言えよう。

(19) するとかっこうはにわかにびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。

L'oiseau — peut-être fut-il surpris ? — s'envola tout d'un coup en direction de la fenêtre.

(20) すると野鼠はびっくりしたようにきよろきよろあたりを見まわしてから

La mère souris parut alors surprise et répondit en jetant des regards inquiets de tous côtés :

「びっくり」〈①不意の出来事、また意外なことに驚きあわてるさま：368〉にあたるフランス語は、どちらも *surpris(e)* 〈不意を突かれた、驚かされた、当惑させられた〉である。「びっくり」は、驚いたさまに溜めがある〈滞留性〉と、驚き始めた状態から完了したことを示す〈完結性〉というふたつのニュアンスを持つ。一方、フランス語の *surpris(e)* は、驚いている状態で留まっている〈滞留性〉と、驚いた状態が完了した〈完結性〉が感じられる。よって、「促音挿入／り付加」の〈滞留性〉〈完結性〉のニュアンスは、フランス語においても訳出されていると言えるだろう。

2.4.2 撥音挿入／り付加

撥音挿入のオノマトペは、〈滞留性〉〈時差性〉の性質を持っているとされる。「り」には〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。撥音挿入と「り」付加のニュアンスが仏語訳にも見られるのか、観察する。これは、ニュアンスとしては「促音挿入／り付加」と同じになるが、基本要素 {AB} のBにあたる音によって、促音が挿入されるか撥音が挿入されるかが自動的に決まるので、この際の、促音と撥音の差異は、考慮する必要がない（これは、次章以下でも同様である）。

(21) すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ座ったままだうもわからないというように首をまげて考えていましたが、

Mais le petit blaireau, d'un air rêveur, s'assit convenablement sur le plancher, puis resta un moment la tête penchée sur la poitrine, en réfléchissant, comme s'il ne comprenait pas ce qu'on lui demandait.

(22) ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡って元気をとり戻そうと急いでねどこへもぐり込みました。

Gauche resta un instant avec un air rêveur à respirer le vent qui s'engouffrait par la vitre cassée la veille, et, afin de reprendre des forces avant de se rendre à la ville, il se glissa immédiatement dans son lit.

「ぼんやり」〈③意識が抜けたりとんだりしているさま。ものの形が不明瞭に見えるさま：466〉にあたるフランス語は、d'un air rêveur〈夢見がちな様子で；夢想にふける様子で〉および、avec un air rêveur〈物思いにふけた様子で〉である。「ぼんやり」は、意識が抜けている状態が留まっているさまを示しながら、その状態が開始してから完了するまでをひとまとまりで表している。フランス語では、2例とも un air rêveur〈夢見心地な様子、顔つき〉が出現している。その意味から夢見心地な表情であるという〈滞留性〉が読み取れる。また、un air rêveur というように、ぼんやりしたさまをひとつの表情 un air と表していることから、ぼんやりした表情になった状態から完結するまでをひとまとまりに表した〈ひとまとまり性〉が含まれていると捉えることができる。よって、「撥音挿入／り付加」の持つ〈滞留性〉〈ひとまとまり性〉は、フランス語においても訳出されていると考えられる。

2.5 反復

オノマトペを繰り返す反復は、音やさまに〈反復性〉を与えるものである。仏語訳にも〈反復性〉が含まれているのか、観察する。

2.5.1 反復×2

(23) そしてまた水をがぶがぶ呑みました。

Encore une fois, il but de l'eau à grands traits.

「がぶがぶ」〈①酒、水などを、勢いよく、むさぼるように飲む音。また、そのさま。ぐびぐび：44〉にあたるフランス語は、à grands traits〈ごくごく〉という成句である。「がぶがぶ」からは、水を飲むさまが豪快で、何度も飲み込んでいることがわかる。フランス語の à grands traits からは、一気に水を飲んだことが表されていることから、何度も飲み込ん

だことも示唆される。よって、「がぶがぶ」の「×2」による〈反復性〉は、仏語訳でも表現されている。

(24) すると野鼠はびっくりしたようにきよろきよろあたりを見まわしてから

La mère souris parut alors surprise et répondit en jetant des regards inquiets de tous côtés :

(20 の再掲)

「きよろきよろ」〈落ち着かないようすで、あたりをせわしなく見回すさま：75〉にあたるフランス語は、inquiets〈不安、心配である〉である。「きよろきよろ」は、野鼠があちらこちら見回していることが示されている。一方、フランス語では、心配した視線であらゆる方向を見ていることが表されている。繰り返し見ていることが読み取れることから、フランス語においても、「×2」の〈反復性〉が訳出されていると言える。

2.4.3 反復×4

(25) しまいは猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴーシュをまわりました。

Finalem^{ent}, il se mit à tourner, tourner tout autour de Gauche, comme une toupie.

「ぐるぐる」は〈②重みを感じさせながら続けて回るさま。続けて回すさま：106〉を表し、「ぐるぐるぐるぐる」は基本要素 {ぐる} の「×4」のオノマトペである。これにあたるフランス語は、tourner〈〈- autour de qc/qn〉の周りをうろつく；にまといつく；巻きつく〉を繰り返した tourner, tourner である。「ぐるぐるぐるぐる」によって、何度も回り続けることがわかる。フランス語でも、tourner, tourner と繰り返すことで、原文のオノマトペが特殊な「×4」であることが示されている。意味からも、繰り返しゴーシュの周りを回ったことが読み取れる。したがって、フランス語でも「×4」の〈反復性〉が訳されている。

(26) 譜をめくりながら弾いては考へ考へては弾き一生けん命しまひまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾きつゞけました。

Il tournait les pages et jouait en réfléchissant, réfléchissait en jouant, et après avoir mis toute son ardeur dans le final, recommença encore et encore depuis le début, dans un puissant grondement.

「ごうごう」は〈①重く鳴りひびく低い音：117〉を表し、「ごうごうごうごう」は基本要素 {ごう} の「×4」のオノマトペである。これにあたるフランス語は、dans un puissant grondement〈強い力強い（低く長い）とどろき、うなりで〉である。「ごうごうごうごう」からは、チェロの音が響き続いており、反復されていることがわかる。一方のフランス語では、チェロを弾く行為が反復されていることは、前述の encore et encore〈何度も何度も〉からはわかるが、dans un puissant grondement からは、ひとつの強く長いとどろきの中で弾かれたことが示されており、弾き始めから弾き終わるまでがひとまとまりで捉えられてい

るように思われる。よって、「ごうごうごうごう」と dans un puissant grondement は、全く同じ〈反復性〉のニュアンスを持つとは言えないことが示唆される。

2.5 日本語オノマトペ訳出の総括

以上を総括すると、次のようになる。

〈瞬間性〉	概ね訳せている
〈急転性〉	概ね訳せている
〈一区切り性〉	概ね訳せている
〈滞留性〉	あまり訳しきれしていない
〈時差性〉	あまり訳しきれしていない
〈余韻性〉	あまり訳しきれしていない
〈残存性〉	概ね訳せている
〈延長性〉	よく訳せている
〈持続性〉	よく訳せている
〈完結性〉	概ね訳せている
〈ひとまとまり性〉	よく訳せている
〈反復性〉	あまり訳しきれしていない

3 漢語由来のオノマトペの形態的パターンとその訳出

本作品に出現した漢語由来のオノマトペは、1件のみであった。以下に例を挙げる。

反復「×2」

せいせい

(27) それから、やっとせいせいしたというようにぐっすりねむりました。

Il parut enfin rafraîchi et soulagé, et ensuite il s'endormit profondément.

上の例文における「せいせい」を、『日本国語大辞典第二版』（以下、『日国第二版』とする）で確認する。

せいせい【清清・晴晴】

【一】〔副〕

すがすがしいさま、きわめて清らかなさま、また、心に何のわだかまりもなく快いさまを表わす語。

*多情多恨〔1896〕〈尾崎紅葉〉「噫、心地が霽々して来たです」

*不如帰〔1898～99〕〈徳富蘆花〉上・三「此様な高い山の見晴はまた別だね。実に爽々（セイセイ）するよ」

*あらくれ〔1915〕〈徳田秋声〉一〇「せいせいするやうな目色（めつき）をして、庭先を眺めてみた」

【二】〔形動タリ〕

【一】に同じ。

*玉塵抄〔1563〕三九「此をのめば心の酒にようたやうなをさまいてせいせいとしたやうなぞ」

*虎明本狂言・磁石〔室町末～近世初〕「のまふと思ふて、心がせいせいとしてよひ」

*浮世草子・御前義経記〔1700〕三・二「夢にとわたる横田川、せいせいたる流れ水の」

*浄瑠璃・国性爺後日合戦〔1717〕二「移らふ星も金石の、情（セイ）せいと晴れ渡る」

*咄本・近目貫〔1773〕嫉妬「かのめかけ、色つや清清として、なをなを気かるに成りし故」

*帰省〔1890〕〈宮崎湖処子〉九「晴々たる秋立ち初むる朝暉に我も亦希望の人なるを覚えしなり」

*落語・牛褒め〔1896〕〈四代目橘家円喬〉「然し檜作りは誠に此、匂ひと云ひ清（セイ）々として好い心持でございます」

*土〔1910〕〈長塚節〉一〇「腹に在るだけのことをいはして畢（しま）えば彼等はそれだけ心が晴々（セイセイ）として」

*宋玉-風賦「清清^冷冷、愈^病析^醒」（『日国第二版』）

「せいせいした」とサ変動詞化していることから、例文の「せいせい」は、【一】に書かれている副詞であり、19世紀から使用されている、漢語由来のオノマトペであることがわかる。また、形容動詞としての例文の初出の方が古いことから、まずは形容動詞として使われていたものであるが、のちに副詞としても使用され始めたものでありそうだ。

例文では、「せいせい」から、心が清々しくなり、落ち着いて眠りについたことが読み取れる。これにあたるフランス語は、*rafraîchi et soulagé*〈冷やされ、また、（肉体・精神的苦痛から）…を解放された、楽にされた；助けられた、救済された〉である。「せいせい」の意味を仏語訳するにあたって、心が清々しくなった上、楽になったさまを表すため、一語だけではなく、*rafraîchi* と *soulagé* という形容詞を二つ使用したのだと考えられる。

漢語由来オノマトペの訳出については、形容詞を併用することで、「せいせい」の持つ、ニュアンスを訳出するための工夫がなされていると評価できる。

4 特異な日本語オノマトペとその訳出

ここで、一般的なオノマトペの語形とは異なるものが、フランス語として、どのように訳出されているのか、確認する。

(28) するとかっこうはどしんと頭を叩かれたようにふらふらっとしてそれからまたさっきのように

「かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっ」と云ってやめました。

Alors le coucou tituba légèrement comme s'il avait reçu un coup sur la tête, puis il interrompit lentement son chant, comme auparavant :

« Coucou, coucou, coucou, cou... cou... cou ! » (5の再掲)

(29) するとかっこうは残念そうに眼をつりあげてまだしばらくはいたっていましたがやと

「.....かっこうかくうかっかっかっかっ」と云ってやめました。

Le coucou, avec regret, chanta encore un instant en haussant les sourcils, finalement :

« Coucou ! Cou-cou ! Cou ! » fit-il en s'arrêtant.

「かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっ」 「かっこうかくうかっかっかっかっ」はどちらもカッコウの鳴き声を表すが、単に「かっこう」の反復だけではない複雑な鳴き声を表わしており、また、「かっかっ」と短い声が長く繰り返されたこともわかる。さらに、後者は、「かくう」という別の音が使われていることにも気がつく。これらのフランス語は、*Coucou, coucou, coucou, cou... cou... cou !* と、*Coucou ! Cou-cou ! Cou !* である。coucou は、『フランス語オノマトペ辞典』に以下のように掲載されている。

Souvent répété "(bruit du chant du coucou)" Attésthé dep. 1578 : 172

しばしば繰り返され、カッコウの鳴き声を表すとされる。原文のオノマトペは、「かっこう」の他に「かっかっ」や「かくう」が現れ、鳴き声のバリエーションが豊かである。フランス語では、coucou を元に、「かっかっ」の部分が cou と置き換えられており、「かくう」は Cou-cou ! と翻訳されている。cou... や Cou-cou ! のように音や綴り自体は変えず、句読点を付加させることで、「かっこう」coucou とは区別されていることが読み取れる。また、cou を繰り返すことで、原文の鳴き声から受ける〈反復性〉のニュアンスも、フランス語に含まれていると言える。

(30) ゴーシュはちょっとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔から中へ入れてしまいました。

Gauche fit gémir légèrement son instrument en l'accordant, puis enleva le jeune souriceau qu'il introduisit dans l'ouverture du violoncelle.

「ぎうぎう（ぎゅうぎゅう、きゅーぎゅー）」は『日国第二版』によると、〈物がきしんだり、こすれたり、押しつけられたりして鳴る音を表わす語〉を意味し、また、『日本語オノマトペ辞典』によると、〈①ものがきしんだり、こすれたり、押しつけられたりして鳴る、

重く濁った音：73) である。『日国第二版』には、20世紀からの用例がある。この例文において、「ギウギウ」は、チェロの糸巻きを回し直して、チューニングした時の音を表していることになるが、「ギウギウ」は通常使用されないことから、賢治独自のオノマトペである可能性がある。また、「ギウギウ」は、{ギウ}が反復されていることから、音が何度か鳴り響いた〈反復性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、gémir〈うめくような音を立てる、きしむ〉である。ここでは、fit gémir légèrement son instrument en l'accordant〈彼の楽器を、調律しながら、ちょっと軋ませて〉と、楽器の音あわせをするという意味の accorder を、同時性を表すジェロンディフで使用することで、チェロの調弦をしながら、軋んだ音が聞こえてくることが表されている。しかし、仏語訳では、音に〈反復性〉があることや、重さがあることは読み取れないため、「ギウギウ」の〈反復性〉やG音の重さは出ていないと言える。

(31) ゴーシュはおっかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラプソディとかいうものをごうごうがあがあ弾きました。

Et Gauche fit descendre la mère souris, puis il prit son archet et se mit à faire vibrer les sons majestueux d'on ne sait quelle rhapsodie.

「ごうごうがあがあ」は、〈①重く鳴りひびく低い音：118 +②騒がしく音や声を立てるさま：21)を示す。ここでは、「ごうごう」「があがあ」を結合させることで、ゴーシュがラプソディを奏でたが、その音が重く鳴り響き、やかましく耳触りであることが読み取れる。また、「ごうごう」も「があがあ」も反復されていることから、ゴーシュがチェロを弾き続け、鳴り響く音が継続された〈反復性〉が示されている。これにあたるフランス語は、les sons majestueux〈いかめしい音〉である。原文のオノマトペが特異なものであることは、仏語訳からはわからない。しかし、複数形の名詞句であることから、音が一回だけだったのではなく、何度も聞こえてきたことは想像ができることから、〈反復性〉のニュアンスはフランス語においても表現されていると言えそうである。

(32) 「セロがおくれた。トオテテ テテテ、ここからやり直し。はいっ。」

« Le violoncelle est en retard ! Nous reprenons à partir de : Ponpon pompom... Un, deux... »

「トオテテテテテ」は、賢治独自のオノマトペである。指揮者がオーケストラに弾いてほしい旋律を歌った場面で、その旋律を「トオテテテテテ」と表している。「トオ」によって伸びた音から始まり、「テテテテ」によって軽くやや早い音が続き、「テ」によって音が伸びていることが読み取れる。これにあたるフランス語は、Ponpon pompom である。『フランス語オノマトペ辞典』には、pom について、次のように記載されている。

POM 2. Répété "(bruit de fredonnement d'un air de musique)" VAR. pon-pon Attesté dep. 1842 : 356

pom は pon とも表記されることがあり、pompom や ponpon のように繰り返されると、曲を鼻歌で歌った時の声を表すとされる。フランス語では、Ponpon pompom と反復されていることから、指揮者のハミングが〈反復性〉のニュアンスを持っていることが示されている。しかし、Ponpon pompom は、一般的なオノマトペであることから、原文のオノマトペが賢治独自のオノマトペであり、T 音を連ねた歯切れのよい音形であることは、仏語訳からは読み取れない。

(33) にわかにはぱたっと楽長が両手を鳴らしました。

« Clac ! » fit brusquement le chef d'orchestre frappent dans ses mains.

手を一度叩く音は「ぱたっ」よりも「ぱちっ」の方が、標準語的に用いられているのではないか。また、「ぱたっ」と「ぱちっ」では、「ぱちっ」の方が鋭く小さな音で、音がなっている時間も短い印象を受ける。そこで、「ぱたっ」と「ぱちっ」を、『日国第二版』で確認する。「ぱたっ」は〈物が急に落ちたり倒れたりぶつかったりする音やそのさまを表わす語。〉を表すが、用例は記載されていなかった。『日本語オノマトペ辞典』には、〈①ものが軽い感じで急に落ちたり倒れたりぶつかったりする音。また、そのさま：336〉とあり、「ドアをぱたっと閉めた」という実例を参考に作った例文が載っており、いつ頃から文献において使用されてきたオノマトペであるのかは、不明である。「ぱたっ」と関連のありそうな「はたと」は『日国第二版』に、〈突然、物がぶつかり合ったり落ちたりする音、また、そのさまを表わす語。はたと。ぱたと。ぱたっと〉を意味するとあり、〈突然の音や動作についていう〉用例は、13 世紀のものが見られた。「はたと」とは、「はたと」を強めたい方である。そこで、「はたと」と「ぱたと」を確認すると、どちらも〈突然の音や動作についていう〉用例があり、「はたと」は 15 世紀に、「ぱたと」は 19 世紀に使用され始めたことがわかる。

一方で、「ぱちっ」は、〈鋭く小さな音を表わす語。ぱちり。ぱちん〉の意味で、20 世紀から使用されているようである。「ぱちり」と「ぱちん」も確認してみると、「ぱちり」は〈硬いものが発する鋭く小さい音を表わす語。ぱちん〉、「ぱちん」は〈金属など硬い物が発する鋭く小さい音を表わす語。刀のふれ合う音、口金を締める音、スイッチの音、碁を打つ音など〉を示し、どちらも 19 世紀の用例が挙げられている。「ぱちっ」「ぱちり」「ぱちん」は、基本要素 {ぱち} が共通であるが、意味を参照すると、手を打ち合わせる音には、「ぱちっ」が該当する。

〈突然の音や動作〉について示すオノマトペとして、まず「はたと」が存在し、その後「ぱたっと」が生成されたと考えられる。手を一度叩く音として、「ぱたっ」は非標準語的であるようにも捉えられるが、楽長が手を叩いた時に響く音は〈突然の音〉であることは明らかであることから、「ぱたっ」は独創的なオノマトペではなく、古態性があるオノマトペと考えておきたい。また、文献に使用された年代から、「ぱちっ」の方が「ぱたっ」よりも新しいオノマトペであるようだ。

「ぱたっ」は促音付加であるから、〈瞬間性〉〈急転性〉のニュアンスを持つ。上記の例文で、「ぱたっ」にあたるフランス語は、Clac!というオノマトペである。『フランス語オノマトペ辞典』には、clac について、次のように書かれている。

1. "(bruit sec produit par un choc, une chute, un mécanisme)". Attesté dep. 1477-1483 : 141

つまり、〈衝撃、落下、機械装置によって生じる、乾いた音〉を意味する。両手を一度叩いた時に、乾いている音が瞬間的に生じたことが、Clac というフランス語オノマトペを用いることで読み取れ、さらに音の強さが感嘆符をつけることから、音の強さも感じられる。したがって、Clac! には、促音付加の〈瞬時性〉が含まれていると言える。

(34) いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふくふく膨らんでいておいしいものなそうでございますが、
« Non, ce qu'on appelle le pain, c'est ce qui est fait avec de la farine de blé, que l'on pétrit et que l'on cuit à la vapeur, qui gonfle, gonfle et qui a l'air si bon... c'est ce que l'on dit ?

パンが膨らむさまは「ふくふく」よりも「ふっくら」「ぷっくり」の方が、現代の日本語では標準語的だと思われる。そこで、「ふくふく」「ふっくら」「ぷっくり」を『日国第二版』で確認すると、「ふくふく」は〈柔らかくふっくらとしているさまを表わす語〉という意味で、12世紀から用いられてきていることがわかる。「ふっくら」は〈柔らかくふくらんでいるさまを表わす語。ふっくり〉の意味で16世紀から使用されており、「ぷっくり」は〈丸くふくらむさまを表わす語〉を示し、20世紀から使われていることがわかる。「ふっくり」も調べてみると、「ふっくら」と同じ意味で使用された例が15世紀のものから掲載されている。つまり、「ふくふく」「ふっくら」「ふっくり」「ぷっくり」が文献において古くから使用された順に並べると、「ふくふく」「ふっくり」「ふっくら」「ぷっくり」となり、「ふくふく」は、〈柔らかく膨らんでいるさま〉を表すオノマトペとして、古態性があるものであり、賢治独自のオノマトペではないと言える。「ふくふく」は反復「×2」のオノマトペであることから、膨らみ続けている〈反復性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、gonfle, gonfle 〈膨らんで、膨らんで〉であり、動詞を繰り返すことで、「ふくふく」の〈反復性〉が表されている。

(35) ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰いろの鳥が降りて来ました。
cria Gauche, mais soudain, à travers une fente du plafond, il y eut un froissement d'ailes et un oiseau gris descendit. (10の再掲)

鳥が穴からいきなりおりてくる音として、「ぼろん」〈①ピアノや弦楽器を弾いたときに
出る低い音：463〉よりも「ばさっ」の方が標準的ではないか。そこで、「ぼろん」と「ば
さっ」を『日国第二版』で確認する。「ばさっ」は〈広がりのある物が落ちたり、覆いかぶ
さったりする音やそのさまを表わす語。ばさり〉とあり、20世紀の用例が掲載されている。
「ばさり」は、〈広がりのあるものが落ちたり、覆いかぶさったりする音、勢いよく物を広
げたり切ったりする音などやそのさまを表わす語〉であり、18世紀からの用例が挙げられ
ている。一方、「ぼろん」は、〈弦楽器の弦を弾いたときに出る音を表わす語〉の意味での
用例は、20世紀のものが載っている。また、仙台の方言で、〈穴のあくさまを表わす語〉
を示し、19世紀には使用されていたようで、「ほろん」と表されることもあると書かれて
いる。穴から鳥がおりてくる音として「ぼろん」を用いることで、鳥がおりてくる様子がこ
ぼれ落ちてくるようであることを表し、加えて、穴が空いているさまも示そうとしたのか
もしれない。また、とびおりてくるさまが急だったとしても、「ぼろん」の撥音によって、
動作に〈余韻性〉〈残存性〉があったことが感じられる。「ぼろん」にあたるフランス語は、
un froissement d'ailes 〈羽のかすかな音〉である。鳥の羽ばたきの音が鳴ったことが訳出され
ているが、原文のオノマトペが特異な使われ方であることや、撥音付加の〈余韻性〉〈残存
性〉は読み取れないだろう。

以上、宮沢賢治独自のオノマトペの仏語訳出について評価すると、全体として、原文のニュ
アンスを表現しようとしているものが8件中5件(62.5%)と過半数であり、全体として、
何らかの形で、工夫して訳されている傾向があるが、十分に訳しきれていないものも見ら
れた、ということになる。

5 原文の擬音性・擬態性と仏語訳出の文法性の対応

5.1 概観

本節では、『ゼロ弾きのゴージュ』の日本語のオノマトペが含まれた用例を抽出し、オノ
マトペを分類する。まず、日本語のオノマトペを、『日本語オノマトペ辞典』による区分に
準じて、すべての種類をまとめた。また、日本語のオノマトペがフランス語に翻訳されたも
のが、フランス語のどのような文法分類(単語や句)に属するのかまとめた。それぞれの組
み合わせの数を数え、単語に訳されたものと単語以外に訳されたものとに別け、それぞれ
を表にまとめた(【表1-1】および【表1-2】)。また、原文に出現したオノマトペにあ
たるものが、フランス語翻訳版に特に見られない場合は、「該当なし」として扱った。

【表1-1】『ゼロ弾きのゴーシュ』に見られたオノマトペとフランス語（単語）の分類

		日本語オノマトペの区分										
		音	声	さま	音・さま	声・さま	音・声	音・名	音・声・さま	名	古	計
フランス語の品詞	オノマトペ	3	6	0	3	1	0	0	0	0	1	14
	副詞	2	0	16	3	0	0	0	0	0	0	21
	動詞	3	0	1	3	0	0	0	0	0	0	7
	形容詞	1	0	11	0	0	0	0	0	0	0	12
	名詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	9	6	28	9	1	0	0	0	0	1	54

【表1-2】『ゼロ弾きのゴーシュ』に見られたオノマトペとフランス語（単語以外）の分類

		日本語オノマトペの区分										
		音	声	さま	音・さま	声・さま	音・声	音・名	音・声・さま	名	古	計
フランス語の品詞	オノマトペ	1	5	1	0	0	0	0	0	0	0	7
	副詞句	2	0	4	3	0	0	0	0	0	0	9
	動詞句	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	7
	形容詞句	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
	名詞句	2	0	4	5	0	0	0	0	1	0	12
	前置詞句	1	0	11	3	0	0	0	0	0	0	15
	接続詞句	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	該当なし	4	0	8	2	1	0	0	0	0	0	15
計	10	5	38	13	1	0	0	0	1	0	68	

本調査を通して、以下の事柄が明らかになった。

『ゼロ弾きのゴーシュ』に出現した日本語のオノマトペの用例は、計122例であった。122例の日本語のオノマトペのうち、「さま」を表すオノマトペ、擬態語が66例と過半数を占め、「音・さま」を表すオノマトペが22例、「音」を表すオノマトペ、すなわち擬音語が19例、「声」を表すオノマトペ、すなわち擬声語が11例、「声・さま」を表すオノマトペが2例、名詞化したものと、古い意味で使われたものが1例ずつと続いた。「音・声」「音・名」「音・声・さま」を表すものは、まったく見出されなかった。

【表1-1】【表1-2】を対比してみると、【表1-2】、すなわち、単語だけで訳出されずに句を用いて訳出されているものの数値は、「さま」「音・さま」に偏っていることがわかる。これは、すなわち、原文のオノマトペが、「さま」に関わると、フランス語の単語ひとつで訳出するのは困難で、2単語以上を用いて訳出しなければならないということを示唆する（具体的な訳出については、以下でみることにする）。

また、単語として訳出された品詞でもっとも多いものは、副詞で、次いで、形容詞、動詞となっている。単語以外で訳出されたものは前置詞句がもっとも多く、次いで、副詞句、動詞句、名詞句が、ほぼ同数で続く。

また、原文の日本語のオノマトペが、フランス語に訳されていない例が計14例見られた。14例のうち、日本語のオノマトペが「さま」を表すものが7例、「音」を表すものが4例、「音・さま」が2例、「声・さま」を表すものが1例あった。

このことも、日本語のオノマトペが「さま」に関わるものだと、フランス語としてうまく訳出できなくなる場合があることを示唆するものであろう（「音」に関わるもので、仏語訳されていないものの具体例についても、以下で詳しくみることにする）。

フランス語翻訳版において、単語や句ではなく単文として訳されたものはなかった。

まず、フランス語オノマトペに訳された具体例を、以下、訳出パターンごとにみていく。なお、『日本語オノマトペ辞典』『フランス語オノマトペ辞典』からの引用箇所は、ページ数を併記する（以下、同じ）。

5.2 フランス語オノマトペでの訳出

フランス語のオノマトペとそれにあたる日本語を表にまとめる。日本語でもオノマトペであったものは、オノマトペの区分を記した（【表1-3】）。

【表 1-3】 フランス語翻訳版に出現したフランス語オノマトペと原文の日本語オノマトペ

日本語オノマトペの区分	日本語オノマトペ	フランス語オノマトペ
音	こつこつ	toc-toc-toc
音	こつこつ	toc-toc-toc
音	こっこっ	toc-toc-toc
音	とぉててててい	Ponpon pompom
声	かっこう	Coucou !
声	かっこう	Coucou !
声	かっこう	Coucou !
声	かっこう	Coucou !
声	かっこうかっこう	Coucou ! Coucou !
声	かっこうかくうかっかっかっか	Coucou ! Cou-cou ! Cou !
声	かっこうかっこうかっこう	Coucou ! Cou-cou ! Cou !
声	かっこうかっこうかっこうかっこう	Coucou, coucou, coucou !
声	かっこうかっこうかっこうかっこうかっこう	coucou-coucou-coucou-coucou-coucou
声	かっこうかっこうかっこうかっこうかっこう	Coucou-coucou-coucou-coucou !
声	かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっか	Coucou, coucou, coucou, cou… cou… cou !
さま	こんこん	Coucou ! Coucou !
音・さま	しゅっ	schuut
音・さま	とんとん	Toc-toc-toc !
音・さま	ばたっ	Clac !
音・さま	ぼんぼん	dong-dong-don
声・さま	くっ	Cou…!

【表 1-3】の通り、フランス語オノマトペとして訳出された日本語オノマトペは21件であった。

ここで、それぞれフランス語オノマトペについて、気がついたことをあげてみる。

第一に、原作において「かっこう」の繰り返しのあとに「かくう」という別の音が入ったり、「かっ」が繰り返されたりしているもののフランス語は **cou** という音が単独で出現している。つまり、「かっこう」という鳴き声であれば **coucou** となるが、原作のかっこうの鳴き声が通常のかっこうではないことを、フランス語翻訳版では **coucou** という形をとらずに **cou** とすることで表しているのである。また、かっこうの「くっ」という声・さまや、「こんこん」と頭をさげるさまも、**cou** とされている。どちらもかっこうの声として訳されている。

第二に、「こつこつ」〈①かたいものがふれ合ってたてるかわいた高い音：127〉と「つ」が促音になった「こっこっ」のフランス語は、**toc toc toc** である。「こつこつ」「こっこっ」はともに2回繰り返されたものであるから、フランス語でも **toc toc** とすることも考えられるが、『フランス語オノマトペ辞典』によると、**toc toc toc** と3回繰り返すことで、存在を示したり、開けてもらったりするために戸やガラスを叩く音を、より執拗に表すことがあ

るようである。¹⁶ 原文のオノマトペが何回繰り返されているかという形よりも、必死に叩いていることを描写しようとして *toc toc toc* と訳したのではないか。

第三に、セロが遅れたことに対して、楽長が「トオテテテテイ」と歌い、そこからやり直すように指示する場面では、「トオテテテテイ」が *ponpon pompom* と訳されている。*pom-pom* もしくは *pon-pon* と繰り返すことで、鼻歌やハミングの音を示す。「トオテテテテイ」という独特なオノマトペが、フランス語では既存のオノマトペに訳されていることがわかる。

第四に、「ぼんぼん」〈①続けざまに打ったり破裂する音。また、軽くたたくさま：466〉が、*dong-dong-don* と訳されている。「ぼんぼん」が、狸の子が棒でセロの駒を拍子よく叩く音を表しているのに対し、*don* は、響きわたる鈍い衝突や激しい爆発の音を示しており、音の軽さの印象が原文とフランス語では異なっている。ちなみに、フランス語には、よく響く衝撃音を表す *pong* というオノマトペも存在するが、少なからず攻撃的な音を示すようで、こちらも「ぼんぼん」の音の持つ印象とは違うようである。¹⁷

5.3 フランス語オノマトペ以外の訳出

前節では、フランス語オノマトペとして訳出された例をあげた。本節では、フランス語がオノマトペでないものの例をあげ、以下、訳出パターンごとにみていく。

5.3.1 副詞・副詞句訳

副詞・副詞句に訳された日本語オノマトペは、「さま」「音・さま」「音」を表す。

(36) では今日は練習はこゝまで、休んで六時にはかさきりボックスへ入ってくれ給へ。

Bon la répétition est terminée pour aujourd'hui ! Repos jusqu'à six heures exactement.

(37) と言いながらさっきの木の根もとへそつとその葉を置きました。

déclara-t-il et il déposa délicatement la feuille au pied du tronc qu'il venait de dépasser.

(38) ゴーシュはどんと床をふみました。

Alors Gauche frappa du pied bruyamment sur le plancher.

(39) おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病気がなおるといふのか。よし。わかったよ。やってやろう。

Quand mon violoncelle résonne très fort, cela vous sert de massage et vous guérissez donc !

¹⁶ 『フランス語オノマトペ辞典』：429

¹⁷ 『フランス語オノマトペ辞典』：357

「かっきり」〈時間や数量などが正確に合っていて、過不足がないさま。ちょうど。きっかり：37〉にあたるフランス語は *exactement* 〈正確に、まさしく、ちょうど〉であり、また、「そっ」〈①音を立てないように、静かにものごとを行うさま。注意深く扱うさま：230〉にあたるフランス語は *délicatement* 〈全重量をかけて、力いっぱい〉である。

「どん」〈鉄砲などを発射する音。太鼓などを強く打つ音。重いものが落ちたりぶつかったりする音〉にあたるフランス語は *bruyamment* 〈大きな音を立てて、騒々しく〉である。どちらの例においても、日本語オノマトペの持つニュアンスがフランス語に翻訳されていることがわかる。

一方、「ごうごう」〈①重く鳴りひびく低い音：117〉に当たるフランス語は *très fort* 〈非常に強く、強烈に、激しく〉である。フランス語版ではチェロの響きが強いことは読み取れるが、「ごうごう」の持つ音の重々しさや、音がなり響く時間の長さのニュアンスまでが含まれているとは言えない。

5.3.2 動詞・動詞句訳

動詞・動詞句に訳されたオノマトペは、「さま」「音・さま」「音」を表す。

(40) すると楽長がきっとなって答へました。

Aussitôt le chef d'orchestre se redressa et répondit :

(41) ホールはまだぱちぱち手が鳴ってゐます。

Le hall crépitait encore des mains qui claquaient ;

(42) 狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしよってゴムテープでぱちんととめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行ってしまいました。

Le petit blaireau, avec une grande précipitation, mit ses baguettes et sa parution sur le dos et fit claquer les bandes de caoutchouc pour bien les ajuster, puis il salua deux ou trois fois et fila rapidement dehors. (10 の再掲)

「きっ」〈③きびしいさま。緊張したり、警戒しているさま：66〉にあたるフランス語は、*se redressa* 〈姿勢を正した、胸を張った；毅然とした〉である。原文では、楽長が一瞬で厳しい態度に変化した様子が想像できるが、フランス語版では、そのさまは含まれているとは言えない。

「ぱちぱち」〈①続けざまにひびく鋭く小さい音。火の強くはぜて燃える音。放電などの音。手を続けて打ち鳴らす音。また、そのさま：339〉のフランス語は、*claquaient* 〈(体の一部)音を立てていた、を鳴らしていた〉であり、「ぱちん」〈①金属などかたいものがぶつかって発する鋭く小さい音。口金を締める音。スイッチの音。基石を打つ音：340〉のフランス語は、*claquer* 〈[戸など]を手荒く閉じる〉である。「ぱちぱち」「ぱちん」はど

ちらも {ぱち} という基本要素が共通したオノマトペであり、フランス語ではともに *claquer* という動詞に訳されている。*claquer* は、乾いた音や非常に強い音を出すという意味である。¹⁸「ぱちぱち」「ぱちん」は、鋭く小さい音というニュアンスを含んでいるのに対し、*claquer* は小さい音のみならず、響く大きな音を出すという意味も持つため、音に関しては、*claquer* の方がより広い意味合いで用いられると言える。

5.3.3 形容詞・形容詞句訳

形容詞・形容詞句に訳されたオノマトペは、「音」「さま」を表す。

(43) それは何でもなし。あの夕方のごつごつしたセロでした。

Ce n'était rien d'autre que le gros violoncelle grinçant de l'après-midi.

(44) すると猫は肩をまるくして眼をすぼめてはみましたが口のあたりでにやにやわらって云ひました。

Alors le chat arrondit les épaules, ses yeux se firent plus étroits, mais sa bouche dessina un sourire un peu dédaigneux et il dit :

「ごつごつ」〈①かたいものがぶつかり合ったり、こすれ合ってたてる重くにぶい音：128〉にあたるフランス語は、*grinçant* 〈きしんでいる、耳障りな音を立てる〉である。「ごつごつ」と *grinçant* を比較すると、*grinçant* の方にはチェロが出す音が不協和音であることが含まれている。

「にやにや」〈①声をたてないで、表情だけで笑い続けるさま。冷やかに、意味ありげにうす笑いを浮かべるさま：314〉にあたるフランス語は、*un peu dédaigneux* 〈少し横柄に、軽蔑的に〉である。「にやにや」の持つ、笑い続ける時間の継続が、*un peu dédaigneux* には見られない。

5.3.4 名詞・名詞句訳

名詞・名詞句に訳されたオノマトペは、「音」「さま」「音・さま」を表すものと、名詞化したものである。

(45) ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰いろの鳥が降りて来ました。

cria Gauche, mais soudain, à travers une fente du plafond, il y eut un froissement d'ailes et un oiseau gris descendit.

¹⁸ Robert, Paul. (1989) *Le Grand Robert de la langue française : du dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française, Tome II, 2e éd*, Dictionnaire Le Robert : 642.

(46) ところが聴衆はしいんとなって一生けん命聞いてみます。

Mais les auditeurs firent le silence et écoutèrent avec une extrême attention. (12 の再掲)

(47) クラリネットもボーボーとそれに手伝ってゐます。

Les clarinettes, quand à elles, offrent leur voix grave.

(48) ゴーシュはひるからのむしゃくしゃを一ぺんにどなりつけました。

Gauche put déverser d'une traite toute l'exaspération accumulée depuis le matin.

「ぼろん」〈①ピアノや弦楽器を弾いたときに出る低い音：463〉のフランス語は、un froissement d'ailes 〈羽のかすかな音〉である。鳥が穴から降りてくる時の音の描写として、「ぼろん」というオノマトペは通常使われないが、ここでは、もっと一般的に、「ぼろっ」や「ぼろり」のように、ものがこぼれ落ちる様子を表しているように思われる。それに対して、原文の「ぼろん」という音を受けて、フランス語でも弦楽器の音を表すオノマトペを用いることもできるだろうが、ここでは、鳥が穴から降りてくる時に出る羽ばたきの音として訳されていることがわかる。

「しいん」〈物音一つ聞こえず、静まりかえってるさま：160〉のフランス語は、le silence 〈沈黙、無言〉であり、「ぼうぼう」〈汽笛などが鳴りひびいたり、風などが吹きつける低い音。また、そのさま〉のフランス語は、voix grave 〈曇った、かすんだ、ぼんやりした声〉である。「ぼうぼう」では、オーボエの音色が響いていることが読み取れるが、フランス語では音色がこもっている印象を受ける。

「わあ」〈①突然泣いたり、笑ったり、驚いたりするときの声。また、そのさま：504〉のフランス語は、des exclamations, des cris 〈驚き〔苦痛、憤慨〕の叫び；感慨、叫び、叫び声〉であり、「むしゃくしゃ」〈①気持ちが乱れたり、腹が立ったりするさま：475〉l'exaspération のフランス語は、〈激高、激怒、激しいいらだち〉である。

5.3.5 前置詞句

前置詞句に訳されたオノマトペは、「音」「さま」「音・さま」を表す。

(49) 譜をめくりながら弾いては考へ考へては弾き一生けん命しまひまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾きつゞけました。

Il tournait les pages et jouait en réfléchissant, réfléchissait en jouant, et après avoir mis toute son ardeur dans le final, recommença encore et encore depuis le début, dans un puissant grondement.

(50) 楽長はポケットへ手をつっ込んで拍手なんかどうでもいゝというようにのそのそみんなの間を歩きまはってゐましたが、じつはどうして嬉しさでいっぱいなのでした。

Le chef d'orchestre, mais dans les poches, marchait avec flegme parmi les musiciens comme si

cela lui était indifférent, mais en réalité, il était profondément heureux.

(51) そしてまた水をがぶがぶ呑みました。

Encore une fois, il but de l'eau à grands traits.

「ごうごうごうごう」は「ごうごう」〈①重く鳴りひびく低い音：117〉の「ごう」の4回繰り返して、音が鳴り続けていることを示している。このフランス語にあたる **dans un puissant grondement** は、〈強い力強い（低く長い）とどろき、うなりで〉という意味であり、「ごうごうごうごう」の持つ、長い時間低く鳴りひびく音というニュアンスが訳されているといえる。

「のそのそ」〈①まどろこしいほど遅く歩くさま。のそりのそり：325〉のフランス語は、**avec flegme** 〈冷静に、沈着に〉である。フランス語では、歩くスピードが非常に遅いさままでは読み取れない。

「がぶがぶ」〈①酒、水などを、勢いよく、むさぼるように飲む音。また、そのさま。ぐびぐび：44〉のフランス語は、**à grands traits** 〈ごくごく〉とという成句である。フランス語のオノマトペには、**glou glou** または **glou-glou** 〈液体を飲むことによって生じる音：240〉もあるが、ここでは使われていない。なぜ既存のオノマトペが存在しているにもかかわらず、この例においては使用されなかったのか、今後検討が必要である。¹⁹

5.3.6 接続詞句

接続詞句に訳されたオノマトペは、「さま」を表す。

(52) すると猫もけろりとして

Mais le chat, comme si de rien n'était :

「けろり」〈①何事もなかったように平然とした態度をとるさま。図々しいくらい平気なさま。けろけろ：116〉は、**comme si de rien n'était** 〈何事もなかったかのように〉という成句に訳されている。「けろり」の持つニュアンスが、この成句によってよく表されている。

5.4 フランス語に訳出されないもの

フランス語に翻訳されなかった日本語オノマトペは、「さま」「音・さま」「音」「声・さま」を表すものであった。まず、原文のオノマトペが「さま」を表す例を挙げる。

(53) それにどうしてもびたっと外の楽器と合わないもなあ。

En plus, vous n'êtes jamais avec les autres instruments !

¹⁹ **glou glou** に関して、『フランス語オノマトペ辞典』p. 241 には、〈液体を飲むことによって生じる音 (p. 240)〉という意味における初出年が 1619 年と記載されており、『セロ弾きのゴーシュ』が発表された 1934 年よりも古くから存在するオノマトペであることがわかる。

「ぴたっ」は〈③ものが完全に適合または的中するさま：364〉を表す。ここでは、ゴーシュが弾くチェロとオーケストラの演奏が、完全にはまって、ハーモニーを奏でることを示す。フランス語では、*vous n'êtes jamais avec les autres instruments* 〈君は一度も他の楽器と合わない〉とすることで、ゴーシュのチェロが、他の楽器の旋律とずれていることは読み取れるが、「ぴたっ」が示すように、完璧に整合しているさまではないということまでは、わからないのではないか。また、「ぴたっ」の促音付加からは、旋律が合った瞬間を表す〈瞬間性〉、合わない状態から急に合うようになる〈急転性〉、合う状態になってから区切りがつく〈一区切り性〉のニュアンスが感じられるが、フランス語の *vous n'êtes jamais avec les autres instruments* からは、これらのニュアンスが見られない。

次に、原文のオノマトペが「音・さま」「音」を表す例を見る。

(54) するとかっこうはどしんと頭を叩かれたようにふらふらっとしてそれからまたさっきのように

「かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっかっ」と云ってやめました。

Alors le coucou tituba légèrement comme s'il avait reçu un coup sur la tête, puis il interrompit lentement son chant, comme auparavant :

« Coucou, coucou, coucou, cou... cou... cou ! » (5の再掲)

(55) ゴーシュはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いてどんと足をふんで、

Alors Gauche ouvrit la porte en grand et s'écria, en frappant du pied par terre :

「どしん」は〈重いものが落ちたり倒れたりぶつかったりしてひびく、低くにぶい音、また、そのさま：293〉を意味する。頭を叩かれた時の低い音やさまが「どしん」と表されている。一方、フランス語では、*comme s'il avait reçu un coup sur la tête* 〈頭に一撃を受けたかのように〉と訳されており、「どしん」にあたる音に関する情報は含まれていない。また、原文では、「どしん」の撥音付加によって、音の〈余韻性〉〈残存性〉のニュアンスが感じられるが、仏語訳には、〈余韻性〉〈残存性〉が見られない。Gabriel Mehrenberger (1995 : 153) は、賢治のオノマトペは往々にして少しずれており、頭を叩くのは「どしん」ではなく「がつん」と考えざるをえず、「どしん」はフランス語にはないので *un grand coup* 〈大きな一撃〉にするしかないと述べている。上の訳文の *un coup* よりも *un grand coup* の方が、カッコウが頭を叩かれるさまや、それに伴う音が大きいことは想像できるが、やはり「どしん」はフランス語に訳出されてはいない。

「どん」は〈①鉄砲などを発射する音。太鼓などを強く打つ音。重いものが落ちたりぶつかったりする音：307〉を意味する。ここでは、足を床に強く踏み鳴らした音を示している。また、撥音付加により、音が鳴り終わった後の〈余韻性〉や〈残存性〉のニュアンスを持つ。フランス語では、*en frappant du pied par terre* 〈床を足で踏み鳴らしながら〉から、おおよそ

の音がどのようなものか検討はつくものの、「どん」を示す語は見られない。また、強い音が鳴った後に感じる〈余韻性〉〈残存性〉も *en frappant du pied par terre* には含まれていない。

最後に、原文のオノマトペが「声・さま」を表す例を見る。

(56) セロ弾きはまたぐっとしやくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口にくわへそれからマッチを一本とって

Gauche sentit la colère l'envahir à nouveau mais, sans rien en montrer il porta une cigarette à sa bouche et sortit une allumette.

「ぐっ」は、〈①苦しいときや不満のあるときなどにもらず、小さな声。息がつまったり、返答のことばに窮するさま。ぐー：96〉を意味する。『日国第二版』には、〈苦しい時や不満のある時などに、小さな声を洩らすさまを表わす語〉という意味で、17世紀からの用例が掲載されている。フランス語では、*Gauche sentit la colère l'envahir à nouveau* で、再び腹立たしく感じることは表されているが、「声・さま」を表す「ぐっ」は訳に見られない。また、「ぐっ」の促音付加の〈瞬間性〉〈急転性〉も示されていない。したがって、声を表す日本語のオノマトペも訳されず、声の持つニュアンスが読みとれない場合があると言える。

本節では、「さま」を表すオノマトペがフランス語に訳されない例があり、フランス語版では、日本語オノマトペが持つニュアンスが失われていることを確認した。さらに、「音・さま」や「音」「声・さま」を表すオノマトペも、仏語訳されない例も見られたことから、音声のニュアンスも読み取れない場合があると言える。日本語オノマトペを翻訳するのが容易ではないだけでなく、フランス語において、日本語オノマトペのニュアンスを伝えることを重視するのか、音声情報を翻訳に含めるのかという、翻訳者の考えが反映される可能性があるが、フランス語に日本語オノマトペが訳出されなかった例は、122例中15例(12.3%)と少数派であり、大部分において、日本語オノマトペのニュアンスをフランス語でも表そうとした傾向があることがうかがえる。

6 『セロ弾きのゴーシュ』のオノマトペと仏語訳についての総括

以上、1. から 5.4 を整理すると、『セロ弾きのゴーシュ』のオノマトペについて言えることは、次の通りである。

- [1] オノマトペの総数が121件であり、第1類が12件(10.0%)、第2類が103件(85.8%)、第3類が5件(4.2%)であり、大方が基本要素から加工と展開のものであった。もっとも多く見られた形式は「×2系」であり、基本要素が孤立した「X」が次いだことがわかった。また、「×2系」を展開したものとして、「X×4」「X×2+X×2」「X×3+Aっ×5」という3つもの形式が見られ、繰

り返しのオノマトペが多いことが指摘でき、また、仏語訳においても〈反復性〉のニュアンスが読み取れるように工夫されている例があった。

- [2] 漢語由来のオノマトペを除いた日本語オノマトペ 120 件のうち、「さま」を表すオノマトペ、擬態語が 66 例と過半数を占め、単語だけで訳出されずに句を用いて訳出されているものの数値は、「さま」「音・さま」に偏っていた。「さま」を表すものは、一語だけでは訳しきれず、やや説明的な訳にならざるをえない例が見られた。
- [3] フランス語によく訳されていると評価できる日本語オノマトペのニュアンスは、〈延長性〉〈持続性〉〈ひとまとまり性〉であり、反対に、あまり訳しきれなかったニュアンスは、〈滞留性〉〈時差性〉〈余韻性〉〈反復性〉であった。
- [4] 特異と思われたオノマトペは、「ぎうぎう」「ごうごうがあがあ」「トオテテテテイ」「ばたっ」「ふくふく」「ぼろん」である。「ごうごうがあがあ」は、「ごう」と「があ」の反復の結合であった。「ばたっ」「ふくふく」は、本作品で使用された意味と同義の用例が『日国第二版』で確認でき、古態性があるものであった。賢治による独創的なオノマトペは「ぎうぎう」と「トオテテテテイ」の 2 種類であり、「ぼろん」は特異な使い方をされていた。
- [5] 漢語由来のオノマトペは、「せいせい」が見られ、「せいせいした」というようにサ変動詞化して使用されていた。
- [6] フランス語オノマトペとして訳出されたものは、**coucou!** や、**toc toc toc** など 24 件あり、もともとフランス語オノマトペとして存在している語や、それらをもとに作られた語であり、新しく独創されたオノマトペはなかった。
- [7] 原文の日本語のオノマトペが、フランス語に訳されていない例が計 15 例あり、そのうち、「どしん」「どん」「ぐっ」のように日本語のオノマトペが「音」「音・さま」「声・さま」を表すものもあった。このような例では、音声情報のみならず、オノマトペの形式が持つニュアンスも、訳出されていなかった。

第2章 『銀河鉄道の夜』と Train de nuit dans la voie lactée

1 『銀河鉄道の夜』に出現するオノマトペの頻度と形式

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』にはどのようなオノマトペが用いられているのかを、頻度ならびに形式の観点から整理・考察する。

1.1 頻度

『銀河鉄道の夜』において用いられているオノマトペを、頻度順（同頻度の場合は、五十音順）に並べると、次の通りになる。

- 29 ぼんやり
- 19 すっかり
- 11 ずうっ
- 9 じっ
- 8 ちらちら はっきり
- 7 がらん どんどん
- 6 そっ
- 5 くるくる ちらっ びっくり
- 4 きちん しいん/しいん/しーん ぼうっ/ぼおっ
- 3 かっきり くっきり ぐるぐる ごとごとごとごと ざわざわ すうっ ぱっ
びたっ
- 2 ぎらっ きらっきらっ さあっ さっ すきっ すっ ずっ
せいせい どんどんどんどん はきはき ぺかぺか もじもじ/もちもち

- 1 うっかり がさがさ がたがた ギーギーフーギーギーフー きいん ぎざぎざ
きしきし ぎくっ きちっ ぎっしり きっぱり きらっ ぎやあぎやあ
くしゃくしゃ くすっ くつつ ぐったり くるっ くるっくるっ こつこつ
ごとごと ころんころん ざあっ ざっ さっさっ さやさや
さらさらさらさら さんさん しくしく しんしん ずんずん ぞくっ
そっくり そろそろ そわそわ だぶだぶ つやつや つるつる どお
どかどか ときどき ときっ どぎまぎ どしどし どほん にこにこにこにこ
にやにや ばさばさ ばっ ばたりばたり ぱっちり ピカッ ぴかぴか
ぴくぴく ぴしゃあん ひそひそ ひらっ ぴよんぴよん ぴん ふらふら
ぼう ぼうっ ぽかっ ほくほく ぽくぽく ほっ ぼろぼろ むしゃむしゃ
りん わくわくわくわく

頻度が最も高かったのは「ぼんやり」であり、29回も出現したのは注目に値する。次いで、「すっかり」が19回、「ずうっ」が11回、「じっ」が9回、「ちらちら」「はっきり」が8回ずつ、「がらん」「どんどん」が7回ずつ、「そっ」が6回、「くるくる」「ちらっ」「びっくり」が5回ずつ、「きちん」「しいん/しーん」「ぼうっ/ぼおっ」が4回ずつ見られた。3回見られたものは、「かっきり」「くっきり」「ぐるぐる」「ごどごとごとごと」などの全8種類である。2回見られたものは、「ぎらっ」「きらっきらっ」「さあっ」「さっ」などの全12種類であり、1回のみ見られたのは、「うっかり」「がさがさ」「がたがた」「ギーギーフーギーギーフー」などの全71種類であった。

以上を整理すると、『銀河鉄道の夜』においては、頻度3までのオノマトペは、ごく一般的なものであると言える。が、頻度2と頻度1のものを見ていくと、一般的なオノマトペに混じって、「ぺかぺか」「ギーギーフーギーギーフー」「どかどか」「どほん」「ぼくぼく」などのように、特異と思えるオノマトペが用いられていることがわかる。このような、賢治独自の世界を表すように思われるオノマトペを、どのようにフランス語へと移していくのか、そのときに、どのような工夫の跡が見られるかも、のちに考察したい。

1.2 形式

次に、オノマトペの形式ごとに整理した結果は、以下の通りである。

まず、日本語オノマトペについて述べる。

1.2.1 日本語オノマトペの形式

第1類 基本要素が見えない複雑なもの 5件 (2.0%)

ギーギーフーギーギーフー どぎまぎ どほん

第2類 基本要素からの加工と展開 237件 (96.0%)

● {X} →加工 φ→展開 φ

さっ ざっ じっ すっ ずっ そっ どお ぼっ ぱっ ぴん ぼう ほっ
りん

● Xっ系

ぎくっ きちっ きらっ ぎらっ くすっ くるっ さあっ ざあっ すうっ
ずうっ すきっ ぞくっ ちらっ どきっ ピカッ びたっ ひらっ
ぼうっ/ぼおっ ぼうっ ぼかっ

◎ Xっ×2

きらっきらっ くるっくるっ

● Xん系

がらん きちん

◎Xん×2
ころんころん

◎Xーん系
ぴしゃあん

●Xり系

◎Xり×2系
ばたりばたり

●×2系

がさがさ がたがた ぎざぎざ きしきし ぎゃあぎゃあ くしゃくしゃ
くつつつ くるくる ぐるぐる こつこつ ごとごと さっさっ さやさや
ざわざわ さんさん しくしく しんしん ずんずん せいせい そろそろ
そわそわ だぶだぶ ちらちら つやつや つるつる どうかどか ときどき
どしどし どんどん にやにや はきはき ばさばさ ぴかぴか ぴくぴく
ひそひそ ぴよんぴよん ふらふら ぺかぺか ほくほく ぽくぽく ぼろぼろ
むしゃむしゃ もじもじ/もちもち

◎X×4

ごとごとごとごと さらさらさらさら どんどんどんどん にこにこにこにこ
わくわくわくわく

●挿入系

◎Aーん系
きいん しいん/しいん/しーん

●促音挿入/り付加系

◎AっBり系
うっかり かっきり ぎっしり ぐったり すっかり はっきり ぱっちり
びっくり

●撥音挿入/り付加系

◎AんBり系
ぼんやり

第3類 基本要素が孤立しているもの 5件 (2.0%)

きっぱり くっきり そっくり

以上、出現したすべてのオノマトペの第1類から第3類の総数と割合をまとめると、次のようになる。

まず、第1類の基本要素{X}が見えない複雑なものは、「ギーギーフーギーギーフー」「どぎまぎ」「どほん」の3種類が見られた。「ギーギーフーギーギーフー」と「どほん」は、どちらも、『日国第二版』に掲載がないが、擬音語であるから、「ギーギーフーギーギーフー」と「どほん」の2種は、賢治独自のオノマトペとみなす。「どぎまぎ」は、基本要素{X}が認定できるものではないものの、状態を表わす副詞であり、一般語との関連性も想定できず、オノマトペと認定しうることから、第1類として扱う。

次に、第2類の基本要素から加工と展開について述べる。

基本要素{X}の形のまま出現したオノマトペは、「さっ」「ざっ」「じっ」などの13種類見られた。

{X}から加工したものは、「ぎくっ」のように促音が付加した「Xっ系」、「がらん」のように撥音が付加した「Xん系」、「ばたりばたり」のように「り」が付加した「Xり系」、「がさがさ」のように繰り返しの「×2系」の4つの形式に大きく分類できる。

「Xっ系」は「ぎくっ」「きらっ」「くすっ」などの20種類のオノマトペが見られた。「Xっ系」を展開したものには、「Xっ×2」の「きらっきらっ」「くるっくるっ」の1つの形式が観察された。

「Xん系」は「がらん」「きちん」の2種類のオノマトペが見られた。「Xん系」を展開したものには、「Xん×2」の「ころんころん」、「Xーん系」の「ぴしゃあん」の2つの形式が観察された。

「Xり系」である「Xり付加」のオノマトペは、見られなかった。「Xり系」を展開したものには、「Xり×2系」の「ばたりばたり」、「促音挿入/り付加系」の「うっかり」「かっきり」「ぎっしり」などの8種類、「撥音挿入/り付加系」の「ぼんやり」の3つの形式が観察された。

「×2系」は「がさがさ」「がたがた」「ぎざぎざ」などの43種類ものオノマトペが見られた。「×2系」を展開したものには、「X×4」の「ごとごとごとごと」「さらさらさらさら」「どんどんどんどん」「にこにこにこにこ」「わくわくわくわく」の1つの形式が観察された。

「挿入系」で見られたものは、長音挿入であり、「Aーん系」の「きいん」「しいん/しいん/しーん」の1つの形式が観察された。

最後に、第3類の基本要素が孤立しているものに当たるオノマトペは、「きっぱり」「くっきり」「そっくり」の3種類が見られた。

以上から、『銀河鉄道の夜』に出現したオノマトペのうち、第2類のオノマトペが全体の大部分(96.0%)を占め、残りの極わずかが第3類(2.0%)と第1類(2.0%)のオノマトペであったと言える。さらに、最も多い形式は「×2系」であり、基本要素に促音付加した「Xっ」が次いだことがわかった。また、「×2系」を展開した「X×4」には、「ごとご

とごとごと」などの擬音語のみならず、「にこにこにこにこ」「わくわくわくわく」といった擬態語も出現したことが注目される。

1.2.2 漢語由来のオノマトペの形式

漢語由来のオノマトペは、基本要素を反復した「さんさん」「しんしん」「せいせい」の3件が見出せた。

2 日本語オノマトペの形態的パターンとその訳出

ここからは、日本語オノマトペの形態的パターンごとに、原文と仏語訳を調査する。

2.1 促音

促音には〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉があるとされている。フランス語でもそれらの性質が含まれているように訳出されているのか、例文を上げながら考察する。

2.1.1 促音付加

(1) そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたっと押えちまうんです。

au moment où ils vont juste toucher le sol, hop !... on les attrape !

「ぴたっ」は〈④動いていたものが、急に止まるさま。継続していたものが、急に絶えるさま：363、364〉を意味する。一方、これに当たるフランス語は、**hop!** というオノマトペである。『フランス語オノマトペ辞典』には、次のように記載されている。

HOP 1. "(marque d'un élan, un saut, une escalade, un geste rapide)".

2. "(marque la soudaineté ou la rapidité d'un procès)". 1938

hop は〈はずみ、跳躍、よじ登ること〉や、〈唐突さまたは過程の素早さ〉を表すとされ、後者の意味において、1938年の例文が初出として挙げられている。ここでは、〈唐突さまたは過程の素早さ〉の意味で使用されている。原文の「ぴたっ」は、一瞬で押さえる〈瞬間性〉と、動いていたものを急に捕まえる〈急転性〉のふたつのニュアンスを持つ。**hop!** からは、その意味においても、行為が唐突で、また瞬時であることがわかり、また、さらに感嘆符を付加させることで、押さえるさまが強調されていることから、フランス語においても促音付加の〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスは含まれていると言える。

(2) 「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらっとさせて、こっちを見て話しかけました。

« Vous visitez ? » fit l'homme aux allures de diplômé supérieur qui regarda vers les enfants, ses lunettes jetant une brève lueur.

「きらっ」〈一瞬明るく鋭く光るさま：76〉にあたるフランス語は、**une brève lueur**〈束の間の閃光、きらめき〉である。「きらっ」には、眼鏡のきらめきが一瞬であった〈瞬間性〉と、きらめくさまが終わって一区切りがつく〈一区切り性〉のニュアンスがある。フランス語の **une brève lueur** は、〈(時間的に)短い、束の間の〉を意味する形容詞 **bref** の女性形単数 **brève** が付加されことで、「きらっ」の促音付加の持つ〈瞬間性〉のニュアンスが表されている。また、**une**〈ひとつの〉という不定冠詞を伴うことで、一度のきらめきが起こり、一区切りつくことを示していると考えられることから、〈一区切り性〉のニュアンスもフランス語でも読み取れると考えられる。

(3) そして二人がそのあかりの前を歩いて行くときはその小さな豆いろの火はちよ
うど挨拶でもするようにぽかっと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。

Puis lorsque les deux enfants passèrent devant chacune de ces lumières, la petite flamme couleur de haricot s'éteignit d'un coup comme pour les saluer et se ralluma quand ils l'eurent dépassée.

「ぽかっ」は〈③軽く浮かび上がるさま。急にある思いや記憶などが生じるさま：433〉を意味し、ここでは、火が軽く消えるさまを示している。また、促音付加によって、火が消えるさまが一瞬である〈瞬間性〉のニュアンスを持つ。一方、これにあたるフランス語は、**d'un coup**〈一挙に、一度に〉である。仏語訳では、火が軽く消えるさままでは読み取れるとは言えないが、原文の促音付加が持つ〈瞬間性〉は表現されている。

2.2 撥音

2.2.1 撥音付加

撥音付加は〈余韻性〉〈残存性〉のニュアンスを持つとされる。それらがフランス語でも見られるのか、観察する。

(4) そのまっ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川が
しらしらと南から北へ亘っているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたの
でした。

Quand il eut dépassé le bois sombre de pins et de chênes Nara, le ciel vide s'élargit soudain et, du sud jusqu'au nord, on put embrasser du regard la rivière du ciel du cycle des éléments.

「がらん」は〈②何もなくて広々としたさま。空虚でさびしく広いさま：53〉を意味する。これにあたるフランス語は、**vide**〈[場所が]空いている、がらんとした、人がいない〉である。「がらん」には、一面に空が広く開いている〈余韻性〉と、そのさまが続いている〈残存性〉のニュアンスが含まれている。一方、フランス語の **vide** は、空が開いている〈残存性〉を示しているが、撥音付加の〈余韻性〉のニュアンスまでは表現されていない。

(5) 見ると鳥捕りは、もうそこでとって来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているのです。

C'était bien le chasseur d'oiseaux en train de disposer, en les alignant soigneusement l'un sur l'autre, les hérons qu'il venait de capturer là-bas.

「きちん」は〈①整った形にできあがっているさま：64〉を意味する。これにあたるフランス語は、soigneusement〈念入りに、注意深く、丁寧に〉である。「きちん」からは、複数の鷺を丁寧に整える動作の〈余韻性〉があること、また、整った形をとどめている〈残存性〉のあることが表されている。フランス語の soigneusement から、鷺を注意深く整える動作の〈余韻性〉と、整えた結果が続いている〈残存性〉の両方が読み取れることから、仏語訳にも原文の撥音付加の〈余韻性〉と〈残存性〉のニュアンスが表されていると言える。

2.2.2 長音／撥音付加

(6) するとぴたっと鳥の群は通らなくなりそれと同時にぴしゃあんという潰れたような音が川下の方で起ってそれからしばらくしいんとしました。

Les volées d'oiseaux s'arrêtèrent net, tandis qu'en même temps un bruit comme le claquement sec de quelque chose qui s'écrase se fit entendre vers l'aval ; peu après tout devint silencieux.

「ぴしゃあん」は {ぴしゃ} に長音と撥音が付加したオノマトペである。「ぴしゃん」は〈②液体などが小さくはねる音。また、そのさま：360〉を表し、「ぴしゃあん」と長音が伴うことにより、その状態や音が長く続く〈延長性〉が含まれることがわかる。ここでは、川の水が小さくはねる時の一定の長さの音が聞こえ、音に余韻があることが「ぴしゃあん」から理解できる。これにあたるフランス語は le claquement sec であり、〈乾いた、(戸、歯、旗などが)音をたてること；(よく響く大きな)音〉という意味の動詞である。「ぴしゃあん」と le claquement sec を比較すると、前者からは小さな水の音が感じられ、後者からは大きく乾いた音と訳出されていることから、言語によって受ける音の印象が異なっている。また、仏語訳からは、原文の「長音／撥音付加」の〈延長性〉や〈余韻性〉までは読み取れない。

2.3 長音

長音は〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを持つとされる。仏語訳にもこれらが含まれているのか、観察する。

2.3.1 長音挿入

(7) ジョバンニは、ぱっと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

Giovanni, d'un seul coup, sentit son cœur se glacer et il eut l'impression qu'autour de lui, tout se mettait à pousser des cris perçants.

「きいん」は、〈①金属的で、鋭く、耳にひびくようなかん高い音。また、そのような声：59〉を示す。長音が挿入されることで、金属的な鋭く高い音が鳴り続けている〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、*des cris perçants* 〈金切り声〉である。フランス語では、音よりも声であると捉えられているが、単数の *un cri perçant* ではなく複数形 *des cris perçants* にすることで、一度だけの声ではないことが示唆されており、原文の長音挿入の〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを表現しようとしていることがわかる。このように、原文のオノマトペのニュアンスが、フランス語においては単数形／複数形の違いによって訳出されていると判断できる場合があり、注意が必要である。

(8) 眼の前がさあつと明るくなって、ジョバンニは、思はず何べんも眼を擦ってしまひました。

tout étincelait devant Giovanni et plusieurs fois, il dut se frotter les yeux.

「さあつ」は、〈動作がほんのわずかの間に行われるさま：145〉を示す。ここでは、長音挿入によって、目の前の景色が明るく変化していく様子の〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスが読み取れる。これにあたるフランス語は、*étinceler* 〈(光を受けて) 輝く、きらめく〉の過去における状態を表す半過去の *étincelait* である。この動詞は、原文での「さあつ」というオノマトペのみではなく、〈さあつと明るくなる〉という表現までを表していると考えられるが、明かりがついていない状態からついた状態に至る過程は表されていないように思われる。また半過去にすることで、明るくきらめき続けている〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスは訳出されている。

(9) 「いまも毎朝新聞をまはしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしてみるからな。」

« Maintenant aussi, j'y vais pour porter le journal *Le Matin* ; mais la maison est toujours silencieuse. »

「しいん」は、〈物音一つ聞こえず、鎮まりかえっているさま：160〉を表す。ここでは、家の中からは音がせず、静まりかえった状態が続いている〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、*silencieuse* 〈静かな〉である。*la maison est toujours silencieuse* 〈家はいつも静かだ〉から、早朝に新聞を持っていくと、常に家が静かであることはわかるが、*silencieuse* だけからは、原文の「しいん」の長音の持つ〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスが表現されているとは言えない。

(10) 「あゝ、ジョバンニ、お仕事がひどかったらう。今日は涼しくてね。わたしはうっと工合がいゝよ。」

« Oh ! Giovanni, ton travail n'était pas trop dur ?... Aujourd'hui il fait frais, n'est-ce pas ! Je me sens beaucoup mieux ! »

「ずうっ」は、〈③性質・距離・時間などについて、大きな隔たりや差があるさま。段違いに。ずっと：199〉を表す。ここでは、通常と比較してよい調子が続いている〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、*beaucoup mieux* 〈ずっとよい〉である。*bien* 〈よい〉の比較級の *mieux* を *beaucoup* 〈ずっと、はるかに〉が修飾することで、いつもよりも非常によい調子であることが表されており、その状態が続く〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスが表現されている。

2.4 リ

「リ」には〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。仏語訳にも同様のニュアンスがあるのか、観察する。

2.4.1 リ付加／反復×2

(11) 中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの〔輪〕転器がばたりばたりとまはり、きれで頭をしばったりラムブシェードをかけたしたりした人たちが、何か歌ふやうに読んだり数へたりしながらたくさん働いて居りました。

À l'intérieur, bien qu'il fit encore jour, des lampes électriques étaient allumées, des rotatives nombreuse tournaient dans un fracas épouvantable ; un grand nombre de travailleurs s'activaient, ils lisaient ou comptaient sur un ton de psalmodie, la tête ceinte d'une serviette ou d'une visière.

「ばたりばたり」は、{ばた}に「リ付加」した「ばたり」〈①ものが当たったり勢いよく倒れたりする音。また、そのさま：337、338〉を繰り返した形である。ここでは、輪転機が何度も音を立ててはまり、その状態が完了した〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、*dans un fracas épouvantable* 〈ひどい、非常に悪い；ものすごい（破裂する）激しい音、轟音、大音響；喧噪に包まれて〉である。*un fracas épouvantable* から、輪転機が放つ大音量をひとつの事象と捉えているように思える。原文のオノマトペの「リ」が持つ〈完結性〉〈ひとまとまり性〉は、フランス語に訳出されていると言える。

2.4.2 促音挿入／リ付加

促音挿入のオノマトペは、〈滞留性〉〈時差性〉の性質を持っているとされる。「リ」には〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。促音挿入と「リ」付加のニュアンスが仏語訳にも見られるのか、観察する。

(12) そしてたくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちょうどま向いに行つてすっかりとまりました。

Ensuite, en passant parmi des signaux en grand nombre et les lumières des réverbères, le train

perdit progressivement de la vitesse, avança encore jusqu'à se trouver en face de la croix et s'immobilisa tout à fait.

「すっかり」は〈残るところなくすべてにわたるさま。ことごとく：207〉を示し、ここでは、汽車の進む速さが遅くなり始めた状態でとどまっている〈滞留性〉と、減速してから停車するまでの動作が完了した〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、tout à fait〈きわめて、非常に〉である。汽車が停車しきった〈完結性〉〈ひとまとまり性〉は読み取れることから、「り」のニュアンスは訳出されているが、〈滞留性〉は表現されていない。

(13) 新世界交響楽はいよいよはっきり地平線のはてから湧きそのまっ黒な野原のなかを一人のインディアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番えて一目散に汽車を追って来るのでした。

Du fond de l'horizon, la Symphonie du Nouveau Monde jaillissait de plus en plus forte et claire ; au milieu de ces champs noirs, un Indien, une plume d'oiseau blanc fichée sur la tête, les bras et la poitrine ornés d'une quantité de cailloux, une fiche encochée sur un petit arc, courait de toutes ses forces derrière le train.

「はっきり」は〈①他との区別が明らかで、あざやかに認識できるさま。明らかに：341〉を意味する。ここでは、それまでかすかに聞こえてきていた新世界交響楽の旋律が、鮮やかに聞こえてきた〈時差性〉と、聞こえるようになった〈完結性〉のニュアンスがある。これにあたるフランス語は、forte et claire〈力強く明瞭な〉である。これらの語句だけでは、原文のオノマトペの〈時差性〉〈完結性〉は表されているとは言えない。しかし、「いよいよはっきり」を de plus en plus forte et claire〈徐々に、だんだん力強く明瞭な〉とすることで、仏語訳でも、以前は弱く聞こえていた旋律が、今ではより強く、より明瞭に聞こえるようになったことが示されていることから、原文の「はっきり」の〈時差性〉と〈完結性〉は翻訳されていると判断できる。

(14) にわかに男の子がぱっちり眼をあいて云いました。

Soudain le petit garçon ouvrit tout grands les yeux et dit :

「ぱっちり」は〈②動きや形の輪郭がよくきわだっているさま。目を大きく見開くさま：344〉を表す。促音挿入により、目を開け始めた状態から完全に目を見開くまでの〈時差性〉や目を大きく見開いた状態で留まっている〈滞留性〉のニュアンスを持ち、「り付加」により、目を開くさまが完了している〈完結性〉〈ひとまとまり性〉がある。これに当たるフランス語は、tout grands〈非常に大きく〉である。le petit garçon ouvrit tout grands les yeux〈少年は目を非常に大きく開ける〉と訳されており、非常に大きく目を開いている状態であることは読み取れるが、その状態がどれほど留まっているのか、また、完全に開ききったのか

はわからないため、原文のオノマトペが持つ〈滞留性〉〈完結性〉のニュアンスは、フランス語に訳出されているとは言えない。

2.4.2 撥音挿入／り付加

撥音挿入のオノマトペは、〈滞留性〉〈時差性〉の性質を持っているとされる。「り」には〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。撥音挿入と「り」付加のニュアンスが仏語訳にも見られるのか、観察する。

(15) ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スター をうたってやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。

Oui... Oui... Mais regardez ! Oh ! Regardez là ! Cette rivière, magnifique, là-bas, au milieu de l'été... Twincele, Twincele, Little Star... C'est l a chanson que l'on chantait lorsqu'on se reposait et alors, par la fenêtre, on voyait cette blancheur voilée.

(16) ジョバンニの眼はまた泪でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったようにぼんやり白く見えるだけでした。

Giovanni, les yeux à nouveau pleins de larmes, ne pouvait que fixer la rivière du ciel qui lui apparut blanche et voilée comme si elle s'était éloignée.

「ぼんやり」は〈③意識が抜けたりとんだりしているさま。ものの形が不明瞭に見えるさま：466〉を意味する。撥音によって、ものの形が不明瞭に見える状態が留まっている〈滞留性〉を示しながら、不明瞭に見える状態で落ち着いた「り付加」の〈完結性〉のニュアンスがある。これにあたるフランス語は、どちらの例文でも動詞 *voiler* 〈ベールで覆う〉の過去分詞の *voilée* 〈曇った、かすんだ、ぼんやりした〉である。霞んでいる状態になり、そのままとどまっていることが読み取れ、原文の「撥音挿入／り付加」の〈滞留性〉〈完結性〉のニュアンスが仏語訳でも表現されていると考えられる。

2.5 反復

オノマトペを繰り返す反復は、音やさまに〈反復性〉を与えるものである。仏語訳にも〈反復性〉が含まれているのか、観察する。

2.5.1 反復×2

(17) その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまさまの楽の音や草花の匂のようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。

Peu-à-peu le feu fut entraîné vers l'arrière et l'on put percevoir toutes sortes de sonorités musicales incroyablement joyeuses il y eut comme des odeurs de fleurs des champs ; on entendit des bruits de voix mêlés à des sifflements.

「ざわざわ」は、〈①声や音が騒がしく聞こえるさま。大勢が騒ぎ動くさま：157〉を意味する。これにあたるフランス語は、*des bruits* 〈音、物音、騒音〉である。「ざわざわ」は、人々が声を上げ続けている〈反復性〉のニュアンスがある。一方、フランス語では、声や口笛も含めて音と捉え、単数形の *un bruit* ではなく、複数形の *des bruits* とすることで、音が一瞬だけ聞こえたのではなく、ある程度の時間の長さの中で音が続いたことが示唆されていることから、仏語訳においても、原文のオノマトペ「×2」の〈反復性〉が訳出されていると言える。

(18) もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど激しく流れて来たらしくときどきちらちら光ってながれているのです。

Maintenant la rivière du ciel longeait la voie du chemin de fer, ses flots qui jusqu'alors avaient paru extrêmement tumultueux coulaient en jetant des étincelles de-ci de-là.

「ちらちら」は〈④弱い光が断続的に光るさま：264〉を表し、{ちら}を繰り返すことで、何度か小さな光を放っている〈反復性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、*des étincelles de-ci de-là* 〈こちら、あちらの輝き、きらめき〉である。輝きを *des étincelles* と複数形にすることで、輝きが続いている〈反復性〉のニュアンスが訳出されている。加えて、*de-ci de-là* 〈こちらでも、あちらでも〉をつけることで、一箇所からの光ではなく、きらめきの範囲が広いことも読み取れることから、フランス語では天の川の輝きのさまを工夫して訳されていることがわかる。

(19) するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもぢもぢ立ち上ったまゝやはり答へができませんでした。

Celui-ci, bien qu'il ait levé la main le premier, se mit debout avec un air plutôt embarrassé et ne répondit rien non plus.

「もぢもぢ」は〈叡慮したり恥ずかしがったり、決心がつかなくなったりして、身をもむさま。もじかわ：487〉を表す。これにあたるフランス語は、*avec un air plutôt embarrassé* 〈むしろ困惑した、途方に暮れた；困窮した様子で〉である。原文では、「もぢもぢ」の反復「×2」によって、自信がなくなって身をもんでいる状態が続いていながらも立ち上がったことが示されている。仏語訳は、*se mit debout avec un air plutôt embarrassé* 〈どちらかと言うと困惑した様子で立つ〉ことはわかるが、「もぢもぢ」の〈反復性〉までは訳出されていないと考える。

2.4.3 反復×4

(20) お母さんがね立派な戸棚や本のあるところに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこわらったよ。

Elle se trouvait dans un endroit où il y avait de splendides armoires et des livres, elle regardait de mon côté, levait la main en me souriant gentiment.

「にこにこ」は〈①うれしそうに笑みをうかべ続けるさま。にっこり：317〉を表し、「にこにこにこにこ」は基本要素 {にこ} の「×4」のオノマトペである。これにあたるフランス語は、gentiment 〈親切に、感じよく〉である。「にこにこにこにこ」によって、微笑んでいる状態が長く続いている〈反復性〉のニュアンスがあることがわかる。一方フランス語では、前述に en me souriant 〈わたしに微笑みながら〉とあるものの、微笑んでいる時間の長さについては説明されていない。また、原文のオノマトペが特殊な「×4」の形式であることが、訳文では読み取れない。したがって、仏語訳には「×4」のニュアンスがよく表現されているとは言えない。

(21) ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。

Les jambes de Giovanni se mirent à trembler convulsivement.

「わくわく」は〈②興奮や不安で心がゆれて落ち着かないさま：504〉を表し、「わくわくわくわく」は基本要素 {わく} の「×4」のオノマトペである。これにあたるフランス語は、convulsivement 〈痙攣したように、ひきつったように〉である。「わくわくわくわく」からは、心が揺れ動き足の震えが反復されていることがわかる。一方のフランス語では、se mirent à trembler convulsivement 〈痙攣したように震え始める〉から、足がひきつったように震えている〈反復性〉は読み取れそうである。しかし、convulsivement のみでは、原文のオノマトペの形式が、反復「×4」と繰り返しが多いことまでは、仏語訳に表現されていない。

2.5 日本語オノマトペ訳出の総括

以上を総括すると、次のようになる。

〈瞬間性〉	よく訳せている
〈急転性〉	概ね訳せている
〈一区切り性〉	あまり訳しきれしていない
〈滞留性〉	あまり訳しきれしていない
〈時差性〉	あまり訳しきれしていない
〈余韻性〉	あまり訳しきれしていない
〈残存性〉	よく訳せている
〈延長性〉	概ね訳せている
〈持続性〉	概ね訳せている
〈完結性〉	概ね訳せている
〈ひとまとまり性〉	概ね訳せている
〈反復性〉	概ね訳せている

3 漢語由来のオノマトペの形態的パターンとその訳出

本作品に出現した漢語由来のオノマトペは、以下の3例であった。

反復「×2」

さんさん しんしん せいせい

このうち、「さんさん」と「しんしん」の例文を挙げる。

(22) ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

On ne vit plus que les feuilles de nombreux noyers étincelants, dressés dans le brouillard et parmi les branches, portant des nimbes jaune d'or, des écureuils électriques aux mignonnes petites têtes qui apparaissaient puis disparaissaient en jetant des coups d'œil par-ci par-là.

上の例文における「さんさん」を、『日国第二版』で確認する。

さんさん【燦燦・粲粲・璨璨】

[形動タリ]

あざやかで美しいさま。きらきらと輝いて美しいさま。

*俳諧・本朝文選〔1706〕二・賦類・百花譜〈許六〉「十月一陽の氣に、燦々（サンサン）たる江南の玉妃、まづえめるより」

- *南郭先生文集-初編〔1727〕一・鏡歌十八首・有所思「小星三五何粲粲、晨風肅肅当レ告レ誰」
- *柳湾漁唱-一集〔1821〕草木共逢春「**粲粲**高低映、**芊芊**遠近均」
- *良寛詩〔1835頃〕粲々倡家女「粲々倡家女、言笑一何工」
- *食後の唄〈木下杢太郎〉序〔1919〕〈北原白秋〕「美は美の儘にただ
燦々爛々と取り散らされてあった」
- *銀河鉄道の夜〔1927頃か〕〈宮沢賢治〕九「ただたくさんのくるみの木
が葉をさんさんと光らして」
- *水の葬列〔1967〕〈吉村昭〕一「日光の燦々（サンサン）と降りそそぐ
世界は、ただ私を苦しませるだけのものだということにも気がついた」
- *詩経-小雅・大東「西人之子、粲粲衣服〈毛伝〕粲粲鮮盛貌」
- *白居易-黒龍飲渭賦「**氣黤黤**以**黯黯**、**光燦燦**而**爛爛**（『日国第二版』）」

例文の「さんさん」は、18世紀から使用されている、漢語由来のオノマトペであることがわかる。

例文では、「さんさん」から、くるみの木の葉が鮮やかに光り輝き続けているさまが読み取れる。

これにあたるフランス語は、動詞 *étinceler* 〈(光を受けて)輝く、きらめく〉をもとにした形容詞 *étincelants* 〈(光を受けて)輝いている、きらめいている〉である。仏語訳でも、光が輝き続けている感覚が表現されていると考えられる。

(23) その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすってのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。

Quelle pouvait bien être sa profondeur ? Y avait-il quelque chose au fond ? Même en se frottant plusieurs fois les yeux pour regarder, on ne réussissait qu'à se les irriter et on ne voyait rien.

しん-しん 【岑岑】

〔形動タリ〕

ひどく痛むさま。

*運歩色葉集〔1548〕「岑々 シンシン」

*和英語林集成(初版)〔1867〕「イタミガ *shinshin* (シンシン) ト ミニコタエル」

*黒潮〔1902～05〕〈徳富蘆花〕一・九・二「蹴られた左の手首は折るるばかり岑々(シンシン)と痛む」

*三四郎〔1908〕〈夏目漱石〕三「岑々(シンシン)たる頭を抑へて未来永劫に試験制度を呪詛する事を記憶せよ」

*漢書-外戚伝・上・許皇后「我頭岑岑也、藥中得^レ無^レ有^レ毒」

(『日国第二版』)

例文の「しんしん」は、16世紀から使用されている、漢語由来のオノマトペであることがわかる。²⁰これにあたるフランス語は、動詞 *se (les) irriter* 〈(それらに) 軽い炎症を起こす、(それらが) ひりひりする〉である。この動詞は、「しんしん」というオノマトペ一語よりも原文の「しんしんと痛む」までを仏語訳したものだと思えられる。痛みは一瞬ではなく、ある程度の持続が考えられることから、フランス語においても、痛み続けている感覚が表現されていると言える。

4 特異な日本語オノマトペとその訳出

ここで、一般的なオノマトペの用法とは異なるものが、フランス語として、どのように訳出されているのか、確認する。

(24) 「それから彗星がギーギーフーギーギーフーて云って来たねえ。」

« Et ensuite une comète est venue en disant : Gui... Gui... Fou... Gui... Gui... Fou... »

「ギーギーフーギーギーフー」は、『日国第二版』に掲載がないものであるが、その語形から、{ギー}の繰り返し「ギーギー」と{フー}の結合を反復「×2」にしたものと考えられる。それぞれの基本要素を調べて見る。「ぎい」は〈物がきしんで出る重く鈍い音。「きい」という音よりも重苦しい。〉と示されており、20世紀からの使用例が挙げられている。「ぎいぎい」も確認すると、〈物が盛んにきしんで出る大きく鈍い音、また、それに似た音や声を表わす語。「きいきい」という音よりも太くて重苦しい。〉とあり、同じく20世紀からの使用されているようである。一方、「ふう」は次のように書かれている。

ふう

【一】〔副〕

(多く「と」を伴って用いる)

(1)「ふうっと(1)」に同じ。

*名語記〔1 2 7 5〕五「風のふうとふく、如何。字の音が、やがて、をとにあらはるる也」

²⁰ 「しんしん」に該当する語は、他に、

「岑岑 〈雨や雪などがしきりに降るさま。また、涙や汗などがしきりに落ちるさま〉」

「伸伸 〈ゆるやかなさま。ゆったりとしたさま。のびのびしたさま。〉」

「振振 〈(1)盛んなさま。盛大なさま。(2)信義仁愛の厚いさま。(3)鳥などのむらがり飛ぶさま。〉」

「新新 〈いちだんとあたらしくなるさま。〉」

「津津 〈あふれ出るさま。絶えずわき出るさま。〉」

「深深・沈沈 〈(1)奥深く静寂なさま。ひっそりと静まりかえっているさま。森森(しんしん)。(2)寒さ、痛みなどが、身にふかくしみとおるさま。〉」

「森森 〈(1)樹木の高く深く生い茂ったさま。こんもり。また、樹木のように、高く並びそびえているさま。(2)深深・沈沈の(1)と同じ。〉」(『日国第二版』)

などがあり、(21)では「岑岑」という使われ方をしていると判断できる。

*虎明本狂言・楽阿彌〔室町末～近世初〕「我も持たる尺八を、ふところよりも取出し、此尺八をふきしむる、此尺八をふきしむる、ふう」

*人情本・春色梅児誉美〔1832～33〕初・四齣「フウと息を二ツ三ツ外へはづし」

(2)「ふうっと(2)」に同じ。

*草枕〔1906〕〈夏目漱石〉三「まぼろしの如く女の影がふうと現はれた」

【二】〔名〕

火や灯火などをいう幼児語。

*俚言集覧〔1797頃〕「ふう。小児の言に火をフウと云フは火也ウは韻也」
(『日国第二版』)

そこで、「ふうっと」を調べてみると、次のように記載されている。

〔副〕

(1)風の吹く音や強く息を吹きつける音、また、そのさまを表わす語。ふう。

*伊蘇普物語〔1873〕〈渡部温訳〉六三「折から風が鬱々（フウツ）と吹いて来て、燈火忽ち滅れたり」

*自由学校〔1950〕〈獅子文六〉その道に入る「フーッと、サジの中のを、吹いた」

(2)音もなく急に動くさま、突然に変化するさまを表わす語。ふう。

*雪国〔1935～47〕〈川端康成〉「やがてスキイ場もふうっと陰って来た」
(『日国第二版』)

〈風の吹く音や強く息を吹きつける音、また、そのさまを表わす語〉という意味の副詞には、「ふう」が13世紀後期からあり、その後「ふうっ」が19世紀には使用され始めたことが推察される。例文の「ギーギーフーギーギーフー」は、彗星から聞こえてくる音として、既存のオノマトペ「ギーギー」と「フー」を結合させた、独自のオノマトペと言えるだろう。G音の長音の繰り返しによって重く長い音が続いている〈延長性〉〈持続性〉があることに加え、F音によって呼吸のような軽い音がG音に続くこと、また、反復「×2」によって〈反復性〉があることを示している。一方、これにあたるフランス語は、Gui... Gui... Fou... Gui... Gui... Fou... である。原文のオノマトペの形式がそのまま仏語訳でも採用されており、フランス語においても、「ギーギーフーギーギーフー」の形式の持つ〈延長性〉〈持続性〉および〈反復性〉は表現されているとみなしうる。

(25) ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

Arrivé au sommet, juste au-dessous des piliers du cycle des éléments, Giovanni se jeta tout essoufflé dans les herbes froides.

「どかどか」の意味や用例を確認する。

どかどか

〔副〕

(多く「と」を伴って用いる)

(1)太鼓など大きな音が続けて響くさま、また、重いものが続けて落ちるさまを表わす語。

*俳諧・七番日記-文化九年〔1812〕二月「とかとかと花の上なる馬ふん哉」

(2)主として大勢の者が、荒々しい足音をたてて、無遠慮に出入りしたり、動きまわったりするさまを表わす語。

*浄瑠璃・吉野忠信〔1697頃〕四「大衆ども甲冑帯し数十人、どかどかと入り来たり」

*書言字考節用集〔1717〕八「動下々々 ドカドカ 俗字」

*怪談牡丹燈籠〔1884〕〈三遊亭円朝〉一〇「理不尽に阿魔女（あまっちょ）が女房の居る所へどかどか這入（へーッ）て来て」

*大阪の宿〔1925～26〕〈水上滝太郎〉一三・五「どかどか二階に上って来た三人連の会社員らしい客があった」

(3)「どか【一】(2)」を強めたいい方。

*雑俳・楊梅〔1702〕「どかどかと・積りこたへぬまつ雪」

*俳諧・希杖本一茶句集〔1827頃〕「穀値段どかどか下るあつさ哉」

*少年行〔1907〕〈中村星湖〉五「自分の前の炉には、榾火がドカドカ燃え盛って、自在鍵には大鍋がかかり」

方言

(1)体がよくぬくもるさま、暖かく感ずるさま。《どかどか》長野県中部 468 480「ストーブを入れたらどかどかするほど暖かい」493 岐阜県飛騨「額がどかどかする（ほてる）」502 静岡県志太郡 535

(2)火などが盛んにおこるさま。《どかどか》長野県東筑摩郡「火がどかどかおこった」480

(3)着物が垢（あか）などでひどく汚れているさま。《どかどか》富山県砺波 398 石川県金沢市 404

(4)ひどくぬれるさま。《どかどか》石川県鹿島郡 411

(5) 地面などが柔らかくぶくぶくしているさま。《どがどが》兵庫県加古郡
664

(6) 汗などが濁るさま。《どかどか》新潟県佐渡 352

(7) 糸や麺（めん）などが切れやすいさま。《どかどか》新潟県佐渡 348

（『日国第二版』）

例文での「どかどか」は、体が火照っているさまを示している。したがって、一般的な使われ方ではなく、方言の(1)〈体がよくぬくもるさま、暖かく感ずるさま〉の意味で使用されていることがわかる。宮澤賢治が創作したオノマトペではなく、方言性のあるものであると言える。また、「どかどか」は{どか}の反復「×2」であるため、体が火照り続けている〈反復性〉のニュアンスを持つ。一方、仏語訳は、Giovanni se jeta tout essoufflé dans les herbes froides 〈ジョバンニは冷たい草に息せききって身を投げ出しました〉とあり、原文の「どかどか」を tout essoufflé 〈息せききって〉と訳したことがうかがえる。体が火照っているさまではなく、息切れしたさまと捉えたのであろう。原文のオノマトペが一般的な使われ方ではなく、方言性を持つものであるため、原文と仏語訳の内容が相違することになったと考えられる。

(26) 天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどほんとあいているのです。

À ce point de la rivière du ciel, un immense trou noir béait largement.

「どほん」は、『日国第二版』に掲載がないものである。関連のありそうな「どぼん」を調べてみる。

どほん

〔副〕

（多く「と」を伴って用いる）

「どぶん」に同じ。

*紀文大尽〔1892〕〈村井弦斎〉あなや「ドボーンと一声水音高し」

*彦市ばなし〔1946〕〈木下順二〉七「ドボンと飛び込む」

*助左衛門四代記〔1963〕〈有吉佐和子〉序「どぼんと鈍く釣瓶が井戸の底に落ちた音が聞えた」
（『日国第二版』）

「どぶん」に同じとあった、「どぶん」を確認してみる。

〔副〕

（多く「と」を伴って用いる）

重い物などが水中に落ちたり、水中に飛び込んだりする音、また、そのさまを表わす語。どぶり。どぼん。

*真景累ヶ淵〔1869頃〕〈三遊亭円朝〉八五「翻筋斗（もんどり）打って、利根の枝川へどぶんと水音高く逆とんぼうを打って投げ込まれましたから」

*俳諧師〔1908〕〈高浜虚子〉四八「左の腕を洗ったばかりでドブンと湯槽の中につかって」
(『日国第二版』)

「どぼん」と「どぶん」は、〈重い物などが水中に落ちたり、水中に飛び込んだりする音、また、そのさまを表わす語。どぶり。どぼん。〉を意味し、「どほん」と同様に19世紀から使用されていることがわかる。

次に、「どぶり」を確認する。

〔副〕

(多く「と」を伴って用いる)

重い物などが水中に落ちこむ音、水が揺れ動いたり、ぶつかったりする音、また、そういう様子を表わす語。どぶん。

*名語記〔1275〕三「水におちいるをとのとぶとなる如何。とふは井の中に石をかきて、とふりとよませたり、つよはむの反は、とふ也」

*雑俳・冠独歩行〔1702〕「またゆくか・女郎の井筒身はどぶり」

*男五人〔1908〕〈真山青果〉三「ドブリと汐先の寄せるたびに、船がゆれて」

方言

〔名〕

(1)水がよどんで深い所。淵（ふち）。《どぶり》長野県北安曇郡469

(2)落とし穴。また、雪で作った落とし穴。《どぶり》秋田県平鹿郡130

(『日国第二版』)

「どぶり」には、〈重い物などが水中に落ちこむ音、水が揺れ動いたり、ぶつかったりする音、また、そういう様子を表わす語。どぶん。〉という意味の副詞のほか、方言に〈落とし穴。また、雪で作った落とし穴。〉という意味で使用される名詞があり、秋田地方で用いられているようである。「どほん」の例文は、大きく穴が開いているさまを示していることから、その意味には「どぶり」の方言からの影響があるのかもしれない。また、「どほん」は撥音により、穴が開いている状態が残っている〈残存性〉と〈余韻性〉がある。一方、「どほん」にあたるフランス語は *largement* 〈広く、大きく〉である。*un immense trou noir béait largement* 〈巨大な黒い穴が大きく開いていた〉と動詞 *béer* を過去の状態を表す直説法半過去 *béait* にすることで、*largement* だけは感じられない〈残存性〉と〈余韻性〉のニュアンス

を、仏語訳でも表現しようとしたと考えられる。このように、動詞の時制に注目すると、直説法半過去には、撥音付加のニュアンスに通じるものがある可能性を指摘できよう。

(27) そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしてゐるのを見ました。

Giovanni s'aperçut alors que les piliers du cycle des éléments, juste à l'arrière, avaient pris on ne sait quand une forme approximativement pyramidale, et que, durant un moment, ils s'éteignirent et se rallumèrent en clignotant, comme des lucioles.

(28) すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くぺかぺか光ったり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。

Les hérons alors, comme des lucioles, clignotèrent dans un sac pendant un moment en émettant des lueurs vertes qui s'allumaient et s'éteignaient puis ils devinrent finalement d'un blanc incertain et fermèrent les yeux.

光ったり消えたりするさまを「ぺかぺか」というオノマトペで表現されている。が、一般的には「ぺかぺか」よりも「ぴかぴか」の方が使われるのではないか。そこで、まず、「ぺかぺか」を確認する。

ぺかぺか

【一】〔副〕

ものの薄く、たわみやすいさま、また、薄っぺらでやすっぽいさまを表わす語。へこへこ。ぺこぺこ。

*変痴気論〔1971〕〈山本夏彦〉郵便箱「それは干と大書したブリキの箱だという。〈略〉あれはぺかぺかしてやっぱり手が切れそうである」

【二】〔形動〕

【一】に同じ。

*読書放浪〔1933〕〈内田魯庵〉窓から眺める・銀ぶら「銀座は夜の町だ。殊に震災後はまだ本建築が出来上らないで、門並がぺかぺかの煉瓦やスタッコの張付けだから博覧会の売店町のやうだ」

方言

細い竹や木などのしなやかでたわみやすいさまを表わす語。《ぺかぺか》山形県米沢市 151 (『日国第二版』)

やはり、光るさまを表す意味で「ぺかぺか」は使用されてこなかったことがわかる。次に、清音の「へかへか」を見てみる。

へかへか

(1) 過労や衰弱のため弱りきったさまを表わす語。《へかへか》山形県北村山郡・最上郡 139 新潟県佐渡 348

(2) 足腰に力が入らないさまを表わす語。《へかっど》とも。長崎県壱岐島「腰のへくわへくわする」「へくわっと座りこーじしも一た」054

(3) たどたどしい足で歩くさまを表わす語。よたよた。《へがもが》島根県美濃郡・益田市「何をへがもがしとるか、早う追っついて来い」725

(4) 重い荷物を背負い足を踏みしめて歩くさまを表わす語。《へかりへかり・へっかあばっかあ》とも。島根県美濃郡・益田市「山の坂を荷を負うてへかへか登った」「米を負うて、へっかーばっかー歩いて往んだ」725

(5) 幼児がよちよちと歩くさまを表わす語。《へかへか》島根県益田市 725 長崎県壱岐島 915 《べかべか》長崎県壱岐島「べくわべくわやっち来おる」915

(6) ためらうさまを表わす語。《へがもが》島根県美濃郡・益田市「へがもがせんとすぐさまやれ」725

(7) 細い竹や木などのしなやかでたわみやすいさまを表わす語。《へからへから・ぺからぺから》とも。山形県 139

(8) 病弱でぶらぶら遊び暮らしているさまを表わす語。《へかへか》富山県砺波 397 (『日国第二版』)

「へかへか」は、光るさまを表す意味の言葉ではなく、方言でのみ使用されているようである。次に、濁音の「べかべか」を確認する。

〔副〕

照り光るさまを表わす語。

*雑俳・太箸集〔1835～39〕四「風呂上り・新酒へかへか貞へ出る」

方言

地にしりを下ろして座るさまを表わす語。《べかべか》長崎県壱岐島「べくわべくわ土の上へすわるな」915 (『日国第二版』)

「べかべか」は、光るさまを表すオノマトペであり、19世紀からの使用例があり、古態性がある語であることが理解できる。「ぴかぴか」も調べてみる。

ぴかぴか

【一】〔副〕

(「と」を伴って用いることもある)

光り輝くさま、特に、点滅したり、向きを変えたりして光り輝くさまを表わす語。また、光線をよく反射するさま、つやがあって光っているさまを表わす語。古くは「ひかひか」。

*人情本・春色梅美婦禰〔1841～42頃〕四・二一回「ぴかぴか光る刃物
を持って居やアがったぜ」

*尋常小学読本〔1887〕〈文部省〉一「あさ日がさして、木の枝には、つ
ゆがぴかぴかひかりて居ます」

*魔風恋風〔1903〕〈小杉天外〉前・画工の家・二「目差（まぼし）い程
燦爛（ピカピカ）する額縁」

*一兵卒の銃殺〔1917〕〈田山花袋〉三「ぴかぴかと輝いて反射する電
燈」

【二】〔形動〕

つやがあって光っているさま。

*つゆのあとさき〔1931〕〈永井荷風〉六「長火鉢にはぴかぴかに磨いた
吉原五徳に鉄瓶がかかってゐる」

*レクイエム〔1969〕〈津島佑子〉午後「ぴかぴかのステンレスの台の上
のまだ湯気をたてている丸い頭蓋骨」

*瓦礫の中〔1970〕〈吉田健一〉六「新建材を使うことを断ったのもその
為で、いつもぴかぴかで時代が付かず」
（『日国第二版』）

副詞において、「べかべか」の方が「ぴかぴか」よりも古くから使用されているわけでは
なく、双方はともに19世紀のからの例があることが理解できる。また、「ぴかぴか」の方
が「光り輝くさま、特に、点滅したり、向きを変えたりして光り輝くさまを表わす語。また、
光線をよく反射するさま、つやがあって光っているさまを表わす語。」と、光り輝くさまで
も、断続性のある光や、反射する光など、より具体的かつ限定的な状況で用いられる語であ
ると言える。次に、「ひかひか」も見てみる。

ひかひか

〔副〕

（「と」を伴って用いることもある）

光り輝くさま。つやがあるさまを表わす語。「ぴかぴか」に相当する古いいい
方。

*羅葡日辞書〔1595〕「Coruscus 〈略〉 Ficaficato （ヒカヒカト） スル
モノ、ヒカル モノ」

*俳諧・徳元千句〔1632〕名所之俳諧「飛火かくれにたえぬ常香 ひかひ
かと螢乱るる初瀬風」

*四河入海〔17C前〕二四・四「金蛇はいなびかりぞ。ひかひかとする処を
にせて、電を金蛇と云ぞ」

*書言字考節用集〔1717〕九「嘩々 ヒカヒカ ヒツカリ〔毛詩註〕電光
貞」

*随筆・孔雀楼筆記〔1768〕一「大なる目のをそろしくひかひかする」

*滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕四・下「ざくろぐちのまいら戸は黒ぬりにてひかひか光るゆゑ」

方言

【一】〔副〕

ものの光るさまを表わす語。ぴかぴか。《ひかひか》岩手県気仙郡 101 平泉 108 宮城県仙台市 121 秋田県鹿角郡 132

【二】〔名〕

雷。いなずま。《ひかひか》兵庫県宍粟郡 649 鹿児島県屋久島 975 《ひかひかどん・ぴかぴかどん・ひかひかいどん・ひかひかさま》鹿児島県揖宿郡 969

(『日国第二版』)

以上から、「ひかひか」が先に存在し、のちに「ぴかぴか」が現れたという流れがあること、「べかべか」「ぴかぴか」「ひかひか」が光を表すオノマトペであることがわかる。また、例文の「ぺかぺか」は光るさまを表すものとされていないため、宮澤賢治の独自のオノマトペである可能性がある。「べかべか」と「ぴかぴか」をもとに創作したものかもしれない。「ぺかぺか」は、反復「×2」の形式であり、光ったり消えたりするさまが繰り返している〈反復性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、*en clignotant* 〈(〔光が〕明滅〔点滅〕し、またたき)ながら〉と、*en émettant des lueurs* 〈微光、弱い〔ほのかな〕光、閃光、きらめきを放ちながら〉である。*en clignotant* は、その意味から、点滅を繰り返す〈反復性〉があるのに対し、*en émettant des lueurs* は、微光が複数形 *des lueurs* になっていることから、光りが続く〈反復性〉のニュアンスが表現されていると理解できる。

(29) とおもひながら、やっぱり**ぼくぼく**それをたべてみました。

C'est vrai qu'il les mangeait, ces morceaux croustillants, tout en réfléchissant aussi.

食べるさまを表すオノマトペには、「ぼくぼく」よりも「ぱくぱく」の方が一般的ではないか。まず、「ぼくぼく」の意味を確認する。

ぼくぼく

【一】〔副〕

(「と」を伴って用いることもある)

(1)木魚などをたたく音を表わす語。

*滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕前・上「なむあみだぶ。ポクポクポクポクポク」

*田舎教師〔1909〕〈田山花袋〉一五「槌を取って木魚を叩いた。ポクポクポクポク、中々其調子が好い」

(2)ゆっくりと歩く足音、また、その様子を表わす語。ぼこぼこ。

*怪談牡丹燈籠〔1884〕〈三遊亭円朝〉八「伴蔵と一所にポクポク出懸けて」

*二人女房〔1891～92〕〈尾崎紅葉〉下・六「葱の味噌汁の暖気（おくび）をしながらぼくぼく出て行くのを見るにつけて」

*夢声戦争日記〈徳川夢声〉昭和一八年〔1943〕七月三日「埃っぼい道をポクポクと行く」

(3)やわらかくて、ふわふわしているさまや、水気やねばり気などが少ないさまを表わす語。ぼくぼく。

*落語・素人茶道〔1893〕〈三代目春風亭柳枝〉「形へ入れて打（ぶっ）こ抜こうと思ったが蜜の粘りと芋がポクポク為て居りますから抜けません」

*銀の匙〔1913～15〕〈中勘助〉前・一四「うはつらはぼくぼくしながら、しんは柔靱でいくら噛んでも噛みきれない」

(4)いねむりをするさまを表わす語。ほくほく。ぼくぼく。

*洒落本・雑文穿袋〔1779〕「さすがの此蔵げんなりし、ぼくぼく眠れば」

(5)穴やくぼみがたくさんあるさまを表わす語。

*永日小品〔1909〕〈夏目漱石〉猫の墓「猫の長い尻尾の毛が段々抜けて来た。始めは所々がぼくぼく穴の様に落ち込んで見えたが」

【二】〔形動〕

砂地などがすっかり乾いているさま。

*父一その死〔1949〕〈幸田文〉菅野の記「砂道が毎日の照りでぼくぼくに乾いて、下駄を吸ひ込んだ」

方言

【一】〔副〕

(1)遠慮なくどしどし行なうさまを表わす語。《ぼおくぼおく・ぼすぼす・ぼおすぼおす》とも。長崎県壱岐島「かんまんけにぼーくぼーくやれ（構わないからどンドンやれ）」915

(2)少しずつつまんで食うさまを表わす語。ぼつぼつ。《ぼくぼく》山形県米沢市 149

(3)もろいさまを表わす語。《ぼくぼく》茨城県稲敷郡 193

(4)だしぬけなさまを表わす語。にわか。急に。《ぼくぼく》長崎県対馬 913

【二】〔名〕

女兒の履くげた。ぼっくり。幼児語。《ぼくぼく》東京都八丈島 335

（『日国第二版』）

やわらかくて、ふわふわしているさまや、水気やねばり気などが少ないさまを表す副詞として、19世紀から使用されているようである。食べ方ではなく、食べるものの状態を表すことができるという点が、「ぼくぼく」とは異なる。また、山形地方の方言では、少しずつつまんで食べるさまを表わすようである。例文では、食べるさまを「ぼくぼく」と表していたことから、この「ぼくぼく」は方言性を持ったものである可能性がある。

次に、「ぼくぼく」も見てみる。

【一】〔副〕

(「と」を伴って用いることもある)

(1)「ぼくぼく(1)」に同じ。

*玉塵抄〔1563〕一九「ぼくぼくとあえうでおそいぞ。ことに足がなえては、一向のことぞ」

*俳諧・山の井〔1648〕年中日々之発句・三月「一僕とぼくぼくありく花見哉」

*社会百面相〔1902〕〈内田魯庵〉投机・一「毎朝毎夕ぼくぼく歩く当主廉蔵の辨当抱への洋服姿を見ても」

(2)「ぼくぼく(3)」に同じ。

*踊之著慕駒連〔1854～61頃〕「縫物するにもボクボク居睡り、折々目覚し」

(3)「ぼこぼこ【一】(4)」に同じ。

*閑耳目〔1908〕〈渋川玄耳〉公開せられた梅「海村の砂地、ボクボクして居るので、陰湿の気は少しも無い」

*あらくれ〔1915〕〈徳田秋声〉五〇「ぼくぼくした下駄をはいて遣って来たが」

*ロシアに入る〔1924〕〈荒畑寒村〉チタの滞在・三「馬の糞やら尿やらが、ボクボクした土に浸み込み、一種異様な悪臭を発散させてゐる」

(4)「ぼくぼく【一】(3)」に同じ。

*我等の一団と彼〔1912〕〈石川啄木〉三「ぼくぼくして皮の厚さうな、指の短い手」

【二】〔形動〕

「ぼこぼこ【二】」に同じ。

方言

〔名〕

泉。わき水。《ぼくぼく》群馬県多野郡246 《ぼくぼくみず〔一水〕》長野県佐久493 《ぼくみず》長野県佐久493 (『日国第二版』)

「ぼくぼく」は、副詞でも、方言でも、食べるさまを表すオノマトペではないことがわかる。最後に、「ぱくぱく」を調べてみる。

【一】〔副〕

(「と」を伴って用いることもある)

(1)魚などが、しきりに口をあけしめするさまを表わす語。

*水籠〔1907〕〈伊藤左千夫〉「鰻がね、〈略〉パクパク水を飲んでゐるのさ」

*東京の三十年〔1917〕〈田山花袋〉九段の公園「金魚や緋鯉がぞろぞろと出て来て、パクパクそれをつついた」

*故旧忘れ得べき〔1935～36〕〈高見順〉八「彼は轍にあぎとふ魚の如く、徒らに口をパクパクさせて」

(2)タバコをしきりにすうさまを表わす語。

*滑稽本・古朽木〔1780〕四「煙草ぱくぱく」

*雑俳・柳多留拾遺〔1801〕卷一六「切みせはぱくぱくぱくと一ふくし」

*日の出〔1903〕〈国木田独歩〉「シガーをパクパクふかして居る者もある」

(3)物をさかんに食べるさまを表わす語。

*銀の匙〔1913～15〕〈中勘助〉後・一五「蕎麦饅頭をぱくぱくくってゐた」

(4)物の合わせ目やつぎ目が離れかかっているさまを表わす語。

*学生時代〔1918〕〈久米正雄〉鉄拳制裁・二「蓋がぱくぱく開くのを知った」

*大阪の宿〔1925～26〕〈水上瀧太郎〉三・一「靴もひどかった。

〈略〉ぱくぱく口の開いたのを」

【二】〔形動〕

老人の歯が抜けて、あけしめする口にしまりのないさま。

*落語・地獄旅行〔1892〕〈三代目三遊亭円遊〉「アー歯を抜かれて仕舞った、宜い気味だ。アレ見よパクパクになった」

方言

タバコを吹かすさまを表わす語。ふかふか。《ぱくぱく》大分県南海部郡939
沖縄県首里993 (『日国第二版』)

「ぱくぱく」は、盛んに食べるさまを表す意味において、20世紀からの使用例があることがわかる。「ぱくぱく」と「ぼくぼく」を比較すると、「ぱくぱく」は、勢いよく食べるさまを示すのに対し、「ぼくぼく」は、少しずつつまんで食べるさまを表わすという点が異なっている。例文においては、お菓子を少しずつ食べるさまを表わすために「ぼくぼく」が使用されたのであり、方言性があると判断する。一方、「ぼくぼく」にあたるフランス語は、

croustillants〈[パン、菓子などが]カリカリ音のする〉である。原文の「それを」を *ces morceaux croustillants* 〈カリカリするそれらのかけらを〉と訳し、食べ方ではなく、食べているお菓子の水分が少ないことを表している。したがって、原文の「ぼくぼく」は食べるさまを表わす方言性のあるものであるが、仏語訳 *croustillants* は、物の質感を表わす方言性のない「ぼくぼく」を訳したものであると推察される。「ぼくぼく」は反復「×2」の形式で、少しずつつまんで口に運ぶことを繰り返している〈反復性〉のニュアンスを持つが、フランス語 *croustillants* も食べ物を咀嚼する音が続いているニュアンスがあり、〈反復性〉は翻訳されていると言える。

5 原文の擬音性・擬態性と仏語訳出の文法性の対応

5.1 概観

本節では、『銀河鉄道の夜』の日本語のオノマトペが含まれた用例を分類する。まず、日本語のオノマトペを、『日本語オノマトペ辞典』による区分に準じて、すべての種類をまとめた。また、日本語のオノマトペがフランス語に翻訳されたものが、フランス語のどのような文法分類（単語や句）に属するのかまとめた。それぞれの組み合わせの数を数え、単語に訳されたものと単語以外に訳されたものとに別け、それぞれを表にまとめた（【表2-1】および【表2-2】）。また、原文に出現したオノマトペにあたるものが、フランス語翻訳版に特に見られない場合は、「該当なし」として扱った。

【表2-1】『銀河鉄道の夜』に見られたオノマトペとフランス語（単語）の分類

		日本語オノマトペの区分										
		音	声	さま	音・さま	声・さま	音・声	音・名	音・声・さま	名	古	計
フランス語の品詞	オノマトペ	1	0	1	3	0	0	0	0	0	0	5
	副詞	0	0	49	2	0	0	0	0	0	0	51
	動詞	0	0	17	0	1	0	0	0	0	0	18
	形容詞	1	1	44	3	0	0	0	0	0	0	49
	名詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	計	2	1	111	8	1	0	0	2	0	0	123

【表 2-2】『銀河鉄道の夜』に見られたオノマトペとフランス語（単語以外）の分類

		日本語オノマトペの区分										
		音	声	さま	音・さま	声・さま	音・声	音・名	音・声・さま	名	古	計
フ ラ ン ス 語 の 品 詞	オノマトペ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	副詞句	1	0	25	0	1	0	0	0	0	0	27
	動詞句	1	0	22	0	2	0	0	0	0	0	25
	形容詞句	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0	14
	名詞句	0	0	13	1	0	1	0	3	0	0	18
	前置詞句	0	0	28	2	0	0	0	0	0	0	30
	接続詞句	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	該当なし	0	0	8	1	0	0	0	0	0	0	9
	計	3	0	110	4	3	1	0	3	0	0	124

本調査を通して、以下の事柄が明らかになった。

『銀河鉄道の夜』に出現した日本語のオノマトペの用例は、計247例であった。247例の日本語のオノマトペのうち、「さま」を表すオノマトペ、擬態語が221例と高い割合を占め、「音・さま」を表すオノマトペが12例、「音」を表すオノマトペ、すなわち擬音語と、「音・声・さま」を表すオノマトペがそれぞれ5例、「声・さま」を表すオノマトペが4例、「声」「音・声」を表すオノマトペがそれぞれ1例と続いた。「音・名」を表すもの、名詞化したもの、古い意味で使われたものは、まったく見出されなかった。

【表 2-1】【表 2-2】を対比してみると、【表 2-1】すなわち、単語だけで訳出されているものの数値は、「さま」「音・さま」に集中しているが、【表 2-2】、すなわち、単語だけで訳出されずに句を用いて訳出されているものの数値は、「さま」に偏っていることがわかる。これは、すなわち、原文のオノマトペが、状態や容態のみ表す「さま」であるよりも、音と状態や容態を表す「音・さま」である方が、フランス語の単語ひとつで訳出することが容易であることに加え、音声情報のない「さま」を表すオノマトペは、単語ひとつでも語句を用いても訳出することが可能であるが、2単語以上を用いて訳出しなければならない場合の方が若干多いことを暗示している（具体的な訳出については、以下でみることにする）。

また、単語として訳出された品詞でもっとも多いものは、副詞で、次いで、形容詞、動詞となっている。オノマトペが、ひとつの名詞のみに訳された例は、見当たらなかった。単語以外で訳出されたものは前置詞句がもっとも多く、次いで、副詞句、動詞句が、ほぼ同数で続く。

また、原文の日本語のオノマトペが、フランス語に訳されていない例が計9例見られた。9例のうち、日本語のオノマトペが「さま」を表すものが8例と大部分であり、残り1例は「音・さま」を表すものであった。

このことも、日本語のオノマトペが「さま」に関わるものだと、フランス語としてうまく訳出しきれない場合があることを示唆するものであろう（「音・さま」に関わるもので、仏語訳されていないものの具体例についても、以下で詳しくみることにする）。

フランス語翻訳版において、単語や句ではなく単文として訳されたものはなかった。

まず、フランス語オノマトペに訳された具体例を、以下、訳出パターンごとにみていく。なお、『日本語オノマトペ辞典』『フランス語オノマトペ辞典』からの引用箇所は、ページ数を併記する（以下、同じ）。

5.2 フランス語オノマトペでの訳出

フランス語のオノマトペとそれにあたる日本語を表にまとめる。日本語でもオノマトペであったものは、オノマトペの区分を記した（【表2-3】）。

【表2-3】フランス語翻訳版に出現したフランス語オノマトペと原文の日本語オノマトペ

日本語オノマトペの区分	日本語オノマトペ	フランス語オノマトペ
音	カチッカチッ	tic-tac
音	ギーギーフーギーギーフー	Gui… Gui… Fou… Gui… Gui… Fou…
音・さま	ごとごとごとごと	teuf-teuf-teuf
音・さま	ごとごとごとごと	Teuf-teuf-teuf-teuf
音・さま	ごとごとごとごと	Teuf-teuf-teuf
さま	びたっ	hop!

上の通り、フランス語オノマトペとして訳出された日本語オノマトペは6例であった。それぞれフランス語オノマトペについて、気がついたことをあげてみる。

第一に、「かちっ」は、〈かたくて小さいものが勢いよく打ち当たる、鋭い音〉を表す。ここでは繰り返すことで、音が持続していることを示している。それにあたるフランス語 tic-tac もしくは tic tac は、"(bruit régulier d'un mécanisme, d'un instrument, d'un appareil)" 〈機械装置の、道具の、器具の規則正しい音〉を表す。[時計]の音という意味での例文の初出

年は、1890年である。ここでは三人称の所有形容詞 *son* に続くことから名詞として出現している。*tic-tac* は名詞としても使用されることがわかる。

第二に、「ギーギーフーギーギーフー」のフランス語は *Gui... Gui... Fou... Gui... Gui... Fou...* であるが、『フランス語オノマトペ辞典』には *gui*、*fou* ともに記載がない。従って、原文をそのままフランス語の綴りで記したものであることがわかる。

第三に、「ごとごと」は、〈①かたくて重いものが、連続してぶつかったり、振動してたてる思い音。力を込めて何かを打つ音。また、そのさま：132〉を示す。一方、*teuf-teuf* は、"*(bruit de moteur)*" 「モーターの音」を表し、*[locomobile, locomotive, tracteur]* [スチーム式脱穀機、機関車、トラクター] の「モーターの音」としては、1966年の例文が挙げられている。「ごとごと」と *teuf-teuf* は共に、繰り返しの音が続いていることを示している。日本語でもフランス語でも、一般的に「ごとごと」や *teuf-teuf* のように2回繰り返されるが、原文では「ごとごとごとごと」と4回繰り返されており、規則的ではないことが、フランス語の *teuf-teuf-teuf*、*teuf-teuf-teuf-teuf* によって示されている。*teuf-teuf-teuf* よりも *teuf-teuf-teuf-teuf* の方が、*teuf-teuf* という辞書に載っている形の繰り返しであり、規則的であると言える。

第四に、「びたっ」は〈④動いていたものが、急に止まるさま。継続していたものが、急に絶えるさま：364〉を表す。一方、*hop* は"*(marque d'un élan, un saut, une escalade, un geste rapide)*" 〈はずみ、跳躍、よじ登ること〉や、"*(marque la soudaineté ou la rapidité d'un procès)*" 〈唐突さまたは過程の素早さ〉を表す。この例文では、後者の意味であろう。『フランス語オノマトペ辞典』には、後者の意味で、1938年の例文が初出として記載されている。*hop!* では不意の動きは示されているものの、動きが停止するニュアンスは *hop!* だけでは表現されていない。

5.3 フランス語オノマトペ以外の訳出

前節では、フランス語オノマトペとして訳出された例をあげた。本節では、フランス語がオノマトペでないものの例をあげ、以下、訳出パターンごとにみていく。

5.3.1 副詞・副詞句訳

副詞・副詞句に訳された日本語オノマトペは、「さま」「音・さま」「音」を表す。

(30) みんなもじつと河を見ていました。

De même, tous regardaient la rivière fixement.

(31) けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。

Giovanni, cependant, se contenta d'agiter la main avec un grand geste et dépassa précipitamment le portail de l'école.

(32) ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいつ集って橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。

Mais, au coin de cette rue et devant les magasins, des femmes s'étaient rassemblées par groupes de sept ou huit et regardaient en direction du pont en chuchotant.

(33) カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のように云っているのです。

Campanella étala sur la paume de sa main une pincée du sable délicat et parla comme en rêve tout en l'effleurant du doigt :

「じっ」〈②視線をそらさないで、ものをよく見つめるさま。つくづく：165〉にあたるフランス語は fixement 〈じつと、目を凝らして〉であり、また、「どしどし」〈①何度も力強く踏みつけたり、たたく音。またそのさま。どしんどしん：293〉にあたるフランス語は、précipitamment 〈大急ぎで、慌ただしく；突然に〉である。

「ひそひそ」〈①人に聞かれないように隠れて話す小さな声。また、そのさま：362〉にあたるフランス語は、en chuchotant 〈ささやきながら、ひそひそ話をしながら、内緒話をしながら〉であり、「きしきし」〈①ものが互いにこすれ合ってたてる、軽くかわいた音。きしんで鳴る音：61〉にあたるフランス語は、en l'effleurant 〈...にそっと触れる、をかすめる、かする〉である。en chuchotant と en l'effleurant のフランス語は、双方とも en-ant というジェロンディフの形の副詞句であり、ここでは同時性を示している。

5.3.2 動詞・動詞句訳

動詞・動詞句に訳されたオノマトペは、「さま」「声・さま」「音」を表す。

(34) その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

L'homme se leva, fit descendre son ballot du filet et le déroula rapidement.

(35) 女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

Brusquement la fillette cacha son visage dans ses deux mains et se mit à pleurer.

(36) 「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云いながら、まるではね上りたいくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがって、その天の川の水を、見きわめようとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はっきりしませんでした。

« Non, ce n'est pas la lune ! Puisque c'est la Voie Lactée, elle brille ! » déclara Giovanni, et en même temps, il se sentit joyeux au point d'avoir envie de sauter à terre, ses pieds frappèrent le sol en cadence, il sortit la tête par la fenêtre et, tout en sifflant à tue-tête, la mélodie de la course des étoiles, il se dressa sur la pointe des pieds du mieux qu'il pût, pour examiner plus précisément l'eau de la rivière du ciel, mais ses efforts n'aboutirent pas tout de suite.

「くるくる」〈①ものが軽やかに続いて回るさま。ものを何回も回すさま：106〉にあたるフランス語は、déroula (不定法は dérouler) 〈[巻いてあるもの]を広げる〉であり、また、「しくしく」〈①勢いなくあわれげに泣く声。また、そのさま：161〉にあたるフランス語は、pleurer 〈泣く、涙を流す；泣き声を出す〉である。フランス語では、「くるくる」の何度も回すニュアンスや、「しくしく」のあわれに泣くニュアンスまでは含まれていない。「音」を表す「こつこつ」にあたるフランス語は、frappèrent le sol en cadence 〈規則正しいリズムで、調子を合わせて、床を打ちながら〉という副詞句である。フランス語では、音の高さまでは明らかではないが、一定のリズムで床を踏み続けて、音が出ていることが読み取れる。

5.3.3 形容詞・形容詞句訳

形容詞・形容詞句に訳されたオノマトペは、「音」「声」「さま」「音・さま」を表す。

(37) 二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて来るのでした。

Les deux enfants, les yeux en l'air, écoutèrent de toutes leurs oreilles. Parmi l'écho du train cliquetant et du vent dans les susuki, on parvenait à distinguer comme un bruit clair d'eau jaillissante.

(38) と云った途端、がらんとした桔梗いろの空から、さっき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっぱい舞いおりて来ました。

À peine ces paroles étaient-elles dites que, du ciel vide, couleur de campanule, comme une averse de neige, une volée de hérons semblables à ceux de tout à l'heure descendirent en poussant des cris aigus.

(39) みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなっていました。

Immédiatement tout le monde descendit et le compartiment se retrouva vide.

(40) 向こうの曲がり角の所に三郎が小さなくちびるをきつと結んだまま、三人のかけ上って来るのを見ていました。

Plus loin, là où le chemin faisait un coude, Matasaburo, ses petites lèvres pincées, regardait les quatre garçons grimper à toute allure.

(41) そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのです。

En effet, quand on regardait par là, tout un champ de susuki de ciel de couleur argentée, ondoyait d'un même mouvement et formait, des vagues bruissantes dans le souffle de la brise.

「ころんころん」〈①琴やピアノ、鈴などの軽やかで明るい音色：143〉にあたるフランス語は、clair 〈[音、声]よく通る、明瞭な、音程の高い〉であり、「ぎゃあぎゃあ」〈①赤ん坊などがやかましく泣き叫ぶ声。鳥などがやかましく鳴く声：71〉にあたるフランス語は、aigus 〈[音、声]鋭い、甲高い、高音の〉である。

「がらん」〈②何もなくて広々としたさま。空虚でさびしく広いさま：53〉にあたるフランス語は、vide 〈[場所]空いている、がらんとした、人がいない〉であり、「きっ」〈③きびしいさま。緊張したり、警戒しているさま：66〉にあたるフランス語は、pincées 〈締めつけた、きつく結んだ〉である。

「さらさらさらさら」は「①さらさら」〈ものが軽くふれ合ってたてる、こまかな音。また、そのさま：153〉の繰り返しである。これにあたるフランス語は、bruissantes 〈ざわめく、かすかな音を立てる〉である。

「ぎゃあぎゃあ」と「さらさらさらさら」のフランス語は複数形になっているため、何度も音が立っていることが理解できる。一方で、「ころんころん」が持つ繰り返しのニュアンスや継続している状態のニュアンスは、仏語訳には表されているとは言えない。

5.3.4 名詞句訳

名詞句に訳されたオノマトペは、「さま」「音・声・さま」「音・さま」「音・声」を表す。

(42) そして車の中はしいんとなりました。

Puis le silence se fit dans le train.

(43) それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうっと遠く小さく、絵のようになってしまい、またすすきがざわざわ鳴って、とうとうすっかり見えなくなっていました。

L'espace d'un court instant durant lequel la rivière fut cachée du train par des rangées de susuki, apparut par deux fois vers l'arrière l'île du Cygne, qui, instantanément, devint toute petite, très lointaine comme une illustration ; à nouveau les susuki firent entendre leurs bruissements et l'île finit par disparaître complètement de la vue.

(44) するとぴたっと鳥の群は通らなくなりそれと同時にびしゃあんという潰れたような音が川下の方で起ってそれからしばらくしいんとしました。

Les volées d'oiseaux s'arrêtèrent net, tandis qu'en même temps un bruit comme le claquement sec de quelque chose qui s'écrase se fit entendre vers l'aval ; peu après tout devint silencieux.
(6の再掲)

(45) ジョバンニは、ぱっと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

Giovanni, d'un seul coup, sentit son cœur se glacer et il eut l'impression qu'autour de lui, tout se mettait à pousser des cris perçants.

「しいん」〈物音一つ聞こえず、静まりかえっているさま：160〉にあたるフランス語は、le silence 〈静けさ、静寂〉であり、「ざわざわ」〈声や音が騒がしく聞こえるさま。大勢が騒ぎ動くさま〉にあたるフランス語は、leurs bruissements 〈それらのざわめき、かすかな音〉である。

「ぴしゃあん」は「ぴしゃん」〈液体などが小さくはねる音。また、そのさま：360〉に長音が付加したものである。このフランス語は、le claquement sec 〈乾いた、(戸、歯、旗などが)音をたてること；(よく響く大きな)音〉である。

「きいん」〈金属的で、鋭く、耳にひびくようなかん高い音。また、そのような声：59〉にあたるフランス語は、des cris perçants 〈金切り声〉である。「しいん」のフランス語は、le silence を主語にし、「静寂が車内を満たした」と描写されている。

液体などの音の「ぴしゃあん」と乾いた音の le claquement sec では、音の印象が異なっている。

5.3.5 前置詞句

前置詞句に訳されたオノマトペは、「さま」「音・さま」を表す。

(46) 隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

À côté, un jeune homme de haute taille, vêtu avec correction d'un habit noir à l'occidentale, dans une attitude faisant penser à celle d'un chêne sur qui soufflerait un vent violent, était debout, tenant l'enfant fermement par la main.

(47) その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらっと光って柱のように高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

À ce moment-là, près de l'autre rive, légèrement sur l'aval, l'eau de la rivière du ciel invisible lança de brefs éclairs et jaillit vers le haut, comme une colonne, dans un violent fracas.

「きちん」〈①整った形にできあがっているさま：64〉にあたるフランス語は、avec correction d'(de) 〈...の礼儀正しさをもって〉であり、「どお」〈大きな重いものが落ちたり倒れたり

して強く当たる音。鉄砲などを撃つ大きな音。また、そのさま。どん)にあたるフランス語は、*dans un violent fracas* (激烈な、強烈な(破裂する)激しい音、轟音、大音響；喧噪に包まれて)である。「どお」にあたるフランス語は、前置詞 *dans* (…な状態で、に包まれて)を用いた前置詞句によって、音がする状態で天の川の水が光り、ほとぼしるさまが表されていることがわかる。

5.4 フランス語に訳出されないもの

フランス語に翻訳されなかった日本語オノマトペは、「さま」と「音・さま」を表すものであった。まず、原文のオノマトペが「さま」を表す例を挙げる。

(48) そこらから小さいのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラもいままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

Autour d’eux se faisait entendre une voix faible qui priait, le souvenir confus de toutes sortes de choses que Giovanni et Campanella avaient oubliées jusque là leur revint et ils furent émus aux larmes.

ここでの「ぼんやり」は、忘れていた記憶がぼやけて浮かび上がってくるさまを示す。仏語訳は、*revint* (不定法は *revenir* (再び来る))を用い、*Giovanni et Campanella avaient oubliées jusque là leur revint* (ジョバンニとカンパネルラはそれまで忘れていた記憶が回復する、よみがえる)ということは読み取れるが、原文の「ぼんやり」が意味する、忘れていた記憶が浮かび上がってくるというニュアンスにあたる語は見当たらない。

次に、原文のオノマトペが「音・さま」を表す例を見る。

(49) すると空中にざあっと雨のような音がして何かまっくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸のように川の向うの方へ飛んで行くのでした。

Alors un bruit semblable à de la pluie emplit l’espace aérien, des choses toutes noires s’amassèrent en quantités innombrables et s’envolèrent de l’autre côté de la rivière aussi vite que des balles de fusil.

「ざあっ」は①雨、水、風などが、瞬間的にはげしく打ちつける音。砂や粒状のものが勢いよくこぼれたり、動く際の大きく耳にたつ音。また、そのさま：145)を表す。仏語訳では、*un bruit semblable à de la pluie emplit l’espace aérien* (雨のような音が空中を満たしている)ことはわかるが、どのような音がする雨なのか、雨の強さはどうかといった、音やさまの描写はされていない。この例文の日本語とフランス語を比較すると、フランス語の方が、雨そのものの音や状態の描写は省いた上で、*un bruit* (音)を主語にし、空間を満たすという動作を表すことに着眼点が置かれていると言える。

以上から、本節では、「さま」「音・さま」を表すオノマトペがフランス語に訳されないことで、フランス語版では、日本語オノマトペが持つ状態や容態のニュアンス、音のニュアンスが失われていることを確認した。日本語オノマトペが「さま」に関わるものである時、フランス語に翻訳するのが難しいだけでなく、あえて翻訳しない場合があることがわかった。

6 『銀河鉄道の夜』のオノマトペと仏語訳についての総括

以上、1. から 5.4 を整理すると、『銀河鉄道の夜』のオノマトペについて言えることは、次の通りである。

- [1] オノマトペの総数が 247 件であり、第 1 類が 5 件 (2.0%)、第 2 類が 237 件 (96.0%)、第 3 類が 5 件 (2.0%) であり、ごく少数を残してほとんどが基本要素から加工と展開のものであった。もっとも多く見られた形式は「×2系」であり、基本要素に促音付加した「Xっ」が次いだことがわかった。また、「×2系」を展開した「X×4」には、「ごのごとごのごと」などの擬音語のみならず、「にこにこにこにこ」「わくわくわくわく」といった擬態語も出現した。
- [2] 漢語由来のオノマトペを除いた日本語オノマトペ 242 件のうち、「さま」を表すオノマトペ、擬態語が 221 例と非常に高い割合を占め、ひとつの単語ではなく句を用いて訳出されているものの数値は、「さま」に偏っていることがわかる。
- [3] フランス語によく訳されていると評価できる日本語オノマトペのニュアンスは、〈瞬間性〉〈残存性〉であり、反対に、あまり訳しきれていなかったニュアンスは、〈一区切り性〉〈滞留性〉〈時差性〉〈余韻性〉であった。
- [4] 特異と思われたオノマトペは、「ギーギーフーギーギーフー」「どかどか」「どほん」「ぺかぺか」「ぼくぼく」であった。宮澤賢治の独自のオノマトペは、「ギーギーフーギーギーフー」「どほん」「ぺかぺか」の 3 種類であり、「どかどか」「ぼくぼく」は方言性を持つものであった。
- [5] 漢語由来のオノマトペは、「さんさん」「しんしん」「せいせい」が見られ、「さんさん」「しんしん」は「-と」を伴って使用されていた。
- [6] フランス語オノマトペとして訳出されたものは 7 件あり、teuf-teuf-teuf-teuf など既存のオノマトペを繰り返したものの、tic-tac など一般的なものが多かった。
- [7] 原文の日本語のオノマトペが、フランス語に訳されていない例が計 9 例あった。日本語オノマトペが「さま」に関わるものである時、フランス語に翻訳するのが

難しいだけでなく、訳者があえて翻訳しない場合があると考えられる。

第3章 『風の又三郎』と Matasaburo, le vent

1 『風の又三郎』に出現するオノマトペの頻度と形式

宮沢賢治『風の又三郎』にはどのようなオノマトペが用いられているのかを、頻度ならびに形式の観点から整理・考察する。

1.1 頻度

『風の又三郎』において用いられているオノマトペを、頻度順（同頻度の場合は、五十音順）に並べると、次の通りになる。

- 14 すっかり
- 12 じっ
- 10 しいん／シイン
- 7 きっ
- 6 どっ びっくり
- 5 がたがた ぐるっ しん どっどど どどう どどどう どどどう どんどん

- 4 ぐんぐん ずうっ そっ だぶだぶ ぼんやり

- 3 きちん きよろきよろ ぐるぐる ごぼごぼ ざあっ さっぱり さらさら
どう どぶん どぶんどぶん どんどんどん ぶるぶる もじもじ

- 2 うん がやがや がやがやがやがや かんかん／カンカン きらきら きりきり
くつくつ こちこち さっ ざっ ざっこざっこ じめじめ じろじろ
すたすた すばすば せかせか そろそろ ちらっ てかてか どっこどっこ
ばしゃばしゃ ばたばた パチパチ はっきり ひそひそ ひゅうひゅう ふっ
ぼうっ

- 1 うとうと がくがく ガサガサガサガサ がっかり がらん がりがり きいん
キインキイン ぎよっ ギラギラ きろきろ ぐうっ ぐちゃぐちゃ ぐっ
ぐったり くるくる くるくるくるっ ごとごと ごとんごとなん ごろごろ
ごろごろごろ さあっ ざくざく さっさ ざぶざぶ ざぶん ざわざわ
ざわざわざわっ じゃぶじゃぶ しゃん しゅう しょんぼり しんしん
ずっ するする ぞろっ だあんだあん チョロチョコロ つるつる どうか
どきどき どやどや にやっ ぬるぬる のっこり のっそり ぱくぱく
ばたっ ばたばた パチパチパチッ ぱっ バラッ ぴかぴか びく びくっ
ぴしゃん びちゃびちゃ ぴったり ひひん ぴよんぴよん ひらっ ひらり

ビルル ビルルッ ビルルル ふ ぶちぶち ぶるっ ぷるぷる べろり
ぼお ぼかん ポタリポタリ ぼちゃぼちゃ ぼちゃんぼちゃん ぼやっ
ぼろぼろ むくっ むくむく むっ むっくり もうもう もくもく
もにやもにやっ わくわく

頻度が最も高かったのは、14回見られた「すっかり」であった。次いで、「じっ」が12回、「しいん／シイン」が10回、「きっ」が7回、「どっ」「びっくり」が6回、「がたがた」「ぐるっ」「しん」など全5種類が5回ずつ、「ぐんぐん」「ずうっ」「そっ」など全5種類が4回ずつ、「きちん」「きよろきよろ」「ぐるぐる」「ごぼごぼ」など全13種類が3回ずつ見られた。2回見られたものは、「うん」「がやがや」「かんかん／カンカン」「きらきら」などの全28種類であり、1回のみ見られたのは、「うとうと」「がくがく」「ガサガサガサガサ」「がっかり」などの全85種類であった。

以上を整理すると、『風の又三郎』においては、頻度14、12、10、7、6と多く出現したオノマトペと、頻度4のオノマトペは、ごく一般的なものと言える。頻度5に「どっどど どどうど どどうど どどう」という宮澤賢治が創作したと考えられるオノマトペがあり、目を引く。また、頻度3の「どう」、頻度2の「ざっこざっこ」「どっこどっこ」、頻度1の「きろきろ」「だあんだあん」「ビルル」「ビルルッ」「ビルルル」「ぶちぶち」「もくもく」「わくわく」は、特異と思えるオノマトペ、もしくは特異な使われ方をしていると思えるオノマトペであり、一般的なオノマトペに混じって現れていることがわかる。このような、賢治独自の世界を表すように思われるオノマトペを、どのようにフランス語へと写していくのか、そのときに、どのような工夫の跡が見られるかも、のちに考察したい。

1.2 形式

次に、オノマトペの形式ごとに整理した結果は、以下の通りである。

まず、日本語オノマトペについて述べる。

1.2.1 日本語オノマトペの形式

第1類 基本要素が見えない複雑なもの 9件 (3.2%)

どっどど どどうど どどうど どどう ひひん ビルル ビルルッ ビルルル

第2類 基本要素からの加工と展開 269件 (95.4%)

● {X} →加工 φ→展開 φ

うん きっ ぎよっ ぐっ さっ ざっ じっ しゃん しゅう しん ずっ
そっ どう どっ ぱっ びく ふ ふっ ぼお むっ りん

● Xっ系

ぐるっ ぞろっ ちらっ にやっ ばたっ バラッ びくっ ひらっ ぶるっ
ぼやっ むくっ

◎ X×2+っ系

もにやもにやっ

◎ X×3+っ系

くるくるくるっ ざわざわざわっ パチパチパチッ

● Xん系

がらん きちん ざぶん どぶん びしゃん ぼかん

◎ Xん×2

ごんごん どぶんどぶん ぼちゃんぼちゃん

● Xり系

ひらり べろり

◎ Xり×2

ポタリポタリ

● ×2系

うとうと がくがく がたがた がやがや がりがり かんかん/カンカン
きよろきよろ きらきら ギラギラ きりきり きろきろ ぐちゃぐちゃ
くつつ くるくる ぐるぐる ぐんぐん こちこち ごとごと ごぼごぼ
ごろごろ ざくざく ざっこざっこ ざぶざぶ さらさら ざわざわ じめじめ
じゃぶじゃぶ じろじろ しんしん すたすた すばすば するする せかせか
そろそろ だぶだぶ チョロチョコ つるつる てかてか どうか ときどき
どっどっこ どやどや どんどん ぬるぬる ぼくぼく ぼしゃぼしゃ
ばたばた ぱたぱた パチパチ ぴかぴか ひそひそ びちゃびちゃ
ひゅうひゅう ぴょんぴょん ぶちぶち ぶるぶる ぷるぷる ぼちゃぼちゃ
ぼろぼろ むくむく もうもう もくもく もじもじ もにやもにやっ わくわく

◎ X×3

ごろごろごろ

◎ X×4

ガサガサガサガサ がやがやがやがや どんどんどん

×3+っ系」の「くるくるくるっ」「ざわざわざわっ」「パチパチパチッ」の2つの形式が観察された。

「Xん系」は「がらん」「きちん」「ざぶん」「どぶん」などの6種類のオノマトペが見られた。「Xん系」を展開したものには、「Xん×2」の「ごんごん」「どぶんどぶん」「ぼちゃんぼちゃん」の3種類が見られた。

「Xり系」は「ひらり」「べろり」の2種類のオノマトペが見られた。「Xり系」を展開したものには、「Xり×2」の「ポタリポタリ」の1つの形式が観察された。

「×2系」は「うとうと」「がくがく」「がたがた」「がりがり」などの63種類のオノマトペが見られた。「×2系」を展開したものには、「X×3」の「ごろごろごろ」、「X×4」「ガサガサガサガサ」「がやがやがやがや」「どんどんどんどん」の2つの形式が観察された。

「挿入系」は、「AっA系」の「さっさ」、「Aーっ系」の「ぐうっ」「さあっ」「ざあっ」「ずうっ」「ぼうっ」、「Aーん系」の「きいん」「しいん/シイン」、「Aーん×2系」の「キインキイン」「だあんだあん」の3つの形式の長音挿入のオノマトペが見られた。

「促音挿入/り付加系」は「ぐったり」「すっかり」「のっこり」「のっそり」など全8種類のオノマトペが見られた。

「撥音挿入/り付加系」は「しょんぼり」「ぼんやり」の2種類が見られた。

最後に、第3類の基本要素が孤立しているものに当たるオノマトペは、「がっかり」「さっぱり」の2種類が見られた。

以上から、『風の又三郎』に出現したオノマトペのうち、第2類のオノマトペが大部分(95.4%)を占め、残りの極わずかは第1類のオノマトペ(3.2%)と第3類のオノマトペ(1.4%)であったと言える。さらに、最も多い形式は「×2系」であり、基本要素が孤立した「X」が次いだことがわかった。また、「×2系」を展開したものとして、「X×3」「X×4」という2つの形式が見られ、繰り返しのオノマトペが多いことが指摘できる。加えて、「挿入系」には、促音挿入の「AっA」、長音挿入の「Aーっ系」「Aーん系」「Aーん×2系」という計4つの形式が観察され、長音挿入の形式のオノマトペの方が使用されていることも明らかになった。

1.2.2 漢語由来のオノマトペの形式

漢語由来のオノマトペは、基本要素を反復した「しんしん」「もうもう」の2例のみ出現した。

2 日本語オノマトペの形態的パターンとその訳出

ここからは、日本語オノマトペの形態的パターンごとに、原文と仏語訳を対比・考察する。

2.1 促音

促音には〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉があるとされている。フランス語でもそれらの性質が含まれているように訳出されているのか、例文を挙げながら検討する。

2.1.1 促音付加

(1) 馬屋のうしろのほうで何か戸がばたっと倒れ、馬はぶるっと鼻を鳴らしました。

À l'arrière de l'écurie, il y eut un grand bruit de porte, ou de chute, le cheval émit un son tremblé.

「ばたっ」は〈①重みのあるものが勢いよく急に落ちたり倒れたりぶつかったりする音。また、そのさま：336〉を、「ぶるっ」は〈①エンジンなどの振動音。唇をふるわせて出す音：408〉を表す。この例文では、「ばたっ」によって、戸が急に勢いよく倒れた〈急転性〉、倒れた音やさまが一瞬であった〈瞬間性〉のニュアンスを持つ。また、「ぶるっ」によって、馬が倒れた戸の音に反応して急に鼻をふるわせて鳴らした〈急転性〉、鳴らした音が一瞬であった〈瞬間性〉のニュアンスがある。一方、「ばたっ」にあたるフランス語は、**un grand bruit** 〈ひとつの大きな音〉であり、「ぶるっ」にあたるフランス語は、**un son tremblé** 〈ひとつの震音〉である。原文の促音付加の〈急転性〉や〈瞬間性〉は仏語訳でも表現されている。また、**un** 〈ひとつの〉という不定冠詞を用いることで、音が一回鳴るという出来事を示している。

(2) するといつか馬はぐるっとさっきの小高いところをまわって、さっき五人ではいって来たどての切れた所へ来たのです。

Mais pendant ce temps-là, les animaux décrivent un grand cercle autour de la petite butte et parvinrent à la brèche du talus, là où les enfants étaient passés auparavant.

「ぐるっ」は〈②円状にひと回りするさま。ひと巡りするさま：108〉を表す。これにあたるフランス語は、**un grand cercle** 〈ひとつの大きな円〉である。原文では、馬が大きく巡ってから区切りがついた〈一区切り性〉のニュアンスがある。仏語訳では、馬が巡ってくるさまを **les animaux décrivent un grand cercle** 〈動物（馬）たちがひとつの大きな円を描いた〉と表している。**une** 〈ひとつの〉という不定冠詞を伴うことで、一度巡回して、一区切りつくことを示していると考えられることから、〈一区切り性〉のニュアンスもフランス語でも読み取れると考えられる。

(3) 先生はちらっと運動場を見まわしてから、「ではならんで。」と言いながらビルルツと笛を吹きました。

Le maître, après avoir jeté un regard rapide tout autour du terrain de sport, dit : « Mettez-vous en rangs ! » et en même temps il souffla : « Drr-Drr » dans son sifflet.

「ちらっ」は、〈②ほんの一瞬、わずかに見聞きするさま：265〉を表し、〈瞬間性〉のニュアンスがある。これにあたるフランス語は、rapide〈素早い、迅速な、時間のかからない〉である。仏語訳では、ちらっと見ることを、avoir jeté un regard rapide〈素早い一瞥を与えた〉と表現されている。rapideによって、視線を投げかけるさまが一瞬であったことがわかることから、原文の促音付加の〈瞬間性〉のニュアンスを表現していると判断できる。

2.1.2 反復×2＋促音付加

(4) お互いに「お早う。」なんて言ったことがなかったのに三郎にそう言われても、一郎や嘉助はあんまりにわかで、また勢いがいいのでとうとう臆してしまって一郎も嘉助も口の中でお早うというかわりに、もにやもにやっとってしまったのです。

ils ne se disaient jamais « Salut ! » même entre eux ; aussi la façon de parler de Matasaburo, sa brusquerie et sa vitalité achevèrent de troubler Ichiro et Kasuke qui au lieu d'un quelconque « Salut ! » ne purent bredouiller quoi que ce soit.

「もにやもにやっ」は、「もにやもにや」〈①口の中で小さく何かよく聞きとれないことをつぶやくさま。むにやむにや。にやもにやも：490〉に、促音付加したオノマトペである。この例文では、小さい声で何か聞こえないことを言ったさまが、一区切りした〈一区切り性〉のニュアンスがある。これにあたるフランス語は、bredouillerという動詞で、〈...を早口でわかりにくく[せき込んで]言う〉を意味する。bredouillerからは、早口で言うという〈瞬間性〉のニュアンスは読み取れるが、原文の促音のニュアンスである〈一区切り性〉は仏語訳にはないと考えられる。

2.1.3 反復×3＋促音付加

(5) 空が旗のようにぱたぱた光って翻り、火花がパチパチパチッと燃えました。

Le ciel tout scintillant s'agita et claqua comme un drapeau, des étincelles crépitèrent et fusèrent.

「パチパチパチッ」は、「パチパチ」〈③しきりにまばたきをするさま：339〉の基本要素 {ぱち} を「×3」加工して、促音付加したオノマトペである。原文では、火花が繰り返し弾け燃えるさまが、一区切りした〈一区切り性〉が含まれている。これにあたるフランス語は、動詞 crépitèr〈ぱちぱちと(乾いた)音をたてる〉を活用させた、crépitèrentである。フランス語の語基 -cré(p)- は、「乾いた音を立てる、破壊する、壊れる」の意味を持っており、例えば、乳幼児の遊具であるガラガラは、crécelleである。語基そのものに、音の要素が含まれている語である crépitèr を使用することで、乾いた音が繰り返されていることが

示されているものの、原文の促音のもつ〈一区切り性〉が表現されているとは断言できない。

2.1.4 促音挿入

促音挿入のオノマトペは、〈滞留性〉〈時差性〉の性質を持っているとされる。本作品では、「さっさ」の1例のみ見られた。

(6) 一郎はしばらくそっちを見ていましたが、やがて鞆をしっかりとかかえて、さっさと窓の下へ行きました。

Ichiro regarda par là un instant, mais bientôt, serrant son cartable sous le bras, il se dirigea vivement dehors, vers la partie basse de la fenêtre.

「さっさ」は〈①迷いや気づかいをせずに、すばやく行うさま。急ぐさま。さっさっ：150〉を表し、行為が完了するまでに若干時間がかかる〈滞留性〉〈時差性〉のニュアンスを持っている。例文でこれにあたるフランス語は、vivement という副詞で〈活発に、勢いよく；素早く、敏捷に〉を意味する。vivement からは〈瞬間性〉は感じられるが、促音挿入のニュアンス〈滞留性〉〈時差性〉が表されているとは言えない。

2.2 撥音

2.2.1 撥音付加

撥音付加は〈余韻性〉〈残存性〉のニュアンスを持つとされる。それらがフランス語でも見られるのか、検討する。

(7) と一郎が言いながらまた教室のほうを見ましたら、一郎はにわかにもるでぽかんとしてしまいました。

En disant ces mots, Ichiro regarda à nouveau vers la salle de classe et resta frappé de stupeur.

「ぽかん」〈②口を締めなくなりあけるさま。切り口が開くさま。まわりに何も注意を払わずにいるさま。ぼんやり：436〉にあたるフランス語は、frappé de stupeur 〈仰天した、驚愕した、呆然自失になった〉である。「ぽかん」は、口を開けた状態がとどまっている〈残存性〉のニュアンスがある。一方、フランス語の stupeur 〈呆然自失〉の語基 -stup(é)- には、呆然とさせるという意味があり、例えば、〈仰天させる〉という動詞は stupéfier である。frappé de stupeur によって、驚き我を忘れたさまを表し、さらに、その状態が続いたことを、前述の rester 〈とどまる〉の直説法単純過去の resta 〈とどまった〉によって示されていることから、原文の撥音の〈残存性〉のニュアンスが表現されているとみなすことができる。

(8) 佐太郎はたいへんまじめな顔で、きちんと立って水を見ていました。

Sataro, le visage grave, regardait dans la rivière en se tenant debout, très droit.

「きちん」の〈①整った形にできあがっているさま：64〉にあたるフランス語は、*très droit* 〈非常にまっすぐに〉である。「きちん」からは、姿勢を整えて立っている姿をとどめていることが表されていることから、〈残存性〉のニュアンスを持っている。フランス語の *très droit* から、背筋を伸ばして立った結果が続いている〈残存性〉が読み取れると考えられる。

(9) 一郎がそこで両手をびしゃんと打ち合わせて、だあ、と言いました。

À ce moment-là, Ichiro eut l'aide de claquer des deux mains en criant très fort : « Hue ! »

「びしゃん」〈平らなものを手荒く打ち合わせたときの高く鋭い音。たたかれたように、平べったくなったさま：361〉にあたるフランス語は *laquer* という動詞であり、この例文では、〈(体の一部) 音を立てる、を鳴らす〉という意味で使用されている。「びしゃん」からは、手を叩いたときの高く鋭い音が耳に響く〈余韻性〉のニュアンスを感じる。一方、フランス語の *claquer* から、両手を叩き音が出たことは読み取れるものの、原文の撥音付加の〈余韻性〉までは翻訳されているとは言えない。

2.2.2 撥音付加×2

(10) 遠くのほうの林はまるで海が荒れているように、ごんごんと鳴ったりざっと聞こえたりするのです。

Au loin le bois, comme une mer déchaînée, mugissait, grondait, et faisait entendre un bruit de ressac.

「ごんごん」は、〈重く大きいものが、連続的にぶつかったり、時間をかけて動くときの規則的なにぶい音。また、そのさま。ごとごと。ごとりごとり：134〉を示す。この例文では、林のざわめきの音が何度も続いて余韻が残っている〈余韻性〉のニュアンスがある。これにあたるフランス語は、*mugissait, grondait* である。〈[風、海などが] うなる、とどろく〉を意味する *mugir* と、〈とどろく、低く鳴り響く；不気味なうなりを上げる〉を意味する *gronder* の2つの動詞を直説法半過去形にし、過去の一瞬の出来事ではなく、〈とどろき、低く鳴り響いていた〉という状態を表していることから、音の〈余韻性〉は仏語訳でも読み取れることは可能である。

2.3 長音

長音は〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを持つとされる。仏語訳にもこれらが含まれているのか、観察する。

2.3.1 長音挿入

(11) みんながまたあるきはじめてときわき水は何かを知らせるようにぐうっと鳴り、
Quand ils recommencèrent à marcher, les sources chantèrent soudain plus bas comme si elles
voulaient leur dire quelque chose,

この例文において、{ぐっ}に長音挿入した「ぐうっ」は、湧き水が出した低く伸びる音を表しており、〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスがある。これにあたるフランス語は、chantèrent soudain plus bas〈突然低く歌った〉である。音がしたことを、泉が歌ったと表現し、音の長さの〈延長性〉〈持続性〉が感じられ、また soudain〈突然に〉を伴うことで促音のもつ〈急転性〉のニュアンスを表そうとしたことがうかがえる。

(12) そこの木もなんだかざあっと鳴ったようでした。
et les arbres alentour, eux aussi, semblèrent murmurer.

「ざあっ」〈①雨、水、風などが、瞬間的にはげしく打ちつける音。砂や粒状のものが勢いよくこぼれたり、動く際の大きく耳にたつ音。また、そのさま：145〉にあたるフランス語は、〈[小川、木の葉、風などが] ささやく、ざわめく〉を意味する動詞 murmurer である。原文の「ざあっ」は、木の葉が風を受けて打ち合うさまや音が続けている〈持続性〉の性質を持つ。一方で、フランス語 murmurer だけでは、木の葉がうるさくざわついているさまが続いていることまでは描写されていないため、原文の長音の〈持続性〉は表されていないと言えない。

(13) 下の子どもらは何かこわいというふうにしいんとして三郎のほうを見ていたのです。
tandis que les plus petits restaient silencieux, comme saisis d'une peur vague en regardant du côté de Saburo.

「しいん」は〈物音一つ聞こえず、静まりかえってるさま：160〉を表し、これにあたるフランス語は、silencieux〈[人が]無口の、口を利かない；物音を立てない、静かな〉である。「しいん」には、子どもたちが恐れて静まりかえった状態が続いている〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを持つ。一方、フランス語 silencieux は、子どもたちが無口であることを表しているが、この語だけでは、〈延長性〉〈持続性〉を表しているとは言えない。しかし、〈とどまる〉を意味する動詞 rester を、過去における状態を示す直説法半過去 restaient という形で用いることで、無口であるさまがとどまっていた〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスは訳すことができている。

2.4 リ

「リ」には〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。仏語訳にも同様のニュアンスがあるのか、検討する。

2.4.1 リ付加

(14) 中にも三郎のすぐ横の四年生の机の佐太郎が、いきなり手をのぼして二年生のかよの鉛筆をひらりととってしまったのです。

Sataro, élève de quatrième année, avait allongé vivement la main et réussi à attraper avec agilité le crayon de Kayo, de troisième année.

「ひらり」〈①身軽に飛び乗ったり飛び越えたりするさま：381〉にあたるフランス語は、avec agilité〈敏捷さ、すばしこさ、軽快さを伴って〉である。この例文において、「ひらり」は、身軽に鉛筆を取り上げ、自分のもつに持ってきたさまが完了している〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。フランス語の avec agilité だけでは〈完結性〉〈ひとまとまり性〉は読み取れないが、avait réussi à attraper〈掴み取ることに成功した〉という前述があることで、身軽に手を伸ばして鉛筆を掴み取ったさまが完了している〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスを訳出できていると言える。

(15) 馬が首をのぼして舌をべろりと出すと、さつと顔いろを変えてすばやくまた手をポケットへ入れてしまいました。

Quand celui-ci étira le cou et sortit sa longue langue, il change brusquement de couleur et, très vite, les enfouit de nouveau dans son vêtement.

「べろり」〈①一回強く長く舌を出すさま：428〉にあたるフランス語は、longue〈長く〉である。「べろり」からは、馬が長い舌を伸ばして出したさまが完結した、〈完結性〉〈ひとまとまり性〉が感じられる。一方で、フランス語 longue からは、馬の舌が長いという描写はされているものの、舌を出した行為の完了を表してはいない。よって、「べろり」の「リ」が持つ〈完結性〉〈ひとまとまり性〉は、フランス語に訳出されていないことがわかる。

2.4.2 リ付加×2

(16) 草からは、もうしずくの音がポタリポタリと聞こえて来ます。

On commença à percevoir le bruit léger des gouttes qui se détachaient des herbes.

「ポタリポタリ」は「ポタリ」〈水滴や水分を含んだもののかたまりなどが、軽く一つ落ちるさま。小さなものが落ちたときにたてるかすかな音：446〉の繰り返しである。この例文において、「ポタリポタリ」は、しずくが一つずつ落ちる音が聞こえてくるさまが完了した〈完結性〉のニュアンスを持つ。一方、これにあたるフランス語は、léger〈軽い〉である。

草から垂れるしずくの音の軽さは示されているが、原文の「り」が持つ〈完結性〉のニュアンスまでは、仏語訳では表現されていない。

2.4.3 促音挿入／り付加

促音挿入のオノマトペは、〈滞留性〉〈時差性〉の性質を持っているとされる。「り」には〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。促音挿入と「り」付加のニュアンスが仏語訳にも見られるのか、検討する。

(17) ほんとうに暑くなって、ねむの木もまるで夏のようにぐったり見えましてし、空もまるで底なしの淵（ふち）のようになりました。

Il faisait vraiment chaud à présent, les arbres à soie paraissaient exténués, comme en été, le ciel était devenu semblable à un gouffre sans fond.

「ぐったり」は〈弱りきって、体の重みをかけて倒れ伏しているさま。これ以上ないほど疲労して力の抜けたさま：99〉を意味する。この例文では、力が抜ける状態から力が抜け切った〈時差性〉、力が抜け切った状態の〈滞留性〉、力が抜けるさまが完了した〈完結性〉のニュアンスがある。これにあたるフランス語は、exténués〈疲れ果てた〉である。これは、〈…をへとへとにする、疲れ果てさせる〉を意味する動詞 exténuer の過去分詞であり、語自体に行為が完了した〈完結性〉の意味合いを持つことから、原文の「り」の〈完結性〉は訳出されていると言えるように思う。また、疲れ果てた状態の〈滞留性〉も含まれていそうである。しかし、〈時差性〉までは表されていないと考えられる。このように、日本語オノマトペがフランス語の形容詞に訳された場合、それが動詞の過去分詞であるかどうか、また、過去分詞であれば「り」の持つ〈完結性〉のニュアンスが訳語に読み取れるのか、注意する必要があるだろう。

(18) 空にはうすい雲がすっかりかかり、太陽は白い鏡のようになって、雲と反対に馳せました。

Le ciel se couvrit entièrement de légers nuages, le soleil devint comme un miroir blanc qui filait rapidement en sens contraire des nuages.

「すっかり」は〈①残るところなくすべてにわたるさま。ことごとく：207〉を表す。この例文では、促音挿入により、雲が出始めた状態から空一面に広がるまでの〈時差性〉や、雲がかかるさまに溜めがある〈滞留性〉のニュアンスを持ち、「り付加」により、雲が広がったさまが完了している〈完結性〉〈ひとまとまり性〉がある。これにあたるフランス語は、entièrement〈完全に、すっかり〉である。雲がかかるまでの〈時差性〉や、雲がかかっている〈滞留性〉、完全に雲がかかった〈完結性〉〈ひとまとまり性〉が感じられることから、「促音挿入／り付加」のニュアンスは、フランス語でも訳出されていると言えそうである。

(19) すると佐太郎はにわかになんか元気になって、むっくり起き上がりました。

À l'instant, Sataro retrouva toute sa vivacité et se redressa brusquement.

「むっくり」〈③緩慢に起き上がったり、ものが生えてきたりするさま：478〉にあたるフランス語は、 **brusquement**〈突然、不意に、いきなり〉である。この例文において、「むっくり」は、起き上がるさまに溜めがある〈滞留性〉〈時差性〉と、起き始めた状態から完了したことを示す〈完結性〉というニュアンスを持つ。一方、これにあたるフランス語の **brusquement** は、突然起き上がることを示していることから、〈滞留性〉や〈時差性〉は感じられない。しかし、前述に、 **se redresser**〈身を起こす、再び立ち上がる〉の直説法単純過去の **se redressa** があることで、現在とのつながりがない過去の行為であることが示されていることから、〈完結性〉のニュアンスは、フランス語においても訳出されていると言えるだろう。

2.4.4 撥音挿入／り付加

撥音挿入のオノマトペは、〈滞留性〉〈時差性〉の性質を持つていとされる。「り」には〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。撥音挿入と「り」付加のニュアンスが仏語訳にも見られるのか、検討する。

(20) 五郎はじつに申しわけないと思って、足の痛いのも忘れてしょんぼり肩をすぼめて立ったのです。

Goro se sentit tout penaud, il en oublia même son mal au pied et resta debout, désolé, les épaules rentrées.

「しょんぼり」〈元気なくうなだれているさま。意気消沈したさま。わびしくさびしそうなさま：192〉にあたるフランス語は、 **rentrées**〈〔体の一部分が〕くぼんだ〉である。この例文において、「しょんぼり」は、肩をすくめるさまに溜めがある〈滞留性〉、肩をすくめる動作が完了した〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがある。一方、これにあたるフランス語 **rentrées** は、肩を丸めたことで、肩の前側にくぼみが出来たとどまっていることを示していると考えられることから、〈滞留性〉のニュアンスを持つ。さらに、 **rentrées** は、〈〔体の部分〕を引っ込める〉を意味する **restreindre** の過去分詞であることから、肩をすくめる動作が完了した〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスも訳出することができている。

2.5 反復

オノマトペを繰り返す反復は、音やさまに〈反復性〉を与えるものである。仏語訳にも〈反復性〉が含まれているのか、検討する。

2.5.1 反復×2

(21) 一郎は言いながら先に立って刈った草のなかの一ぼんみちをぐんぐん歩きました。

Ichiro avait pris sa tête du groupe et marchait à grands pas sur l'unique chemin tracé au milieu de la prairie fauchée.

「ぐんぐん」〈ものごとが勢いよく進行するさま。ためらったり滞ったりしないさま。ずんずん：111〉にあたるフランス語は、à grands pas〈大股で〉である。「ぐんぐん」からは、ためらうことなく勢い良く歩き、何度も歩を進めていることがわかる。フランス語の à grands pas からは、大股で歩くことが表されていることから、足を運び続けていることも示唆される。よって、「ぐんぐん」の「×2」による〈反復性〉は、仏語訳においても表現されていると言える。

(22) その時風がざあっと吹いて来て土手の草はざわざわ波になり、

À ce moment, un grand vent se leva et les herbes des talus devinrent des vagues bruisantes ;

「ざわざわ」〈①声や音が騒がしく聞こえるさま。大勢が騒ぎ動くさま：157〉にあたるフランス語は、bruisantes〈ざわめく、かすかな音を立てる〉である。「ざわざわ」は、風になびく草の音が続いて聞こえていることが表されている。一方、フランス語では、前述の des vagues〈波〉とともに複数形になっていることで、ざわめく音が波のようになり、一度だけではなく、何度も聞こえてくることが示されている。よって、フランス語にも、「ざわざわ」の「×2」の〈反復性〉は表されている。

(23) 「発破かけたら、雑魚撒かせ。」嘉助が河原の砂っばの上で、ぴよんぴよんはねながら高く叫びました。

« Quand on se sert de dynamite, on ne récolte que du menu fretin ! » s'écria Kasuke en sautillant sur le sable du lit à sec.

「ぴよんぴよん」〈繰り返し身軽に飛び上がったたり、飛び越えたりするさま：380〉にあたるフランス語は、en sautillant〈ぴよんぴよん飛びながら、跳ね回りながら〉である。「ぴよんぴよん」も en sautillant も何度も繰り返し飛び続ける〈反復性〉のニュアンスが読み取れることから、仏語訳においても「反復×2」の〈反復性〉は表されている。

2.5.2 反復×3

(24) そのうちに、いきなり上の野原のあたりで、ごろごろと雷が鳴り出しました。

Soudain, aux alentours des hauts pâturages, retentit le grondement du tonnerre.

「ごろごろ」は〈①雷のとどろきひびく音：138〉を表し、「ごろごろごろ」は、基本要素 {ごろ} を3回繰り返した「反復×3」のオノマトペである。雷のとどろく音が繰り返されて長く続いていることを示している。一方、これにあたるフランス語 **le grondement** は、〈(低く長い) とどろき、うなり〉であり、**le grondement** という語句そのものに、とどろきが長く続くというニュアンスがあることがわかる。よって、仏語訳においては、原文のオノマトペが「反復×3」という特殊な形式であることまでは読み取れないものの、その意味から「反復×3」の〈反復性〉は表されていると考えられる。

2.5.3 反復×4

(25) 天井がガサガサガサガサ言います。

On entendit le toit de chaumes bruire.

「ガサガサ」は〈①水けがなく、薄いものなどが、騒がしくこすれ合って発する音：26〉を表し、「ガサガサガサガサ」は基本要素 {ガサ} を4回繰り返した「反復×4」のオノマトペである。これにあたるフランス語は、**bruire** 〈[鳴き声、叫び声] が鳴り響く〉である。「ガサガサガサガサ」は、何度もこすり合う音が聞こえて続けていることがわかる。一方、フランス語の **bruire** からは、原文のオノマトペが特殊な「反復×4」であることは読み取れないが、音が響くということは、ある程度の音の長さがあることが示唆される。したがって、フランス語においても〈反復性〉が訳されていると言える。

(26) 空では雲がけわしい灰色に光り、どんどんどん北のほうへ吹きとばされていました。

Dans le ciel, des nuages d'un gris menaçant brillaient, ils filaient vite, très vite, entraînés par le vent dans la direction di nord.

「どんどん」は〈③ものごとが勢いよくとどまることなく進むさま。ためらわないで事を進めるさま：309〉を表し、「どんどんどんどん」は基本要素 {どん} のを4回繰り返した「反復×4」のオノマトペである。これにあたるフランス語は、**vite, très vite** 〈急速に、非常に急速に〉である。「どんどんどんどん」からは、大変勢いよく吹きとばされ続けるさまがわかる。一方のフランス語では、原文のオノマトペが「反復×4」という特殊な形式であることを、**vite** 〈速く、急速に〉を繰り返すことで表し、ふたつ目の **vite** には **très** 〈非常に〉を伴わせることで、吹きとばされる勢いが強いことを表すことができている。したがって、仏語訳においても、「どんどんどんどん」の「反復×4」の形式や〈反復性〉のニュアンスは表現されている。

2.5 日本語オノマトペ訳出の総括

以上を総括すると、次のようになる。

〈瞬間性〉	概ね訳せている
〈急転性〉	あまり訳しきれていない
〈一区切り性〉	あまり訳しきれていない
〈滞留性〉	あまり訳しきれていない
〈時差性〉	あまり訳しきれていない
〈余韻性〉	あまり訳しきれていない
〈残存性〉	概ね訳せている
〈延長性〉	概ね訳せている
〈持続性〉	概ね訳せている
〈完結性〉	概ね訳せている
〈ひとまとまり性〉	概ね訳せている
〈反復性〉	大変よく訳せている

3 漢語由来のオノマトペの形態的パターンとその訳出

本作品に出現した漢語由来のオノマトペは、2件であった。以下に例を挙げる。

反復「×2」

しんしん もうもう

このうち、「もうもう」の例文を挙げる。

(27) たばこばたけからもうもうとあがる湯げの向こうで、その家はしいんとしてだれもいたようではありませんでした。

À travers la vapeur dense qui se dégageait du champ de tabac, la maison là-bas était silencieuse, il était probable qu'il n'y avait personne.

上の例文における「もうもう」を、『日国第二版』で確認する。

もうもう【濛濛・蒙蒙・矇矇・朦朦】

【一】〔形動タリ〕

(1)霧や小雨、水しぶきなどであたりが薄暗いさま。暗く閉ざされた感じであるさま。また、煙や塵埃などのたちこめるさま。

*文華秀麗集〔818〕上・江楼春望〈小野岑守〉「春雨濛濛江楼黒、悠悠雲樹尽微茫」

*御伽草子・鉢かづき〔室町末〕「頭を見ればまうまうとして、口より下は見ゆれども、鼻より上は見えもせず」

*日葡辞書〔1603～04〕「Mo^ˆmo^ˆ（モウモウ）。または、mo^ˆmo^ˆto（モウモウト）ヲボロ〈訳〉あるものが暗く、霧がかかった状態にあるさま」

*艸山集〔1674〕一七・客居得淹字「暑雨濛々霧満レ簾、旅窓寂寞対二牙籤一」

*米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉二・二一「秋冬より歳首の比までは、陰雲濛濛として、日光をみることに至て少く」

*坂崎出羽守〔1921〕〈山本有三〉一「二の丸あたりから、黒けむりがもうもうと立ちのぼっており」

*楚辞 - 哀時命「霧露濛濛其晨降兮、雲依斐而承レ宇」

(2) 混沌として分ちがたいさま。

*土井本周易抄〔1477〕一「物生始めは蒙々としたものぢや程に」

(3) 意識の朦朧（もうろう）としているさま。ぼんやりとしているさま。

*将門記〔940頃か〕「其日、将門急に脚の病劣て事毎に朦朧たり」

*太平記〔14C後〕二七・雲景未来記事「夢の覚たる心地して、大内の旧跡大庭の椋の木の本に、朦（モウ）朦としてぞ立たりける」

*御伽草子・鴉鷺合戦物語〔室町中〕「こひしさこちあしさ、とにかくに牛につづみをおふせたるやうに、もうもうたんたんとして侍り」

*集義和書〔1676頃〕一〇「朦々たんたんとして士はあしきもの也といへり」

(4) 事理を判断する心の暗いさま。愚かなさま。

*史記抄〔1477〕一六・酷吏列伝「朝廷に居た時は、文盲で蒙々として分別もなかったか」

*盲安杖〔1619〕「明明たる心を、朦々たる心に掩てくるしむ事なかれ」

*東京日日新聞 - 明治二四年〔1891〕一一月一七日「是を以て世の蒙々たるもの或は枢密院を以て国务大臣の待命処と誤認し」

*班固 - 幽通賦「吻昕寤而仰思兮、心朦朦猶未レ察」

(5) 物事の程度の強くさかんであるさま。

*ロドリゲス日本大文典〔1604～08〕「Mo^ˆmo^ˆ（マウマウ） セイセイ ト シテ」

*浄瑠璃・栴狩劍本地〔1714〕三「今朝からもうもうと頭痛で、頭が砕ける」

【二】〔名〕

病気。

*御湯殿上日記 - 文明一二年〔1480〕正月二六日「御もうもうの御きたう申よし申」

*言継卿記 - 大永七年〔1527〕八月三日「摂取院に罷候、久蒙々にて今日少減之由被申候」
(『日国第二版』)

「もうもう」は、9世紀から使用されている、漢語由来のオノマトペであることがわかる。例文の「もうもう」は、【一】〈(1)霧や小雨、水しぶきなどであたりが薄暗いさま。暗く閉ざされた感じであるさま。また、煙や塵埃などのたちこめるさま。〉の意味で使用され、湯気が立ち込め続けていることが読み取れる。これにあたるフランス語は、*dense* という形容詞であり、〈〔霧、葉などが〕濃い、濃密な〉を意味する。湯気が立ち込めるさまが濃いということは、湯気が出続けている状態が示唆されることから、仏語訳においても *dense* によって〈反復性〉のニュアンスを表そうとしたことがうかがえる。

漢語由来オノマトペの訳出については、形容詞を併用することで、「もうもう」の持つ、ニュアンスを訳出するための工夫がなされていると評価できる。

4 特異な日本語オノマトペとその訳出

ここで、一般的なオノマトペの用法とは異なるものが、フランス語として、どのように訳出されているのか、確認する。

(28) さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。

Dans le ciel bleu le vent chantait Dzdzz et le soleil éclairait le terrain de sport.

(29) 風がまたどうと吹いて来て窓ガラスをがたがた言わせ、

Dzz-dzdz, le vent recommença à rugir, les carreaux des fenêtres vibrèrent ;

(30) そのとき風がどうと吹いて来て教室のガラス戸はみんながたがた鳴り、

moment-là, dzz-dzz, le vent se mit à souffler très fort ; dans la classe, les vitres des portes tintèrent ;

風の音として「どう」はあまり使用されないように思う。そこで、「どう」を『日国第二版』で確認する。

どう-と〔副〕

(古くは「どうど」とも)

(1)大きな重い物が落ちたり倒れたりして強く当たる音、また、物を強く当てる音や、そのさまを表わす語。どうっと。

*古本説話集〔1130頃か〕六五「この鉢に蔵のりて〈略〉飛びて、河内国にこの聖の行ふかたわらに、どうと落ちぬ」

*平家物語〔13C前〕四・宮御最期「上総守が童次郎丸といふしたたか物、おしならべひっくんで、どうどおつ」

*御伽草子・一寸法師〔室町末〕「打出の小槌を濫妨（らんぼう）し、『われわれがせいを大きになれ』とぞ、どうとうち候へば、程なくせい大きになり」

*天草本平家物語〔1592〕二・八「ヤガテ ヤ タチナガラ ミナミノ コニワニ dôdo （ドウド）ヲチタヲ」

*談義本・当世下手談義〔1752〕五・都路無字大夫、江の鳥参詣の事「法師は大木のたほるるごとく、どうどふして、正体もなく又高躰（いびき）」

*青春〔1905～06〕〈小栗風葉〉春・一一「沖から畳む波の蜿（うねり）は〈略〉**𢇛**（ダウ）と岩に打突（ぶつか）って」

(2)重量のあるものを一度にたくさん置いたり積んだりするさまを表わす語。量がおびただしく多くあるさま。どっしりと。でんと。

*虎明本狂言・鼻取相撲〔室町末～近世初〕「新座の者をおいてつかはふと思ふが〈略〉せかせかとおこうよりも、一度にどうとおいてつかはふ」

*狂言記・目近大名〔1700〕「千石の米をも、万石の米をも蔵にどふと納めて」

(3)病気が重くなって、起き上がることのできないさまを表わす語。どっと。

*滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕二・下「ぢいさまがどうど床に着て十死（じひ）一生だはな」

(4)歌舞伎脚本のト書の用語。「どうとなる」の形で用いる。倒れるさまを表わす語。

*歌舞伎・四天王楓江戸粧〔1804〕三立「立廻りあって、この内猪熊、竹槍を取って源吾を突く。これにて**𢇛**（ドウ）となる」

*歌舞伎・小袖曾我薊色縫（十六夜清心）〔1859〕序幕「『うぬ、人でなしめ』トお藤を切下げる。これにてどふと成る」

補注

中世頃、軍記などでは、「どうど」「ちゃうど」「ひやうど」のように、「う」で終わる擬声語の次の「と」は、濁って「ど」とよまれている。

方言

(1)突然。急に。《どうと》島根県隠岐島 725

(2)量の多いさまを表わす語。たくさん。うんと。《どうと》越後†087 島根県隠岐島 725 《どうど》新潟県 347373 《とうど》相模†020

(3)甚だ。たいそう。《どうと》伊豆八丈島†080 島根県隠岐島 723

(4)しきりに。盛んに。《どうと》兵庫県加古郡 664 （『日国第二版』）

物が落ちたり当たったりする時の音として、12世紀から使用されている例があるが、風が吹く音としては、通常使用されないことがわかる。また、方言にもそのような意味で用いられることはないようである。「どう」は、打撃を受けるような強い風が吹くことを表していると捉えられる。また、長音付加によって、風が吹く音が続けていること、もしくは、ある程度の時間の長さの風が吹いていることが読み取れ、〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、**Dzdzz** 及び **Dzz-dzdz**、**dzz-dzz** である。3種類ともすべて綴りが異なるが、同じ表現を避けるためであるかもしれない。フランス語では、打撃の音は **B** 音の **baff** などがあり、**D** 音はむしろ、教会の鐘の音の **ding dong** や、電話の呼び出し音や振動の **drrr** など、鐘やベルの音、振動音を表すものであることから、**D** 音の印象が日本語とフランス語では異なると言える。原文の **D** 音の表記を受けて、仏語訳も **D** 音にし、打撃のような風の音よりも、振動が感じられる風の音を表そうとしたと思える。「どう」は **D** 音が一回であるのに対し、フランス語では **D** 音がそれぞれ2回以上で異なっている。**D** 音を繰り返すことによって、音の長さも長くなっており、原文の音の〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを表そうとしたと考えられる。

(31) どっどど どどうど どどうど どどう

DZZ-DZDZ Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz

(32) どっどど どどうど どどうど どどう

« **Dzz Dzz-dzdz Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz** »

「どっどど どどうど どどうど どどう」は、くるみや花梨の実を吹き飛ばす強い風の音を示していると考えられる。**D** 音を繰り返すことで、打撃のような強い音が何度も聞こえてくることが感じられる。「どっどど」は、促音挿入によって、風が急に起きてとどまっている〈滞留性〉〈時差性〉のニュアンスがある。「どどうど どどうど」は、長音挿入と「反復×2」によって、風が吹く状態がとどまっている〈滞留性〉〈時差性〉と風が何度も来る〈反復性〉がある。「どどう」は、長音付加することで、風がなお吹き続ける〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスがある。一方、フランス語は、原文の「ど」を **Dz** とし、「どっ」「どどう」のように促音や長音がつくと **Dzz** と綴っていることがわかる。ここでも、原文の **D** 音と同様に仏語訳も **D** 音を使用し、振動があるような風の音を表現しようとしたのであろう。上の例では、**DZZ-DZDZ Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz** というように、原文の「どっどどどどうど どどうど どどう」のリズムをそのまま生かしていることがうかがえる。章の冒頭であるため、最初の **DZZ-DZDZ** は、大文字になっている。下の例では、**Dzz Dzz-dzdz Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz** となっている。これを日本語に戻してみると、「どっ どっどど どどうど どどうど どどう」となり、始めに **Dzz** 「どっ」が付加されていることがわかる。これは、本作品に現れた「どっどど どどうど どどうど どどう」が訳された4回の中で、唯一 **Dzz** がひとつ多く書かれていたものであるため、誤植である可能性もある。**DZZ-DZDZ Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz** も **Dzz Dzz-dzdz Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz** も、原文の促音や長

音のリズムを表そうとしていることから、繰り返しの音による〈反復性〉や、風の音が聞こえ続けている〈滞留性〉〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを表現しようと工夫されたともみなせる。

(33) 「雨はざっこざっこ雨三郎、
風はどっこどっこ又三郎。」と叫んだものがありました。
« La pluie qui gicle, gicle,
La Pluie-Saburo
Le vent qui rugit, mugit,
Matasaburo. »

「ざっこざっこ」「どっこどっこ」は、どちらも『日国第二版』に掲載がない。形式は、「{ざっ}「こ付加」/反復×2」と、「{どっ}「こ付加」/反復×2」であると考えられる。そこで、接尾辞「こ」の意味を調べてみる。

こ

〔接尾〕

〔一〕（「こと」の変化したもの）名詞または動詞の連用形などに付いて、…のこと、…することの意を表わす。上が促音化することもある。「あいこ」「ほんこ」「馴れっこ」「構いっこ」など。また、「…（っ）こなし」「…（っ）こない」の形で、…しないことを互いに確認する、…するわけがない、…するはずがない、などの意を表わす。

*黄表紙・心学早染艸〔1790〕中「コレサ、そんなきまらぬ事をいっこなしさ」

*洒落本・妓情返夢解〔1802〕一「そんなに自由（じゆう）こになるものかな」

*滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕二・上「嘘事（うそっこ）だから是でも能（よい）ねへ」

*浮雲〔1887～89〕〈二葉亭四迷〉一・三「多少の艱苦は免（のが）れっこは有りませんワ」

*たけくらべ〔1895～96〕〈樋口一葉〉一三「左様だらう、お前に鼻緒の立（たち）っこは無い」

*青春〔1905～06〕〈小栗風葉〉春・三「終に自然の奥底の分りっ事（コ）無いと為たら」

*坊っちゃん〔1906〕〈夏目漱石〉六「おれ見た様な食ひ心棒にゃ到底出来っ子ないと思った」

〔二〕動詞の連用形や名詞などに付いて、その動作を二人以上であることを表わす。上の音が促音化することが多い。

- (1)二人以上で、同じ動作をお互いにすること。「取りかえっこ」「かわりばんこ」など。
- (2)二人以上で、同じ動作を同時に、競争して行なうこと。くらべ。くら。「当てっこ」「駆けっこ」「にらめっこ」など。
- 〔三〕特に擬声語、擬態語などの副詞などに付いて、そのような状態であることを示す。「ぺちゃんこ」「どんぶりこ」「ごつつんこ」など。
- 〔四〕名詞などに付いて、小さなものの意を表わしたり、親愛の情を示したりする。「べこっこ」「にゃんこ」など。
- *童謡・めえめえ児山羊〔1921〕〈藤森秀夫〉「藪こあたれば、腹こがちくり」
- 〔五〕名詞に付いて、幼児語または俗語として用いる。「はじっこ」「すみっこ」など。

方言

- (1)はじめに定めておくことの意を表わす。《こ》仙台†057 宮城県石巻 120 秋田県雄勝郡「明日から九時に学校に行くこだ」130 《ご》山口県大島 801
- (2)競争する意を表わす。《こ》秋田県雄勝郡 130 《ご》山口県大島「おにご(鬼ごっこ)」801
- (3)ずっとそのままの状態である意を表わす。《こ》香川県「乗り物にのらんこでいたんじゃ」829
- (4)名詞に付いて親愛の情を表わしたり、小さなものの意を表わしたりする。《こ》伊豆八丈島†077 丹波「てふこ(蝶)」†115 青森県 069 岩手県気仙郡 100 宮城県 114120121 秋田県 130 山形県「姉こ」139 新潟県西蒲原郡 371 富山県砺波 398 長野県佐久 493 愛媛県周桑郡・喜多郡 845 高知県土佐郡 866 大分県宇佐郡 939
- (5)名前に添えて用いる。《こ》富山県砺波「敏こ(敏江)」「政こ(政雄)」398 大分県宇佐郡 939
- (6)場所を示す。…の所。《こ》香川県東部「とうちゃんこいくんな」829 愛媛県周桑郡 845
- (7)糸、ひも、縄などを数える単位。《こ》新潟県佐渡 351 静岡県志太郡「ふたっこぬい(二本糸で縫うこと)」535
- (8)ものの数を数える単位。《こ》三重県志摩郡 054 (『日国第二版』)

例文において、「ざっこざっこ」「どっこどっこ」の接尾辞「こ」は、〈〔三〕特に擬声語、擬態語などの副詞などに付いて、そのような状態であることを示す〉ということがわかる。「ざっこざっこ」は、急にざっと降る雨の音が続いている状態、「どっこどっこ」は急に風が吹く音が続いている状態を表していると考えられる。よって、どちらも促音の〈急転

性)や繰り返しの〈反復性〉のニュアンスを持つ。一方、「ざっこざっこ」にあたるフランス語は、**gicle, gicle**で、「どっこどっこ」にあたるフランス語は、**rugit, mugit**である。**gicle, gicle**は、〈〔血、水などが〕噴出する、ほとばしる；跳ねかける〉を意味する **gicler** の直説法現在 **gicle** を繰り返したものである。**rugit, mugit** は、〈〔海、波などが〕うなる、とどろく〉を意味する **rugir** と主に文語で〈〔風、海などが〕うなる、とどろく〉を意味する **mugir** の直説法現在を組み合わせたものである。原文のオノマトペが「反復×2」であることを、仏語訳でも、繰り返すと、異なる2つの動詞の併記によって表していると考えられることから、〈反復性〉のニュアンスを表現することができていると言える。〈急転性〉のニュアンスに関して、**gicle, gicle** はその意味に含まれていそうであるが、**rugit, mugit** では〈急転性〉のニュアンスがあるとみなすことはできない。

(34) みんなはやはりきろきろそっちを見えています。

Les autres le regardaient toujours avec curiosité.

見るさまを表すには、「きろきろ」よりも「きよろきよろ」の方が一般的に使われているのではないか。「きろきろ」を確認してみる。

きろきろ

〔副〕

(多く「と」を伴って用いる)

目などの光るさま、また、落ち着きのない目つきを表わす語。

*狭衣物語〔1069～77頃か〕三「おとどはよしな。嗟峨の院こそ、頭はきろきろと、恐ろしげなれ」

*堤中納言物語〔11C中～13C頃〕はいずみ「まだらに、および形につけて、目のきろきろとして、またたきみたり」

*日葡辞書〔1603～04〕「メガ qiroqiroto (キロキロト) スル」

*浄瑠璃・女殺油地獄〔1721〕中「思ひ知ったか思ひ知れとあたりをきろきろ睨め廻し」

方言

(1) 落ち着きなく目を動かすさま。きよろきよろ。《きろきろ》仙台†058 新潟県佐渡 348 愛媛県大三島 848

(2) 鋭い目つきでにらむさま。《きろきろ》宮城県仙台市 123 長崎県壱岐島 915

(3) すっかり。《きろきろ》新潟県刈羽郡 380

語源説

(1) キラキラの転〔大言海〕。

(2) キロはクリラヨ、キリラヨの反。〔名語記〕 (『日国第二版』)

「きろきろ」は、〈落ち着きのない目つきを表わす語〉として、11世紀後半には使用されていたことがわかる。語源説(2)にある『名語記』の初稿六巻本は、1268年に成立したものであったことから、この語が古語である可能性を示している。また、方言では、仙台地方で〈落ち着きなく目を動かすさま〉を示す語として、19世紀からの例があるようで、方言として残った可能性がある語と言えそうだ。したがって、「きろきろ」は、賢治が創り上げたオノマトペではなく、もともとは古態性のあるものであり、賢治が生きていた年代が19世紀後半から20世紀前半であったことに鑑みると、方言性がある語として用いられたと考えられそうである。

「きよろきよろ」も確認してみる。

きよろきよろ

〔副〕

(「と」を伴って用いることもある)

うろたえなどして、そわそわと落ち着かないさま、また、落ち着かない様子であたりを見まわすさまを表わす語。

*評判記・満散利久佐〔1656〕小藤「二人ながら、こちのことかと、きよろきよろとするけしき、猶以、あしし」

*浄瑠璃・生玉心中〔1715か〕上「悪口いへばあたりからはきよろきよろ見る」

*人情本・春情花の朧夜〔1860頃か〕初・五回「『道でも大方違ったらう』と暗に透して散眼(キョロ)々々とあたりを窺ふ衿元を」

*魔風恋風〔1903〕〈小杉天外〉後・許嫁・二「『へ』ときよろきよろした眼をして」

*葬列〔1906〕〈石川啄木〉「かの六人の遽々然(キョロキョロ)たる歩振(あゆみぶり)を見て」

方言

(1)慌てるさま。《きよろきよろ》大分県大分郡 941

(2)ぐずぐずするさま。《きよろきよろ》徳島県板野郡 040

(3)滑っこいさま。つるつる。《きよろきよろ》群馬県多野郡 246

(『日国第二版』)

「きよろきよろ」は、17世紀半ばからの使用例があることから、まず「きろきろ」が存在し、のちに「きよろきよろ」が使われ始めたと捉えられる。「きよろきよろ」は体全体の落ち着きのなさも示すこと、また、〈あたりを見まわすさま〉も目以外の部分も落ち着かない様子であるということを表すが、「きろきろ」は、落ち着かないさまでも目の動きを表す

ことに特化しているオノマトペであると言える。例文の「きろきろ」は、何度も目を落ち着かない様子で動かす〈反復性〉のニュアンスがある。これにあたるフランス語は、avec curiosit  (好奇心を持って)である。原文の「やはり」にあたる toujours (今もなお、相変わらず)があるため、継続して見ていることはわかるが、目を何度も動かすさまでは、描写されていない。よって、仏語訳には、「きろきろ」の〈反復性〉のニュアンスは訳出されていないとみなす。

(35) 両足をかわるがわる曲げて、だあんだあんと水をたたくようにしながら斜めにならんで向こう岸へ泳ぎはじめました。

Repliant alternativement les jambes comme pour frapper l'eau, ils commenc rent   nager vers l'autre rive en se suivant en diagonale.

泳ぐ際に足が水を打つ音として、「だあんだあん」は一般的には使用されないのではないか。「だあんだあん」に似たような形式のオノマトペでは、「ばしゃんばしゃん」の方が用いられているような印象がある。まず、「だあんだあん」を調べてみると、掲載がないが、繰り返していない「だあん」単独は、以下のように書かれている。

〔副〕

(「と」を伴って用いることもある)

銃などを撃ち放つ音を表わす語。

*助左衛門四代記〔1963〕(有吉佐和子)三・二「ダーンと鉄砲を撃つのは、それだけで胸がすく」(『日国第二版』)

「だあん」は、〈銃などを撃ち放つ音を表わす語〉であり、20世紀からの使用例があるようである。よって、「だあん」の「反復×2」である「だあんだあん」は、一般的には何度も鳴る銃声の音を表すと考えられる。

次に、「ばしゃんばしゃん」を確認するが、掲載されていないため、単独の「ばしゃん」を試みる。

ばしゃん

〔副〕

(多く「と」を伴って用いる)

勢いよく水面を打つ音を表わす語。

*水籠〔1907〕(伊藤左千夫)「バシャンバシャン水音をさして半四郎君が台所へ顔を出した」

*故旧忘れ得べき〔1935～36〕(高見順)一〇「バシャンといふ大きな音がした。身体を濡らさないで、とびこんだものらしい」(『日国第二版』)

「ばしゃん」は、〈勢いよく水面を打つ音を表わす語〉であり、20世紀からの例があるようだ。やはり「ばしゃん」や、「ばしゃん」に長音挿入し、繰り返した「ばしゃあんばしゃあん」は、打った水面の音を表すのに対し、「だあんだあん」は、銃などを撃ち放つ音を示し、音の印象や性質が異なる。例文において、「だあんだあん」からは、足を蹴って水面を叩く音が強い打撃のようであることを表そうとしたと考えられる。「だあんだあん」は「長音挿入／反復×2」の形式であるため、勢いよく打つ音が伸びる〈延長性〉に加え、何度もその音がする〈反復性〉のニュアンスがある。これにあたるフランス語は、見当たらない。comme pour frapper l'eau からは、〈水を叩くように〉したことはわかるが、それによって音が鳴ったことまでは表現されていない。〈延長性〉や〈反復性〉のニュアンスも読み取ることにはできない。

(36) 先生は呼び子をビルルと吹きました。

Le maître siffla : Drr-Drr.

(37) 先生はちらっと運動場を見まわしてから、「ではならんで。」と言いながらビルルッと笛を吹きました。

Le maître, après avoir jeté un regard rapide tout autour du terrain de sport, dit : « Mettez-vous en rangs ! » et en même temps il souffla : « Drr-Drr » dans son sifflet.

(38) それはすぐ谷の向こうの山へひびいてまたビルルルと低く戻ってきました。

Le son se propagea instantanément sur l'autre versant de la vallée jusqu'à la montagne puis revint en écho, légèrement affaibli, Trr-Trr.

「ビルル」「ビルルッ」「ビルルル」はいずれも『日国第二版』に記載がないものである。小さな笛を吹く音としてはP音の「ピー」などの方が一般的かと感じるが、B音の「ビ」を用いることで、より重い音であることがわかる。また、「ビ」で笛の鳴り始めを示し、その後、呼吸を送り続けることで笛の中の球体を揺らして聞こえて来る音を、「ル」の繰り返しによって、表しているのではなかろうか。「ビルル」「ビルルッ」「ビルルル」は、すべて音の〈反復性〉があり、「ビルルッ」に関しては、促音から音が鳴り響いて区切りがついた〈一区切り性〉のニュアンスもある。「ビルル」「ビルルッ」にあたるフランス語は、ともにDrr-Drrで、「ビルルル」にあたるものは、Trr-Trrである。

実際に笛を吹いた時の音は、Drr-Drrと訳し、笛を吹いてこだまが返ってくる時の音はTrr-Trrとすることで、両者の音を区別して表現しようとしたことがわかる。また、原文の表記にならって、DrrrrrやTrrrrrなどとすることも想像できるが、一つ目の子音D、Tも2回ずつ現れていることに気がつく。「ル」の繰り返しを表すために、Drr-DrrやTrr-Trrと表していると考えられることから、仏語訳にも〈反復性〉のニュアンスがあると言える。しかしな

がら、「ビルル」と、促音付加した「ビルルッ」の訳は、どちらも **Drr-Drr** と共通していることから、促音付加の〈一区切り性〉のニュアンスは表現されていないとみなせる。

(39) 淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなってしまいました。

De grands remous se creusèrent dans la rivière, et l'eau agitée ressembla à un amas de pierres.

水の状態を表すために、「ぶちぶち」はあまり使用されないのではないか。「ぶちぶち」は『日国第二版』に記載がない。『日本語オノマトペ辞典』には、〈①もの言いが、つぶやくようで、聞きとりにくいさま。不平や不満を言うさま。：397〉〈②蕎麦などが切れやすいさま。：397〉と書かれている。しかし、この例文での「ぶちぶち」は、夕立が来て水かさが増えた淵の水面で、多量に激しく跳ねている大きな雨粒のことを指しているように解される。「ぶちぶち」は「反復×2」のオノマトペであるので、雨粒が次々に跳ねている〈反復性〉のニュアンスがある。一方で、これにあたるフランス語は、**de remous**〈渦〉である。フランス語では、**De grands remous se creusèrent dans la rivière**〈川では大きな渦が窪み〉と訳されており、「ぶちぶち」が水面に見える複数の渦であり、窪んでいると捉えられていることがわかる。仏語訳では、**de remous** と複数形にすることで、原文の〈反復性〉のニュアンスを現そうとしたことがうかがえる。

(40) みんなは萱の間の小さなみちを山のほうへ少しのぼりますと、その南側に向いたくぼみに栗の木があちこち立って、下には葡萄がもくもくした大きな藪になっていました。

Sur le petit chemin en pente douce, au milieu des chaumes, ils montèrent vers la montagne où, dans des creux de terrain exposés au sud, se dressaient ça et là des châtaigniers au pied desquels de la vigne sauvage formait un grand buisson moutonneux.

葡萄が豊かに実っているさまは、「もくもく」よりも「たわわ」の方が現代では用いられているのではないか。まず「もくもく」を確認する。

もくもく

〔副〕

（「と」を伴って用いることもある）

(1) 煙・雲などが、重なり合うように盛んにわきおこるさまを表わす語。

*春潮〔1903〕〈田山花袋〉一三「湯の笥を伝ふ音と、水のもくもくと湧出る音とが」

*旅日記から〔1920～21〕〈寺田寅彦〉二「烟突からモクモクと引切りなしに出て来る黒い烟も」

*がらくた博物館〔1975〕〈大庭みな子〉犬屋敷の女「ドライアイスを放

りこんだ大きな壺の中からは白い煙がもくもくと吹き出ている

(2)一部分が盛り上がり、うごめいたりするさまを表わす語。

*異端者の悲しみ〔1917〕〈谷崎潤一郎〉五「死んだ体はまだ微かに動いて居た。もくもくと肩の筋肉を強直させて」

*暗夜行路〔1921～37〕〈志賀直哉〉二・九「毛布の中で蹴り合ひを始めた。もくもくと其処が持上った」

*暗室〔1976〕〈吉行淳之介〉一四「大きな芋虫が、全身をもくもく動かしているように見える」

(3)ふんわりしてふくらんでいるさま、肥えふとっているさまを表わす語。

*日本橋〔1914〕〈泉鏡花〉二九「見上げるばかり大いのが、もくもくとして肩も胸も腹もなく、づんぐり腰の下まで着こんだのは」

*若い人〔1933～37〕〈石坂洋次郎〉上・三「ちっともモクモクした所の無い、鑿で一泓ぐりして出来たかのやうな滑らかなしまった頬」

(4)柔らかく、暖かい感じ、快く、暖かく包みこまれるような感じを表わす語。

*千鳥〔1906〕〈鈴木三重吉〉「自分はもくもくと日のさした障子を見つめて」

(5)物をほおぼって口を動かさずさまを表わす語。もぐもぐ。

*良人の自白〔1904～06〕〈木下尚江〉前・一〇・四「押丁は口をモクモク動かしながら」

*石川五右衛門の生立〔1920〕〈上司小剣〉三「母はもくもくと淡紅色の御所柿の一片を前歯で噛んでゐた」

方言

(1)見る間に増大するさまを表わす語。《もくもく》長野県東筑摩郡「筍がもくもく大きくなった」480

(2)太って柔らかいさまを表わす語。《もくもく》新潟県西蒲原郡「手がもくもくして居る」371

(3)大口をあけて物を食べるさまを表わす語。ぱくぱく。《もくもく》長野県東筑摩郡「あの老人がもくもく物を食ふ」480

(4)ぐずぐずするさまを表わす語。のろのろ。《もくもく》山形県米沢市151

(5)衣服などの着にくいさまを表わす語。《もくもく》山形県米沢市149

(『日国第二版』)

例文において「もくもく」は、20世紀からの使用例がある、〈(1)煙・雲などが、重なり合うように盛んにわきおこるさまを表わす語〉という意味で使用されていると思えるが、ここでは煙や雲のように物体感のないものではなく、葡萄というある程度の重みを感じ

じるものが重なり合うように実っていることを示している点が、異なっている。ここで、「たわわ」も見てみる。

〔形動〕

(木の枝に多くの実がなったりして) 枝がしなうさま。たわ。とおお。

*古今和歌集〔905～914〕秋上・二二三「をりてみばおちぞしぬべき秋はぎの枝もたわわにおけるしら露〈よみ人しらず〉」

*徒然草〔1331頃〕一一「大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが」

*難波土産〔1738〕発端「傍なる松の枝もたははなるが」

(『日国第二版』)

「たわわ」は、10世紀初期からの使用例がある言葉で、多くの実がなることに加え、〈枝がしなうさま〉を表すことがわかる。やはり、果実の実がなるさまを表す語としては、「たわわ」の方が一般的であると言える。

例文での「もくもく」は、葡萄の実が次々にふくらむようにたくさんなっているさまが感じられ、特異な使われ方をしたオノマトペであるとみなせる。また、「反復×2」の形式によって、〈反復性〉のニュアンスを持つ。これにあたるフランス語は、〈〔海などが〕白波の立った；〔空が〕綿雲に覆われた〉を意味する *moutonneux* である。原文の「もくもく」が、通常は雲の様子を示すことから、仏語訳においても雲に関係した語を選択したにちがいない。しかし、「反復×2」の〈反復性〉は、フランス語に翻訳されていないと考えられる。

(41) すると向こう岸についた一郎が、髪をあざらしのようにしてくちびるを紫にして わくわく ふるえながら、

Ichiro, arrivé sur l'autre rive, les cheveux pareils à ceux d'un phoque, les lèvres violettes, tremblant et frissonnant, lui dit :

震えるさまを表すオノマトペとしては、「わくわく」を使用するのは現代では珍しいのではないか。「わくわく」を確認してみる。

わくわく

〔副〕

(「と」を伴って用いることもある)

喜び、期待または心配などによって、心が落ち着かないで騒ぐさまを表わす語。

*浄瑠璃・釈迦如来誕生会〔1714〕五「疾しや遅そしの道すがら、心わくわくせきかくる跋提河にぞ着き給ふ」

*洒落本・契情買虎之巻〔1778〕五「あんまりのうれしさに、気がわくわくしてあゆみにくい」

*真景累ヶ淵〔1869頃〕〈三遊亭円朝〉一六「わくわく悵気の焰は絶える間は無く」

*たけくらべ〔1895～96〕〈樋口一葉〉一三「其声信如に聞えしを恥かしく、胸はわくわくと上気して」

方言

(1)寒さなどで震えるさまを表わす語。わなわな。ぶるぶる。《わくわく》岩手県気仙郡 100 秋田県鹿角郡「寒えかめでわくわくとふるてら」133 山形県 139 長野県佐久 493 福岡市 879 《わっくわっく》岩手県気仙郡 100

(2)頭痛がするさまを表わす語。ずきずき。《わくわく》山口県 803 《わっくわっく》島根県「今日はどーも頭がわっくわっくして何もできん」725

(3)湿気が多くて気持の悪いさまを表わす語。《わくわく》岡山市 762

(4)ひどく暑いさまを表わす語。《わっくわっく》島根県大原郡「夕日で部屋がわっくわっくする」725
(『日国第二版』)

方言の(1)に〈寒さなどで震えるさまを表わす語〉とあり、20世紀半ばに岩手県において使用されている例があることから、例文の「わくわく」は、賢治独自の使い方をしたものではなく、方言性のあるオノマトペであると認めることができる。また、「反復×2」の形式によって、震えるさまの〈反復性〉のニュアンスがある。一方、「わくわく」にあたるフランス語は、〈(寒さ、感動などで)震える、身震いする〉を意味する動詞 *frissonner* の現在分詞、*frissonnant* 〈震えている〉である。震えは一回ではなく、何度も身震いしているということが示唆されるため、仏語訳においても〈反復性〉が表されていると考える。

以上から、特異と思われたオノマトペのうち、「わくわく」は方言性があり、また「きろきろ」は古態性や方言性があるものであり、宮沢賢治が創造したものではなかったと言える。

また、宮沢賢治独自のオノマトペの仏語訳出について評価すると、全体として、原文のオノマトペのニュアンスが翻訳されているものが16件中11件(73.3%)であり、仏語訳においても大半の場合は、表現しようとしてされていると言える。それ以外の例では、事象の描写はできているものの、オノマトペのニュアンスが翻訳できているとは言えないものだった。

5 原文の擬音性・擬態性と仏語訳出の文法性の対応

5.1 概観

本節では、『風の又三郎』の日本語のオノマトペが含まれた用例を抽出し、オノマトペを分類する。まず、日本語のオノマトペを、『日本語オノマトペ辞典』による区分に準じて、すべての種類をまとめた。また、日本語のオノマトペがフランス語に翻訳されたものが、フランス語のどのような文法分類（単語や句）に属するのかまとめた。それぞれの組み合わせの数を数え、単語に訳されたものと単語以外に訳されたものとに別け、それぞれを表にまとめた（【表3-1】および【表3-2】）。また、原文に出現したオノマトペにあたるものが、フランス語翻訳版に特に見られない場合は、「該当なし」として扱った。

【表3-1】『風の又三郎』に見られたオノマトペとフランス語（単語）の分類

		日本語オノマトペの区分										
		音	声	さま	音・さま	声・さま	音・声	音・名	音・声・さま	名	古	計
フランス語の品詞	オノマトペ	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	6
	副詞	0	0	38	3	0	0	0	0	0	0	41
	動詞	7	1	12	12	1	0	0	0	0	0	33
	形容詞	0	0	44	7	1	0	0	1	0	0	53
	名詞	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	3
	計	10	1	96	25	3	0	0	1	0	0	136

【表 3-2】『風の又三郎』に見られたオノマトペとフランス語（単語以外）の分類

		日本語オノマトペの区分										
		音	声	さま	音・さま	声・さま	音・声	音・名	音・声・さま	名	古	計
フ ラ ン ス 語 の 品 詞	オノマトペ	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	5
	副詞句	0	0	13	5	1	0	0	1	0	0	20
	動詞句	5	0	3	4	3	0	0	0	0	0	15
	形容詞句	0	0	13	0	0	0	0	0	0	0	13
	名詞句	4	0	13	2	1	0	0	0	1	0	21
	前置詞句	3	1	27	6	0	0	0	1	0	1	39
	接続詞句	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	該当なし	3	0	23	6	1	0	0	0	0	0	33
	計	15	1	92	28	6	0	0	2	1	1	146

本調査を通して、以下の事柄が明らかになった。

『風の又三郎』に出現した日本語のオノマトペの用例は、計282例であった。漢語由来のオノマトペを除いた269例の日本語のオノマトペのうち、「さま」を表すオノマトペ、擬態語が188例と過半数を占め、「音・さま」を表すオノマトペが53例、「音」を表すオノマトペ、すなわち擬音語が25例、「声・さま」を表すオノマトペが9例、「音・声・さま」を表すオノマトペが3例、「声」を表すオノマトペ、すなわち擬声語が2例、名詞化したものと、古い意味で使われたものが1例と続いた。「音・声」「音・名」に区分されるものは、まったく見出されなかった。

【表 3-1】【表 3-2】を対比してみると、「音」「声」「さま」「音・さま」「声・さま」「音・声・さま」を表すオノマトペの単語と語句については、数値が大体同じである傾向がある。

また、単語として訳出された品詞でもっとも多いものは、形容詞で、次いで、副詞、動詞となっている。単語以外で訳出されたものは前置詞句がもっとも多く、次いで、副詞句、名詞句、動詞句と続く。

また、原文の日本語のオノマトペが、フランス語に訳されていない例が計33例見られた。33例のうち、日本語のオノマトペが「さま」を表すものが23例と過半数を占め、「音・さま」を表すものが6例、「音」を表すものが3例、「声・さま」を表すものが1例あった。

このことも、日本語のオノマトペが「さま」に関わるものだと、フランス語としてうまく訳出できなくなる場合があることを示唆するものであろう（「音」や「声」に関わるもので、仏語訳されていないものの具体例についても、以下で詳しくみることにする）。

フランス語翻訳版において、単語や句ではなく単文として訳されたものはなかった。

まず、フランス語オノマトペに訳された具体例を、以下、訳出パターンごとにみていく。なお、『日本語オノマトペ辞典』『フランス語オノマトペ辞典』からの引用箇所は、ページ数を併記する（以下、同じ）。

5.2 フランス語オノマトペでの訳出

フランス語のオノマトペとそれにあたる日本語を表にまとめる。日本語でもオノマトペであったものは、オノマトペの区分を記した（【表3-3】）。

【表3-3】フランス語翻訳版に出現したフランス語オノマトペと原文の日本語オノマトペ

日本語オノマトペの区分	日本語オノマトペ	フランス語オノマトペ
音	ビルル	Drr-Drr
音	ビルルル	Trr-Trr
音	ビルルッ	Drr-Drr
音・さま	どっどど どどうど どどうど どどう	Dzz Dzz-dzdz Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz
音・さま	どっどど どどうど どどうど どどう	DZZ-DZDZ Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz
音・さま	どっどど どどうど どどうど どどう	DZZ-DZDZ Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz
音・さま	どっどど どどうど どどうど どどう	Dzz-dzdz Dzdzzdz Dzdzzdz Dzdzz
音・さま	しゅう	Schtt ! Schtt !
音・さま	どう	Dzz-dzdz
音・さま	どう	dzz-dzz
音・さま	どう	Dzdzz

上の通り、フランス語オノマトペとして訳出された日本語オノマトペは11件であった。ここで、それぞれフランス語オノマトペについて、気がついたことをあげてみる。

第一に、日本語のオノマトペの形式は、基本要が単独で出現した「どう」や長音付加の「しゅう」といった繰り返しのないものもあるが、フランス語ではすべて、2モーラ以上のオノマトペに訳されている。その結果、「どう」や「しゅう」には、〈反復性〉のニュアンスがないが、「どう」の仏語訳の Dzz-dzdz、 dzz-dzz、 Dzdzz や、「しゅう」の仏語訳の Schtt ! Schtt ! からは、音の〈反復性〉のニュアンスが感じられるようになっている。

第二に、『フランス語オノマトペ辞典』の見出し語には、語尾に繰り返しの子音が付加されていなくても、実際にフランス語版に現れたフランス語オノマトペの語尾の綴りは、Trr-Trr や dzz-dzz のように子音の繰り返しが多いことである。このことは、フランス語のオノマトペの綴りが、一般語に比べて固定化されておらず、表記の選択肢が多いということを示唆する。また、子音を繰り返すことで、音の長さが感じられることから、〈延長性〉や〈持続性〉のニュアンスが読み取れる。

第三に、Schtt! Schtt! の意味合いが異なることである。「しゅう」は〈②絹ものなどがすれ合ってたてる音。ものがすべったりこすれたりしたときの音。また、そのさま:186〉であり、原文においては、柳の枝や萱の穂で、馬の肌の上を滑らせるときの音やさまの意味で用いられている。一方の仏語訳の Schtt! Schtt! の意味を確認すると、sch や schtt といった綴りのものは『フランス語オノマトペ辞典』に掲載がない。sch と同じ発音の ch を調べると、CH¹ の項目に sch とともに綴られると書かれている。ch は、〈強い呼気の音〉や〈液体やもしくは火縄が爆発せずに燃える音〉を示す他に、次の意味もあるようである。

CH² Souvent répété "(pour mettre en fuite un animal)". : 138

CH² の意味では、sch とともに綴られるとは書かれていないが、しばしば繰り返して、〈動物を追い払うため〉に用いられるようである。原文の柳の枝や萱の穂で、馬の肌の上を滑らせるときの音やさまという意味と、同様の意味の語ではないと判断できる。馬を追い払うことを示さないように、ch ではなく sch を使用したのかもしれない。Schtt! Schtt! は、原文の「しゅう」の意味からではなく、「しゅう」という音の印象からつくられたオノマトペであるようだ。さらに、フランス語には感嘆符が付加されており、「しゅう」よりも音に強さや大きさがあるように感じる。

5.3 フランス語オノマトペ以外の訳出

前節では、フランス語オノマトペとして訳出された例をあげた。本節では、フランス語がオノマトペでないものの例をあげ、以下、訳出パターンごとにみていく。

5.3.1 副詞・副詞句訳

副詞・副詞句に訳された日本語オノマトペは、「さま」「音・さま」「声・さま」「音・声・さま」を表す。

(42) おかしいとおもってみんながあたりを見ると、教室の中にあの赤毛のおかしな子がすまして、しゃんとすわっているのが目につきました。

Ils regardèrent tout autour d'eux et finirent par remarquer au milieu de la classe, assis sagement, un peu compassé, le bizarre petit rouquin.

(43) 次の朝、空はよく晴れて谷川はさらさら鳴りました。

Le matin suivant, le ciel était très clair, la petite rivière chantait en murmurant doucement.

(44) すると三郎は国語の本をちゃんと机にのせて困ったようにしてこれを見ていましたが、かよがとうとうぼろぼろ涙をこぼしたのを見ると、だまって右手に持っていた半分ばかりになった鉛筆を佐太郎の目の前の机に置きました。

Quand Matasaburo, qui regardait cela d'un air embrassé son livre de japonais posé comme il faut sur la table, vit qu'elle commençait vraiment à pleurer, sans rien dire il posa sur la table de Sataro, devant ses yeux, le crayon déjà à moitié usé qu'il tenait dans sa main droite.

(45) すると三郎は少しおもしろくなったようでまたくつつつ笑いだしてたずねました。

Matasaburo, comme s'il commençait à trouver la situation amusante, répondit en pouffant :

(46) すすきがざわざわざわつと鳴り、

Des roseaux s'agitaient en bruissant ;

「しゃん」〈②体を起こして姿勢正しいさま。姿勢に直線的な張りがあるさま：184〉にあたるフランス語は、*sagement* 〈おとなしく、控え目に；ほどほどに；身持ち正しく〉であり、「さらさら」〈ものが軽くふれ合ってたてる、こまやかな音。また、そのさま：153〉にあたるフランス語は、*en murmurant doucement* 〈〔小川、木の葉、風などが〕静かにささやきながら、ざわめきながら〉である。どちらも原文の「さま」や「音・さま」のニュアンスが訳語にも感じられる。特に、「さらさら」の仏語訳の *en murmurant doucement* は、動詞 *murmurer* が文章語での意味で用いられ、前述の *chantait* 〈歌っていた〉と同時性を表すジェロンディフの *en murmurant* という形で小川がささやきながら歌っていたことを表し、*doucement* 〈静かに、そっと、穏やかに〉という副詞を併用することで、「さらさら」の持つ穏やかさが表されている。

一方、「ぼろぼろ」〈①砕けたものや粒状のものが次々に大量にこぼれ落ちるさま。大粒の涙を流すさま：462〉にあたるフランス語 *vraiment* 〈実際に、本当に〉と、「くつつつ」〈①おかしくてたまらず、ひそかに笑う声、また、そのさまを表わす語。おさえきれないで、声をもらして笑うさまを表わす語。「くすくす」より、ややきわだって笑うさまにいう。くつりくつり。〉にあたる *en pouffant* 〈噴き出しながら〉は、原文のオノマトペが持っている「音」や「声」のニュアンスが訳出しきれないと言える。

また、「ざわざわざわつ」は {ざわ} の「反復×3／促音付加」の形式であり、「ざわざわ」は〈①声や音が騒がしく聞こえるさま。大勢が騒ぎ動くさま：157〉にあたるフランス語は *en bruissant* 〈軽く音を立てながら〉であり、「音」が出ていることを表しており、さらに、前述の動詞 *s'agitaient* 〈揺れていた〉によって、すすきが揺れることによる「音」であることが表現されていると言える。

5.3.2 動詞・動詞句訳

動詞・動詞句に訳されたオノマトペは、「音」「声」「さま」「音・さま」「声・さま」を表す。

(47) 風がまた吹いて来て窓ガラスはまたがたがた鳴り、ぞうきんを入れたバケツにも小さな黒い波をたてました。

Le vent à nouveau se mit à souffler, les vitres des fenêtres recommencèrent à tinter, dans le seau où l'on avait déposé la toile à laver se formèrent des vaguelettes noires.

(48) 馬もひひんと鳴いています。

Le cheval hennit.

(49) 嘉助はなんだかせなかがかゆく、くすぐったいというふうにももじもじしていました。

celui-ci se tortilla comme pour dire que quelque chose le démangeait ou le chatouillait dans le dos.

(50) 三郎はぼちゃぼちゃ、もう近くまで行きました。

Matasaburo, lui, faisaient clapoter l'eau, tout à côté.

(51) けれどもやっぱり底まで届かずに浮いてきたのでみんなはどっと笑いました。

Mais lui aussi réapparut sans avoir atteint le fond et tout le monde éclata de rire.

「がたがた」〈かたいものがふれ合って発する、重く騒々しい音：29〉にあたるフランス語は、tinter 〈(金属, ガラスが触れ合って) 鋭い音がする；ちりんちりん [かちんかちん] と音を立てる〉であり、「ひひん」〈馬のいななく声を表わす語〉にあたるフランス語は、hennit 〈[馬が] いななく, ひひーんと鳴く：372〉である。「がたがた」と tinter では、音の性質や印象が異なるが、「音」を表す「がたがた」も「声」を表す「ひひん」も、フランス語では音声の意味合いを持つ動詞に訳されていることに気がつく。

「もじもじ」〈叡慮したり恥ずかしがったり、決心がつかなくなったりして、身をもむさま。もじかわ：487〉にあたるフランス語は、se tortilla 〈身をくねらせた、のたくった〉である。

「もじもじ」と se tortilla では、それらから感じる、体の動きの種類や動作の大きさの印象が異なる。フランス語では、原文の前述の「せなかがかゆく、くすぐったい」を受けて、「もじもじ」の恥ずかしがっているさまよりも、大きな動作を示す se tortilla と訳されたのであろう。

「ぼちゃぼちゃ」〈①水をかき乱す音。ひとつのところで動き回っているさま：447〉faisaient clapoter l'eau 〈びちゃびちゃと水の音を立たせていた〉であり、clapoter の語源は、擬音語語根の klapp- であり、乾いた音や余韻のない打音を表すようだ。「どっ」〈(1) 多人数が一度に声をあげるさま、高く笑うさまを表わす語。どつとど。どと。〉にあたるフランス語は、éclata de rire 〈爆笑した、嘖き出した〉である。

原文のオノマトペが「音」や「声」のみを表す場合よりも、「音・さま」「声・さま」を表す場合の方が、訳語ではひとつの動詞では表現しきれず、動詞句で訳す必要があることを示している。

5.3.3 形容詞・形容詞句訳

形容詞・形容詞句に訳されたオノマトペは、「さま」「音・さま」「声・さま」「音・声・さま」を表す。

(52) ところが三郎のほうはべつだんそれを苦にするふうもなく、二三歩また前へ進むとじつと立って、そのまっ黒な目でぐるっと運動場じゅうを見まわしました。

Matasaburo cependant ne parut pas s'en émouvoir particulièrement ; il fit encore deux ou trois pas en avant et, bien campé sur ses jambes, de ses yeux d'un noir profond, il embrassa toute l'étendue du terrain de sports.

(53) 三郎は両手で本をちゃんと机の上へもって、言われたところを息もつかずじつと読んでいました。

Matasaburo, tenant correctement son livre à deux mains sur la table, lisait à en perdre le souffle, les yeux fixés au passage indiqué.

(54) 昇降口からは行って行きますと教室はまだいいんとしていましたが、ところどころの窓のすきまから雨がはいて板はまるでざぶざぶしていました。

Ils passèrent la porte d'entrée, la salle de classe était encore silencieuse, à certains endroits, la pluie avait coulé par les interstices des fenêtres sur le plancher qui était inondé.

(55) 「風が吹いたんだい。」三郎は上でくつくつわらいながら言いました。

« C'est le vent qui souffle ! » dit Saburo là-haut, avec un petit rire.

(56) その時風がざあっと吹いて来て土手の草はざわざわ波になり、

À ce moment, un grand vent se leva et les herbes des talus devinrent des vagues bruissantes ;

(22 の再掲)

「じつ」〈②体を動かさないで静かにしているさまを表わす語：165〉にあたるフランス語は、bien campé〈しっかりと据えられた、固定した〉と、fixés〈じつと、目を凝らして〉である。bien campéは、不動であるさまを表すために、〈非常に、とても、大いに〉を意味する bien が campé に付加されており、fixés は les yeux 〈目〉を修飾している。

「ざぶざぶ」〈①川を渡ったり、風呂の湯を使ったり、洗濯したりする時などの、水を大きく動かす音を表わす語。さぶさぶ。じゃぶじゃぶ：152〉にあたるフランス語は、inondé

〈水に漬かった〉である。「ざぶざぶ」は「音・さま」を表すが、**inondé**は「さま」のみを訳したものであり、「音」は感じられない。

一方、「くつつつ」〈①笑いや嗚咽をのど奥でおしころすときの声。また、そのさま：97〉にあたるフランス語は、**petit**〈小さい、ちょっとした〉であり、「ざわざわ」〈①声や音が騒がしく聞こえるさま。大勢が騒ぎ動くさま：157〉にあたるフランス語は、**bruissantes**〈ざわめく、かすかな音を立てる〉である。「くつつつ」の訳語 **petit** だけでは、「声」の情報は含まれていないが、**dit Saburo là-haut, avec un petit rire**〈上にいる三郎は小さな笑いを伴って言う〉から、無言での笑いではなく話しながらの笑いであったことがわかり、「声」が表されている。「ざわざわ」の訳語 **bruissantes** からも音声の情報が読み取れる。

5.3.4 名詞・名詞句訳

名詞・名詞句に訳されたオノマトペは、「音」「さま」「音・さま」「声・さま」を表すものと、名詞化したものである。

(57) 風はまだやまず、窓ガラスは雨つぶのために曇りながら、またがたがた鳴りました。

Alors que le vent ne cessait de souffler et que les gouttes de pluie obscurcissaient les vitres des fenêtres, à nouveau on entendit des tremblements.

(58) みんなもなんだか、その男も三郎も気の毒なようなおかしながらんとした気持ちになりながら、

Les enfants, comme s'ils se trouvaient désolés à la fois pour Matasaburo et pour l'homme, ressentirent un sentiment de vide étrange.

(59) 遠くのほうの林はまるで海が荒れているように、ごんごんと鳴ったりざつと聞こえたりするのです。

Au loin le bois, comme une mer déchaînée, mugissait, grondait, et faisait entendre un bruit de ressac. (10の再掲)

(60) 嘉助はまるで手をたたいて机の中で踊るようにしましたので、大きなほうの子どもらはどつと笑いましたが、

Kasuke se mit à tambouriner sur la table un rythme de danse avec les mains et les grands partirent d'un énorme éclat de rire.

(61) 淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなってしまいました。

De grands remous se creusèrent dans la rivière, et l'eau agitée ressembla à un amas de pierres.

(39の再掲)

「がたがた」〈①かたいものがふれ合って発する、重く騒々しい音：29〉のフランス語は、**des tremblements** 〈震動、ぐらつき〉であり、「がらん」〈②何もなくて広々としたさま。空虚でさびしく広いさま：53〉にあたるフランス語は、**vide** 〈虚無（感）、むなしさ〉である。「がたがた」の仏語訳は、前述の **on entendit** 〈を聞いた〉によって、震動に「音」が伴っていたことがわかるため、「がたがた」の「音」を訳そうとしたことがうかがえる。

一方、「ざっ」〈①風や雨などが突然に勢いよく吹いたり降ったりする音。また、そのさま：149〉のフランス語は、**un bruit de ressac** 〈磯波、逆波、砕ける大波の音〉であり、「どっ」〈多人数が一度に声をあげるさま、高く笑うさまを表わす語。どつとど。どと。〉のフランス語は、**un énorme éclat de rire** 〈甚だしい爆笑〉である。どちらも、原文のオノマトペが「音」や「声」を示すことを、**un bruit** 〈音〉や **éclat de rire** 〈爆笑〉というような名詞句で訳し、それがどのような音声であったのかを、さらに名詞や形容詞で具体的に表していると言える。

また、唯一名詞として現れたオノマトペ「ぶちぶち」は、特異な使われ方をしたものであり、ここでは、淵の水面で多量に激しく跳ね続けている大きな雨粒のことを指していると思われるが、フランス語では **de remous** 〈いくつかの渦〉と表されており、描写されている出来事は異なるが、原文の名詞「ぶちぶち」が名詞句で訳されていることがわかる。

5.3.5 前置詞句

前置詞句に訳されたオノマトペは、「音」「声」「さま」「音・さま」「音・声・さま」を表す。

(62) 一郎は急いでごはんをしまうと、椀をこちこち洗って、

Ichiro se dépêcha de terminer son petit déjeuner, rinça à la hâte son bol

(63) と思ったらすぐそのあとから佐太郎だの耕助だのどやどややってきました。

Tout de suite après arrivèrent en bande Sataro, Kosuke, d'autres encore.

(64) 三郎もみんな知っていて、みんなどんどん歌いました。

Matasaburo lui aussi connaissait toutes ces chansons, et il les chanta sans hésitation.

(65) 運動場を出るときその子はこっちをふりむいて、じっと学校やみんなのほうをにらむようにすると、またすたすた白服の大人について歩いて行きました。

Une fois hors du terrain, l'enfant tourna la tête en arrière et parut fixer des yeux l'école et tous les enfants, puis il se remit à marcher à pas vifs derrière l'homme vêtu de blanc.

(66) 胸を一ぱいはって、息をふっと吹きました。

il dilata sa poitrine puis expira avec force.

「こちこち」〈かたいものをたたく音。また、かたいもの同士が軽くふれ合う音。また、かたいもの同士が軽くふれ合う音：124〉にあたるフランス語は、*à la hâte* 〈大急ぎで〉であり、「どやどや」〈多人数が集まり騒ぐさま、また、多人数が一時に騒がしく出入するさまを表わす語。〉にあたるフランス語は、*en bande* 〈集団で〉である。どちらの例においても、仏語訳では、「音」や「声」までは読み取れない。

「どんどん」〈③ものごとが勢いよくとどまることなく進むさま。ためらわないで事を進めるさま：309〉にあたるフランス語は、*sans hésitation* 〈遠慮なく〉であり、「どんどん」の「さま」が表されている。

一方、「すたすた」〈②足どりも軽く、うしろも見ずに、歩いてゆくさま：397〉にあたるフランス語は、*à pas vifs* 〈生き生きした、活発な歩みで〉であり、「ふっ」〈①口をすばめて息を吹く音。吹き出して笑ったりする声。また、そのさま：397〉にあたるフランス語は、*avec force* 〈力を込めて〉である。どちらの前置詞句も、訳語そのものの意味合いには、音声の情報が含まれていないが、前述の動詞 *marcher* 〈歩く〉や *expira* 〈息を吐いた〉を修飾することで、「音」「声」を想像することが可能になっている。

5.4 フランス語に訳出されないもの

フランス語に翻訳されなかった日本語オノマトペは、「さま」「音」「音・さま」「声・さま」を表すものであった。まず、原文のオノマトペが「さま」を表す例を挙げる。

(67) 空がくるくるくるっと白く揺らぎ、草がバラッと一度にしづくを払いました

Alors le ciel faisait vaciller ses grandes masses blanches et les herbes s'égouttèrent tout d'un coup.

(68) すると三郎はすっかり顔を赤くしてしばらくもじもじしていましたが、

Saburo, le visage rouge, resta tout bête un moment :

「くるくるくるっ」は、「くるくる」〈②ものが円を描いて移動するさま：106〉に基本要素 {くる} をもう一度繰り返して、促音付加したオノマトペである。仏語訳では、原文の「くるくるくるっ」にあたる語句は見当たらず、*le ciel faisait vaciller ses grandes masses blanches* 〈空が大きな白い塊を揺らめかせていた〉と訳されている。よって、どのような動きで揺らめかせていたのかという具体的な描写がない。さらに、「くるくるくるっ」は、「反復×3／促音付加」という特異な形式によって、円を何度も繰り返し描きながら揺らぐさまである〈反復性〉と、動きが急に始まったさまである〈急転性〉のニュアンスを持つものである。しかし、仏語訳には、原文のオノマトペが特異な形式であることのみならず、〈反復性〉や〈急転性〉のニュアンスも訳出されていないと判断できる。

また、「すっかり」は、〈①残るところなくすべてにわたるさま。ことごとく：207〉を意味し、基本要素 {すか} に「促音挿入／り付加」したオノマトペである。例文では、三郎

が顔全体を赤らめていることを示している。フランス語では、**Saburo, le visage rouge**〈三郎は顔を赤くして〉と訳されており、「すっかり」にあたる語句がないことがわかる。よって、フランス語では、顔全体まで赤くしているのか、頬のみ赤くしているのか、言及されてはいない。さらに、原文では「促音挿入／り付加」の形式によって、顔を赤らめている状態で留まっている〈滞留性〉や、赤らめ始めてからそのさまが完了した〈完結性〉のニュアンスがある。が、フランス語には、〈滞留性〉や〈完結性〉のニュアンスも訳されていないと言える。

次に、原文のオノマトペが「音」「音・さま」を表す例を見る。

(69) するとまもなく、ぼおというようなひどい音がして水はむくっと盛り上がり、それからしばらくそこらあたりがきいんと鳴りました。

Tout de suite après, un grand bruit sourd se fit entendre, de brusques remous soulevèrent l'eau et les environs résonnèrent un bon moment.

(70) 向こうの少し小高いところにてかてか光る茶いろの馬が七匹ばかり集まって、しっぽをゆるやかにばしゃばしゃふっているのです。

Plus loin sur une petite butte, sept chevaux à la robe brune et luisante étaient rassemblés, balançant doucement leur queue.

「きいん」は、〈金属的で、鋭く、耳にひびくようなかん高い音。また、そのような声〉を示す、長音挿入されたオノマトペである。仏語訳では、「きいん」にあたる語句がなく、**les environs résonnèrent un bon moment**〈しばらくの間、あたりが鳴り響いた〉となっている。そのため、「きいん」のように、金属的でかん高い音になっていたということは、フランス語には訳出されていない。また、「きいん」は長音挿入によって、その音に〈延長性〉や〈持続性〉のニュアンスがあることを表している。フランス語では、聞こえてくる「音」に〈延長性〉や〈持続性〉といったニュアンスがあったことは読み取れないが、原文の「しばらく」にあたる **un bon moment**〈しばらくの間〉によって、**résonnèrent**〈鳴り響いた〉ことが一瞬ではないことが示唆され、音が響き続けている〈延長性〉や〈持続性〉があることを表現しようとしたと考えられる。

また、「ばしゃばしゃ」は、〈水面などをたてつづけにたたいたり、水が物に打ち当たって飛び散ったりする音を表わす語。〉を意味し、基本要素 {ばしゃ} を繰り返した「反復×2」の形式のオノマトペである。この例文では、馬が尾を何度も振り続けている音や、そのさまを表している。フランス語では、**balançant doucement leur queue**〈尾をゆっくり振り動かしながら〉であり、「ばしゃばしゃ」の「音」は感じられない。また、「ばしゃばしゃ」には、「音・さま」の〈反復性〉のニュアンスがあるが、フランス語においても、〈振り動かしながら〉ということは、何度も振っていることが示唆されることから、〈反復性〉のニュアンスは表されているとみなせる。

最後に、原文のオノマトペが「声・さま」を表す例を見る。

(71) 庄助は変な顔をしてみえています。みんなはどっとわらいました。

Shosuke le suivit des yeux, interloqué. Tout le monde rit.

「どっ」は、〈①大勢が一度に声をあげたり、高笑いする声。また、そのさま：294〉を示す。フランス語では、*Tout le monde rit*〈みんなが笑いました〉と訳されていることから、笑っていることは表されてはいるが、「どっ」にあたるフランス語は見当たらない。また、「どっ」は基本要素のオノマトペであり、促音によって、その場にいた大勢に人が急に笑い出す〈急転性〉のニュアンスがある。一方、仏語訳では、〈急転性〉も感じることはできない。

本節では、「さま」を表すオノマトペがフランス語に訳されない例があり、フランス語版では、日本語オノマトペの意味のみならず、「反復×3／促音付加」や「促音挿入／り付加」といったオノマトペの形式が持っているニュアンスが表現されていないと判断した。さらに、「音」「音・さま」を表すオノマトペが仏語訳されない例においては、原文のオノマトペがどのような「音」であるのか具体的に訳出されていないため、原文と同じような「音」を感じることはできないが、オノマトペの形式による〈滞留性〉や〈持続性〉、〈反復性〉のニュアンスは翻訳しようとしているとみなせるものであった。

「音」「音・さま」のように「音」が含まれる擬音語の方が、オノマトペの形式のニュアンスを訳するのがより容易であり、「さま」のみを表す擬態語は、やはり、フランス語で表現するのが困難でありそうであることが示唆される。

6 『風の又三郎』のオノマトペと仏語訳についての総括

以上、1. から 5.4 を整理すると、『風の又三郎』のオノマトペについて言えることは、次の通りである。

- [1] オノマトペの総数が 282 件であり、第 1 類が 9 件 (3.2%)、第 2 類が 269 件 (95.4%)、第 3 類が 4 件 (1.4%) あり、ほとんどが基本要素から加工と展開のものであった。もっとも多く見られた形式は「×2系」であり、基本要素が孤立した「X」が次いだことがわかった。また、「×2系」を展開したものとして、「X×3」「X×4」という 2 つの形式が見られ、繰り返しのオノマトペが多いことが指摘でき、さらに、「挿入系」には、促音挿入の「AっA」、長音挿入の「Aーっ系」「Aーん系」「Aーん×2系」という 4 つもの形式が観察され、そのうち長音挿入の形式のオノマトペの方が使用されていることも明らかになった。

- [2] 漢語由来のオノマトペを除いた日本語オノマトペ280件のうち、「さま」を表すオノマトペ、擬態語が188例と過半数を占めた。単語だけで訳出されるものと、句を用いて訳出されたものの総数は、大体同じであった。
- [3] フランス語に大変よく訳されていると評価できる日本語オノマトペのニュアンスは、〈反復性〉であり、反対に、あまり訳しきれていなかったニュアンスは、〈急転性〉〈一区切り性〉〈滞留性〉〈時差性〉〈余韻性〉であった。
- [4] 特異と思えるオノマトペ、もしくは特異な使われ方をしていると思えるオノマトペは、「どう」「どっどど どどうど どどうど どどう」「ざっこざっこ」「どっこどっこ」「しろしろ」「だあんだあん」「ビルル」「ビルルッ」「ビルルル」「ぶちぶち」「もくもく」「わくわく」である。これらのうち、「わくわく」は方言性があり、「しろしろ」は古態性や方言性があるものであり、宮沢賢治が創造したものではなかった。また、上記2例以外の宮沢賢治独自のオノマトペの仏語訳出について評価すると、大半の場合は、原文のオノマトペのニュアンスを、表現しようとされていた。
- [5] 漢語由来のオノマトペは、「しんしん」と「もうもう」が見られ、「もうもう」は、その意味とオノマトペのニュアンスの両方が仏語訳されていた。
- [6] フランス語オノマトペとして訳出されたものは、Dzz-dzdz や、Schtt! Schtt! など11件あり、日本語のオノマトペの形式は、基本要素が単独で出現した「どう」や長音付加の「しゅう」といった繰り返しのないものもあるが、フランス語ではすべて、2モーラ以上のオノマトペに訳されており、原文のオノマトペの形式のニュアンスとは異なるニュアンスを訳語が持っている例も見られた。
- [7] 原文の日本語のオノマトペが、フランス語に訳されていない例が計32例あり、それらは「さま」「音」「音・さま」「声・さま」を表すものであった。そのうち、「くるくるくるっ」「すっかり」のように日本語のオノマトペが「さま」を表す擬態語は、音声を表すオノマトペと比較して、出来事の描写とオノマトペの形式のニュアンスの両方を訳出することは、より困難であると結論づけられる。

以上、第2部では、『ゼロ弾きのゴーシュ』、『銀河鉄道の夜』、『風の又三郎』の原文と仏語訳を、作品ごとに調査した。

第3部では、第2部で取り上げた3つの童話を総体として、日本語オノマトペの形態的パターンごとに仏語訳を分析していく。

第3部 日本語オノマトペの仏語訳

第1章 宮澤賢治のオノマトペの仏語訳の評価基準

1 翻訳の定義と翻訳の評価基準

ここからは、日本語オノマトペの仏語訳を評価していく。そのために、まず、翻訳とは何を目指しているものなのかを、確認しておきたい。そこで、以下に、代表的な翻訳論における翻訳についての所見を取り上げる。

Benjamin, W. (1921) は、翻訳は原作を読めない読者のために行われるものなのか、そもそも原作は読者のために書かれたのか、原作が読者を想定して書かれたのでなければ翻訳もまた読者のためになされるものではないはずではないか、という疑問から出発した。翻訳とは、純粋言語を志向して行われるものであり、翻訳者の使命は、純粋言語の種子を成熟させることにあるとした。さらに、翻訳には、元の言語との文化的な差異を感じさせない「同一性の倫理」と、元の言語の文化の独自性が保持された「差異性の倫理」という立場があるとした。ベンヤミンの翻訳論は、ボードレールの詩篇の翻訳を前提に構築されたものであり、散文や詩的要素を含む文学作品に、より効果的であると考えられる。²¹

また、Jakobson, R. (1959) は、翻訳を「言語内翻訳」「言語間翻訳」「記号法間翻訳」の3つに分類している。「言語内翻訳」は、あるテキストを同じ言語内において解釈すること、すなわち、言い換えを指す。「言語間翻訳」は、あるテキストを起点言語から目標言語で解釈することである。「記号法間翻訳」は、ことば、音、映像、絵画などを全て記号とみなし、ある記号を別の記号によって解釈すること、つまり、移し換えを意味する。ヤコブソンが意図するところの翻訳とは、広義の翻訳のことであり、「言語間翻訳」が狭義の翻訳を指す。「言語内翻訳」の延長線上に「言語間翻訳」を捉えると、同一言語内で言い換えられるように、言語をまたぐ場合でも翻訳は可能であるということになる。また、翻訳をコミュニケーション行為として捉えると、翻訳は単なる異言語間の変換行為ではないとした。²²

Coseriu, E. (1978) は、翻訳について、次のように見解した。ドイツ語原文と岸谷敏子による日本語訳を引用する。

Die Aufgabe der Übersetzung ist es nun, in sprachlicher Hinsicht, nicht die gleiche Bedeutung, sondern *die gleiche Bezeichnung und den gleichen Sinn* durch die Mittel (d.h.eigentlich durch die *Bedeutungen*) einer anderen Sprache wiederzugeben. (...) Das Problem beim Übersetzen ist in dieser Hinsicht das Problem der identischen Bezeichnung mit verschiedenen Sprachmitteln, d.h. nicht etwa "Wie übersetzt man

²¹ Jakobson, R. (1959). On linguistic aspects of translation. In L. Venuti (Ed.). (2004). *The translation studies reader*. 2nd edition : 138-143.

²² Benjamin, W. (1972). *Die Aufgabe des Übersetzers: Gesammelte Schriften Band IV.1.* (herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser) Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. 「翻訳者の使命」(内村博信訳)(浅井健二郎 他 編訳 (1996) 『ベンヤミン・コレクション 2』 筑摩書房

diese oder, jene Bedeutung dieser Sprache ?", sondern "Wie nennt man den gleichen Sachverhalt bzw. Tatbestand in einer anderen Sprachen in der gleichen Situation?"²³

翻訳の任務とは何か。言語の面で言えば、それは、同一の意味ではなく、同一の素材関連と同一の意義とを、別の個別言語の手段（すなわち本来は、その個別言語の意味）によって、再現することである。（中略）翻訳行為のさいの問題とは、要するに、異なる言語手段を同一の素材に関連させることの問題である。すなわち、「この言語のあれやこれやの意味を、どのように翻訳するか」というようなことではなく、「これと同じ事柄ないし事実を、これと同じ場面において、別の言語ではどう表すか」ということが問題なのである。²⁴

岸谷徹子訳が指すところの、「素材関連 (*Bezeichnung*) 」とは、「言語外の「こと」、言語外の「事柄」や「事実」、ないし言語外の表現意図自体との、対応関係」であるとされる。一方、「意義 (*Sinn*) 」とは、ひとつのテキストが持っている「特別な内容」とされる。

すなわち、「素材関連」とは、オノマトペが表わしている指示対象あるいは「出来事」そのものを指し、「意義」とは、当該オノマトペが、その出来事ごとに持つ、特別なニュアンスを指すと解することができる。

そこから考えると、翻訳とは、他言語での語や句以上によって産出される数々の意味を通じて、「等価の表象 (出来事) (*Bezeichnung*) 」と「等価の意義 (*Sinn*) 」とを再生することだと理解することができる。つまり、元の言語の語や句以上が示す、「出来事」を誤解せずに適切な語句を選択することに加え、付随する「ニュアンス」を理解し言語化するという過程が必要になるのである。

また、元の言語の「出来事」を他の言語に翻訳するとき、元の言語の「意味 (*Bedeutung*) 」から他の言語の「意味 (*Bedeutung*) 」を当てはめるのではなく、元の言語の「表象 (*Bezeichnung*) 」と等価な他の言語の「表象 (*Bezeichnung*) 」を見つけて、それを表すことができる表現 (語または句以上) (*Bedeutungen*) を選択することが重要だとされる。

日本語のオノマトペは、「出来事」を表すだけでなく、オノマトペの型によって、様々な「ニュアンス」が付随されることが特徴である。言い換えれば、原文のオノマトペが表す意味は、日本語のなかで「出来事」と「ニュアンス」とに分解される。これを他の言語に訳す場合には、「出来事」と「ニュアンス」の双方を同等に再生することが、求められる。また、

²³ Coseriu, E. (1978), Falsch und Richtig Fragestellungen in der Uebersetzungstheorie. TeXto! [online], Juni 2006, vol. XI, n°2 : 4

²⁴ Coseriu, E. (1978), Falsch und Richtig Fragenstellungen in der Uebersetzungstheorie, Theory and Practice of Translation, Verlag Peter Lang (岸谷徹子訳「翻訳論における誤った設問と正しい設問」諏訪功他訳 1983 『コセリウ言語学選集 4 ことばと人間』三修社) : 318-319

「出来事」を訳すにあたって、他の言語において「出来事」を表すことができる語や句以上が選ばれることは、本論文の第2部で実例を比較した結果においても同様であった。

したがって、

- 翻訳の使命とは、翻訳対象となっている言語がもともと持っていた「出来事」と「ニュアンス」を、別の言語において、同等に再現することであり、さらに、
- 「出来事」を翻訳する言語に移すとき、直接、その言語の意味に引き当てられるのではなく、元の言語の表象と等価な表象を見つけて、それを表すことができる表現（語または句以上）を選択する

と述べるコセリウの所論は、日本語オノマトペと他の言語の訳とを対比するにあたって、もっとも相応しいと判断し、本見解を援用することにする。

これを、宮澤賢治のオノマトペに即して言えば、それが、「指示対象（出来事）」と「特別なニュアンス」の両側面から、フランス語に再現しえているのかが、評価のポイントとなる。そのような観点から、宮澤賢治オノマトペの仏語訳出を見ていくことにしたい。

そして、その際、翻訳対象となった原典におけるオノマトペの、「指示対象（出来事）」と「特別なニュアンス」が、翻訳先となる言語において、どれぐらい再現可能なのかという観点で、訳文を評価していくことにする。

以上の観点から、次章以降では、日本語オノマトペで表わされている出来事が、ニュアンスとともに訳されているのかという点に着目しながら、仏語訳を見ていく。日本語オノマトペのニュアンスは、第2部で取り上げたような、オノマトペ独自の形式によって醸し出されるものであった。よって、仏語訳も、日本語オノマトペの形式ごとに評価していくこととする。日本語オノマトペとそれに対応する仏語訳は、作品ごとではなく、第2部で調査対象とした『セロ弾きのゴーシュ』、『銀河鉄道の夜』、『風の又三郎』の3作品全体を通じたかたちで把握していくことにする。

第2章 基本要素末の促音と促音付加・挿入の仏語訳

1 オノマトペ末の促音

1.1 基本要素末にある場合

3作品に出現した基本要素末に促音があるオノマトペのうち、「音」「声」を単独で表すものはなく、音声の情報に関わるものは「音・さま」「声・さま」「音・声・さま」を表すものであった。以下、順に見ていく。

基本要素の末に促音があり、「音・さま」を表すオノマトペのうち、〈一区切り性〉のニュアンスがあるものはなく、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスがあるとみなせるものであった。それらの日本語オノマトペと、その仏語訳は次の通りである。

「音・さま」

- ざっ un bruit de ressac 〈磯波、逆波、砕ける大波の音〉→144頁参照。
aspergea 〈...に水をかけた〉→新規補足。
- ぎよっ étonnement 〈驚き〉→新規補足。
- どっ s'engouffra 〈吹き込んだ、流れ込んだ〉→新規補足。
- ばっ un grand coup 〈大きな一撃〉→新規補足。
très fort 〈非常に強く、強烈に、激しく〉→新規補足。

これらの仏語訳はすべて、日本語オノマトペが表す出来事を、翻訳できている。しかし、このうち、仏語訳に〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスが見出せるものはない。〈一区切り性〉のニュアンスが見られたものは、「ざっ」の仏語訳 un bruit de ressac 〈磯波、逆波、砕ける大波の音〉と、「ばっ」の仏語訳 un grand coup 〈大きな一撃〉である。この二つは、もとのオノマトペ末の促音は〈瞬間性〉や〈急転性〉のニュアンスを持つものであったが、仏語訳されることで、もとのニュアンスが消失し、〈一区切り性〉というもうひとつの促音末のニュアンスが表されたということであると考えられる。その他の仏語訳には、促音のニュアンスが表現しきれていないと言える。

基本要素末に促音があり、「声・さま」を表すオノマトペには、〈一区切り性〉のニュアンスがあるものはなく、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスがあるとみなせるものがあつた。それらの日本語オノマトペと、その仏語訳は次の通りである。

「声・さま」

- くっ Cou...! →新規補足
- どっ éclata de rire 〈爆笑した、噴き出した〉→142頁参照。
un énorme éclat de rire 〈甚だしい爆笑〉→144頁参照。

これらの仏語訳はすべて、日本語オノマトペで表現されている出来事を翻訳することができている。「くっ」は、カッコウの鳴き声であり、その仏語訳 *Cou...!* は〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスも訳されている。が、「どっ」の仏語訳 *éclata de rire* と *un énorme éclat de rire* は、語源を同じくする *éclater de rire* 〈爆笑する〉、*un éclat de rire* 〈爆笑〉という語句が見られるが、原文の促音の〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスは、訳出されていない。

基本要素末に促音があり、「音・声・さま」を表すオノマトペは1例のみであり、〈急転性〉と〈一区切り性〉のニュアンスはなく、〈瞬間性〉のニュアンスがあるものであった。その日本語オノマトペと、仏語訳は次の通りである。

「音・声・さま」

ふっ *avec force* 〈力を込めて〉→145頁参照。

「ふっ」の仏語訳は *avec force* であり、出来事を翻訳することができている。また、力を込めて息を吐いて区切りがついたことによる〈一区切り性〉が指摘できる。しかし、原文の促音による〈瞬間性〉は表現されていないとみなされる。

次に、3作品に出現した基本要素の末に促音があるオノマトペのうち、「さま」を表すもの、すなわち擬態語であるものの日本語オノマトペと、その仏語訳の例を以下に挙げる。

「さま」〈瞬間性〉〈急転性〉

さっ ふっ ぱっ *brusquement* 〈突然、不意に、いきなり〉→新規補足。

きっ *se redressa* 〈姿勢を正した、胸を張った；毅然とした〉→62頁参照。

さっ *soudain* 〈突然〉→新規補足。

ぱっ *d'un seul coup* 〈(成句) 一挙に、一度に；突然〉→新規補足。

soudain plus vive 〈突然〔光、色などが〕より強烈な、鮮明な、きつい〉
→新規補足。

これらの仏語訳はすべて、日本語オノマトペが表す出来事を、翻訳することができていた。「さっ」「ふっ」「ぱっ」の訳に、 *brusquement* が共通して出現した。また、「さっ」「ぱっ」の別の例では、 *soudain* が使用されていた。「さっ」「ふっ」「ぱっ」の仏語訳においては、出来事が突然起こることが表せていることから、促音の〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスも、翻訳することができていると言える。しかし、厳しい表情や瞬時にある態度になるさまを表す「きっ」の仏語訳 *se redressa* は、促音による〈瞬間性〉と〈急転性〉を翻訳できているとは言えない。

「さま」 〈一区切り性〉

きつ *avec force* 〈力を込めて〉 →新規補足。

そつ *avec précaution* 〈注意して、注意深く（成句）〉 →新規補足。

délicatement 〈そつと、軽く；慎重に〉 →61頁参照。

doucement 〈静かに、そつと、穏やかに〉 →新規補足。

「きつ」「そつ」の仏語訳は、前置詞 *avec* 〈...を伴って〉に無冠詞名詞が続く前置詞句と、単独の副詞であった。また、「きつ」の仏語訳には、基本要素の末に促音があり、「音・声・さま」を表す「ふっ」の訳と共通の *avec force* が見られたことにも気がつく。上記すべての例において、日本語オノマトペが表す出来事を、翻訳することができていた。また、両オノマトペは、動作が終了してから区切りがつく〈一区切り性〉のニュアンスがあるものである。

「さま」 〈固定性〉

きつ *étroitement* 〈きつく、固く〉 →新規補足。

fermement 〈堅固に、しっかりと〉 →新規補足。

pincées 〈締めつけた、きつく結んだ〉 →101頁参照。

じつ *attentivement* 〈注意深く〉 →新規補足。

bien campé 〈しっかりと据えられた、固定した〉 →143頁参照。

en fixant 〈じつと見詰めながら、見据えながら〉 →新規補足。

en guettant 〈...をつけねらいながら、見張りながら、待伏せしながら〉
→新規補足。

fixait 〈...をじつと見詰めていた、見据えていた〉 →新規補足。

fixant 〈...をじつと見詰めながら、見据えながら〉 →新規補足。

fixés 〈固定された、動かない〉 →143頁参照。

fixement 〈...をじつと、目を凝らして〉 →99頁参照。

fixer 〈...をじつと見詰める、見据える〉 →新規補足。

fixèrent 〈...をじつと見詰めた、見据えた〉 →新規補足。

immobile(s) 〈動かない、不動の〉 →新規補足。

les yeux rivés 〈釘づけになった目〉 →新規補足。

sans ciller 〈まばたきせずに〉 →新規補足。

視線を定めて見つめるさまを表す「じつ」、唇をきつく締めるさまを表す「きつ」には、〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉というよりは、ある状態に定まって動かずに保っているというニュアンスがあるように思われる。そこで、これを〈固定性〉と名付けることにする。

「じっ」の仏語訳は、種類が多く見られた。しかし、アルファベット順に並べると、パターンがあることに気がつく。

まず、*fixer*〈…をじっと見詰める、見据える〉の不定形および活用形、現在分詞である *fixant*、過去分詞である *fixé(s)*、副詞である *fixement* というように、動詞の *fixer* と、*fixer* と語源を共にする語が多用されていた。これらのうち、動詞 *fixer* の不定形および活用形、*fixé(s)* の前後には、*des / les yeux* 〈目〉や *son regard* 〈彼の視線〉/*leurs regards* 〈彼らの視線〉などが併用されている例が見られた。また、副詞の *fixement* が用いられていた例すべてにおいて、*regarder* 〈…を見る〉といった動詞の活用形や *tenir son ses prunelles* 〈眼差しを保つ〉といった動詞句が伴っていた。*fixer* は、〈…を固定する、据え付ける、はめ込む；定着させる〉という意味合いがある動詞であり、前後の語句と関連し、視線を固定させるという事象を表す場合においては、〈…をじっと見詰める、見据える〉という意味で使用されていることがわかる。訳文に現れた *fixer* と、*fixer* と語源を共にする語は、「じっ」が表す出来事と、〈固定性〉のニュアンスの両方を訳出することができている。

次に、目や視線の様子を示した語である、*bien campé*、*immobile(s)*、*les yeux rivés*、*sans ciller* が使用されている。原文には「じっ」が多く見られたが、フランス語の特に文語では、同じ語句を何度も使用することが憚られるという傾向があるため、*fixer* とそれと語源を共にする語を頻繁に使用することを避けるために、上記の語句が使用されたと考えられる。これらの語句も、「じっ」の出来事のみならずニュアンスも表されている。最後に、見ている時の態度を示す語である *attentivement*、*en guettant* が用いられた。どちらも用心深く凝視するさまが描写されていることから、これらも「じっ」が表す出来事と〈固定性〉のニュアンスを訳出することができているとみなしうる。

一方で、「きっ」の仏語訳は、*étroitement*、*fermement*、*pincées* である。どれも、唇を固く結んでいることを示していることから、「きっ」の表す出来事および〈固定性〉のニュアンスの両方を表現することができていると言える。

1.2 基本要素に付加された場合

3 作品に出現した基本要素に促音付加したオノマトペのうち、音声に関わるものは「音」「音・さま」「声・さま」を表すものであった。以下、順に見ていく。

「音」 〈瞬間性〉 〈急転性〉

ぶるっ *un son tremblé* 〈ひとつの震音〉 →112頁参照。

「ぶるっ」は馬が鼻を鳴らして出す一瞬の音を表し、前述の「馬屋のうしろのほうで何か戸がばたっと倒れ」たことによって、驚いて鳴らした音であることがわかる。仏語訳 *un son tremblé* は馬がひとつの震音を出したことを示し、また扉が倒れた音に反応して鼻を鳴らしたことが描写されている。よって、「ぶるっ」が表す出来事を表すことができている。*un son*

tremblé からは「ぶるっ」の促音が持つ〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスが読み取れ、さらに、不定冠詞 un 〈ひとつの〉によって、震音が一度鳴るという〈一回性〉のニュアンスが表されているように考えられる。

「音・さま」〈瞬間性〉〈急転性〉

シュッ schuut! →42頁参照。

ばたっ lourdement 〈全重量をかけて、力いっぱい〉→新規補足。

un grand bruit 〈ひとつの大きな音〉→112頁参照。

ばたっ Clac! →55頁参照。

これらは、原文のオノマトペが表す出来事は翻訳できていたものである。しかし、オノマトペの〈瞬間性〉や〈急転性〉のニュアンスが表現できていたものは、手を叩く「ばたっ」の仏語訳 Clac! のみであった。マッチを舌でする「シュッ」の仏語訳 schuut!、戸が倒れる「ばたっ」の仏語訳 lourdement と un grand bruit においては、〈瞬間性〉や〈急転性〉のニュアンスが感じられない。が、un grand bruit は、音が一度鳴って一区切りついたという〈一区切り性〉のニュアンスが、不定冠詞 un 〈ひとつの〉によって表されているように思える。これも、原文の促音が持つ〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスとは異なる、〈一区切り性〉というもうひとつのニュアンスが、翻訳されることで表されたと考えられる。

「声・さま」〈急転性〉

くすっ pouffer de rire 〈(思わず) 噴き出す〉→新規補足。

pouffer de rire の pouffer は、墜落や破裂の音「どしん」「どかん」などを表す pouf というオノマトペから由来していると考えられている動詞である。「くすっ」は〈少し笑う際にほんの少しもれる声。また、そのさま〉を表すのに対し、pouffer de rire は、堪えかねて思わず笑い出すさまを表し、原文と仏語訳では、笑いや笑い声の大きさが少し異なっていると言える。しかし、「くすっ」の〈急転性〉のニュアンスは、仏語訳においても表現することができているとみなせる。

次に、3作品に出現した基本要素に促音付加したオノマトペのうち、「さま」を表すもの、すなわち擬態語であるものの日本語オノマトペと、その仏語訳の例を以下に挙げる。

「さま」〈瞬間性〉〈急転性〉

ぎらっ de brefs éclairs 〈(時間的に) 短い、束の間の(宝石などの) きらめき、閃光〉→新規補足。

ぐるっ contourna très vite 〈非常に早く迂回した〉→新規補足。

- ちらっ **en un clin d'œil** 〈(成句) 一瞬のうちに、またたく間に〉→新規補足。
rapide 〈素早い、迅速な、時間のかからない〉→113頁参照。
très vite 〈非常に早く〉→新規補足。
- どきっ **en sursautant** 〈思わず飛び上がりながら〉→42頁参照。
 ぴたっ **brusquement** 〈突然、不意に、いきなり〉→43頁参照。
hop! →73頁参照。
- ひらっ **en un éclair** 〈一瞬のうちに〉→新規補足。
 ぽかっ **d'un coup** 〈(成句) 一挙に、一度に；突然〉→74頁参照。
 むくっ **de brusques** 〈突然の、急激な、不意の〉→新規補足。

上記の仏語訳は、オノマトペが示す出来事を表せていた。また、オノマトペの促音は〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスを持つものである。フランス語は、時間の短さや動作が一瞬であったことを表す語や語句である **brefs** 〈(時間的に) 短い、束の間の〉、**brusques** 〈突然の、急激な、不意の〉、**brusquement** 〈突然、不意に、いきなり〉、**très vite** 〈非常に早く〉、**rapide** 〈素早い、迅速な、時間のかからない〉や、**d'un coup**、**en un clin d'œil** といった成句が見られ、原文の促音の〈瞬間性〉および〈急転性〉のニュアンスも訳出することができている。

- ぐるっ **un grand cercle** 〈ひとつの大きな円〉→112頁参照。
 ぞくっ **un frisson** 〈(寒さ、悪寒による) 震え、身震い〉→新規補足。
 びくっ **un léger mouvement** 〈ひとつの軽い動き〉→新規補足。
 ひらっ **d'un bond léger** 〈軽い一飛びで〉→新規補足。
 にやっ **un petit rire** 〈ひとつの小さな笑い〉→新規補足。

「にやっ」の仏語訳には、**sourire** 〈微笑み〉ではなく **rire** 〈笑い〉が現れたことから、声を出さないで意味ありげに微笑む「にやっ」と仏語訳の出来事は若干の違いがあるように感じる。それ以外の4例においては、原文のオノマトペの出来事を、表すことができていた。ニュアンスについて比較する。一瞬身の震えるさまの「ぞくっ」と「びくっ」は、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスを持つものである。また、人が飛び上がるさまの「ひらっ」、ひと巡りするさまの「ぐるっ」、意味ありげに微笑む「にやっ」の3つのオノマトペは、動作が終わって区切りがつく〈一区切り性〉のニュアンスがある。仏語訳を見ると、すべて名詞に不定冠詞 **un** 〈ひとつの〉がついており、動作をひとつの動きと捉えて、動きが終わり一区切りついた〈一区切り性〉のニュアンスを表していると考えられる。よって、「ひらっ」「ぐるっ」「にやっ」が持つ促音の〈一区切り性〉のニュアンスまでは、仏語訳することができているが、「ぞくっ」と「びくっ」が持つ促音の〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスは表現できていないとみしうる。

2 オノマトペ基本要素への促音挿入

2.1 単独

促音が単独で挿入された例は、以下の通りである。

「さま」

さっさ *vivement* 〈活発に、勢いよく；素早く、敏捷に〉→114頁参照。

rapidement 〈速く、迅速に、手短かに〉→44頁参照。

「さっさ」は、迷いや気づかいをせずに、すばやく行うさまを示し、仏語訳の *vivement*、*rapidement* も同等の出来事を表すことができていると言える。また、「さっさ」と「ささっ」を比べると、促音挿入の「さっさ」には、動作が開始してから完了するまでに時間の溜めがある〈滞留性〉や〈時差性〉のニュアンスがある。が、仏語訳の *vivement* と *rapidement* はどちらも「ささっ」の訳としても想定されるものであり、〈滞留性〉や〈時差性〉のニュアンスまでをも読み取ることは難しい。よって、促音挿入のニュアンスは、よく翻訳されているとは言えない。

2.2 他の加工との複合「AっBり」

3作品には「AっBり」の形式のオノマトペが見当たらなかった。したがって、ここでは、「AっBり」の仏語訳を見ていく。

「さま」

すっかり そっくり *exactement* 〈正確に、まさしく、ちょうど〉→新規補足。

すっかり *autant de* 〈…と同数の…、同量の…〉→新規補足。

bien 〈確かに、まさに、本当に〉→新規補足。

complètement 〈完全に、すっかり、まったく〉→新規補足。

entièrement 〈完全に、すっかり〉→118頁参照。

extrêmement 〈きわめて、非常に〉→新規補足。

tout à fait 〈完全に、まったく、すっかり〉→78頁参照。

très 〈非常に、とても、たいへん〉→新規補足。

はっきり *clair* 〈〔音、声が〕よく通る、明瞭な；音程の高い〉→新規補足。

clairement 〈はっきりと、明確に〉→新規補足。

distincte 〈別の、はっきり異なる〉→新規補足。

distinctement 〈はっきりと、明瞭に、明確に〉→新規補足。

forte et claire 〈力強く明瞭な〉→78頁参照。

plus précis 〈より〔表現、印象などが〕明確な、鮮明な；的確な、ぴったりの；簡明な〉→新規補足。

びっくり *avait extrêmement étonné* 〈きわめて、非常にびっくりした、驚いた〉
→新規補足。
avait l'air (vraiment) surpris 〈(本当に) 驚いた様子で〉 →新規補足。
avec étonnement 〈驚きをもって〉 →新規補足。
surprise 〈不意を突かれた、驚かされた、当惑させられた〉 →48頁参照。

残るところなくすべてにわたるさまを示す「すっかり」と、きわめてよく似ているさまを示す「そっくり」の仏語訳に共通して用いられているものとしては、*exactement*が、指摘できた。その他の「すっかり」の訳は、*complètement*、*entièrement*、*extrêmement*、*tout à fait*、*très* といった絶対的な観念を表す副詞や副詞句が見られた。「すっかり」と「そっくり」の出来事の翻訳はできているとみなせる。

他との区別が明らかで、あざやかに認識できるさまを示す「はっきり」の仏語訳には、*clair*とその副詞の *clairement*、また、形容詞 *forte* 〈力強い〉を加えた *forte et claire*というパターン、*distincte* とその副詞の *distinctement* というパターンが見られた。これらの仏語訳は、見聞きして明らかに識別できることを表していることから、「はっきり」が表す出来事を表現することができていた。

また、不意の出来事、意外なことに驚きあわてるさまを示す「びっくり」の仏語訳には、*étonné* とその副詞の *étonnement* を用いた、*avait extrêmement étonné*、*avec étonnement* のパターンと、*surpris(e)*の単独、*surpris* を用いた *avait l'air (vraiment) surpris* のパターンが見られた。これらは、「びっくり」が表す出来事を表せていた。

次に、促音挿入のニュアンスについて見る。「びっくり」の仏語訳においては、驚いているという状態を表しており、それらには、驚き始めてからそのままの状態であるというある程度の〈滞留性〉が示唆される。よって、「びっくり」の仏語訳は、促音挿入の〈滞留性〉のニュアンスを訳出することができていると言える。これは、原文の「びっくり」が「びっくりした」や「びっくりするように」など、サ変動詞化しているものであったことで、仏語訳も「驚いた」「驚かされた」「驚いた様子で」などと動詞句や形容詞で訳すことが可能であったことが関係していると考えられる。

「すっかり」「そっくり」「はっきり」にあたる仏語訳は、動詞を含まない、語や語句単独によるものであった。したがって、それらの仏語訳のみでは、原文のオノマトペのニュアンスを表すことは困難であるようだ。しかし、前後の動詞や形容詞などを修飾することで、促音挿入の〈滞留性〉のニュアンスが読み取れるようになっていたものがある。例えば、原文の「はっきり」が「はっきりして」のようにサ変動詞化する場合や、「はっきりなって」のように動詞「なる」が続く場合である。

(1) それはだんだんはっきりして、たうたうりんとうごかないようになり、濃い鋼青のそらの野原にたちました。

Leur silhouette devint de plus en plus distincte et, pour finir, ils restèrent rigoureusement immobiles, droits dans les pâturages du ciel d'un bleu d'acier profond.

(2) けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌い出されだんだんはっきり強くなりました。

Cependant, sans qu'on sache exactement quand ni qui l'entonna le premier, le chant fut repris et devint de plus en plus fort et clair.

すぐうしろの天気輪の柱のシルエットが際立ったという出来事の仏語訳は、**devint de plus en plus distincte**〈だんだん鮮明になった〉であり、歌声の音量が徐々に大きくなり、明瞭に聞こえるようになったという出来事の仏語訳は、**devint de plus en plus fort et clair**〈だんだん強く明瞭になった〉である。どちらも動詞 **devint**〈～になった〉とともに使用されており、その動詞を伴うことで、「さま」が変化し始めてからとどまっている〈滞留性〉のニュアンスを感じることができる。一方、「すっかり」の仏語訳 **autant de** のように、促音挿入のニュアンスが訳出されていないと判断できるものもあった。

2.3 日本語オノマトペにおける「っ」のニュアンス

以上のことから、日本語オノマトペ末の「っ」のニュアンスを全体的に整理すると、次のようになる。

オノマトペの基本要素に含まれる場合
〈瞬間性〉 〈急転性〉 〈一区切り性〉
〈固定性〉

基本要素に付加する場合
〈瞬間性〉 〈急転性〉 〈一区切り性〉

基本要素に挿入する場合
〈時差性〉 〈滞留性〉

基本要素の末が促音であるオノマトペは、ほとんどの例において〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉という3つのニュアンスのうち、ひとつを持っている、もしくは、2つのニュアンスを持ち合わせているものであった。これに当てはまらないものは、視線を定めて見つめるさまを表す「じっ」と、唇をきつく締めるさまを表す「きっ」であり、どちらも、ある状態に定まって動かずに保っているという〈固定性〉というニュアンスがあるとみなせた。促音だけのニュアンスというよりは、象徴音としての「じ」や「き」と、促音末が組み合わせられる構成によるものであると考えられる。

基本要素に促音付加しているオノマトペは、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスを持つものが多数であった。その他、「ぐるっ」や「にやっ」は〈一区切り性〉のニュアンスが見られた。

基本要素に促音挿入しているオノマトペ、基本要素に促音挿入／り付加しているオノマトペの促音は、〈時差性〉や〈滞留性〉のニュアンスを表しているものであった。

第3章 基本要素末の撥音と撥音付加の仏語訳

1 オノマトペ末の撥音

1.1 基本要素末にある場合

3 作品に出現した基本要素末に撥音があるオノマトペは、擬音語と擬態語であった。以下、順に見ていく。

「音」

どん *bruyamment* 〈大きな音を立てて、騒々しく〉→61頁参照。

床を強く踏み鳴らす音「どん」にあたる仏語訳は *bruyamment* であり、鳴る音が大きいという出来事を表せている。また、「どん」は、鳴った音が耳に響いている〈余韻性〉のニュアンスがあり、その仏語訳 *bruyamment* においても、騒がしい音が鳴り響くことが示唆されることから、基本要素末の撥音のニュアンスが訳出されていると判断できる。

「さま」

りん *rigoureusement* 〈厳密に、正確に；完全に、まったく〉→新規補足。

「りん」の仏語訳 *rigoureusement* は、まったく動かなくなるさまを示しており、仏語訳においても動きがなくなり姿に張りがあるさまが読み取れる。また、「りん」は、張りがあるさまが続いているという〈持続性〉のニュアンスがあるが、仏語訳では副詞 *rigoureusement* を使用することで、完全に動かなく鳴った状態が続く〈持続性〉のニュアンスが加えられていることがわかる。

1.2 基本要素に付加された場合

撥音による加工が関与するものは、付加のみであり、擬音語と擬態語の場合にわかる。

1.2.2 擬音語

擬音語で基本要素に撥音付加したオノマトペと仏語訳は、次の通りである。

「音」

ぴしゃん *claquer* 〈(体の一部)音を立てる、を鳴らす〉→115頁参照。

ぼろん *un froissement d'ailes* 〈羽のかすかな音〉→新規補足。

「ぴしゃん」の仏語訳 *claquer* は、両手を叩いて音を鳴らすという出来事は翻訳できている。また、撥音付加によって、音が鳴り終わった後に耳に響く〈余韻性〉のニュアンスがうまれている。*claquer* は、戸が閉まる音や鞭や平手で打った時の音を示すフランス語オノマ

トペ *clac* と語源が共通しており、動詞 *claquer* 自体に「音」のニュアンスが含まれているようである。ただ、そのために音の〈余韻性〉があると主張することは難しいと思われはするが、手を叩いて音を出した結果が残っている〈残存性〉のニュアンスは訳出されているとみてよい。

「ぼろん」と *froissement d'ailes* では、鳥が穴を通っておりてくる音と、鳥のはばたきの音というように、描写されている音の印象が異なる。これは、原文の「ぼろん」が特異な使われ方をしていたことが、影響した。また、音の〈余韻性〉〈残存性〉も読み取れるとは言いがたい。

1.2.3 擬態語

擬態語で基本要素に撥音付加したオノマトペとその仏語訳は、次の通りである。

「さま」

がらん *désert* 〈人気がない、人通りの少ない〉→新規補足。

large ouverture 〈広い、大きな（物の）口、穴〉→44頁参照。

vide 〈[場所が]空いている、がらんとした、人がいない〉→74頁参照。

きちん *avec correction d'* 〈...の礼儀正しさをもって〉→103頁参照。

convenablement 〈礼儀正しく、きちんと〉→45頁参照。

correctement 〈正確に、正しく、きちんと、道義にかなって〉→新規補足。

soigneusement 〈念入りに、注意深く、丁寧に〉→75頁参照。

très droit 〈非常にまっすぐに〉→114頁参照。

「がらん」の仏語訳は、オノマトペが表す、大きな空間が目の前にあいたままになっているという出来事を描写できているものであった。何もなく広々としているさまを表す場合の仏語訳は、*large ouverture* であり、空虚でさびしく広いさまを示す場合の仏語訳、*désert*、*vide*とは、区別して翻訳されていることがわかる。いずれの仏語訳も空間が開けているさまが読み取れることから、〈残存性〉のニュアンスを表現することができている。しかし、大きな空間があいた事象が人の心に残るという〈余韻性〉のニュアンスまでは感じられない。

「きちん」の仏語訳も原文が表す、ととのった姿を呈しているという出来事を訳出することができている。語源が共通している *correction*、*correctement* を使用した、*avec correction d'* と *correctement* が見られた。どの仏語訳も、整っているさまが続いている〈残存性〉のニュアンスの翻訳ができているが、整っていることが人の心を打つという〈余韻性〉のニュアンスまでもが、表現されているとは言えない。

第4章 「り」付加の仏語訳

「り」は基本要素に挿入されるものではなく、付加のみが見られる。また、「り」付加のオノマトペで、音や声を示す擬音語の例は見られなかった。擬態語とその仏語訳については、次の通りである。

「さま」

けろり **comme si de rien n'était** 〈何事もなかったかのように〉→46頁参照。

びたり **net** 〈突然、不意に；一挙に。はっきりと、きっぱりと〉
→46、47頁参照。

べろり／ベロリ **longue** 〈長い〉→117頁参照。

prestement 〈素早く、機敏に〉→47頁参照。

「けろり」「びたり」「べろり／ベロリ」が表わす出来事を、上の仏語訳は訳出することができていた。また、「り」は、〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスを持つ。

「けろり」の仏語訳 **comme si de rien n'était** からは平然とした表情になったさまが完了していることが読み取れることから、〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスの翻訳ができています。

楽器を弾くことをやめる「びたり」の仏語訳 **net** においても、弾き終えた結果が続いていることが表されており、〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスは感じられる。

一方、「べろり／ベロリ」の仏語訳 **longue** からは舌が長いこと、**prestement** からは動作が素早いことがわかるが、行為の完了は表されておらず、これらも〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスが訳出されているとは言えない。

第5章 長音付加と挿入の仏語訳

長音付加と挿入のオノマトペとその仏語訳は、次の通りである。

5.1 長音付加

長音付加されたオノマトペとその仏語訳を見る。オノマトペは、「音・さま」を表すものである。

「音・さま」

しゅう Schutt! Schutt! →新規補足。

長音は〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスを持つ。長音が付加された「しゅう」とその仏語訳 Schutt! Schutt! では、前者が馬の肌の上を柳の枝や萱の穂で滑らせる「音・さま」を表すのに対し、後者は強い呼気の声などを表すことから、表されている出来事の意味合いが異なっている。また、Schutt! Schutt! は、長音の〈持続性〉や〈延長性〉よりも、繰り返しによる音の〈反復性〉のニュアンスが表されている。

5.2 長音挿入

長音挿入されたオノマトペとその仏語訳を見る。オノマトペは、「音・さま」を表すものと、擬態語である。

「音・さま」

ざあっ dégoulinèrent 〈〔雨水、汗、涙などが〕 滴り落ちた〉 →新規補足。

grand 〈大きい〉 →新規補足。

murmurer 〈〔小川、木の葉、風などが〕 ささやく、ざわめく〉 →116頁参照。

しづくを頭からかぶる擬音語「ざあっ」の仏語訳 dégoulinèrent と、木々がざわめく murmurer は「ざあっ」が表す出来事を翻訳することができていた。しかし、瞬間的に風が激しく打つ「ざあっ」の仏語訳 grand は、un grand vent 〈ひと吹きの強い風〉という使われかたであり、風が強いという状態は示しているものの、打ちつけるような風が吹いているという出来事までは、訳出されていないように思われる。

dégoulinèrent と grand からは、そのさまが続いているという〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスまでは読み取ることはできない。一方で、murmurer は、〈つぶやき、ささやき〉〈(風や小川などの) さざめき、軽やかな音〉などを意味する名詞 murmure の動詞であり、murmure はラテン語の murmur 〈とどろき、うなり、ざわめき〉〈つぶやき、ささやき〉が語源であるようだ。したがって、この murmur 自体が擬音語である可能性がある。murmurer からは〈延長性〉のニュアンスは感じられないが、ささやく状態を続けている〈持続性〉が

murmur という音に含まれているとすれば、「ざあっ」の長音の〈持続性〉のニュアンスも訳出されているとみなせる。

「さま」

さあっ brusquement 〈突然、不意に、いきなり〉→新規補足。
 d'un seul coup 〈(成句) 一挙に、一度に；突然〉→新規補足。
 étincelait 〈(光を受けて) 輝いていた、きらめいていた〉
 →76頁参照。

しいん／しーん en silence 〈音を立てずに、静かに、無言で(成句)〉→新規補足。
 le silence 〈沈黙、無言〉→46、64、102頁参照。
 silencieux/silencieuse 〈[場所が] しんとした、ひっそりとした〉
 →76、116頁参照。

ずうっ beaucoup mieux 〈ずっとよい〉→76頁参照。
 beaucoup plus 〈～よりずっと〉→新規補足。
 extrêmement 〈きわめて、非常に〉→新規補足。
 loin 〈〔空間的に〕 遠くに、遠方に、離れて〉→新規補足。
 sans cesse 〈絶えず、しょっちゅう〉→新規補足。
 Tout 〈まったく、すっかり〉→新規補足。
 toute/très 〈まったく、すっかり／非常に、とても、たいへん〉
 →新規補足。
 tout à fait 〈完全に、まったく、すっかり〉→新規補足。
 très 〈非常に、とても、たいへん〉→新規補足。
 très loin 〈とても遠い〉→新規補足。

動作がほんのわずかの間に行われるさまを表す擬態語「さあっ」の仏語訳 *brusquement* は、原文のオノマトペが表す出来事を翻訳することができていた。が、「さあつと明るくなって」の仏語訳は、*étincelait* であり、明かりがつかない状態からつき始めたという「さあっ」が表す出来事は、訳出されていないようである。

また、「さあっ」は、「さっ」よりも〈持続性〉や〈延長性〉のニュアンスがあるものであるが、仏語訳 *brusquement*、*d'un seul coup* には、〈持続性〉〈延長性〉のニュアンスが感じられない。また、「さあつと明るくなって」の仏語訳 *étincelait* は、過去の状態を表す半過去で訳されて、輝き続けていたことはわかることから、〈持続性〉〈延長性〉のニュアンスが訳出されているとみなせる。

物音一つ聞こえず、静まりかえっているという出来事を表わす「しいん／しーん」「ずうっ」の仏語訳 *d'un seul coup* は、原文のオノマトペが表す出来事を翻訳することができていた。

「しいん／しーん」の仏語訳には、*silence*とその形容詞の *silencieux/silencieuse* もみられた。音を立てずにいるさまが続いていることが表されていることから、〈持続性〉〈延長性〉のニュアンスは仏語訳されていると言える。

性質・距離・時間などについて、大きな隔たりや差があるという出来事を表わす「ずうっ」の仏語訳には、*beaucoup mieux*、*beaucoup plus*といった比較級、*extrêmement* や *toute/très*など意味を強める副詞、距離が離れていることを示す *loin*、*très loin* の3つのパターンがあった。ある状態が長い間続く出来事を表わす「ずうっ」の仏語訳は、*sans cesse* であり、意味合いによって翻訳が区別されていることがわかる。すべて、その状態が持続していることが示されていたことから、「ずうっ」の仏語訳は長音の〈持続性〉〈延長性〉のニュアンスを表現することができている。

第6章 繰り返しの仏語訳

3作品に出現した基本要素に促音付加したオノマトペのうち、音声の情報があるものは音・さま「声・さま」「音・声・さま」とすべての区分にわたっていた。まず、音声情報のみを表す「音」「声」のオノマトペ、すなわち擬音語とその仏語訳を見ていく。

6.1 擬音語

「音」

がたがた *des tremblements* 〈震動、ぐらつき〉→144頁参照。

tinter 〈(金属, ガラスが触れ合って) 鋭い音がする; ちりんちりん [かちんかちん] と音を立てる〉→142頁参照。

tintèrent 〈(金属, ガラスが触れ合って) 鋭い音がする; ちりんちりん [かちんかちん] と音を立てる〉→新規補足。

vibrèrent 〈振動した〉→新規補足。

「がたがた」が激しい振動が起こるという出来事を、仏語訳は表すことができていた。*des tremblements* は、複数形にすることで、震動が一度きりではないことが表されており、〈反復性〉のニュアンスを名詞の複数形という文法的カテゴリーを利用して仏語訳していることは、促音付加のところで見た、*un/une* を利用して〈一回性〉のニュアンスを仏語訳していることと合せて、注目に値する。動詞 *tinter* とその活用の *tintèrent* は、かちかち、ちりんちりん和鐘なる音を示すフランス語オノマトペ *tintin* と関連があり、動詞自体に「音」の〈反復性〉のニュアンスがありそうである。*vibrèrent* は動詞 *vibrer* の活用であり、この動詞は音や声について用いる語である。振動するということは、一度の揺れではなく音が何度も鳴ったことが示唆されるため、繰り返しの〈反復性〉のニュアンスがあるとみなす。

「声」

どやどや *en bande* 〈集団で〉→145頁参照。

「どやどや」は、大勢の人が騒がしく「声」をあげていること表すが、仏語訳の *en bande* は「声」ではなく、集団で現れる「さま」を表している。だが、集団ということは騒がしいかどうかまではわからないが、人々が「声」をあげていることも示唆される。ただ、それが〈反復性〉のニュアンスがあるかどうかまでは、表現されていない。

次に、「音・さま」「声・さま」「音・声・さま」を表す繰り返しのオノマトペとその仏語訳を見る。

「音・さま」

さらさら **en murmurant doucement** 〈[文章語] [小川、木の葉、風などが] ささやきながら、ざわめきながら〉→140頁参照。

ばさばさ **froufrouant** 〈(絹、羽、葉などの) 触れ合う音のする、さらさら音のする〉→新規補足。

仏語にも音の反復がある「さらさら」と「ばさばさ」の仏語訳は、オノマトペが表す出来事を、翻訳できていた。**murmurant** も **froufrouant** も音の繰り返しがあことに気がつく。**murmurant** は 前項で述べた **murmurer** の現在分詞である。**froufrouant** は **froufrouer** の現在分詞であり、さらさら、かさかさと絹、羽、葉などの触れ合う音を示すフランス語オノマトペの **froufrou** と関係している。音の繰り返しによって、〈反復性〉のニュアンスが表現されている。

「声・さま」

くつつつ **en pouffant** 〈噴き出しながら〉→141頁参照。

petit 〈小さい、ちょっとした〉→新規補足。

ひそひそ **chuchoter** 〈ささやく、ひそひそ話をする、内緒話をする〉→新規補足。

en chuchotant 〈(ささやき、ひそひそ話をし、内緒話をし) ながら〉

→100頁参照。

tenaient conseil 〈会議を開いていた、集まって相談していた〉→新規補足。

「くつつつ」の仏語訳 **en pouffant** は、原文のオノマトペが示す、笑い声を立てるという出来事を訳出することができていた。もう一方の仏語訳 **petit** は、笑いが小さいことが表されているものの、その語だけでは「くつつつ」の声を漏らして笑う出来事までは十分に表すことができていない。また、両者とも、声や動作に繰り返しがあのかどうかまでは読み取れず、〈反復性〉のニュアンスを表現することはできていないと評価できる。

「ひそひそ」の仏語訳はどれも、オノマトペが表す表す、騒がしい音が生じているという出来事を翻訳することができている。**chuchoter** と そのジェロンディフの **en chuchotant** は、呼気の音を表すフランス語オノマトペ **ch** と関係している可能性もある。もし **ch** と関係性がある語であれば、仏語訳にも原文の繰り返しの〈反復性〉が含まれることになる。一方で、**tenaient conseil** では、話している状態が継続していたことが描写されていることから、〈反復性〉ではなく、〈持続性〉のニュアンスが表されていると考えられる。

「音・声・さま」

ざわざわ **bruisantes** 〈ざわめく、かすかな音を立てる〉→120、143頁参照。

leurs bruissements 〈それらのざわめき、かすかな音〉→102頁参照

des bruits 〈音、物音 騒音〉→80頁参照。

une grande agitation 〈大きな(物の) 動揺、揺れ；(人々、街頭などの) 慌

ただしさ、混乱、ざわめき〉→新規補足。

「ざわざわ」の仏語訳は、すべてオノマトペが表す出来事を訳出できていた。bruisantes、leurs bruissements、des bruits は、bruit 〈音、物音〉と関係がある語である。すべて複数形で訳出されたことで、原文の〈反復性〉が表されているとみなせる。しかし、une grande agitation という訳では、単数形で訳されている上、名詞 agitation からも「ざわざわ」の〈反復性〉が感じられず、〈反復性〉が翻訳されているとは言えない。

6.2 擬態語

繰り返しの擬態語とその仏語訳は、以下の通りである。

「さま」

きらきら ちらちら étincelaient 〈(光を受けて)輝く、きらめく〉→新規補足。
en scintillant 〈またたき、きらめき、きらきら輝きながら〉
→新規補足。

きらきら tout scintillant 〈まったくまたたき、きらめき、きらきら輝きながら〉→新規補足。

ちらちら des étincelles de-ci de-là 〈ときどきの輝き、きらめき〉
→80頁参照。

ぴかぴか ぺかぺか des lueurs 〈微光、弱い〔ほのかな〕光、閃光、きらめき〉
→89頁参照。

ぴかぴか étincelant 〈(光を受けて)輝きながら、きらめきながら〉
→新規補足。

ぺかぺか en clignotant 〈(〔光が〕明滅〔点滅〕し、またたき)ながら〉
→89頁参照。

toute clignotante et scintillante 〈まったく〔光、明かりが〕ちかちか点滅し、きらめく、またたく〉→新規補足。

toutes clignotantes 〈まったく〔光、明かりが〕ちかちかする、点滅する〉→新規補足。

「きらきら」と「ちらちら」の仏語訳には、「さあっ」の訳としても現れた étincelait²⁵ と同じ動詞である étincelaient と、ジェロンディフの en scintillant といった共通した語(句)が見られ、その他には、tout scintillant、des étincelles de-ci de-là が用いられていた。「きらきら」「ちらちら」の訳語には、動詞 étinceler 〈輝く〉が元になったものと scintiller 〈またた

²⁵ 76 頁参照。

く、きらめく、きらきら輝く〉が元になったものという2つのパターンである。étincelaient は、動詞 étinceler の直説法半過去であり、その名詞は étincelle 〈輝き、きらめき〉である。また、scintillant は、動詞 scintiller の現在分詞である。名詞 étincelle は、動詞の scintiller を語源とする語であるので、「きらきら」「ちらちら」に使用された訳語は、すべて同じ語源のものであると指摘でき、これらは、原文のオノマトペが表す、光が明滅するという出来事を翻訳することができていた。名詞 étincelle は、複数形で訳されており、動詞や現在分詞からも輝くさまが続いていることが読み取れることから、原文の繰り返しの〈反復性〉も訳出されているとみなせる。

「ぴかぴか」と「ぺかぺか」の仏語訳には、des lueurs が共通して見られた。「ぴかぴか」には、動詞 étinceler の現在分詞である étincelant が、「ぺかぺか」には、動詞 scintiller の現在分詞の形容詞女性形 scintillante が使用されている。また、動詞 clignoter 〈〔光が〕明滅〔点滅〕する、またたく〉の現在分詞の clignotant(e) も見られた。これらの訳語は、「ぴかぴか」と「ぺかぺか」が表す出来事のみならず、〈反復性〉も表現できていた。

原文において「きらきら」「ちらちら」「ぴかぴか」「ぺかぺか」はどれも光り輝くさまを表したオノマトペであり、そのうち「ぴかぴか」は点滅しながら光るさまを表す。これらの4つのオノマトペにあたるフランス語の動詞は、étinceler、scintiller、clignoter であったが、clignoter には点滅するという意味合いがあり、「ぴかぴか」の訳には用いられず、「ぺかぺか」に訳のみにあらわれた。「ぺかぺか」は通常はひかるさまを表すものではなく、宮沢賢治独自の使い方であったため、「きらきら」「ちらちら」「ぴかぴか」の仏語訳と区別した可能性もある。

「さま（方言）」

どかどか tout essoufflé 〈息せききって〉→86頁参照。

原文の「どかどか」は、体が火照っているという出来事を表していた。仏語訳は、tout essoufflé であり、「どかどか」が表す出来事とは異なっていると言える。これは、原文のオノマトペが方言性を持つものであったことが影響していると考えられる。「どかどか」は、繰り返しのより〈反復性〉のニュアンスがあるが、仏語訳 tout essoufflé も荒い呼吸を繰り返していることが示唆されることから、〈反復性〉のニュアンスは訳出されているとみなせる。

終章 結論

本研究では、日本語オノマトペが持つニュアンスがどのように仏語訳されるのかという、先行研究には見られない視点に立って、宮澤賢治の3つの童話を取り上げて検証を行った。それらの結果から、以下の結論が導き出される。

1 宮澤賢治の3つの童話の日本語オノマトペが持つニュアンスと仏語訳の評価

第2章で取り上げた作品ごとに、日本語オノマトペのニュアンスが仏語訳されていたか否かを、以下の表にまとめた（【表4】）。なお、紙幅の都合上、表中の作品名『セロ弾きのゴーシュ』『銀河鉄道の夜』『風の又三郎』を、それぞれ、ゴーシュ、銀河鉄道、又三郎と略記する。

【表4】 3つの童話の日本語オノマトペのニュアンスと仏語訳の評価

	固定性	瞬間性	急転性	一区切り性	滞留性	時差性	余韻性	残存性	延長性	持続性	完結性	ひとまとまり性	反復性
ゴーシュ	◎	○	○	○	△	△	△	○	◎	◎	○	◎	△
銀河鉄道	◎	◎	○	△	△	△	△	◎	○	○	○	○	○
又三郎	◎	○	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○	◎
全体	◎	○	○	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○

評価の観方は、◎が「よく訳されている」、○が「概ね訳されている」、△が「あまり訳しきれていない」、×が「まったく訳しきれていない」である。

『セロ弾きのゴーシュ』の仏語訳においては、〈固定性〉〈延長性〉〈持続性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスがよく訳されており、概ね訳されているニュアンスは、〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉〈残存性〉〈完結性〉であった。あまり訳されていないニュアンスは、〈滞留性〉〈時差性〉〈余韻性〉〈反復性〉と多数あった。

『銀河鉄道の夜』の仏語訳において、よく訳されているニュアンスは、〈固定性〉〈瞬間性〉〈残存性〉であった。概ね訳されているとみなせたニュアンスは、〈急転性〉〈延長性〉〈持続性〉〈完結性〉〈ひとまとまり性〉〈反復性〉と多数あった。あまり訳されていないニュアンスは、〈一区切り性〉〈滞留性〉〈時差性〉〈余韻性〉であった。

『風の又三郎』の仏語訳においては、〈固定性〉と〈反復性〉のニュアンスがよく訳されており、〈瞬間性〉〈残存性〉〈延長性〉〈持続性〉〈完結性〉〈ひとまとまり性〉が概ね訳されているニュアンスであった。また、〈急転性〉〈一区切り性〉〈滞留性〉〈時差性〉〈余韻性〉のニュアンスがあまり訳されていないと判断できるものであった。

3つの童話すべてにおいて、よく訳されていたと評価できる日本語オノマトペのニュアンスは、〈固定性〉であり、概ね訳されていたニュアンスは、〈瞬間性〉〈残存性〉〈延長性〉〈持続性〉〈完結性〉〈ひとまとまり性〉である。よって、〈固定性〉〈瞬間性〉〈延長性〉〈持続性〉〈完結性〉〈ひとまとまり性〉は、他のニュアンスと比較して、仏語訳に写しやすいといえよう。これは、

- ① 訳されたフランス語の動詞や副詞に〈固定性〉のニュアンスが読み取れるものであったこと
- ② 語句で訳すことによって、また、動詞の時制によって、〈瞬間性〉〈残存性〉〈延長性〉〈持続性〉〈完結性〉のニュアンスを表し得たこと
- ③ 不定冠詞 **un/une** を伴うことによって、〈ひとまとまり性〉が示されていたことが理由であると考えられる。

一方で、3つの童話すべてに共通して、まったく翻訳されなかったとみなせるニュアンスはなく、あまり訳されなかったニュアンスは、〈滞留性〉〈時差性〉〈余韻性〉である。促音挿入や撥音挿入の〈滞留性〉〈時差性〉のニュアンスは、仏語訳されにくいと思われる。また、オノマトペ末の撥音を持つ〈余韻性〉は、出来事の終了後の描写にまで関連するニュアンスであり、音が鳴り終わった後まで音が耳に残る響きや、動作が終わった後に人の心を打つといった風情までを、仏語訳することが難しい事情があると考えられる。加えて、訳者があえて〈余韻性〉のニュアンスを訳さなかったことも理由の一つとして示唆される。

2 日本語オノマトペの型と区分ごとの仏語訳の総評・翻訳における課題

日本語オノマトペの仏語訳の評価を全体的に整理し、課題となることを、まとめる。

[1] 促音を含む日本語オノマトペが表す出来事の翻訳は、概ねできていた。

まず、基本要素に促音が含まれる場合、

「音・さま」に区分されるオノマトペが持つ〈急転性〉〈瞬間性〉が十分に訳出されにくいことがわかった。原文と異なり、仏語訳のニュアンスが〈一区切り性〉に変わった例も見られた。

「声・さま」に区分されるオノマトペが、フランス語オノマトペに訳された場合には、〈急転性〉〈瞬間性〉が表現されていた。が、フランス語オノマトペ以外の訳語には、ニュアンスまでが翻訳されていなかった。

「音・声・さま」に区分されるオノマトペが、〈瞬間性〉のニュアンスを持つ時、その仏語訳は〈一区切り性〉のニュアンスを表すものに変った例もあった。

「さま」に区分されるオノマトペが、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスを持つほとんどの場合において、〈瞬間性〉〈急転性〉双方のニュアンスが翻訳されていた。一方、〈一区切り性〉〈固定性〉のニュアンスを持つ場合においても、それらがよく訳されていた。

次に、基本要素に付加された場合、

「音」に区分されるオノマトペが、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスを持っていても、仏語訳には双方のニュアンスが訳出されていなかった。

「音・さま」に区分されるオノマトペが、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスを持つ場合は、それらがほとんど翻訳されていた。仏語訳が表すニュアンスが、〈一区切り性〉に変った例もあった。

「声・さま」に区分されるオノマトペは「くすっ」であったが、原文と仏語訳が表す、笑うさまや笑い声の大きさが少し異なっていた。原文の〈急転性〉のニュアンスは訳出されていた。

「さま」に区分されるオノマトペのうち、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスを持つ「ぞくっ」「びくっ」の出来事の訳出ができていなかった。〈一区切り性〉のニュアンスを持つ「ひらっ」「ぐるっ」「にやっ」においては、不定冠詞 un 〈ひとつの〉がついており、動作をひとつの動きと捉えて、動きが終わり一区切りついた〈一区切り性〉を表現することができていた。

最後に、促音が単独で挿入されたものの場合、

原文が持つ〈滞留性〉と〈時差性〉のニュアンスを翻訳することはできていなかった。「AっBり」の形の場合は、前後の動詞や形容詞などを修飾することで、〈滞留性〉のニュアンスを出すことが可能である例が見られた。その一方で、一部「すっかり」などの訳には、〈滞留性〉のニュアンスが翻訳されていないものもあった。もうひとつの〈時差性〉のニュアンスは、仏語訳で表しきれなかった。

[2] 撥音付加で「さま」に区分されるオノマトペが表す出来事は、仏語訳でも表現することが概ねできていた。

「音」に区分されるオノマトペは〈余韻性〉と〈残存性〉を持つが、フランス語オノマトペで訳されたものには〈残存性〉のニュアンスのみが見られ、〈余韻性〉

のニュアンスが失われていた。特異な使われ方をしていた「ぼろん」と仏語訳を比較すると、原文と訳文の音の描写が異なっており、訳文には〈余韻性〉も〈残存性〉も表されていないかった。

「さま」に区分されるオノマトペも〈余韻性〉と〈残存性〉のニュアンスを持つが、仏語訳には〈余韻性〉のニュアンスが表現されていないかった。

- [3] 「り」付加のオノマトペは、すべて「さま」に区分された。これらが表す出来事が、仏語訳で表現することは、概ねできていた。

「り」付加のオノマトペは〈完結性〉と〈ひとまとまり性〉のニュアンスを持つが、接続詞句で訳されていたものはどちらのニュアンスを表現することができていた。しかし、形容詞、副詞ひとつだけで訳されていたものは、ニュアンスを表せていなかった。

- [4] オノマトペが長音付加と長音挿入されたものである場合、オノマトペが表す出来事があまり翻訳しきれていない例が多く見られた。

「音・さま」に区分される時、〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスはほとんど訳されていないかった。とりわけ〈延長性〉を翻訳することはできていなかった。仏語訳の語源が擬音語である可能性があるものは、その語に〈延長性〉や〈持続性〉のニュアンスがあることも考えられるため、注意が必要である。

「さま」に区分される時、動詞が直説法半過去で訳されたものは、〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを表されていた。このように、動詞に関しては時制によって、ニュアンスが表されている場合がある。しかし、*brusquement*、*d'un seul coup* などに訳されたものは、〈延長性〉〈持続性〉のニュアンスを表現することはできていなかった。「しいん／しーん」の仏語訳は、*silence* とその形容詞の *silencieux/silencieuse* がみられ、音を立てずにいるさまが続いていることが表されており、〈持続性〉〈延長性〉のニュアンスを翻訳することができていた。また、原文のオノマトペ「ずうっ」は、多様な意味で使用されていたが、フランス語でも異なる訳語が現れ、区別されていたことも確認できた。

- [5] オノマトペが繰り返しである場合、オノマトペが表す出来事の訳は、概ねできていた。繰り返しのオノマトペは〈反復性〉を表すものである。

オノマトペが「音」に区分される時、フランス語オノマトペ由来の動詞に訳されたものは、語そのものに「音」の〈反復性〉が見られた。

「声」に区分されるオノマトペの仏語には、〈反復性〉のニュアンスが失われていた。

「音・さま」に区分されるオノマトペの仏語訳も、音の繰り返しが見られ、〈反復性〉を表すことができていた。

「声・さま」に区分されるオノマトペの仏語訳が、フランス語オノマトペ由来と思われる動詞であった場合は、〈反復性〉のニュアンスが訳出されている可能性を見出せた。しかし、その他の訳語には、〈反復性〉のニュアンスが表現されていなかった。

「音・声・さま」に区分されるオノマトペの仏語訳は、複数形にすることによって〈反復性〉のニュアンスを表すことができていた。

「さま」に区分されるオノマトペの仏語訳は、〈反復性〉を翻訳できていた。光るさまを示す「きらきら」「ちらちら」「ぴかぴか」「ぺかぺか」には、語源が共通した語や句が見られた。特異な使われ方をしたオノマトペ「ぺかぺか」のみ、点滅するという意味合いがある動詞 *clignoter* が使用されており、原文のオノマトペの特異性が仏語訳でも表現されていることがうかがえた。同じ「さま」に区別されても方言性を持つオノマトペと仏語訳では、表す出来事が異なっていたが、〈反復性〉のニュアンスを表すことができていた。

3 日本語オノマトペの仏語訳における留意点

日本語オノマトペを仏語訳するにあたって、どのような点に意を払えばよいか述べる。

第一に、日本語オノマトペがどのような出来事を表しているのかを、理解することである。

原文の日本語オノマトペが特異な使われ方であるもの、あるいは、古態性や方言性を持つものである場合は、原文のオノマトペが表す出来事を翻訳できていない傾向があった。特異なオノマトペが擬音語である時は、原文のオノマトペをフランス語の綴りで示すほか、既存のフランス語オノマトペで訳することは、致し方ないかもしれない。擬態語である場合は、前後の文脈や音や形式が似ている日本語オノマトペから推測する以外、特異なオノマトペが表す出来事を、完璧に翻訳することは困難であろう。しかし、古態性や方言性を持つものであれば、辞書等を参照することで、原文が何を表しているのか理解することは可能であるはずだ。特異なオノマトペであると思われるものが文中に現れた場合は、それらが作者の独創のオノマトペであるのか、それとも古態性や方言性を持つオノマトペである

のか辞書等で調べ、さらに日本語母語話者に確認することが必要になる。その上で訳出すれば、原文と訳文が表す出来事が乖離したものになることを避けることができる。

また、日本語オノマトペにあたる仏語が *petit*、*grand* といった程度や規模の大きさを表す形容詞ひとつである場合は、原文のオノマトペが表す出来事を表現しきれていなかった。形容詞を使用する場合、原文が表している事柄に適応する具体的な形容詞を選択するか、複数の形容詞を組み合わせることで、この問題は解決できるだろう。

第二に、日本語オノマトペの形式に注目し、それらが示すニュアンスを翻訳にも活かすことである。そのためには、以下のことがらを踏まえる必要がある。

- [1] 促音が基本要素に含まれる場合にも、〈急転性〉と〈瞬間性〉のニュアンスがあり、特に「音・さま」に区分されるオノマトペの訳には、双方のニュアンスが失われないようにする。
- [2] 基本要素に促音付加された場合、「音」や「さま」に区分されるオノマトペの訳にも、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスを訳出する。
- [3] 促音が挿入されたオノマトペには、〈滞留性〉と〈時差性〉のニュアンスがある。
- [4] 撥音付加には、〈残存性〉と〈余韻性〉のニュアンスがあるが、仏語訳には〈余韻性〉のニュアンスが消失しやすいということを踏まえ、特に擬音語の訳語には〈余韻性〉が感じられる訳にする。
- [5] 「り」付加には、〈完結性〉と〈ひとまとまり性〉のニュアンスがあるが、それらは形容詞や副詞はひとつだけでは表せないため、語句にする必要がある。
- [6] 長音付加と長音挿入には、〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスがあるが、オノマトペが「音・さま」に区分される時、フランス語では双方のニュアンスが失われることがある。
- [7] 繰り返しのオノマトペは〈反復性〉のニュアンスを持つが、「声」「声・さま」に区分されるオノマトペの仏語訳では、〈反復性〉のニュアンスが表しにくい。

第三に、フランス語においてはオノマトペの範疇に入らない擬態語の翻訳については、ひとつの語ではなく語句で訳す例の方が多く見られ、それらの中には原文が表す出来事とオノマトペの形式が持つニュアンスを訳出できているものであった。したがって、擬態語

は語句で訳すことで、原文の表す出来事とニュアンスの双方を表現することがより可能になると言える。

また、フランス語では音の情報を訳出する必要はないという考えがあるが、本翻訳では、擬音語もフランス語に訳そうとされたことがわかり、フランス語オノマトペ以外で訳されたものの一部にも、原文の出来事やニュアンスを表現することができていた例が見られた。宮澤賢治の童話のように多様なオノマトペが作品に効果を与えている作品では、翻訳者が語と語の調和がとれると判断できる条件においては、音のニュアンスが含まれた語や語句で擬音語を翻訳することなどによって、読者は原作の豊かなオノマトペの世界を味わう楽しみを得られるのではないかと考えられる。

4 日本語オノマトペの教育における留意点

フランス語母語話者に対して、どのように日本語オノマトペを教えていけばよいのであろうか。

まず、フランス語のオノマトペは基本的に擬音語を差すのに対し、日本語のオノマトペは擬音語のみならず、擬態語も含まれるということ、日本語のオノマトペの多様さや総数の多さ、フランス語と異なり文学作品などにも使用されるものであること、といった解説は必須であると考えられる。

さらに、すでに存在している日本語教科書とそのフランス語翻訳版では、日本語オノマトペの区分のみならず型についての説明が不足していることもわかった。また、細かいニュアンスの解説や、具体的な例文、イントネーションについての記述も必要である。よって、現存の教材を使用するだけでは、日本語オノマトペの習得につなげることは難しいと推測される。

そこで、新しく教材を開発することが求められる。教材には、上記の事柄に加えて、本論文を通して明らかになった、日本語オノマトペとそれらにあたる仏語訳を含めることができる。以下に具体的な教材案を示す。

《教材案》

そくおん 促音「っ」の〈固定性〉 こていせい

オノマトペの末^{まつ}の促音「っ」は、いくつかのニュアンスを持っています。そのうちのひとつが、ある状態^{じょうたい}に定^{さだ}まって動^{うご}かずに保^{たも}っているという〈固定性〉のニュアンスです。

1. じっ

「じっ」は、〈視線^{しせん}を定めて見つめるさま〉を^{あらわ}表す擬態語^{ぎたいご}です。またこのとき、するどさや、きびしさも感じます。

「じっ」にあたるフランス語は、fixer、fixé、(en) fixant、fixement、en guettant、attentivement、bien campé、immobile、les yeux rivés、sans ciller などがあります。

(例1) 運動場を出るときその子はこっちをふりむいて、じっと学校やみんなのほうをにらむようにすると、またすたすた白服の大人について歩いて行きました。

Une fois hors du terrain, l'enfant tourna la tête en arrière et parut fixer des yeux l'école et tous les enfants, puis il se remit à marcher à pas vifs derrière l'homme vêtu de blanc.

(宮澤賢治「風の又三郎」)

(例1) では、「じっ」によって、子どもがみんなの方に視線を定めて、見つめるさまが、表されています。

フランス語訳の fixer des yeux も、目を動かさずに見つめるという「じっ」の意味と、〈固定性〉のニュアンスが表現されています。

2. きっ

「きっ」は、〈唇をきつく締めるさま〉を表す擬態語です。

「きっ」にあたるフランス語は、étroitement、fermement、pincé などがあります。

(例2) 向こうの曲がり角の所に三郎が小さなくちびるをきっと結んだまま、三人のかけ上って来るのを見ていました。

Plus loin, là où le chemin faisait un coude, Matasaburo, ses petites lèvres pincées, regardait les quatre garçons grimper à toute allure.

(宮澤賢治「風の又三郎」)

(例2) では、「きっ」によって、三郎が唇を固く結んでどめているさまが、表されています。

フランス語訳の pincées も、唇を固く締めたという「きっ」の意味と、〈固定性〉のニュアンスが表されています。

【練習問題】

下の例文のかっこに「じっ」か「きっ」を入れましょう。文全体をフランス語に訳して、線の上かに書きましょう。

(1) 猫が小鳥を () と見つめています。

(2) 女の子がケーキ屋さんのケーキを () と見つめています。

(3)その人は返事をせずに唇を（ ）と結んでいます。

(4)思わず相手の目を（ ）と見つめました。

(5)駅の前で、友達が唇を（ ）として、わたしを待っていました。

このように、教材には、日本語オノマトペの型とニュアンスごとに、オノマトペを取り上げ、宮澤賢治の3つの童話に現れた日本語オノマトペと、それらに対応した仏語の語句、また作品内での実例を挙げる。また、練習問題を設けることで、学習者の習得を図りたい。

5 今後の課題

今後は、宮澤賢治の他の作品の仏語訳を検討することが、第一の課題となる。その際、今回対象とした訳者の、他の作品の仏語訳を増やすことはもちろんだが、今回の訳者以外による訳文も検討する必要がある。そのことで、より総合的に宮澤賢治の日本語オノマトペとその仏語訳を比較することが可能になり、また、どのオノマトペが表す出来事や、どのオノマトペの形式が持つニュアンスが訳出しにくいのか、作品によっての違いも見られるだろう。さらに、宮澤賢治以外の作品と仏語訳を比較することで、賢治独自のオノマトペと、通常の使われ方のオノマトペの仏語訳の違いもさらに明瞭になってくることが期待できる。

日本語オノマトペと仏語訳の比較研究を継続し、日本語オノマトペがどのようなフランス語に対応するのかをまとめた、日仏翻訳オノマトペ集のようなものを作成することも、今後の課題のひとつとして挙げておきたい。

また、研究を通して得られた結果を、具体的に翻訳や教育に活かす方法を考えていきたい。オノマトペの教育に関しては、特に教科書における記述に関して、まだ改善できる点が多々あるため、オノマトペの教材の開発も、今後の課題としたい。

さらに、本論文の内容を仏語訳することで、フランス語母語話者が日本語オノマトペを翻訳する際の糧となるよう、そのためにも、日本語のオノマトペと、その仏語訳の理解、ひいては、日本語そのもの、フランス語そのものについて、さらに理解を深めていきたいと、切に願う。

謝辞

本論文は、筆者が明治大学大学院教養デザイン研究科文化領域研究コース博士後期課程における研究を集成したものである。同コース教授、高遠弘美先生には、指導教員として本研究の機会を与えていただき、ご指導を賜りました。ここに深謝の意を表します。同コース教授、鈴木哲也先生には、副指導教員としてご助言をいただくとともに、本論文の細部にわたりご指導をいただきました。深く感謝いたします。文学部教授、小野正弘先生には、副指導教員として、また、オノマトペ研究の第一人者として、終始多大なるご指導をいただき、的確なご指摘や、貴重な先行研究・資料をご提供くださいました。心より御礼申し上げます。

〈参考文献〉

- 青木三郎 (2006) 「フランス語のオノマトペについて」『実験音声学と一般言語学 -城生伯太郎博士還暦記念論文集-』今泉弘勝 発行、東京堂出版 432-442
- 朝倉季雄 (2002) 『新フランス文法事典』白水社
- 浅野鶴子編 金田一春彦解説 (1978) 『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 天沼 寧編 (1974) 『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
- アンドルー・チャン (1990) 『<和英>擬態語・擬音語分類用法辞典』大修館書店
- 石野好一 (2019) 「日仏語のオノマトペについて -とくに擬情語をめぐる-」『人文科学研究』新潟大学 144 :33-80
- 泉 邦寿 (1973) 「ソシュールの言語記号論と若干の問題」『上智大学外国語学部紀要』上智大学外国語学部 7 :1-21
- (1975) 「続フランス語そぞろ歩き 3」『ふらんす』白水社 06
- (2004a) 『フランス語を考える20章-意味の世界』白水社
- (2004b) 「鳩時計」『フランス語の小径 たのしい意味世界への誘い』白水社
- 泉 邦寿著, 鈴木孝夫編 (1976) 「擬声語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現 (日本語講座4)』, 筑摩書房
- 今井むつみ、針生悦子 (2014) 『言葉をおぼえるしくみ 母語から外国語まで』筑摩書房
- 岩崎典子、デイビッド ヴィンソン、ガブリエラ ヴィリョコ (2005) 「擬音語の感覚 英語母語話者と日本語母語話者のとらえ方の比較」『言語学と日本語教育』IV
- 内田 洋 (1996) 「擬音・擬態語の仏語訳について」『金沢大学文学部論集. 文学科篇』16
- 大賀正喜 他編 (1993) 『小学館プログレッシブ仏和辞典』小学館
- 大賀正喜、G.メランベルジェ共著 (1987) 大阪日仏センター編『和文仏語訳のサスペンス: 翻訳の考え方』白水社
- 太田晶子 (2002) 「日本語と諸外国語における擬声語・擬態語の特徴と指導法-日本語・英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語の場合-」『函館大学論究』53-66
- 大野 晋 他 (1989) 『日本語相談一』朝日新聞社
- 他 (1990) 『日本語相談三』朝日新聞社
- 岡本克人 (1989) 「日仏語の音に対する態度」『高知大学学術研究報告』37:131-139
- (1990) 「日仏語絵本の世界-対照言語学的研究」『高知大学学術研究報告』39:93-104
- (1991) 「日仏漫画の対照言語学的研究—オノマトペを中心に」『高知大学学術研究報告』40
- 尾野秀一 編著 (1984) 『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂書店
- 小野正弘編 (2007) 『日本語オノマトペ辞典 擬音語・擬態語4500』小学館
- (2009) 『オノマトペがあるから日本語は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』平凡社

- (2011) 「オノマトペ素の加工と展開—近代小説を視野に入れながら—」第287回
日本近代語研究会資料
- (2015) 『感じる言葉 オノマトペ』角川選書
- (2017a) 「オノマトペの対照研究のために—中国語に擬態語はありますか?—」
『日中言語対照研究論集』第19号
- (2017b) 「日本語オノマトペの組み立て」『ことばの波止場』2、国立国語研究所
- (2018a) 「宮沢賢治初期童話作品のオノマトペ—基本要素からの加工と展開—」
『感性の方言学』ひつじ書房
- (2018b) 『くらべてわかるオノマトペ』東洋館出版社
- (2019a) 『オノマトペ 擬音語・擬態語の世界』角川文庫
- 監修 (2019b) *ONOMATOPE The Fantastic World of Japanese Symbolic Words*, ナツメ
社
- (2021) 「オノマトペのニュアンス付加」『文芸研究：明治大学文学部紀要』明
治大学文芸研究会 144 :5-12
- オノマトペラボ 〈<http://onomatopelabo.jp>〉 (accessed oct. 10, 2017)
- 郭華江 主編(1994) 『日中擬声語・擬態語辞典：上海訳文出版社版』東方書店
- 笈寿雄、田守育啓編 (1993) 『オノマトピア：擬音・擬態語の楽園』勁草書房
- 角岡賢一 (2007) 『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性』くろしお出版
- 窪菌晴夫編 (2017) 『オノマトペの謎』岩波書店
- 国立国語研究所 〈<https://www.ninjal.ac.jp/info/movies/#NINJAL-F>〉 (accessed mar. 20, 2018)
- 小嶋孝三郎 (1972) 『現代文学とオノマトペ』桜楓社
- 小林隆 他著 (2017) 『方言学の未来をひらく オノマトペ・感動詞・談話・言語行動』ひつ
じ書房
- 五味太郎 (1989) 『英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典』ジャパントイムス
- 小学館ロベール仏和大辞典編集委員会 編 (1988) 『小学館ロベール仏和大辞典』小学館
- 篠原和子、宇野良子編 (2013) 『オノマトペ研究の射程 近づく音と意味』ひつじ書房
- 清水 仁 (2014) 『日中擬音語・擬態語辞典』書香堂
- 瀬川愛美 (2016) 「日仏オノマトペの対照—石川淳『鷹』とフランス語翻訳版 *Le Faucon*—」
『教養デザイン研究論集』10:23-39
- (2017) 「日仏オノマトペの対照—大江健三郎「人間の羊」とフランス語翻訳版
Tribu bélante—」『教養デザイン研究論集』12:1-20
- (2018a) 「日仏オノマトペの対照—フランソワーズ・サガン *Bonjour tristesse* と
日本語翻訳版『悲しみよ こんにちは』—」『教養デザイン研究論集』13:1-21
- (2018b) 「日仏オノマトペの対照—ルネ・ゴシニ *Le Petit Nicolas* と日本語翻訳版
『わんぱくニコラ』—」『教養デザイン研究論集』14:1-15
- (2019a) 「日仏オノマトペの対照—宮沢賢治「銀河鉄道の夜」とフランス語翻
訳版 *Le Train de nuit dans la Voie lactée*—」『教養デザイン研究論集』15:1-19

- (2019b) 「『銀河鉄道の夜』の促音付加のオノマトペとフランス語翻訳」『言語と人間』言語人文学会
- (2020) 「日仏オノマトペの対照——宮沢賢治『ゼロ弾きのゴーシュ』と *Gauche le violoncelliste*——」『論究日本近代語』日本近代語研究会 1:253-270
- スリーエーネットワーク編著 (2008) 『みんなの日本語中級 I』
- (2011) 『みんなの日本語中級 I 翻訳文法解説フランス語版』
- (2012a) 『みんなの日本語中級 II』
- (2012b) 『みんなの日本語初級 I 第 2 版』
- (2013a) 『みんなの日本語初級 II 第 2 版』
- (2013b) 『みんなの日本語初級 I 第 2 版 翻訳文法解説フランス語版』
- (2014) 『みんなの日本語中級 II 翻訳文法解説フランス語版』
- (2015) 『みんなの日本語初級 II 第 2 版 翻訳文法解説フランス語版』
- 仙波純子 (1990) 「擬音語・擬態語についての一考察 —日仏対照研究—」『講座日本語教育』早稲田大学日本語研究教育センター、25:76-94
- 田辺保 (1997) 『フランス語とはどんな言葉か』講談社学術文庫
- 田村毅 他編 (1998) 『旺文社ロワイヤル仏和中辞典』旺文社
- 田守育啓 (1991) 『日本語オノマトペの研究』神戸商科大学経済研究所
- (2002) 『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店
- (2010) 『賢治オノマトペの謎を解く』大修館書店
- 田守育啓、ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ—形態と意味—』くろしお出版
- 飛田良文、浅田秀子著 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 辻村成津子 (2005) 「擬音語・擬態語の言語学的重要性と日本語教育」『言語学と日本語教育』IV
- 中里理子 (2017) 『オノマトペの語義変化研究』勉誠出版
- 那須昭夫 (1994) 「オノマトペに現れる促音について」『言語学論叢』13
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編 (2000) 『日本国語大辞典』小学館
- 根本道也 編著 (2015) 『オノマトペ (擬音語・擬態語) 独和小辞典』同学社
- 浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトペ—音象徴と構造—』くろしお出版
- Hamcieu, M. 松村瑞子 (2004) 「宮沢賢治「風の又三郎」におけるオノマトペ—英・仏・ル翻訳との対照—」『言語科学』九州大学、39、43-66
- 藤田孝、秋保慎一編 (1984) 『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』金星堂
- フランス語学会 (2015) 「フランス語談話会報告 有契性か恣意性か — オノマトペと音象徴」『フランス語学研究』49、162-167
- 松本道弘 (2020) 『難訳・和英オノマトペ辞典』さくら舎
- 三上京子 (2007a) 「日本語オノマトペとその教育：早稲田大学博士学位申請論文」
- (2007b) 「日本語教材とオノマトペ (特集 オノマトペと日本語教育)」『日本語学』明治書院、26(7)、36-46、06

- 水谷智洋 編 (2009) 『羅和辞典 改訂版』 研究社
- 三戸雄一、笈寿雄編著 (1981) 『日英対照:擬声語(オノマトペ)辞典』 学書房
- 宮沢賢治 (1980) 『新修宮沢賢治全集 第十二巻』 筑摩書房
- (1995a) 『新校本 宮澤賢治全集 第八巻 童話 1』 筑摩書房
- (1995b) 『新校本 宮澤賢治全集 第九巻 童話 2』 筑摩書房
- (1995c) 『新校本 宮澤賢治全集 第十巻 童話 3』 筑摩書房
- (1995d) 『新校本 宮澤賢治全集 第十二巻 童話 5・劇・その他』 筑摩書房
- (1996) 『新校本 宮澤賢治全集 第十一巻 童話 4』 筑摩書房
- 宮沢賢治著 栗原敦監修 (2014) 『宮沢賢治のオノマトペ集』 筑摩書房
- G. メランベルジェ著 大阪日仏センター編 (1995) 『宮沢賢治をフランス語で読む: 翻訳の授業ライヴ』 白水社
- 山口仲美 (2005a) 『犬は「びよ」と鳴いていた 日本語は擬音語・擬態語が面白い』 光文社
- 編 (2015) 『擬音語・擬態語辞典』 講談社学術文庫
- 山口仲美、佐藤有紀著 (2006) 『「擬音語・擬態語」使い分け帳』 山海堂
- 山中冴ゆ子 (2010) 「日仏語オノマトペ対照研究: 音象徴を中心に」 『筑波大学フランス語フランス文学論集』 25号 筑波大学フランス語・フランス文学研究会
- Benjamin, W. (1972). *Die Aufgabe des Übersetzers: Gesammelte Schriften Band IV.1.* (herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schwepenhäuser) Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (内村博信訳「翻訳者の使命」) 浅井健二郎 他 編訳 (1996) 『ベンヤミン・コレクション 2』 筑摩書房
- Centre National de Ressources Textuelles et Lexicales <<https://www.cnrtl.fr>> (accessed June. 2, 2021)
- Coseriu, E. (1978), Falsch und Richtig Fragenstellungen in der Uebersetzungstheorie, *Texto!* [online], Juni 2006, vol. XI, n°2. Verfügbar auf:
<http://www.revue-texto.net/Lettre/Coseriu_Uebersetzung.pdf> (accessed June. 27, 2021)
(岸谷徹子訳「翻訳論における誤った設問と正しい設問」) 諏訪功他訳 (1983) 『コセリウ言語学選集 4 ことばと人間』 三修社
- Delas, D. et D. Delas-Demon. (1991), *Dictionnaire des idées par les mots*. Paris, Le Robert.
- Enckell, P. et P. Rézeau. (2003), *Dictionnaire des onomatopées*. Presses Universitaires de France.
- Ferragut P. (2003), *Japon ! au pays des onomatopées 1*. Editions Ilyfunet.
- Ferragut P. (2005), *Japon ! au pays des onomatopées 2*. Editions Ilyfunet.
- Gallimard. (1989), *Anthologie de nouvelles japonaises contemporaines Tome II*, Editions Galimard, pour la traduction française.
- Hamano, S. (2019) Monosyllabic and disyllabic roots in the diachronic development of Japanese mimetics, *Ideophones, Mimetics and Expressives*, John Benjamins Publishing Company, 57-76

- Ishino, K. (2016), « Sur les expressions onomatopéiques de l'émotion en japonais. » *Cognition et émotion dans le langage* (慶応大学COE プロジェクト・シンポジウム「心と感情の言語表現」報告書) 慶應出版, 105-115
- Jakobson, R. (1959/2004). On linguistic aspects of translation. In L. Venuti (Ed.). (2004). *The translation studies reader*. 2nd edition : 138-143. London & New York : Routledge.
- Miyazawa, K. (1995), *Train de nuit dans la Voie lactée*, traduit par Hélène Morita, éditions Le Serpent à plumes.
- (2001), *Traversée de la neige*, traduit par Hélène Morita, éditions Le Serpent à plumes.
- Le Robert. (2001), *Le Grand Robert de la langue française : du dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française, 2e éd*, Dictionnaire Le Robert.
- Le Trésor de la Langue Française Informatisé <<http://atilf.atilf.fr>> (accessed May 22, 2021)
- Nodier, Charles. (1808), *Dictionnaire raisonné des onomatopées françaises*.
<<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k123239j>> (accessed May 2, 2021)
- Pozzuoli, A. (2007), *Dictionnaire des onomatopées dans la chanson*, Scali.
- Н.Г. Румак, О.П. Зотова. (2012), *Толковый японско-русский словарь онomatopoэтических слов* (和露擬声語・擬態語辞典) Изд-во "Моногтари"